秋田県文化財調査報告書第97集

腹鞁の沢遺跡発掘調査報告書

昭和57年3月

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

腹鞍の沢遺跡周辺地形（航空写真）

序

昭和56年度の国営能代開拓建設事業地内（小友工区）には、腹鞍の沢遺跡が存在します。本遺跡は、文化財保護の立場から、工法の変更等で遺跡保存をはかることを目標としてきました。しかしながら、その一部分は、諸般の事情から保存不可能になったため、記録保存を目的に発掘調査されることになりました。

本報告書は、腹鞍の沢遺跡の発掘調査の結果を集録したものです。この報告書の刊行が、地方史研究や文化財愛護に寄与することができれば幸いです。

発掘調査から本報告書刊行に至るまで、東北農政局能代開拓建設事業所・秋田県能代地区土地改良区・機織組ならびに能代市教育委員会には、何かと便宜を計っていただきました。心から感謝の意を表するしだいです。

昭和57年３月31日

秋田県教育委員会

教育長　畠山芳郎

例　　言

1　本報告書は、国営能代開拓建設事業に伴う腹鞍の沢遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

小林達雄（国学院大学）、林謙作（北海道大学）、佐藤昭男（県立農業短期大学）、小松正夫（秋田城跡調査事務所）、成田典彦（十和田小学校）

3　石質鑑定は、渡部昂（秋田県立博物館）氏によるものである。

4　報告書の執筆は、永瀬福男・熊谷太郎・大高博康がそれぞれ分担し、実施した。なお、II—3は工藤英美（秋田県教育センター）氏に執筆いただいた。

5　石器実測・トレースは丑沢美記子・進藤妗子・大西英子・後藤のり子、土器実測トレースは石木田京子・納谷鈴子・京久美子・藤井智子・佐藤洋子、遺構の図面作成は大高博康・佐々木金正・諸沢早苗、拓本は鈴木光子・山田美喜子・鈴木智子・越後谷栄子が主に担当した。

6　土色の記載については、「標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

7　挿図に使用したスクリーン・トーンは、II—3を除き、下記のとおりである。

ローム

ローム＋砂

砂

礫

焼土

目　　次

巻頭写真 …… 3

序 …… 5

例言 …… 6

Ⅰ　はじめに

1　発掘調査に至るまで …… 14

2　調査の組織と構成 …… 14

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　立地と環境 …… 15

2　歴史的環境 …… 16

3　腹鞍の沢遺跡周辺の地形・地質 …… 16

①　調査にあたって …… 16

②　地形・地質概要 …… 16

③　段丘群 …… 17

④　腹鞍の沢の地形・地質 …… 17

4　小結 …… 22

Ⅲ　発掘調査の概要

1　遺跡の概観 …… 24

2　調査の方法 …… 24

3　調査の経過 …… 27

Ⅳ　調査の記録

A地区

1　遺構と遺物 …… 29

①　竪穴住居跡 …… 29

②　掘立柱建物跡 …… 48

③　土壙 …… 48

④　焼土遺構 …… 52

⑤　陥し穴状遺構 …… 56

2　遺構外の出土遺物 …… 64

① 土師器 …… 64
② 縄文土器 …… 64
③ 石器 …… 64
3 小結 …… 66
① 住居跡 …… 67
② 土壙 …… 67
③ 陥し穴状遺構 …… 67
④ 遺物について …… 68
C地区
1 遺構と遺物 …… 98
① 竪穴住居跡 …… 98
② 土壙 …… 101
③ 溝状遺構 …… 106
2 遺構外の出土遺物 …… 106
① 土器 …… 106
② 石器 …… 111
3 小結 …… 111
D地区
1 遺構と遺物 …… 127
① 袋状土壙 …… 127
② 土壙 …… 134
③ 竪穴状遺構 …… 134
2 遺構外の出土遺物 …… 138
① 土器 …… 138
② 石器 …… 138
3 小結 …… 139
V まとめ

挿 図 目 次

第1図 腹鞍の沢遺跡遇辺地形図及び遺跡分布図 …… 13
第2図 腹鞍の沢周辺の地形及び露頭位置図 …… 18
第3図 各露頭における地質柱状図 …… 19

第４図　腹鞍の沢周辺の地形・地質・断面図 …… 20
第５図　腹鞍の沢周辺における模式地質・断面図 …… 21
第６図　腹鞍の沢遺跡地形・グリッド配置・調査区位置図 …… 23
第７図　腹鞍の沢遺跡Ａ地区の地層 …… 24
第８図　腹鞍の沢遺跡Ｃ地区の地層 …… 25
第９図　腹鞍の沢遺跡Ｄ地区の地層 …… 25
第10図　大グリッドと小グリッドの呼称方法 …… 26
第11図　腹鞍の沢遺跡Ａ地区遺構分布図 …… 28
第12図　ＳＩ01実測図 …… 30
第13図　ＳＩ01カマド実測図 …… 31
第14図　ＳＩ01遺物出土状況図 …… 32
第15図　ＳＩ01出土遺物 …… 33
第16図　ＳＩ02・ＳＫ06・ＳＫ07・ＳＫ08実測図 …… 35
第17図　ＳＩ02カマド実測図 …… 36
第18図　ＳＩ02・ＳＫ06・ＳＫ07・ＳＫ08遺物出土状況図 …… 37
第19図　ＳＩ02出土遺物 …… 38
第20図　ＳＩ02出土遺物 …… 39
第21図　ＳＩ03実測図 …… 41
第22図　ＳＩ03カマド実測図 …… 42
第23図　ＳＩ03遺物出土状況図 …… 43
第24図　ＳＩ03出土遺物 …… 44
第25図　ＳＩ04実測図 …… 45
第26図　ＳＩ04カマド実測図 …… 46
第27図　ＳＩ04出土遺物 …… 47
第28図　ＳＢ01実測図 …… 49
第29図　ＳＫ01実測図 …… 50
第30図　ＳＫ07出土遺物 …… 51
第31図　ＳＫ13出土遺物 …… 52
第32図　ＳＫ02・ＳＫ03・ＳＫ04・ＳＫ09実測図 …… 53
第33図　ＳＫ05・ＳＫ11・ＳＫ12実測図 …… 54
第34図　ＳＫ10・ＳＫ13実測図 …… 55
第35図　ＳＸＦ01実測図 …… 56

第36図　ＳＸＦ01出土遺物 …… 56
第37図　ＳＫＴ01・ＳＫＴ02実測図 …… 57
第38図　ＳＫＴ03・ＳＫＴ04実測図 …… 58
第39図　ＳＫＴ05・ＳＫＴ06実測図 …… 59
第40図　ＳＫＴ07・ＳＫＴ08実測図 …… 60
第41図　ＳＫＴ09・ＳＫＴ10実測図 …… 61
第42図　遺構外出土遺物 …… 64
第43図　遺構外出土遺物 …… 65
第44図　遺構外出土遺物 …… 66
第45図　陥し穴状遺構主軸方位略図 …… 68
第46図　腹鞍の沢遺跡Ｃ地区遺構分布図 …… 97
第47図　ＳＩ01実測図 …… 98
第48図　ＳＩ01出土遺物 …… 99
第49図　ＳＩ02実測図 …… 99
第50図　ＳＫ01・ＳＫ03実測図 …… 100
第51図　ＳＫ02実測図 …… 101
第52図　ＳＫ02出土遺物 …… 101
第53図　ＳＫ03出土遺物 …… 102
第54図　ＳＫ04遺物出土状況図 …… 103
第55図　ＳＫ04出土遺物 …… 104
第56図　ＳＫ04出土遺物 …… 105
第57図　遺構外出土遺物 …… 107
第58図　遺構外出土遺物 …… 108
第59図　遺構外出土遺物 …… 109
第60図　遺構外出土遺物 …… 110
第61図　腹鞍の沢遺跡Ｄ地区遺構分布図 …… 127
第62図　ＳＫＦ01・ＳＫＦ02実測図 …… 128
第63図　ＳＫＦ01出土遺物 …… 128
第64図　ＳＫＦ03・ＳＫＦ04実測図 …… 129
第65図　ＳＫＦ05・ＳＫＦ06実測図 …… 120
第66図　ＳＫＦ07・ＳＫＦ08実測図 …… 132
第67図　ＳＫＦ09・ＳＫＦ10実測図 …… 133

第68図　ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ03実測図 …… 135
第69図　ＳＫＩ01実測図 …… 136
第70図　遺構外の出土遺物 …… 138

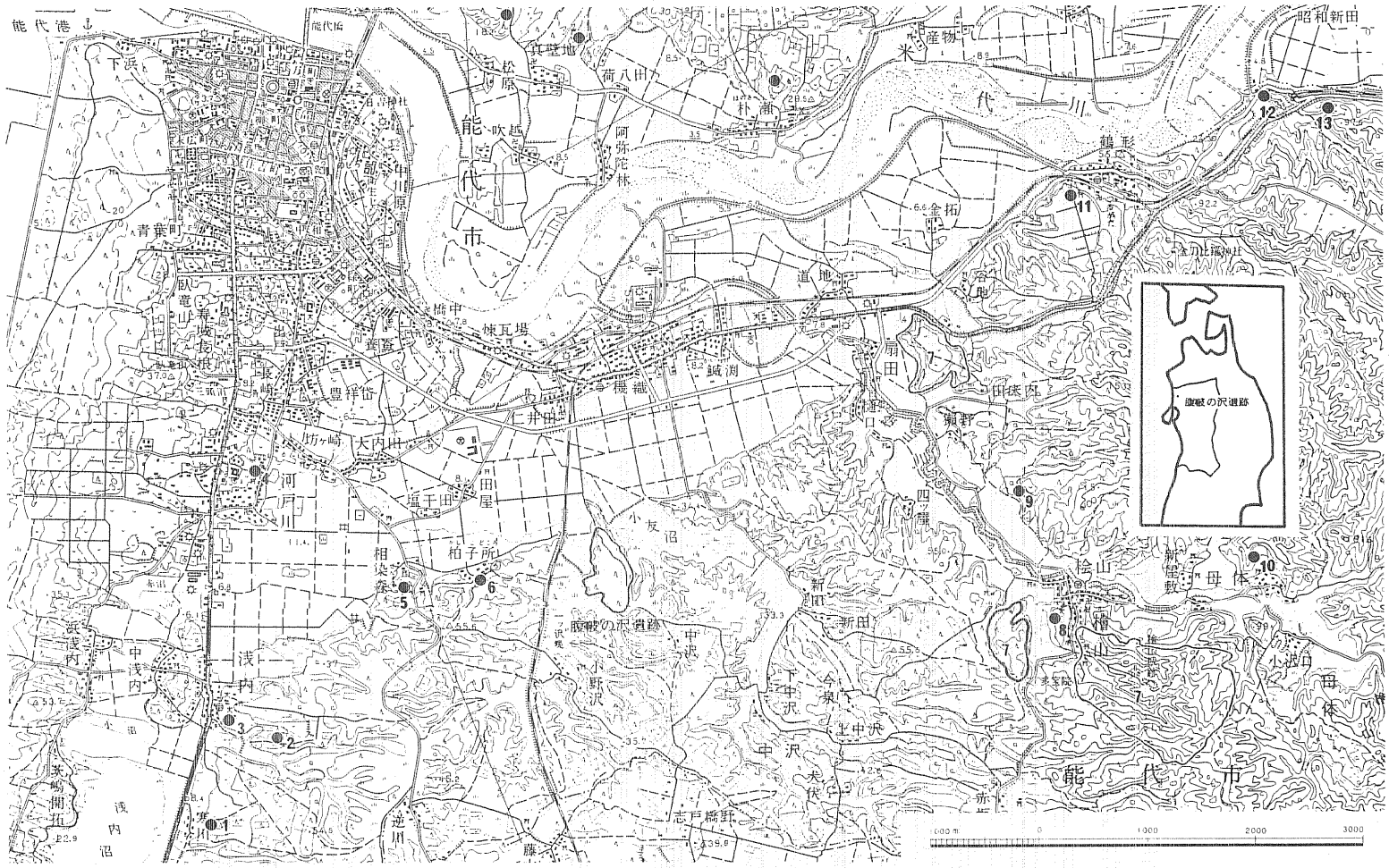
表　目　次

第１表　Ａ地区遺構埋土層一覧表(1)・(2) ……62・63
第２表　Ｃ地区遺構埋土層一覧表 …… 106
第３表　Ｄ地区遺構埋土層一覧表(1)・(2) ……137・138

図　版　目　次

図版１　①発掘調査前　②調査風景 …… 71
図版２　①調査風景　②調査風景 …… 72
図版３　①調査終了時　②調査終了時 …… 73
図版４　①ＳＩ01　②ＳＩ01のカマド …… 74
図版５　①ＳＩ02　②ＳＩ02のカマド …… 75
図版６　①ＳＩ03　②ＳＩ03 …… 76
図版７　①ＳＩ03のカマド　②ＳＩ03煙道部の断面 …… 77
図版８　①ＳＩ04の遺物出土状態 …… 78
図版９　①ＳＩ04　②ＳＩ04 …… 79
図版10　①ＳＩ03　ＳＩ04　②ＳＢ01 …… 80
図版11　①ＳＫ01炭化材出土状態　②ＳＫ01 …… 81
図版12　①ＳＫ04　②ＳＫ05 …… 82
図版13　①ＳＫ09　②ＳＫ06、ＳＫ07、ＳＫ00 …… 83
図版14　①ＳＫ10、ＳＫ13確認面　②ＳＫ10、ＳＫ13 …… 84
図版15　①ＳＫＴ01　②ＳＫＴ02 …… 85
図版16　①ＳＫＴ03　②ＳＫＴ04 …… 86
図版17　①ＳＫＴ05　②ＳＫＴ06 …… 87
図版18　①ＳＫＴ07　②ＳＫＴ08 …… 88
図版19　①ＳＫＴ10 …… 89
図版20　①～⑧ＳＩ01出土遺物 …… 90
図版21　①ＳＩ01出土遺物　②～⑧ＳＩ02出土遺物 …… 91
図版22　①～⑥ＳＩ02出土遺物 …… 92
図版23　①、②ＳＩ03出土遺物　③～⑨ＳＩ04出土遺物 …… 93
図版24　①、②ＳＫ07出土遺物　③ＳＸＦ01出土遺物 …… 94

図版25　①、②遺構外出土遺物 …… 95
図版26　①発掘調査前のようす　②調査終了時 …… 113
図版27　①ＳＩ01　②ＳＩ02 …… 114
図版28　①ＳＫ01　②ＳＫ01、ＳＫ03 …… 115
図版29　①ＳＤ01、ＳＫ04確認面　②ＳＤ01、ＳＩ01、ＳＩ02 …… 116
図版30　①ＳＫ02　②土器出土状態 …… 117
図版31　①石鏃出土状態　②石匙出土状態 …… 118
図版32　①ＳＩ01出土遺物　②ＳＫ02出土遺物 …… 119
図版33　①ＳＫ03出土遺物　②ＳＫ04出土遺物 …… 120
図版34　①、②ＳＫ04出土遺物 …… 121
図版35　①ＳＫ04出土遺物　②遺構外出土遺物 …… 122
図版36　①、②遺構外出土遺物 …… 123
図版37　①、②遺構外出土遺物 …… 124
図版38　①遺構外出土遺物 …… 125
図版39　①発掘調査前のようす　②調査風景 …… 141
図版40　①、②調査終了時 …… 142
図版41　①ＳＫＦ01　②ＳＫＦ03 …… 143
図版42　①ＳＫＦ02埋土　②ＳＫＦ02 …… 144
図版43　①ＳＫＦ04　②ＳＫＦ05 …… 145
図版44　①ＳＫＦ06埋土　②ＳＫＦ06 …… 146
図版45　①ＳＫＦ07埋土　②ＳＫＦ07 …… 147
図版46　①ＳＫＦ08埋土　②ＳＫＦ08 …… 148
図版47　①ＳＫＦ09埋土　②ＳＫＦ09 …… 149
図版48　①ＳＫＦ10　②ＳＫＦ03、ＳＫＦ04、ＳＫＦ05 …… 150
図版49　①ＳＫＦ01、ＳＫＦ02、ＳＫＦ10　②ＳＫＦ01、ＳＫＦ02、ＳＫＦ10 …… 151
図版50　①ＳＫＦ06、ＳＫＦ07、ＳＫＦ08　②ＳＫＦ06、ＳＫＦ07、ＳＫＦ08 …… 152
図版51　①ＳＫ02　②ＳＫ03 …… 153
図版52　①ＳＫＩ01確認面　②ＳＫＩ01 …… 154
図版53　①ＳＫＦ01出土遺物　②遺構外出土遺物 …… 155



第１図　腹鞍の沢遺跡周辺地形図および遺跡分布図

Ⅰ はじめに

1　発掘調査に至るまで

腹鞍の沢遺跡発掘調査は、能代開拓建設事業に係る緊急発掘調査である。当事業は、米代川の右岸・左岸を対象とする国営総合開発事業であり、その面積は3,671haにおよぶ。

昭和56年度の工事対象地域内に所在する腹鞍の沢遺跡は、同年4月に範囲確認調査（秋田県教育庁文化課実施）が実施された。その結果、約10haの台地上に6地点の遺跡が所在することが確認された。遺跡名は、6地点を総称して腹鞍の沢遺跡とし、それぞれの地点は、A地区・B地区……と呼称することにした。

それぞれの面積は、範囲確認調査の結果、下記のように予想された。

A地区　6,500㎡
B　〃　6,450〃
C　〃　4,400〃
D　〃　1,600〃
E　〃　2,550〃
F　〃　2,850〃

A～F地区のうち、工法等で対応不可能なA・C・D地区の約10,000㎡を発掘調査することになったものである。（永瀬）

2　調査の組織と構成

遺　跡　名　腹鞍の沢遺跡
遺跡所在地　秋田県能代市腹鞍の沢18―5他
調査期間　昭和56年5月11日～昭和56年10月20日
調査対象面積　10,000㎡
調査面積　11,582㎡
調査主体　秋田県教育委員会
調査担当者　永瀬福男　秋田県埋蔵文化財センター　社会教育主事
熊谷太郎　秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事
補佐員　大高博康
佐々木金正
調査作業員　秋山甚九郎・秋元正二郎・佐々木才吉・武田喜太郎・武田潤造・長岡礼治・

成田市太郎・成田松太郎・藤田清・松橋吉五郎・佐藤佐一郎・藤田与市・佐々木菊太郎・丑沢勘右門・成田勘十郎・長岡永治郎・桧森好広・鈴木正一・米川一郎・藤田兵治・成田義文・藤田偉佐雄・安岡明・朝香利彦・佐藤公一安岡誠・住吉和人・塚本悟・菊地浩晃・佐々木一幸・佐々木真人・桐越貴司武田清治・船山サダ・吉田トミ・斉藤チヨ・藤田ノエ・安田キヨ・戸松テツ武田ヨリ子・戸松サタ子・竹嶋美貴子・成田かほる・田村芳子・白鳥美穂子戸松ミワ・藤田カチ・佐藤ミツ子・武田映子・佐々木キヨ子・佐々木勝子・藤田昭子・藤田ウメ・藤田満子・藤田タツ・柴田カヂ子・藤田カネ子・斉藤えみ子・武田ユリ・武田美枝子・村木夕紀子・住吉優子・鵜木トヨ・今井ナミ・小林テツエ

調査参加者 中村大・宮腰勇・田中清司・高橋勝義・雄鹿寿勝・佐藤幹雄

整理作業員 鈴木光子・石木田京子・京久美子・諸沢早苗・丑沢美記子・納谷鈴子・佐藤洋子・進藤妗子・大西英子・後藤のり子・山田美喜子・鈴木智子

調査協力機関 東北農政局能代開拓建設事業所
能代市教育委員会
秋田県能代土地改良区
機織組（土地所有者の会）

II 遺跡の立地と環境

1 立地と環境

腹鞍の沢遺跡は、北緯40°10′—40°11′・東経140°04′—140°05′に位置する。遺跡の下には、米代川の形成した沖積地が広がる。米代川は西流し、日本海に注ぐ。北を遠望すると青森県との県境となっている白神山地が東西に横走する。西を遠望すると、砂丘がみえ、まもなく日本海である。遺跡から日本海までの距離は、直線距離にして約5㎞である。

米代川の右岸・左岸ともに標高35m程の段丘が形成されている。腹鞍の沢遺跡は、左岸の段丘の北縁に位置する。

遺跡周辺は松・杉・雑木が生え、開田・開畑が進行している。

2　歴史的環境

腹鞍の沢遺跡周辺は、旧石器時代から人々の生活の舞台として利用されていたようである。

昭和56年11月に秋田県教育庁文化課が実施した範囲確認調査で、能代市浅内字此掛沢遺跡（第１図の３）で、旧石器時代に属すると考えられる石器が数点検出された。米代川の河口周辺では、左岸で昭和53年に旧石器時代の石器が発掘されており、右岸でも旧石器の存在が確実になった。

相染森遺跡（第１図の５）は縄文時代中期の遺跡であり、竪穴住居跡・袋状土壙等が確認されている。

柏子所貝塚（第１図の６）は、県指定史跡である。昭和30・32・33年に発掘され、その結果人骨８体・貝類（コマタガイ・サルボウ・ベンケイガイ・アカニシ・イタボガイ・ヤマトシジミ・イシガイ・カワニナ）・鳥獣魚骨類（シカ・イノシシ・クマ・ムササビ・クジラ・オットセイ・ウサギ・クロダイ・スズキ）・炭化植物（クリ・ドングリ・トチ）などのほか，縄文時代晩期の土製品・石製品・骨角器が多数検出されている。

国指定史跡である桧山安東氏城館跡（第１図の７）は、中世に秋田・桧山・比内３郡を支配した桧山安東氏の居城である。遺跡周辺の集落である桧山・扇田・柏子所・道地・仁井田・長崎・塩干田・大内田・河戸川・浅内は戦国期には、すでに誕生していた村々である。

（永瀬）

3　腹鞍の沢遺跡周辺の地形・地質

①　調査にあたって

この報告書は腹鞍の沢遺跡をのせている東西方向約400ｍ・南北方向約900ｍのほぼ南北にのびる半島状の台地を調査したものである。（図１）　調査にあたっては露頭ごとの地質柱状図を作成することを中心におこない、併せて微地形も調査した。なお微地形の調査には野外での観察のほかに４万分の１空中写真を用いて実体視による観察も加味し、地形図は1/5000を用いた。

なお、まとめにあたっては、地質柱状図のいくつかは「八郎潟東縁部の段丘について」（工藤、1976）から転用し、段丘区分は「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」（白石・工藤ら、1977）にならった。

②　地形・地質概要

当調査地域を含むこの広大な台地は段丘地形をしめし、数段の段丘に分類されている。これら段丘地形は米代川をはさんで左岸にも広く分布しているものである。これら段丘群の東方には新第三紀層からなる丘陵・山地が連なる。また、西方には浅内沼はじめ小湖沼が点在し、さらに西方には沿岸砂丘列がほぼ南北に連なっている。

③　段丘群

これら段丘群は1977年に白石らによって北能代地区および米代川下流域、八郎潟東縁部の三地区ごとに分類された。当調査地は米代川下流域にはいり、ここでは米代川第１段丘～第９段丘（但し第２段丘はない）の８段丘に分類されている。以下にそれらの特色をのべる。

１）、最高位段丘は米代川第１段丘と名付けられ、当地からはるか東方の駒形付近の山麓にわずかに分布するだけで、高度は150ｍ前後である。段丘面は開析が進んでいるが明らかに平坦面は残している。

２）、高位段丘には、米代川第３段丘がこれに当たり、丘陵の西縁部に断片的に分布する。構成層は露頭にめぐまれず、わかっていない。ただし、大台野部落付近では粘土の薄層を挟む礫層からなり、その上に約1.5ｍの浮石層がある。（佐藤、1974　書き）

３）、中位段丘は米代川第４・第５段丘がこれに当たり、段丘面の高度は40～50ｍで高位の面群との間には明瞭な高度差が認められる。

構成層は新第三系の上に不整合に重なる花崗岩質礫を多量に含む礫層および砂層よりなる。また、第４段丘は関東平野における下末吉段丘に対比されている。一方近年の潟西団体研究グループの成果には、第４段丘と第５段丘は一連の段丘面の可能性があることが指摘されていることは興味深い。

４）、低位段丘は、米代川第６および第７・第８の各段丘に分けられ、高位ならびに中位段丘との高度差は明瞭であるが、それぞれの面間の比高は小さい。第６および第７段丘の構成層は多量の花崗岩質礫を含む10数ｍ～20ｍの厚い段丘礫層からなる。

５）、沖積段丘としては米代川第９段丘があり、高度は８～10ｍである。構成層は砂・礫のほかに直径数mmの円磨された浮石層を堆積しているのが特徴的である。この特徴や面の高度からみて、この段丘面は隣接する鷹巣盆地における洪水シラスの堆積面（平山・市川、1966）に対比されると考えられている（白石ら1977)。

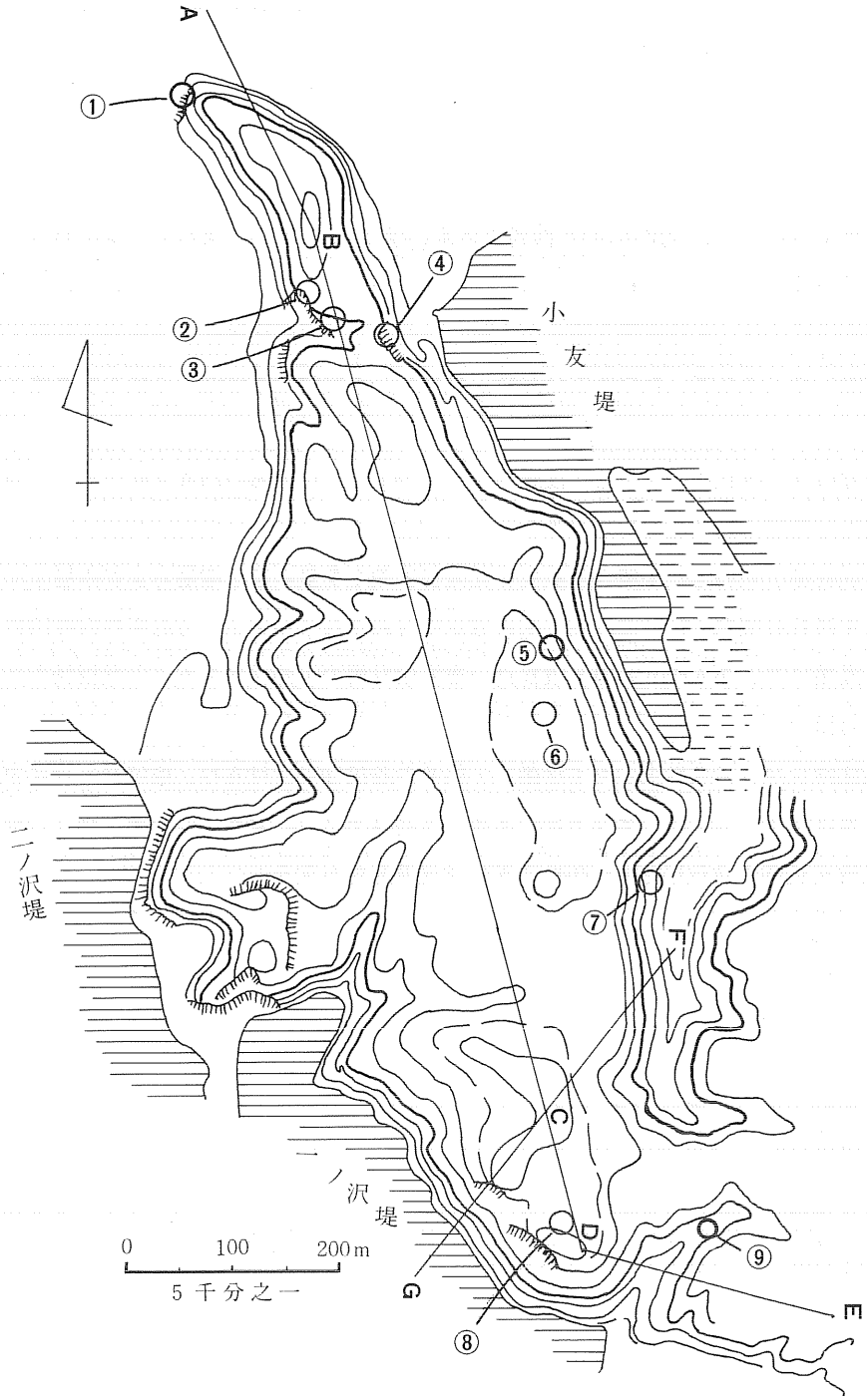
④　腹鞍の沢の地形・地質

当遺跡は前述の米代川第６段丘の段丘面上に位置し、これらについて以下に詳述する。

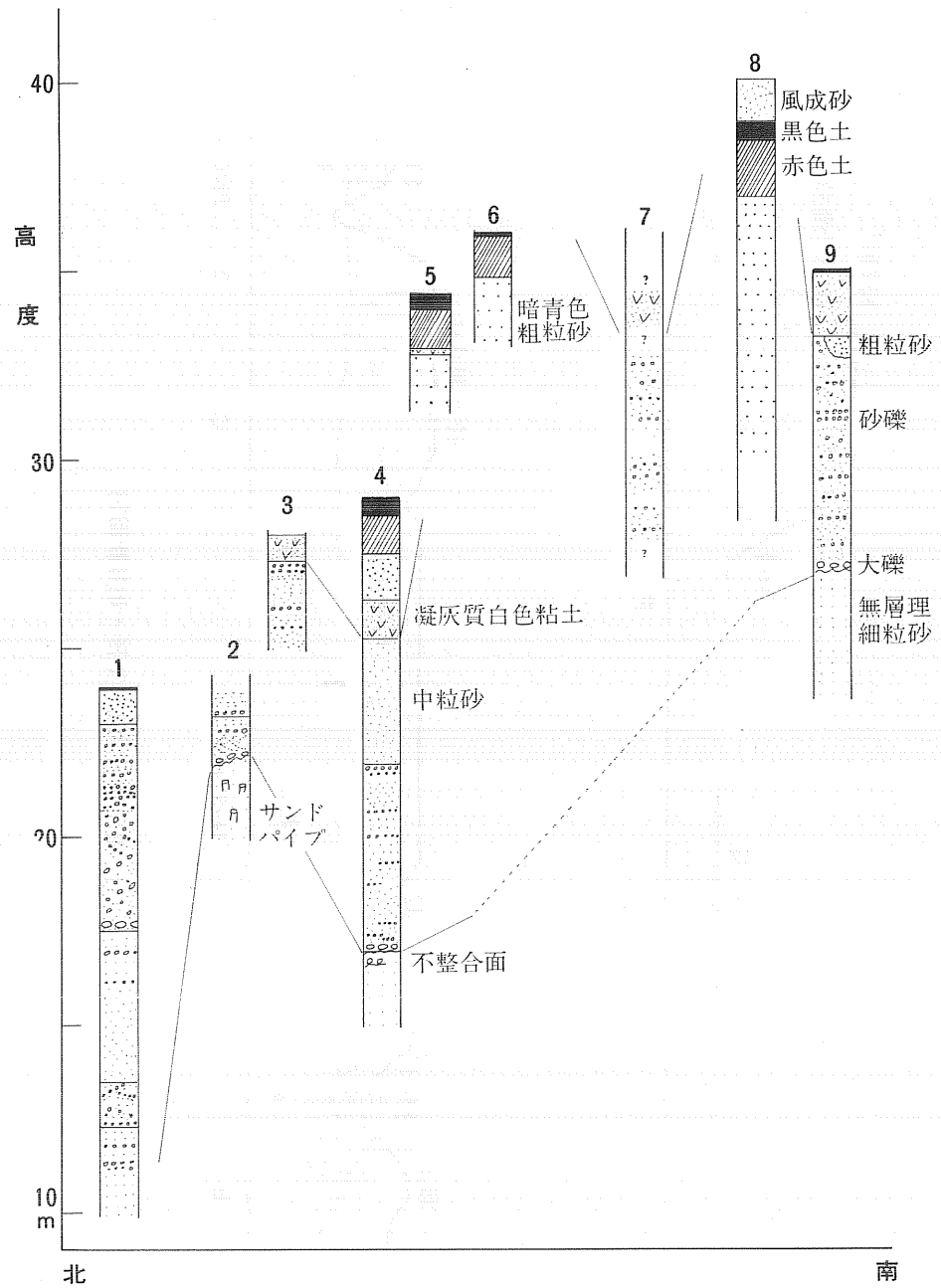
当段丘は東側の低地には小友堤、西側の低地には二ノ沢堤と一ノ沢堤を従え、北北西に細長く伸びる半島状の地形をしめす。（第２図）

付近の沖積面は米代川第９段丘からなり、水田として使われている。この面から比高20～30ｍで米代川第６段丘の段丘崖が、また頂部では平坦な段丘面を形成している。しかし、空中写真を用いて面を実体視すると、面にはいくつかの凹凸があり、後述するように地質とのかかわりが深いことがわかる。

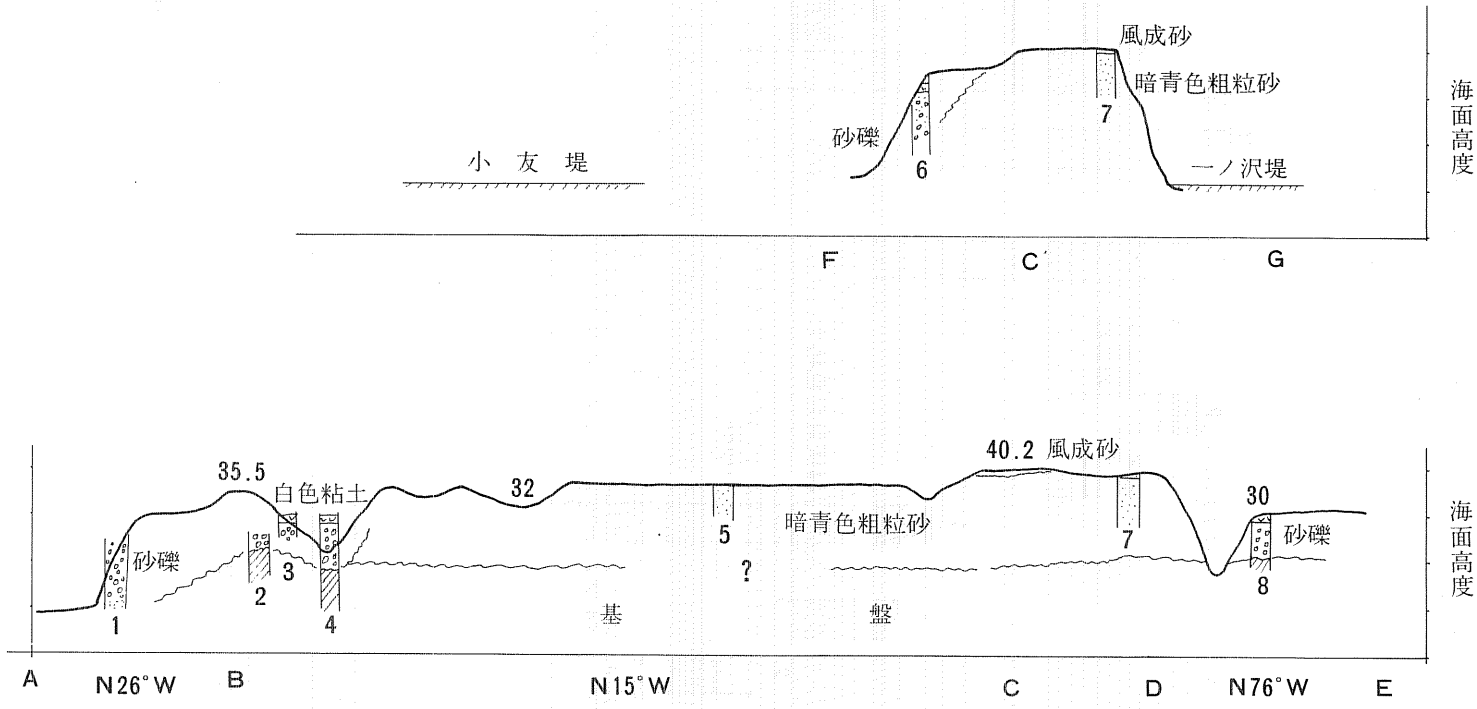
第６段丘堆積物の基盤は新第三紀鮮新世の笹岡層に相当すると思われる無層理の細粒砂から



第2図　腹鞁の沢周辺の地形および露頭位置図



第３図　各露頭における地質柱状図
（１～９は露頭番号）



第4図　腹鞍の沢周辺の地形・地質断面図

なり、露頭によってはサンドパイプ（住穴痕）が多数産する。

その上には砂礫層が不整合に堆積したり、場所によっては暗青色粗粒砂がやはり不整合に堆積していると思われるが後者については露頭が不足で確認することができなかった。

砂礫層は中粒砂～粗粒砂や小礫～中礫のよく円磨された礫よりなり、これには花崗岩質礫も多数含まれる。また、平行葉理や斜交葉理が認められるところもある。（第３図）

この地層は前述の米代川第６段丘堆積物の特徴と同じであり矛盾はないが、他の一つの構成層である暗青色粗粒砂層については、その特徴から米代川第４段丘の上部を構成する砂層とほぼ同じである。この砂層の特徴は、無層理で団結の度合いが他の砂層よりはるかに大きいことと、地層全体が暗青色を呈することである。なお、暗青色の要因は構成鉱物の中で有色鉱物のしめる割合が大きいためである。

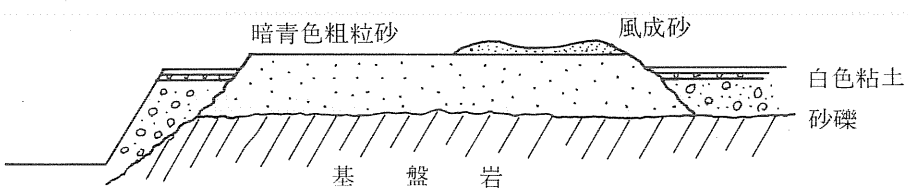
これらの特徴から、本地層は潟西地域の本内砂部層(潟西層団体研究グループ、1982投稿中)に相当するものと考えられる。

ここで、当地の段丘面を一連の面と考えると、段丘編年上に矛盾が生じる。そこで、地形とこれら構成層の関連を追求したら以下の事が判明した。

１）、露頭８にみられる砂礫層は杉沢台遺跡でみられる暗青色粗粒砂の直下にくる砂礫層に比して団結の度合いが悪い。また前者の砂礫層の上部にくる凝灰質白色粘土は後者の砂礫層には出現しない。

２）、米代川左岸の段丘においては、米代川第６段丘構成層である砂礫層がある場所では暗青色粗粒砂は観察できない（但し当地はのぞく）。これは、暗青色粗粒砂は浸食により消滅したと考えると都合がよい。

３）、当調査地の微地形をみると、５ｍほどの高低の起伏があり、高い部分はもっぱら暗青色粗粒砂でしめられており、低い部分は白色粘土や砂礫でしめられている。（第４図）　なお、凝灰質白色粘土は砂礫層のみならず、暗青色粗粒砂層の一部も被っている可能性があるので、



第５図　腹鞍の沢周辺における模式地質断面図

精査の必要がある。

以上のことから考察すると、当調査地域においては本内砂部層に相当する暗青色粗粒砂が堆積し段丘が形成されたあと、一旦浸食された。この時その一部が残丘状に残り、次の海進時に谷間や残丘のまわりを埋めるように砂礫層を堆積したと考えられる。

最上部にはわずかに未固結の風成砂が黒色土を被って分布し、厚さは1m前後である。境下では有色鉱物のみならず石英粒子も円磨されたものが多くなっている。

4　小結

以上のことから当調査地域の台地の地質を模式的に表わすと（第5図）の通りになる。なお、これに似た地質現象は中田面遺跡周辺にもみられ、そこでは砂礫層と暗青色粗粒砂（報告書では単に砂と記されている）の関係を露頭で確認したものであることを付記しておく。

（工藤）

参考文献

○平山次郎・市川賢一、（1966）、「1000年前のシラス洪水—発掘された十和田湖伝説」『地質ニュース、No.140・10—28』

○佐藤喜博、（1974　書き）、「能代南東方の第四系—特に段丘とその編年について」『秋田大学教育学部卒論』

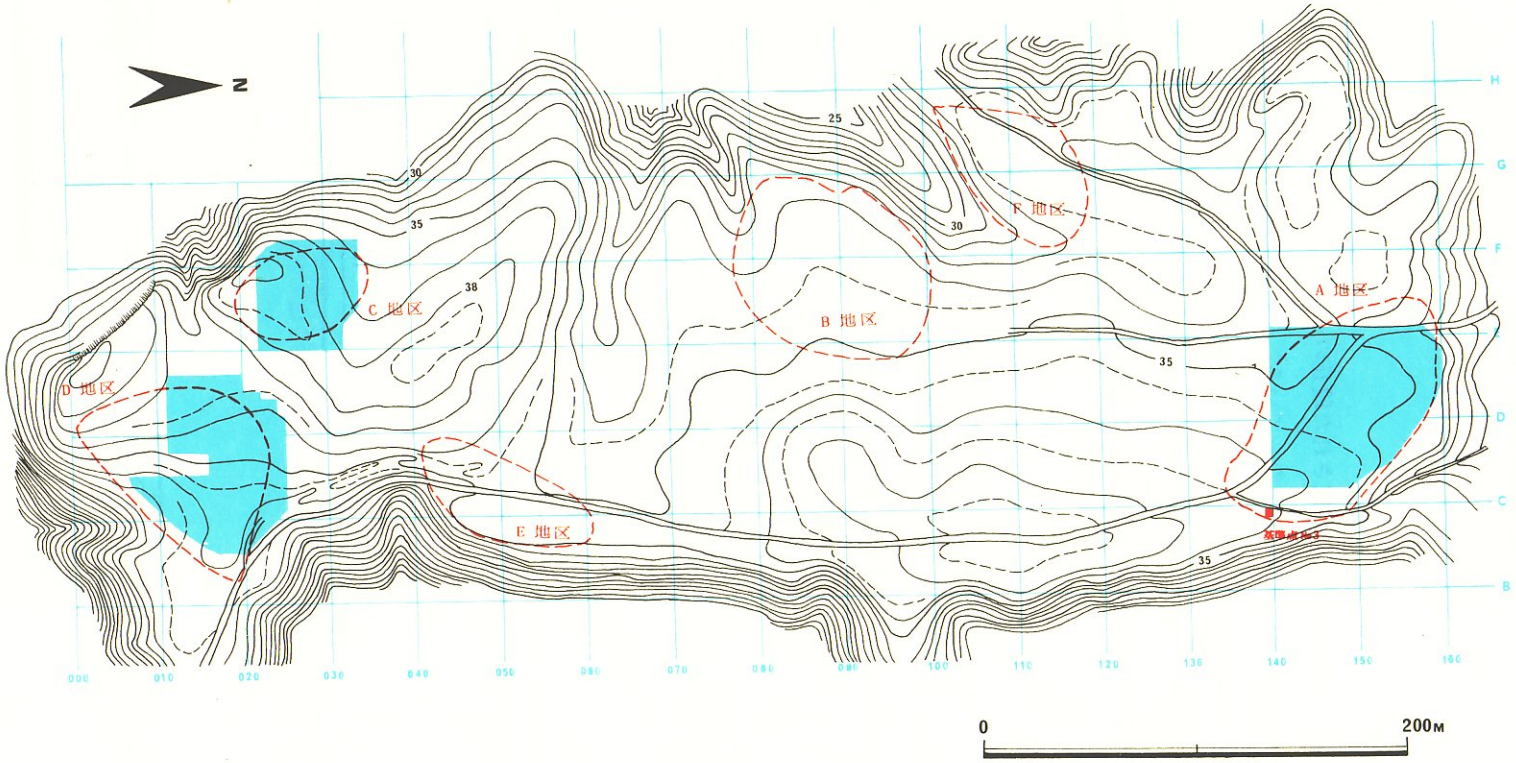
○工藤英美、（1976　書き）、「八郎潟東縁部における段丘について」　斎藤憲三顕彰会

○白石建雄・工藤英美・秋田第四紀研究グループ、（1977）、「秋田県北部日本海沿岸地帯の段丘群」『秋田大学教育学部研究紀要（自然科学）第27集』

○秋田県教育委員会、（1980）、秋田県文化財調査報告書第74集『中田面遺跡、重兵衛台Ⅰ遺跡、重兵衛台Ⅱ遺跡、根洗場遺跡発掘調査報告書』、秋田県教育委員会、5

○秋田県教育委員会、（1981）、『杉沢台遺跡・竹生遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第83集、秋田県教育委員会、4—10

○潟西層団体研究グループ、（1982）、「男鹿半島北東部潟西地域における潟西層」（投稿中）



第６図　腹鞍の沢遺跡地形・グリット配置・調査区位置図

III 発掘調査の概要

1　遺跡の概観

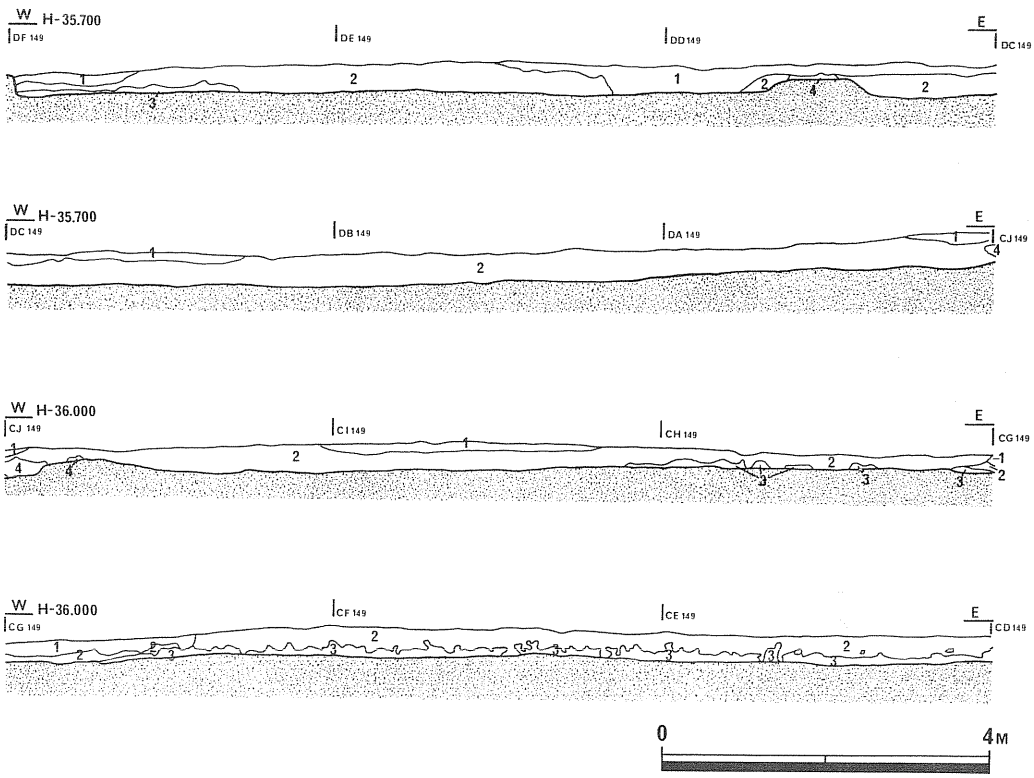
腹鞍の沢遺跡は、米代川の左岸に形成された段丘の一部が、北に舌状に延びる地形上に所在する。北端は沖積地に接し、東西は谷となっている。この谷は堰止められ、堤となっている。段丘面はゆるやかな起伏があり、標高35～38mを測る。

A地区は段丘の北縁に位置し、標高約35m。C地区は舌状台地の基部に位置し、標高約35m。D地区は台地の基部近くの西縁に位置する。ここは台地でもっとも標高があり、約38mを測る。

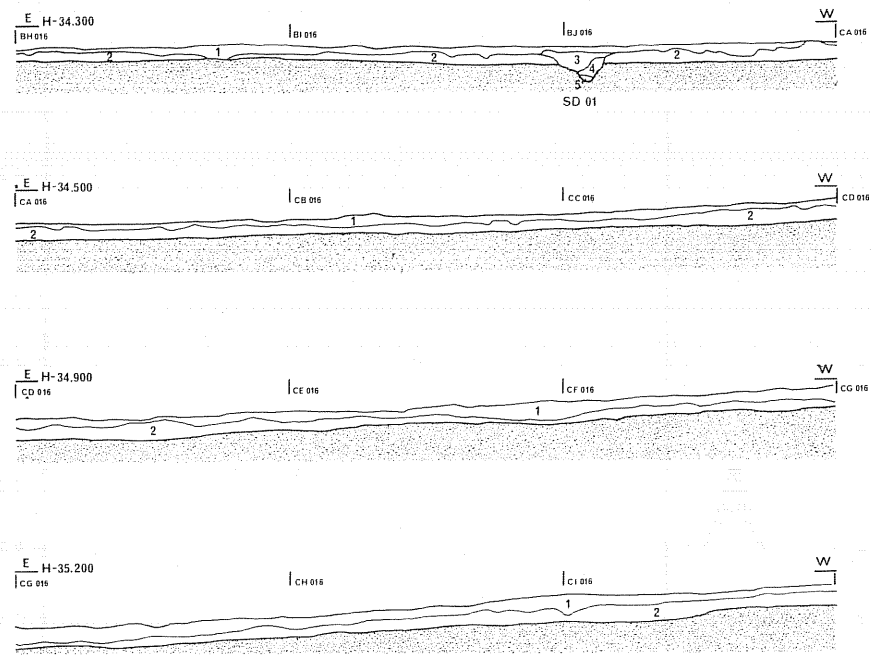
（永瀬）

2　調査の方法

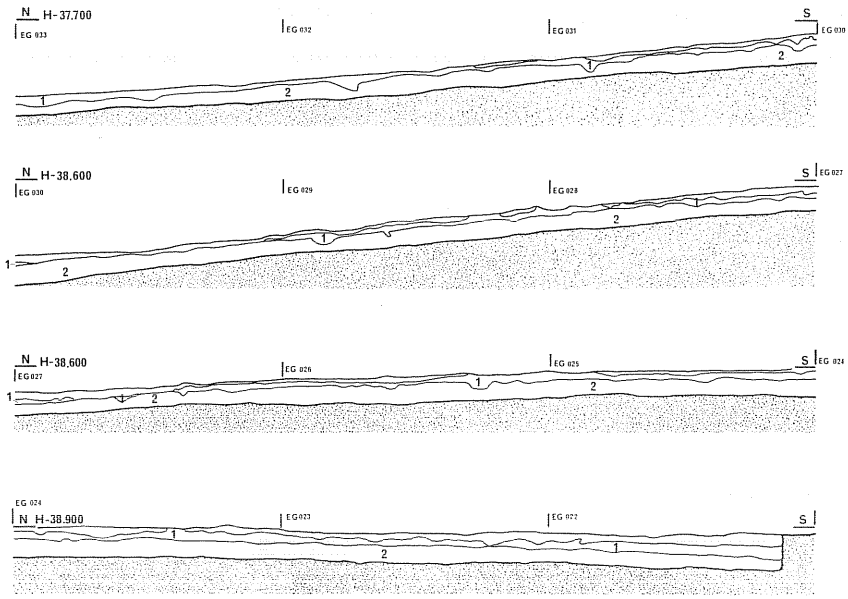
発掘調査はグリッド方式で実施した。台地の北縁の小友工区測量基準点No.3より原点を移動し、X＝19,000m・Y＝－65,200mを発掘基準点とした。この発掘基準点を中心として、東西南北に40m×40mの大グリッドを設定した。南北方向は磁北方向に一致する。この大グリッドには、4m×4mの小グリッドを配置した。



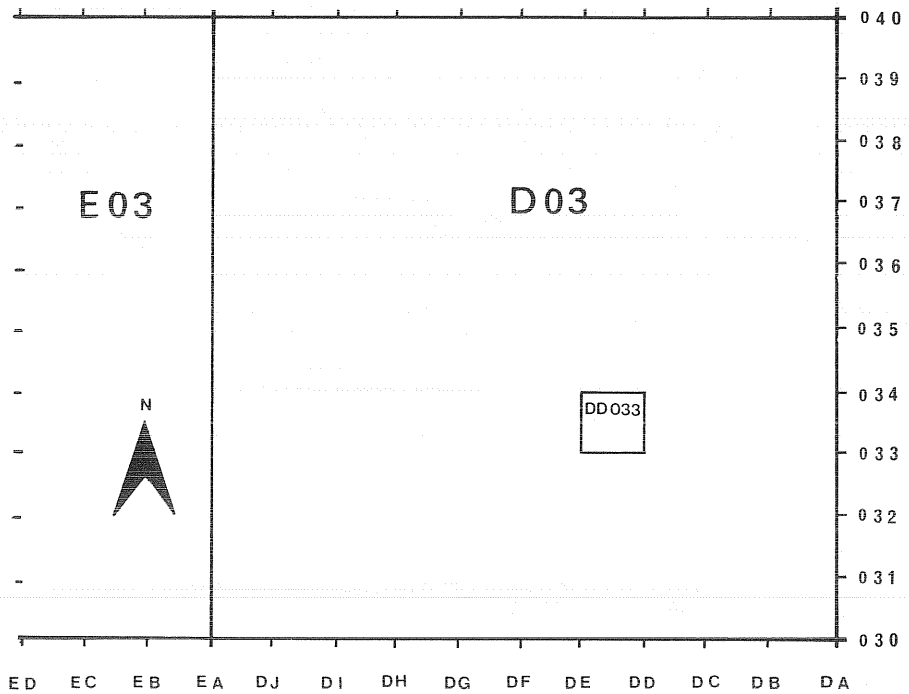
第7図　腹鞍の沢遺跡A地区の地層



第８図　腹鞍の沢遺跡Ｃ地区の地層



第９図　腹鞍の沢遺跡Ｄ地区の地層



第10図　大グリッドと小グリッドの呼称方法

グリッドの名称は、東西方向の基線の算用数字３桁と南北方向の基線のアルファベット２文字の組合せで表現することとした。そして、グリッドの南東隅の交点が、グリッド名になるようにした。なお、算用数字は北へ進むと増え、アルファベットは小グリッドが10進むごとに頭文字が変わることとする。すなわち、西方向へＤＡ→ＤＪと小グリッドが10進むと、こんどは頭文字を変えてＥＡ→ＥＪとする。第10図は、小グリッドと大グリッドの名称表現例である。小グリッド（細い線）はアルファベット２文字と算用数字３桁で表現する。たとえば、ＤＦ035のように。大グリッド（太い線）はアルファベット２文字のうちの頭文字と算用数字の前２桁の組み合せで表現する。たとえば、D03のように。

遺構の実測は、遣り方測量で実施した。

略記号は下記の通りである。

ＳＩ……竪穴住居跡　　ＳＫＦ……袋状土壙

ＳＢ……掘立柱建物跡　　ＳＫＩ……竪穴状遺構

ＳＫ……土壙　　ＳＫＴ……陥し穴状遺構

ＳＤ……溝状遺構　　ＳＸＦ……焼土遺構　　（永瀬）

3　調査の経過

発掘調査は、昭和56年５月11日から同年10月20日まで実施した。

５月11日の午前中は、作業員に対して発掘調査の目的・賃金の支払い・勤務時間・安全規則について説明。午後からＡ地区の調査開始。13日、陥し穴状遺構のプランが確認される。４月に実施された範囲確認調査では、陥し穴状遺構は１基も確認されていない。18日、雨の日が続き調査はなかなか進まない。スライドで掘り方指導。19日、竪穴住居跡（ＳＩ01）のプラン確認。21日、竪穴住居跡（ＳＩ02）のプラン確認。27日、地層観察・花粉分析資料採取のため、cc140グリッドの掘り下げ開始。

６月２日、竪穴住居跡（ＳＩ03）のプラン確認。６日、土壙（ＳＫ01）のプラン確認。精査開始。９日、遣り方測量の杭打ち。11日、ＳＩ01・02の精査開始。13日、ＳＫ02・ＳＫＴ01の精査。15日、ＳＫ03の精査。17日、ＳＩ01床面の硬度測定を計画、佐藤昭男（県立農業短期大学）氏より中山式硬度計を借用。25日、ＳＩ01の床面の硬度の測定開始。硬度計の読み手１人と記録係１人で１パーテーとする。30日、ＳＫＴ04の精査。

７月３日、ＳＩ04の精査開始。８日、地形測量開始。９日、ＳＩ03の精査。13日、ＳＫＴ05の精査。14日、秋田大学教育学部生25名実習のため来跡。16日、林謙作（北海道大学）氏来跡。17日、ＳＩ03の床面の硬度計測。20日、地山を掘り下げ、旧石器の探索開始。22日、遺構の実測・地山面の地形図作成開始。24日、遺構の写真撮影。28日、文化課・農政局・業者の３者でＡ・Ｃ・Ｄ地区の調査日程を確認。

８月３日、能代市立第１中学校社会科クラブ員５名調査に参加。４日、Ｃ地区のグリッド杭打ち。６日、Ａ地区の補足調査。７日、Ｄ地区の発掘調査開始。19日、ＳＫＩ01のプラン確認。24日、ＳＫＦ01袋状土壙の精査開始。25日、峰浜村文化財保護委員６名来跡。26日、ＳＫＦ02～07の精査開始。ＳＫＦ01の埋土中で後期の土器片検出。袋状土壙の年代は縄文時代後期と想定される。28日、ＳＫＦ08・09の精査。29日、埋土層の実測開始。

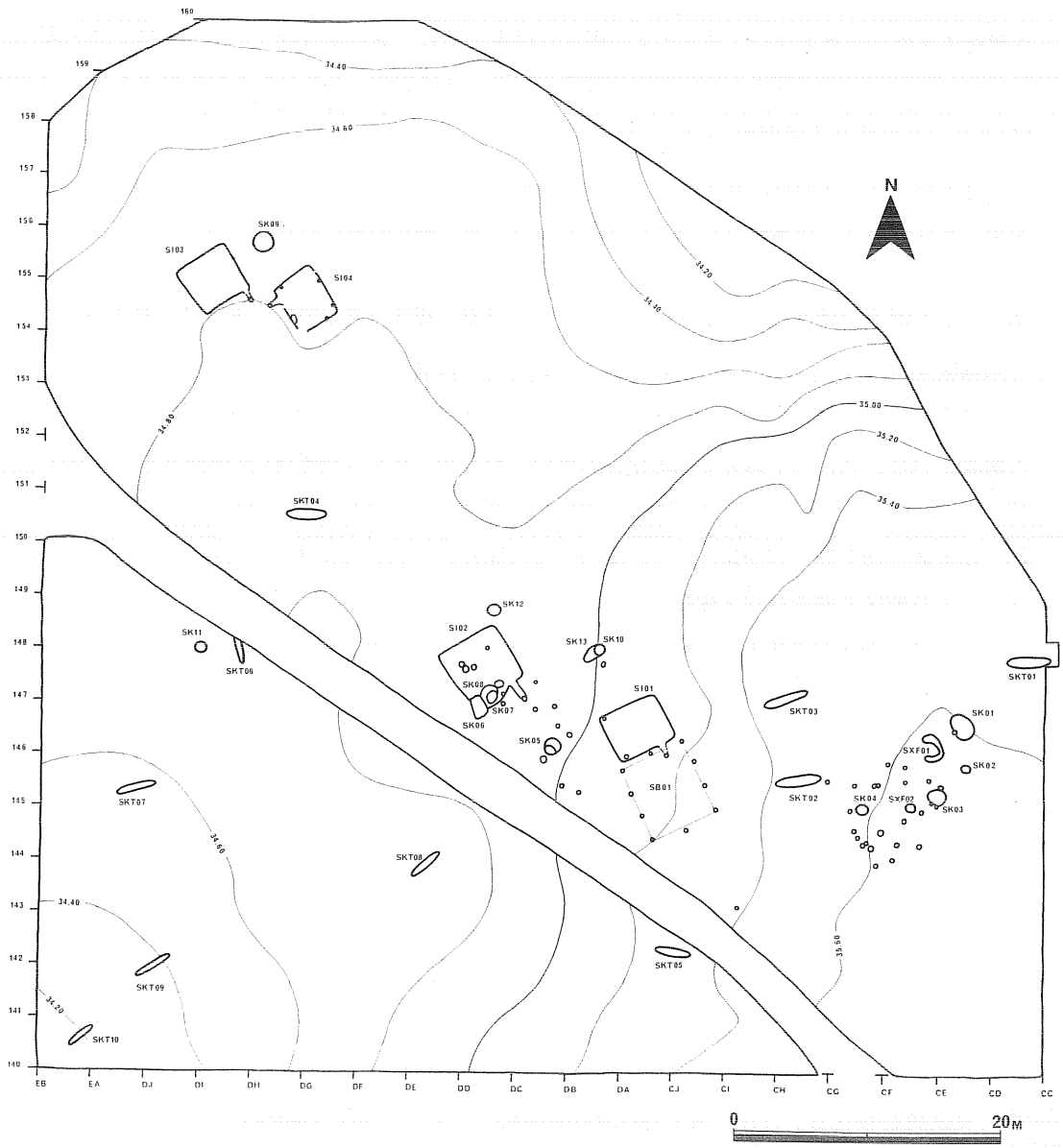
９月11日、Ｄ地区と並行してＣ地区の調査も開始。14日、Ｄ地区の遺構の実測開始。16日、Ｄ地区のＳＫＦ10から花粉分析用資料として、埋土採取。18日、Ｄ地区の写真撮影。19日、Ｄ地区の調査終了。

10月１日、Ｃ地区のＳＤ01とＳＫ04の精査開始。河原主任調査官（文化庁）来跡。９日、ＳＫ01の精査。13日、ＳＩ01・02の精査開始。15日、ＳＩ01・02・土壙の実測。午後、作業員に対し発掘調査報告会。17日、地山面の地形図作製。20日、Ｃ地区の調査終了。

（永瀬）

Ⅳ 調査の記録

A地区



第11図　腹鞁の沢遺跡A地区遺構分布図

1　遺構と遺物

①　竪穴住居跡

南に向いわずかに傾斜を持つ台地縁辺部寄りに、4棟検出された。遺構の確認面は構作土直下の2層で、その中位から下位にかけた地山上10～15cmである。住居跡は2棟ずつ隣接する形をとり、うち3棟は住居跡の南東壁にカマドが検出され、煙道はいずれも地山をくり抜いて構築されている。遺構どうしの重複はみられない。出土遺物は土師器を主とし、須恵器は杯1点のみである。

SI 01竪穴住居跡　（第12図、図版4）

〈平面形状〉　東西辺長4.6m、南北辺長3.8mで南面に向い、わずかに開き気味の長方形各コーナー部は隅丸を呈する。主軸方向はS—24°—Eを示す。

〈堆積土〉　I層を除いて、ローム粒子が混入。床面直上のII層下位には特に多い。遺物は主としてII層に包含され、床面直上では検出されない。

〈床面〉　凹凸が激しくもろい。わずかに南東方向に傾斜している。

〈壁〉　わずかに外傾する。壁高は低く16～20cm。

〈壁溝〉　南壁を除き、三辺壁に沿っている。溝幅は東壁沿いが狭く4～8cm、他は8～12cmで、床面からの深さ4cm、溝はU状に掘られ、底面は凹凸を呈す。

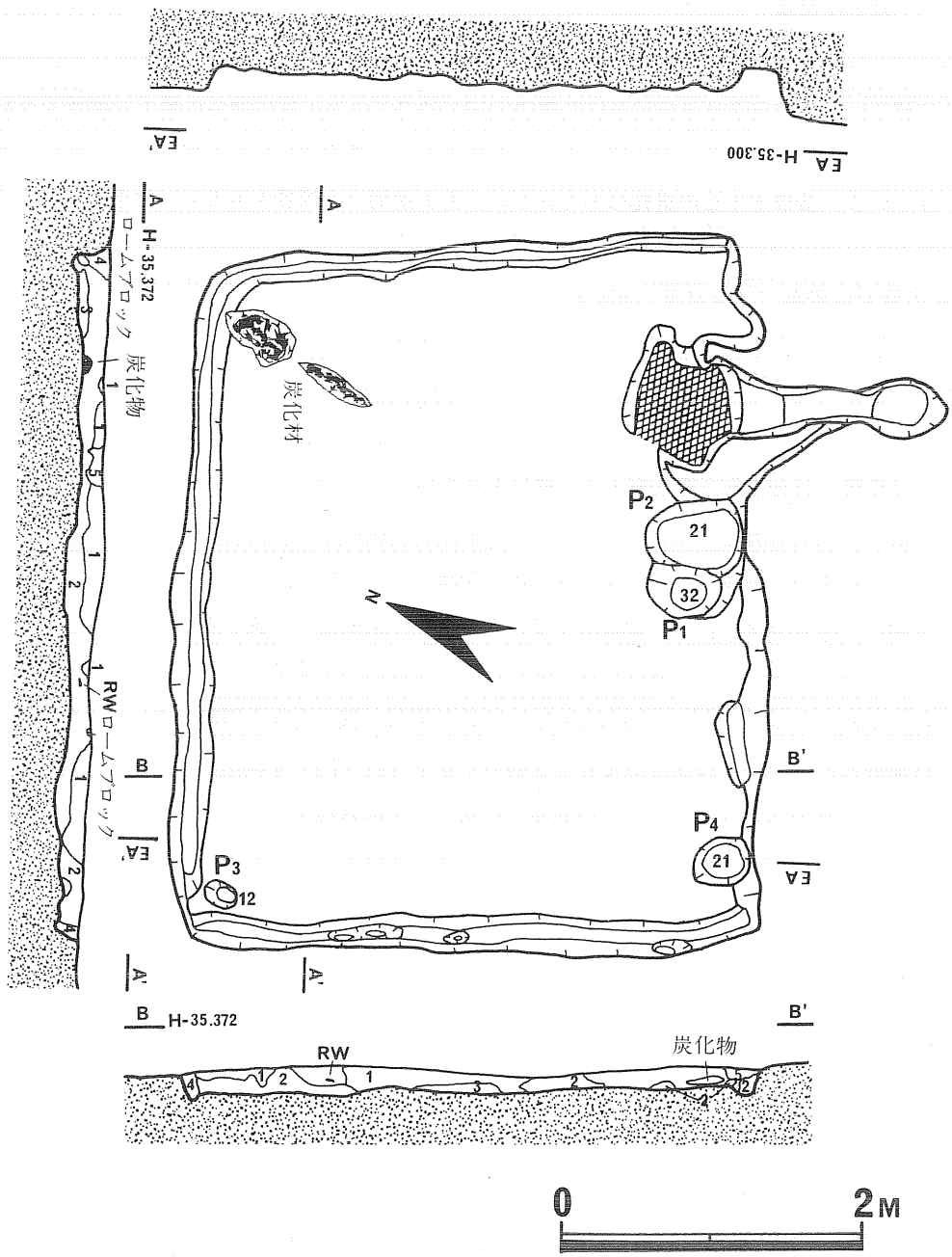
〈柱穴（状ピット）〉　P_3、P_4であるが、P_3は、形状、掘り方とも明瞭でない。

〈付属施設〉　カマド西面に隣接して2基のピット（P_1・P_2）を検出。いずれも同時に使用。カマドからの焼土が多量に混入し、壁底面に付着して土師器検出。

〈カマド〉　南壁東寄りで、壁面に対しほぼ直角に構築され、主軸方向は南東。燃焼部は地山を約14cm不整円型に掘りくぼみ、多量の焼土堆積をみる。煙出し部の端までの長さ2m。袖部は崩落が激しいが、多量の粘土ブロックの堆積と火熱を受けた拳大の石をみることから、両袖部の芯に石を利用、粘土を貼りつけ構築していたと考えられる。煙道部はその始点で底面が一旦上昇し、その後20度の傾斜で段状に下降、煙出し部に至る。構築は地山をくり抜いてなされ、断面は袋状、最大幅20cm、上部は崩落している。煙出し部は底面が平坦で円筒状に掘りこまれ、地山面からの深さ40cm。壁面は熱化により部分的に赤褐色で硬化している。

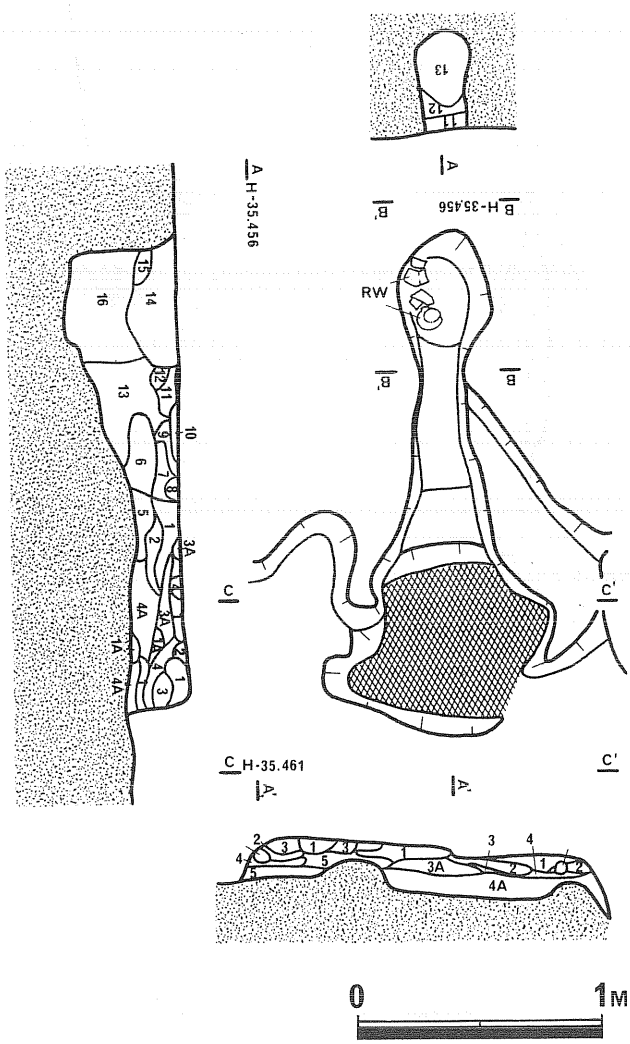
〈出土遺物〉　（第15図・図版20、21）　全て土師器で、杯を主とし、皿形土器が1点。底部は回転系切りで無調整。遺物はカマドとその周辺、及び住居跡内北西部に集中して出土。

1・5はほぼ完形で出土。1は体部内外面に凹凸を留め、底径6.6cm、口径14.6cm、器高5.0cm。色調は鮮やかな橙色。5は底径6.5cm、口径13.9cm、器高5.0cm。2・3はカマド燃焼部より出土。2は器表面の凹凸が顕著で胎土は堅い。3は体部が直線状に立ち上る。底径6.7cm、口径13.4cm、器高5.1cm。4は体部上半が欠損。底部径5.9cm。6は皿形土器で完形出土。体部

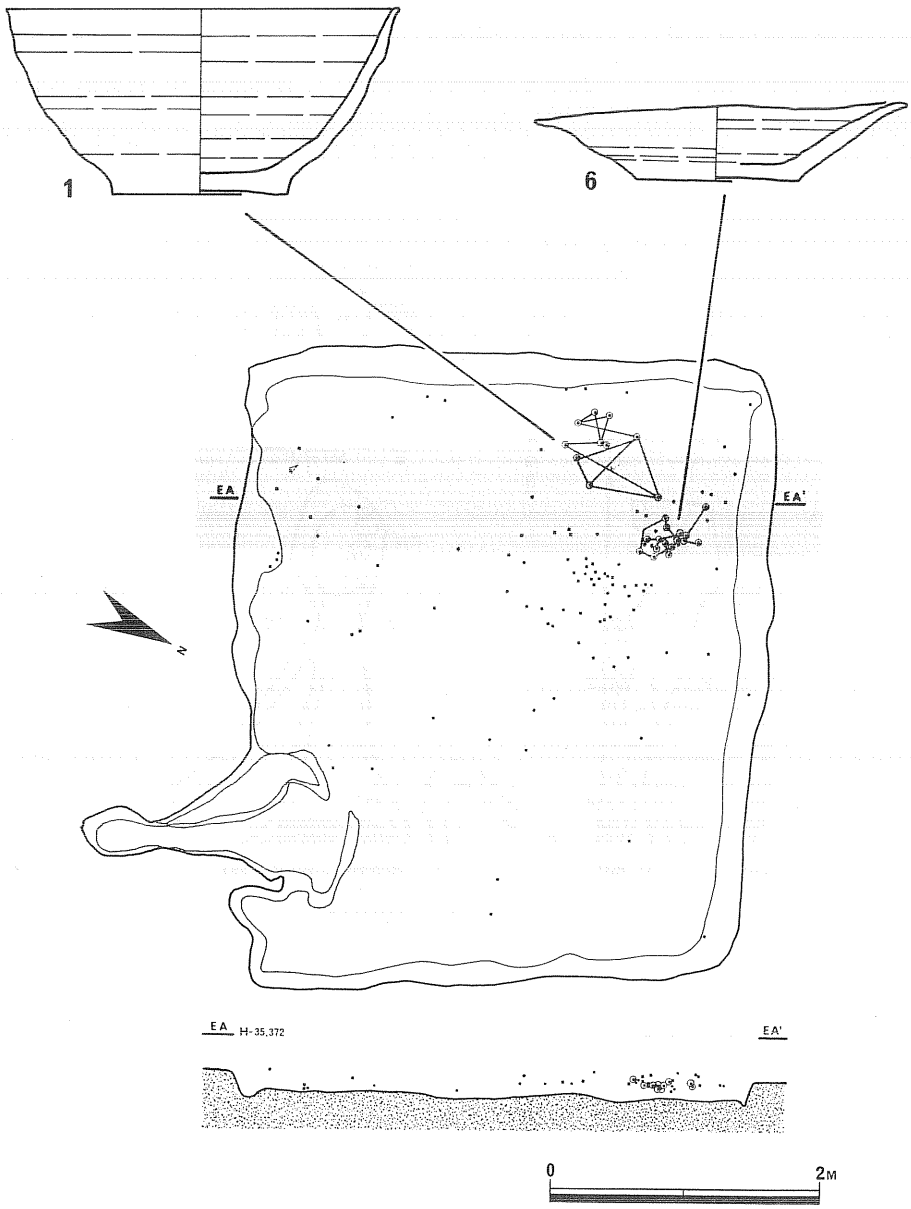


第12図　ＳＩ01 実測図

は強く外傾し、口縁部で強く外傾する。体部中央の器厚は1.2cmと厚い。底部径6.1cm、口径13.9cm、器高は口縁がゆがみを呈しているので一定せず、2.5cm～3.1cm。7・8は土師器甕で、カマド煙道部から煙出し部にかけての埋土及び底面より出土。7は体部形体が紡錘形を示し、口

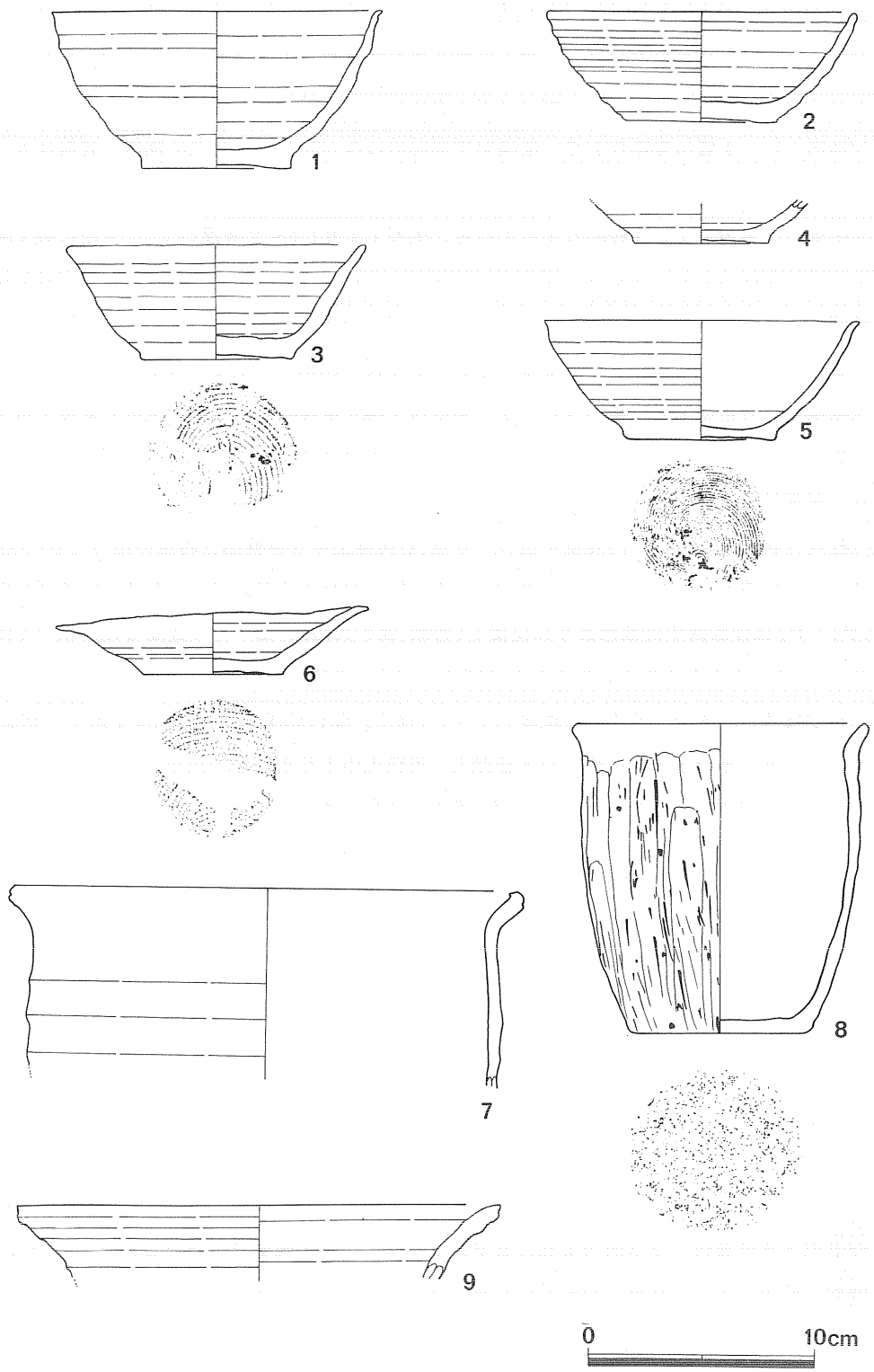


第13図　SI 01 カマド実測図



第14図　SI 01 遺物出土状況図

縁部でくの字状に外反、口唇部で垂直に立ち上る。胴部上半にロクロ調整痕を留める。8は小型の甕で完形出土。底部は砂粒の付着した砂底で、外面は口縁部を横ナデし、口縁直下から胴部下半にかけヘラナデ、底部付近はヘラケズリを施す。内面は斜位にナデ。9は土師器甕の口縁部、口縁は幅広く、立ち上りは強く外反する。ロクロ調整痕を留める。



第15図　ＳＩ01 出土遺物

ＳＩ 02竪穴住居跡　（第16図、図版５）

〈平面形状〉　南壁東南部は、土壙と重複しており壁部が明瞭でないが、東辺長4.4ｍ、北辺長５ｍで南北にわずかに長い長方形を呈すと思われる。主軸方向はＳ－37°－Ｅ。

〈堆積土〉　Ⅰ層は黒褐色土で、遺構中央部周辺にみられ、レンズ状に堆積。Ⅱ層はローム粒を含有する暗褐色土で遺構全体を覆い、最も遺物を包含する。

〈床面〉　平坦を呈し比較的しまっている。床面上より1.5～２cm浮いて、二ヵ所に焼土痕跡がみられ、南面のものはＳＫ08に切られ、西面のは、焼土除去段階で、P_2・P_3の辺縁部輪郭が確認された。

〈壁〉　わずかに外傾する。壁高は全体的に低く12～16cm、西壁は特に低い。

〈壁溝〉　各辺壁沿いに検出されたが、南壁は土壙と重複のため不明。東壁と北壁で部分的に中断している。溝幅は広狭があり、４～12cm。床面よりの深さは浅く、平均４cm、Ｕ状に掘られ、底面は凹凸を呈し、もろい。

〈柱穴（状ピット）〉　内周壁に沿って８基、対角線上に３本検出、周壁に沿ったものは極めて浅いが、位置的に対称を示す。対角線上のものは、対称するP_6・P_7が形状、深さ共類似する。P_1・P_2は住居跡中央部西寄りに位置し、形状、深さ共類似、掘り方は底面で柱痕状のくぼみを持つ。いずれも上面の焼土を除去した段階で全プランを確認。底面より多量の土師器杯を検出。

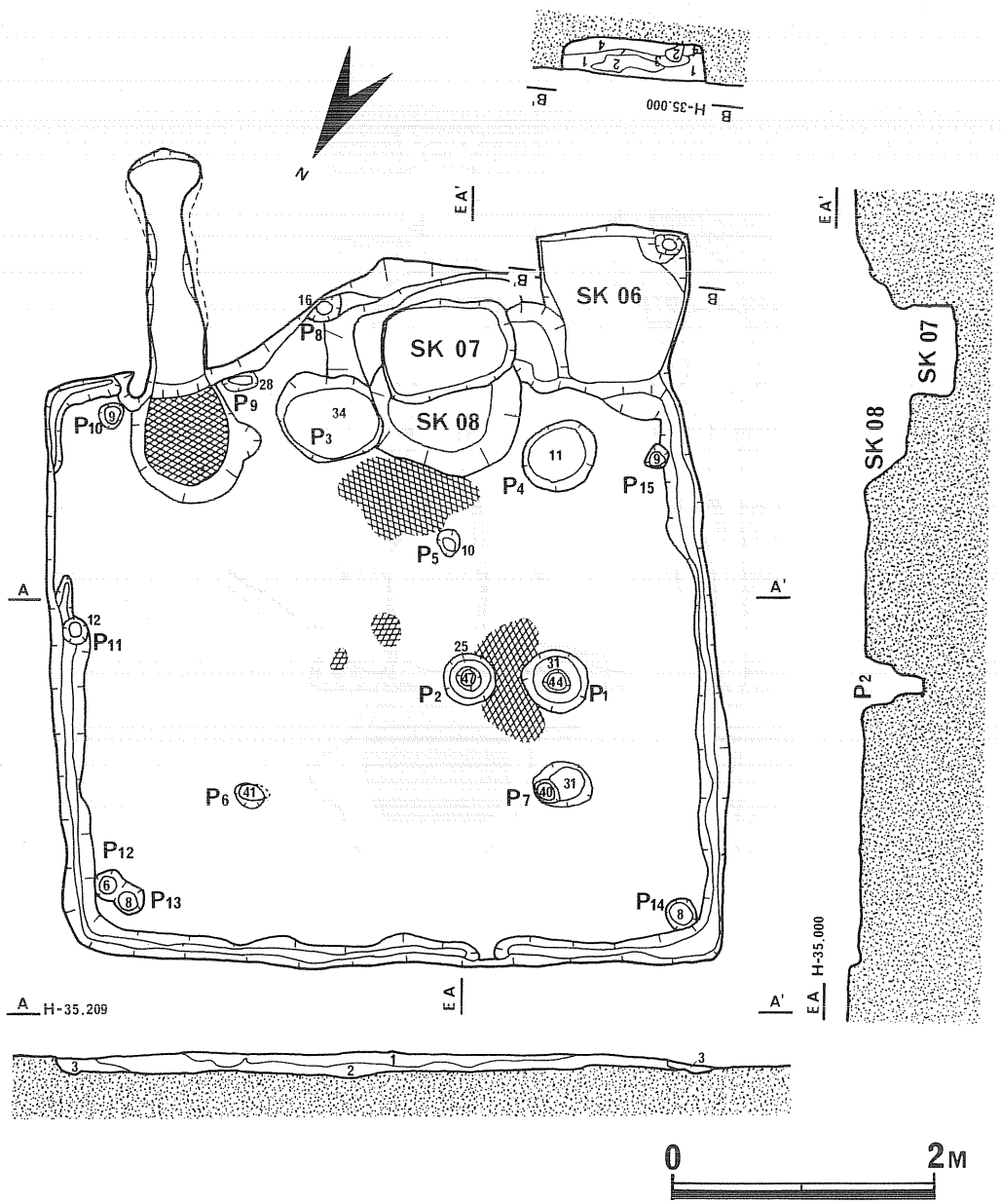
〈付属施設〉　カマド西面部に隣接して、P_3検出。開口部径80cm、底面は平坦で、壁面共しまっており、カマドからの焼土が多量混入。堆積土中より土師器片出土。

〈重複〉　遺構内南西部で３基の土壙と重複して検出された。ＳＫ06・08は住居跡よりも新しく、ＳＫ07は古い

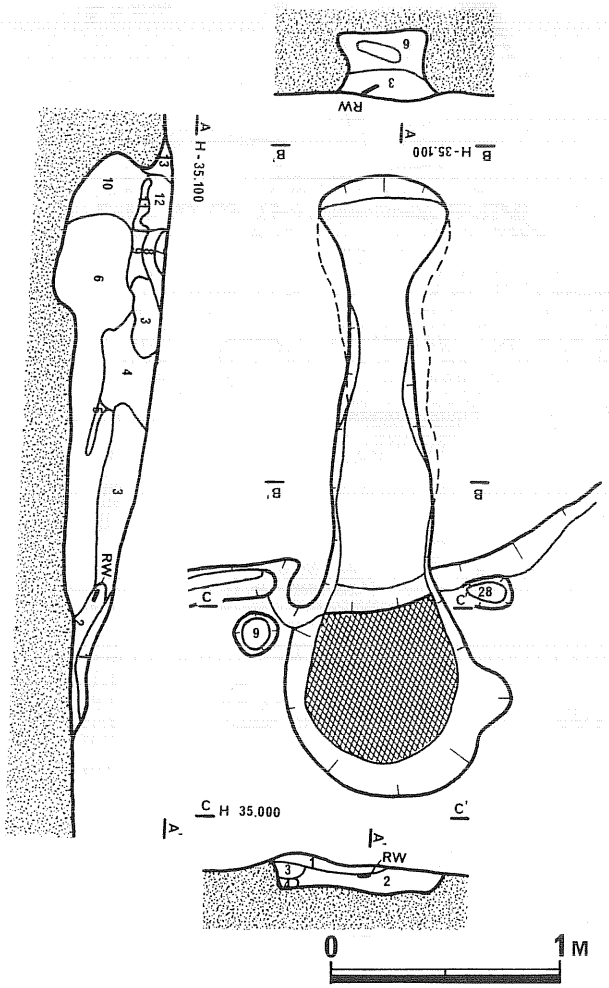
〈カマド〉　住居跡南壁東寄りに位置し、壁面にほぼ直角に構築される。主軸方向は南東。焚口、燃焼部は地山を約16cm円形に掘りくぼみつくられ、厚い焼土堆積をみる。煙出し部端までの長さ2.7ｍ、袖部はほとんどその痕跡を留めない。煙道部は、その始点で底面が一旦下降した後、ほぼ平坦にのびる。構造は地山を掘り抜いて構築されたと考えられるが、堆積土に多量の粘土ブロックを含んでいることから、地山を深く掘りくぼみ、上部に粘土を貼りつけ天井部とした半地下式のものの可能性も考えられる。断面形状は、すそが広がる袋状を示し、最大幅36cm。煙出し部は底面が一段低く落ちくぼみ、先端で軽く外傾して立ち上る。

〈出土遺物〉　（第19・20図、図版21、22）　４棟の住居跡の中では、最も出土量が多く、カマド内とその周辺、及び南西隅部に集中。遺物は大半が土師器で、須恵器は杯１点である。土師器は杯を主とし、底部は回転糸切り無調整。体部は内湾気味に立ち上るのが多く、体下半でふくらむ傾向がある。甕は胴部上半から口縁にかけての出土で上半にロクロ調整痕を留める。

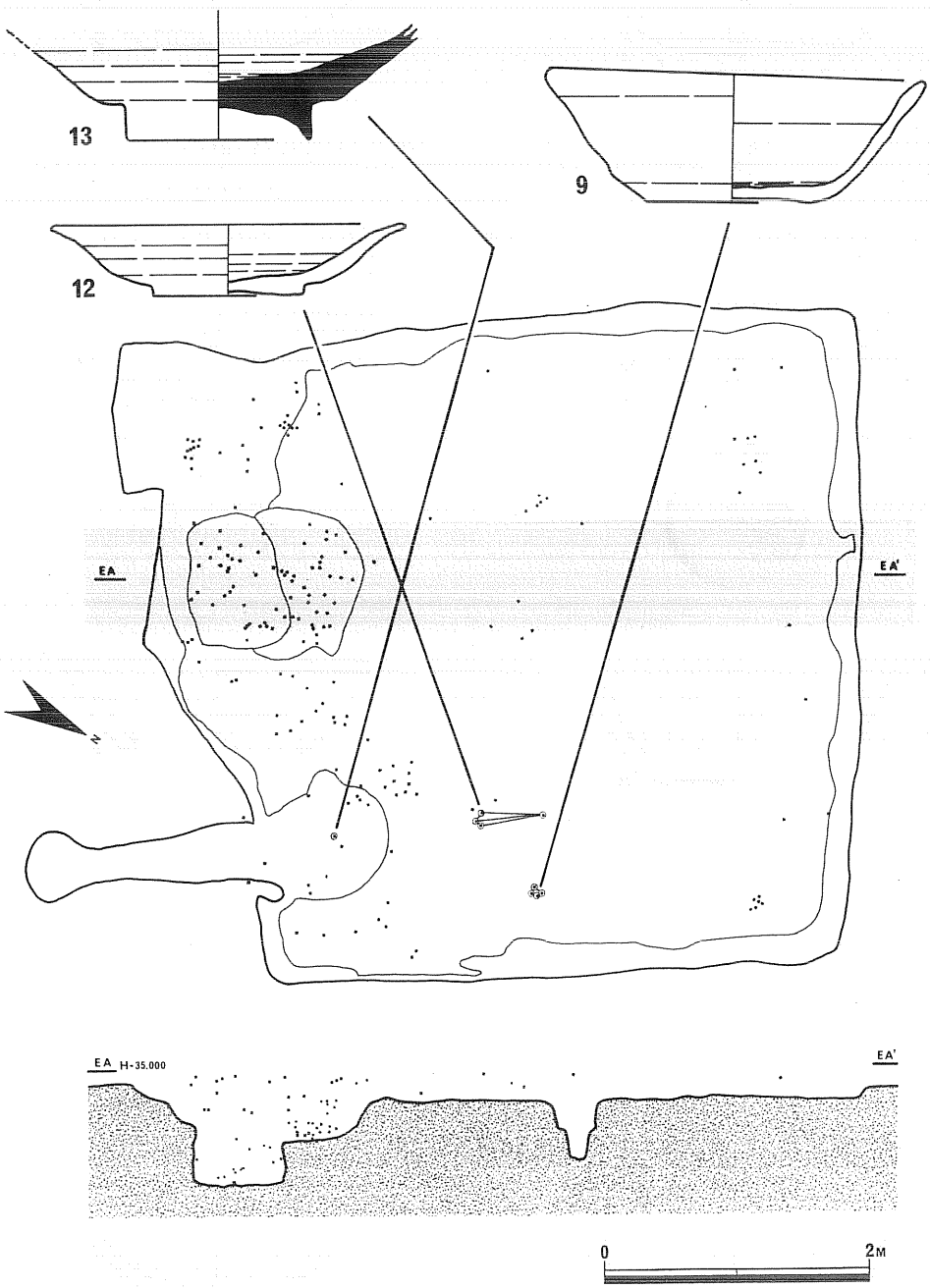
１・４はいずれも胎土が比較的緻密で、色調はにぶい褐色を示し、器表内外面に凹凸を留める。



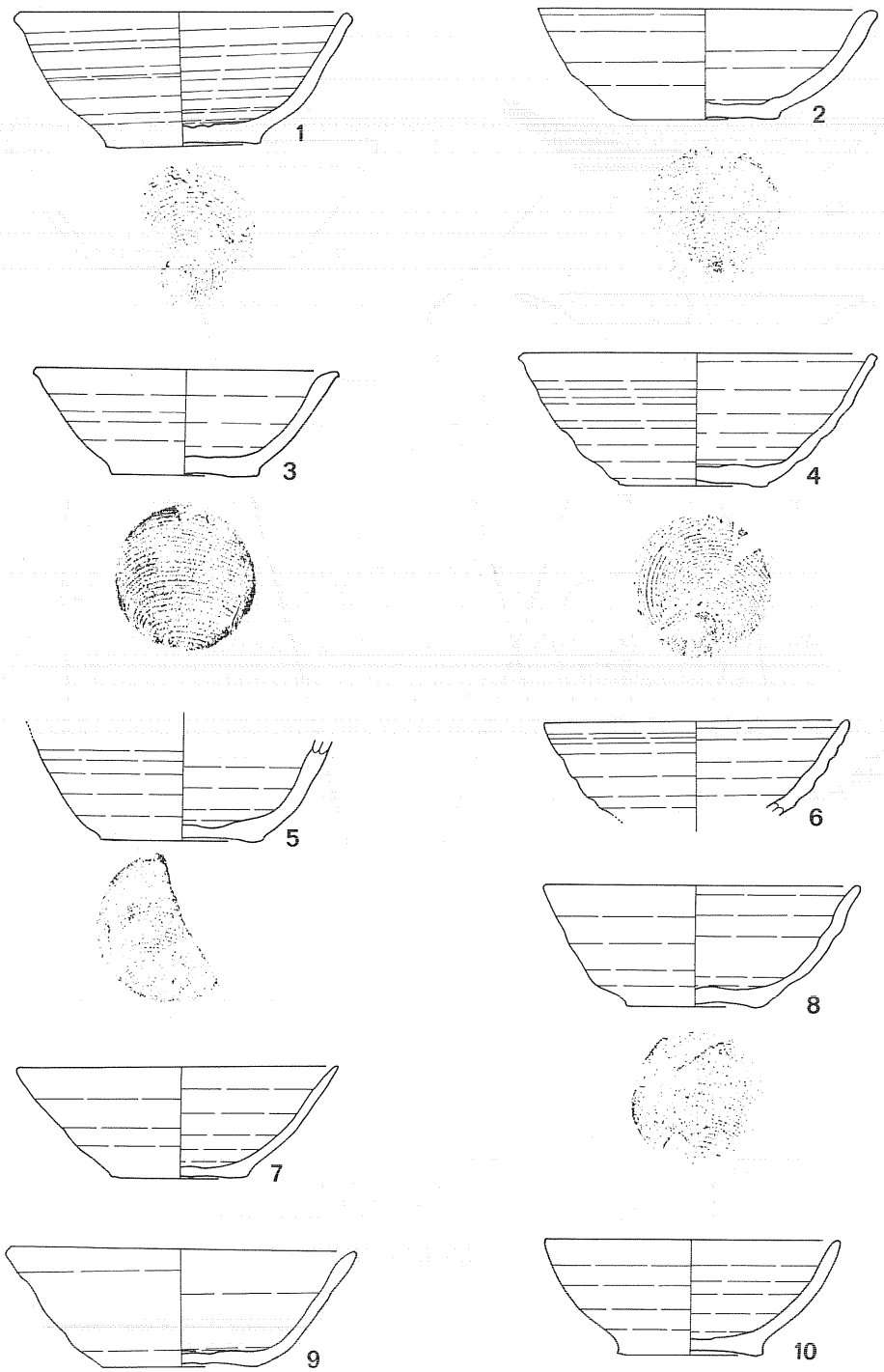
第16図　SI 02・SK06・SK07・SK08 実測図



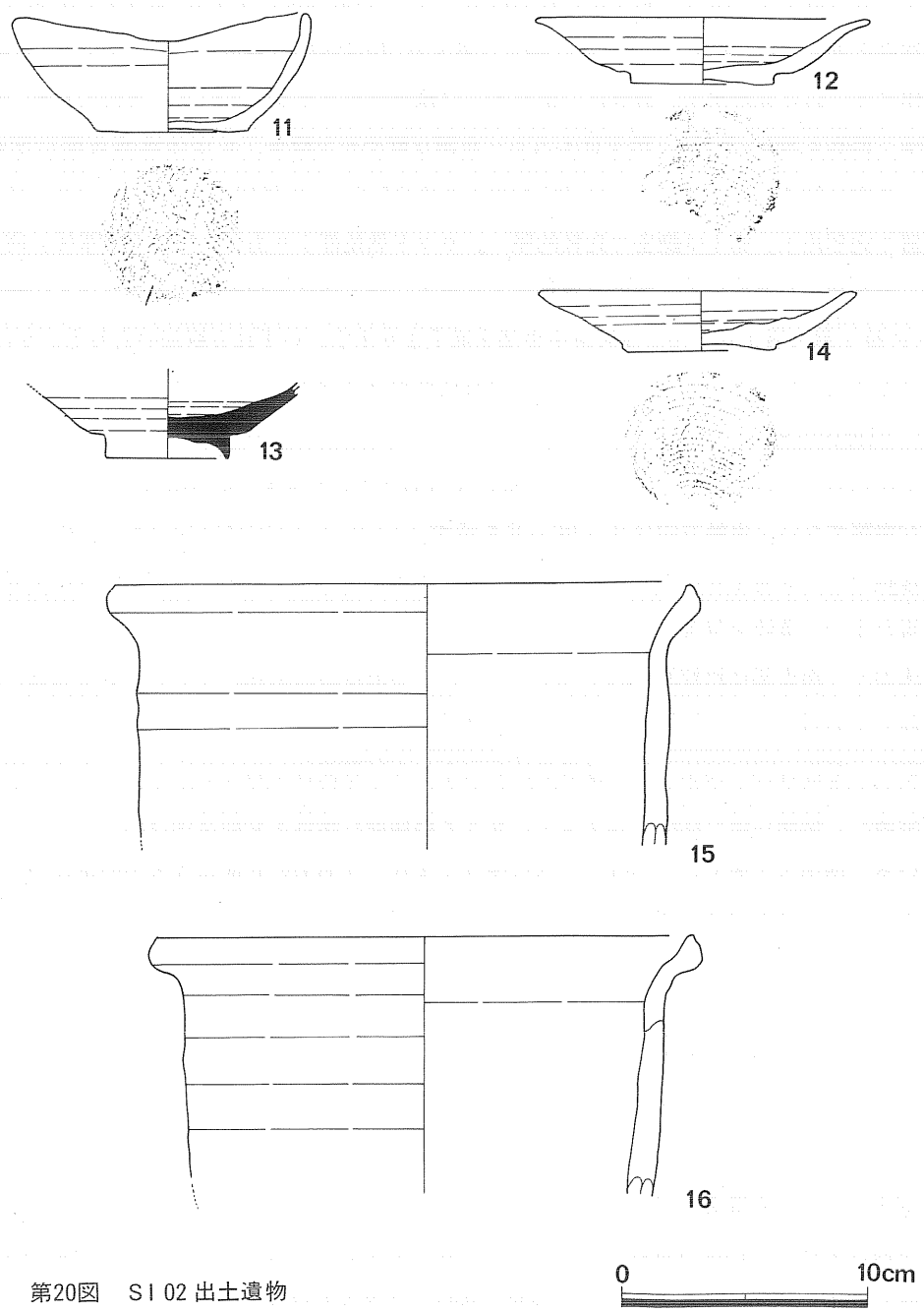
第17図　SI 02 カマド実測図



第18図　SI 02・SK06・SK07・SK08 遺物出土状況図



第19図　SI 02 出土遺物



第20図　SI 02 出土遺物

1・4は、いずれも胎土が比較的緻密で、色調はにぶい褐色を示し、器表内外面に凹凸を留める。1は庭径が6.4cm、口径13.7cm、器高5.2～5.8cm。4は底径6.2cm、器高5.3cm。2はほぼ完形出土で底径6.0cm、口径13.6cm、器高4.5cm。3・5・7・10・11は住居跡内中央部で隣接するP1・P2の底面より出土。体部の立ち上がりは内湾するものが多いが、7は直線状

を示す。３は鮮やかな橙色で胎土は比較的緻密で堅い。口縁部は外反する。底径6.1cm、口径6.0cm、器高4.4cm　５は内面にスス状炭化物を付着する。10は体部の器厚が均一しており、口縁部は内傾する。11は完形出土。器高は一定せず、口縁がゆがみをみせている。底径6.2cm、口径11.8cm、器高4.8cm～3.7cm。胎土はもろく、色調は鮮やかな橙色。６は体部器表面に凹凸を留め、色調は鮮やかな橙色。８はほぼ完形出土で底径5.5cm、口径12.9cm、器高5.0cm。14は皿形土器で完形出土。胎土は緻密で比較的堅い。カマド燃焼部より出土。13は須恵器杯、高台を付し、器表面に自然釉付着。カマド燃焼部より出土。15・16は土師器甕。15はカマドに隣接するP_3の焼土混入層より、16は住居跡中央部床面上より出土。いずれも胴部の立ち上がりは直線状になされ、口縁部でくの字状に外反、口唇部で垂直に立つ。

ＳＩ　03竪穴住居跡　（第21図、図版６）

〈平面形状〉　西辺長3.8ｍ、南辺長４ｍの長方形プランを呈す。北西隅部は、攪乱をうけて壁部が明瞭でない。主軸方向はＳ－38°－Ｅを示す。

〈堆積土〉　３層を基本とし、各層はレンズ状の堆積を示す。２・３層はローム粒を混入した暗褐色土で、遺物を包含する。

〈床面〉　南面部は比較的平坦で堅くしまり、北面部は凹凸気味。わずかながら北面に向って傾斜している。

〈壁〉　壁高は13～16cmで、ほぼ垂直に立ち上がり、壁面はなめらか。

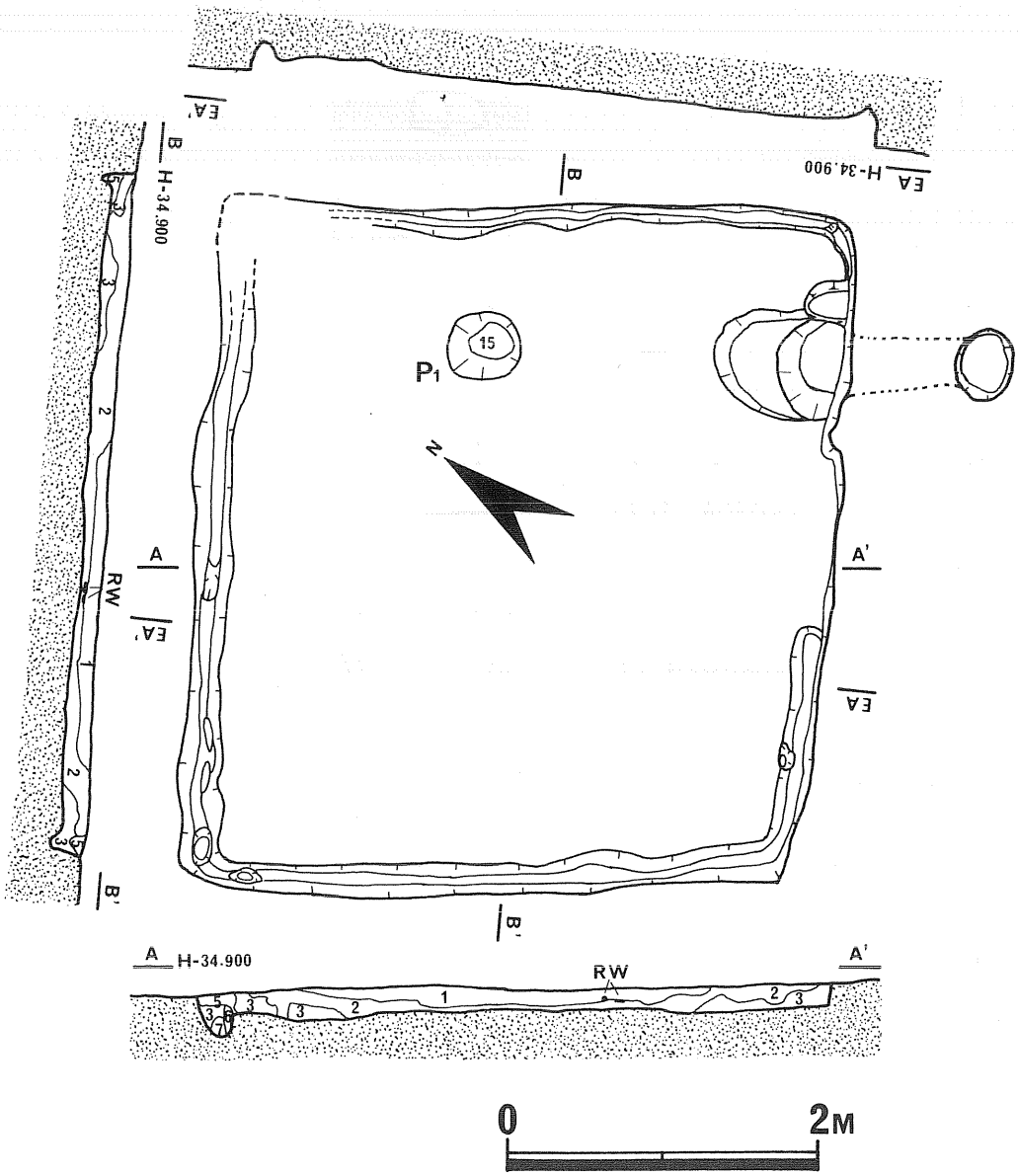
〈壁溝〉　壁際に沿いほぼ全周するが、カマド西面部に接続する部分は、1.2ｍにわたり中断している。溝巾は上面で12～14cm、Ｕ状に掘りこまれ、北面部の底面には大小の細長いくぼみが、みられる。深さは９～12cm。

〈柱穴（状ピット）〉　住居跡中央部西寄りにP_1があり、掘り方は不整で、底、壁面共凹凸を呈し、柱穴としての痕跡は薄い。開口部径44cm。

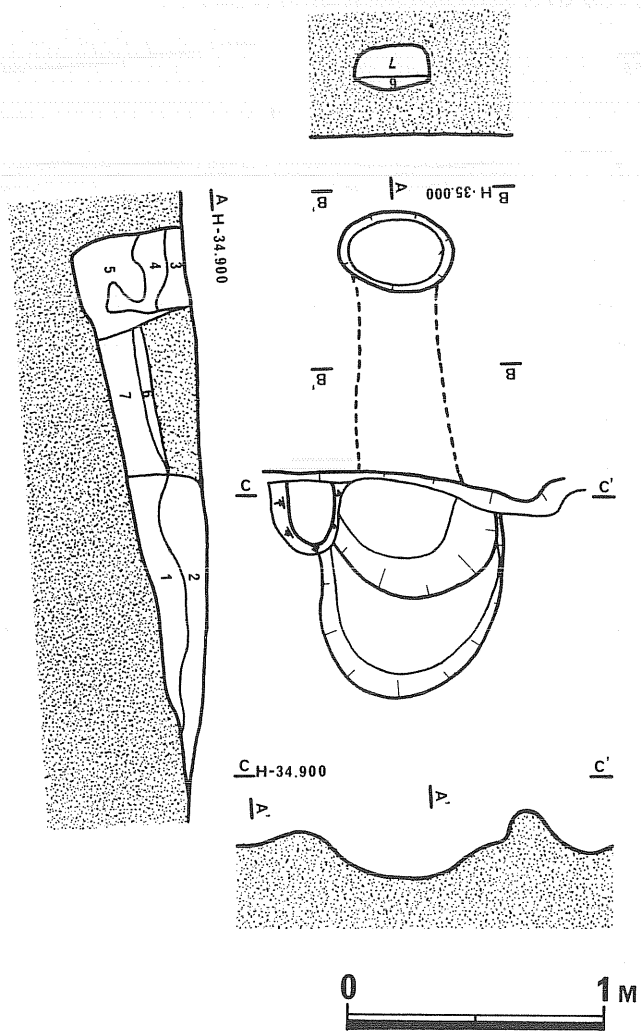
〈カマド〉　住居跡南壁東りに、壁面に対しほぼ直角に構築。主軸方向は南東、焚口、燃焼部とも地山をそれぞれ８cm、12cm程掘りくぼめて作っているが、焼土痕跡はみられない。煙出し部端までの長さ1.5ｍ。袖部は崩壊により痕跡を留めないが、燃焼部堆積土に比較的多量の粘土ブロックを混入している。煙道部は地山をくり抜いてつくられ、原型を良く留めている。底面は平坦で、12度の傾斜でなだらかに下降。断面形状は隅丸方形を呈し最大幅20cm、高さ12cm。煙出し部は一段低くなり、先端部で外傾して立ち上がる。深さ28cm。

〈出土遺物〉　（第24図、図版23）　遺物は住居跡南面部に集中し、北面部には極めて少く対照的である。遺物は全て土師器であり、杯を主とし、量的に少く、復元可能なもの１点。

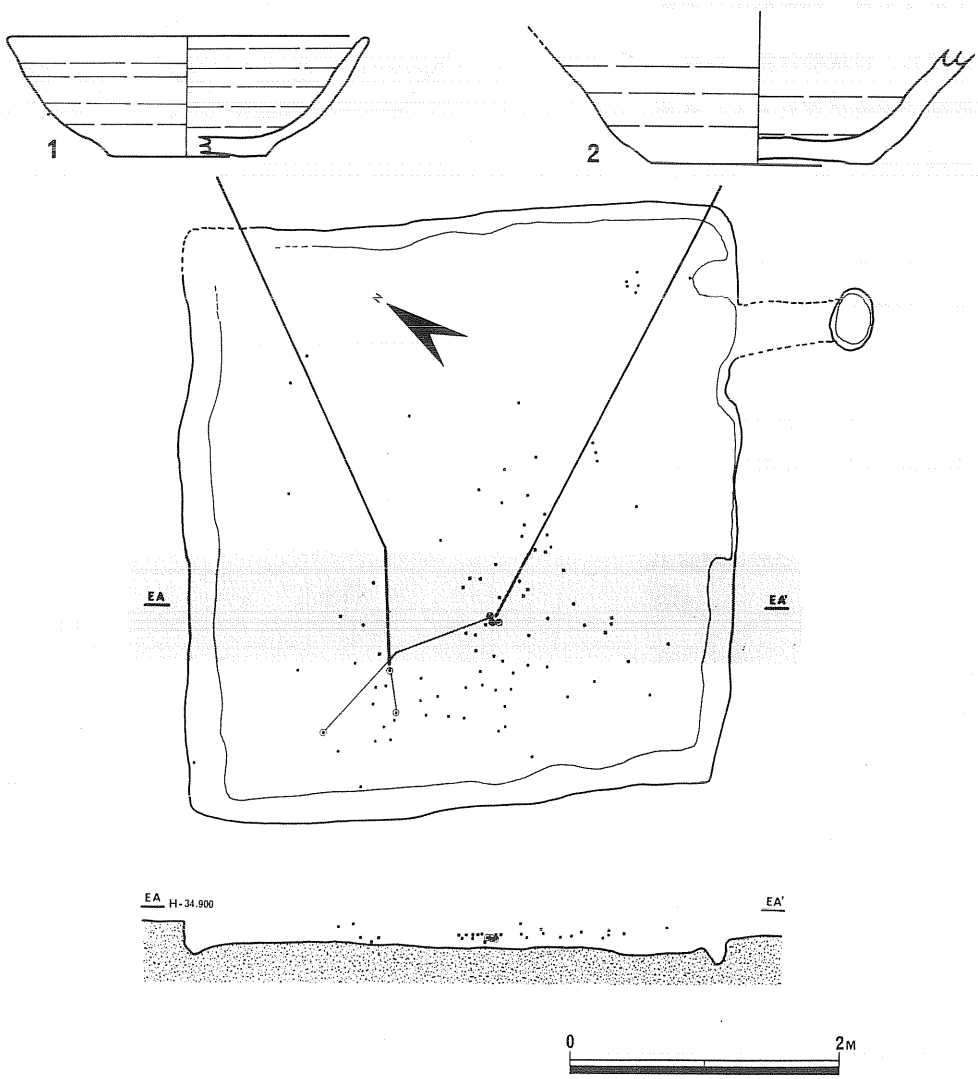
１は器表面に凹凸を呈す。立ち上りは体部下半でふくらみを持ち内湾気味になされる。２・



第21図　SI 03 実測図

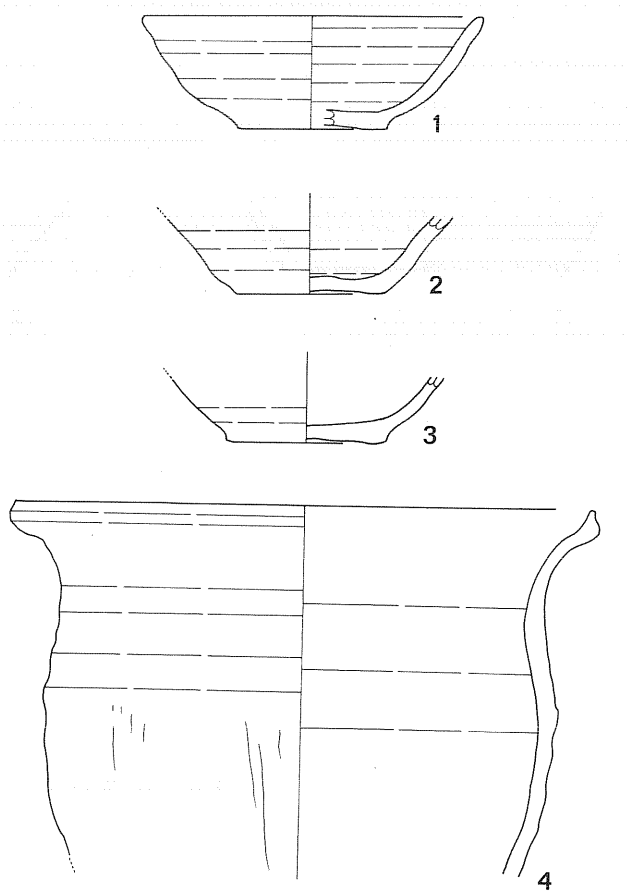


第22図　SI 03 カマド実測図



第23図　SI 03 遺物出土状況図

3はいずれも体部下半でわずかにふくらみをもち、2は直線状に立ち上る。4は土師器甕で胴部下半は欠損。胴部形体は紡錘状を呈し、口縁部は強く外反、口唇部で垂直に立ち上る。外面は胴部上半にロクロ調整痕を留め、下半をヘラナデ、内面は横位にナデを施している。



第24図　SI 03 出土遺物

SI 04竪穴住居跡

（第25図、図版9・10）

〈平面形状〉　北辺長3.4m東辺長4.2mの周溝に区画された長方形プランを呈する。検出された段階で、壁面は確認出来ず、床面と地山面との比高差はみられなかった。主軸方向は南西。

〈床面〉　ほぼ平坦を呈し、周溝外との堅さ、しまり具合等に差異はみられない。

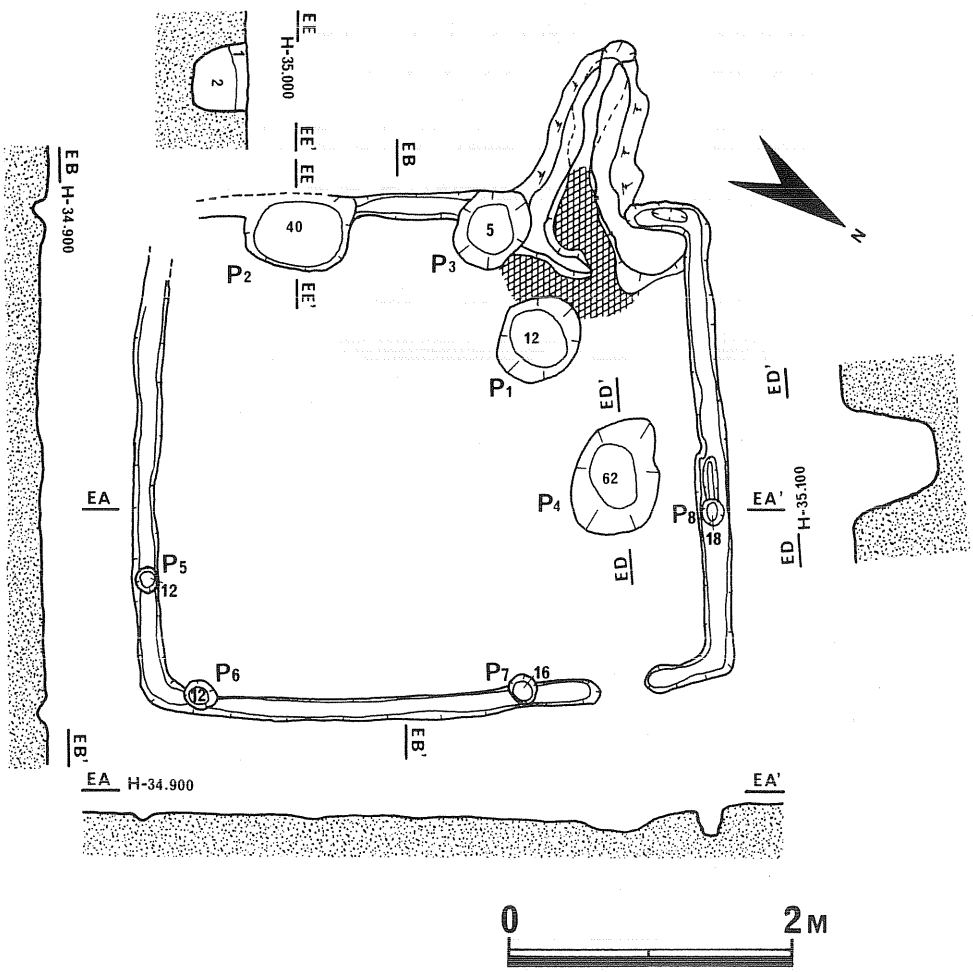
〈壁溝〉　西辺部南寄りの部分は攪乱を受け不明。東辺部では長さ40cmにわたり中断している。溝幅はほぼ一定しており、16～20cm。掘り方はU状になされ、深さは北辺部で部分的に深く16cm、他は8～12cm。底、壁面ともなめらかでしまっている。

〈柱穴（状ピット）〉　周溝内に4本検出。いずれも開口部径13～15cmで浅い。

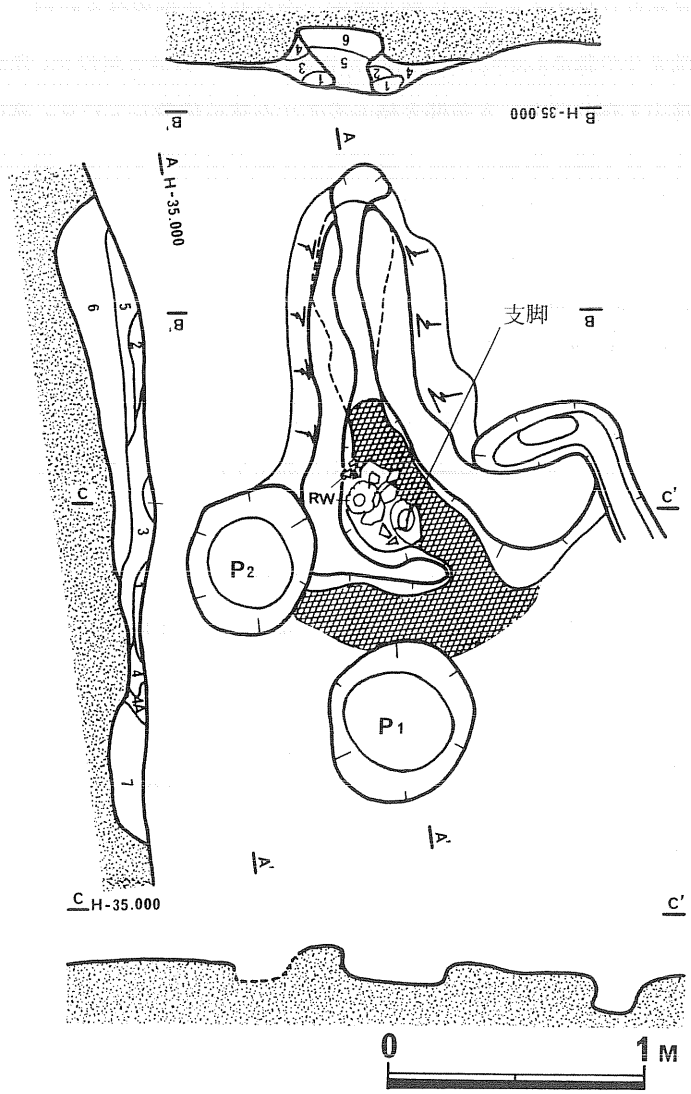
〈付属施設〉　P_1は開口部径56cmで円形を呈し、カマド前面に位置する。底面は鍋底状を呈し、底、壁面とも堅くしまっている。堆積土は軟質の黒色土で少量の焼土を含むが、カマドより流出した焼土、炭化物の多くはピット縁を境にして停止している。P_2は円筒状を呈し、開口部長軸88cm。堆積土は多量の焼土と少量の炭化物を含有するが、ピット外周辺にはその痕跡がみられない。壁面はピット内中位を中心に、火熱により赤褐色を示し、硬化している。堆積土下層より土師器片出土。P_3は、P_1と形状、深さが類似している。カマド袖部を除去する段階で検出されたが、ピット範囲部分は、袖部の上面で土質が混濁しており、土師器片の散布が多く

みられた。P_4は開口部長76cmの不正楕円形で、深く、堆積土は極めて軟質の黒褐色土である。底面、壁面とも凹凸を呈し、もろくブサブサしている。

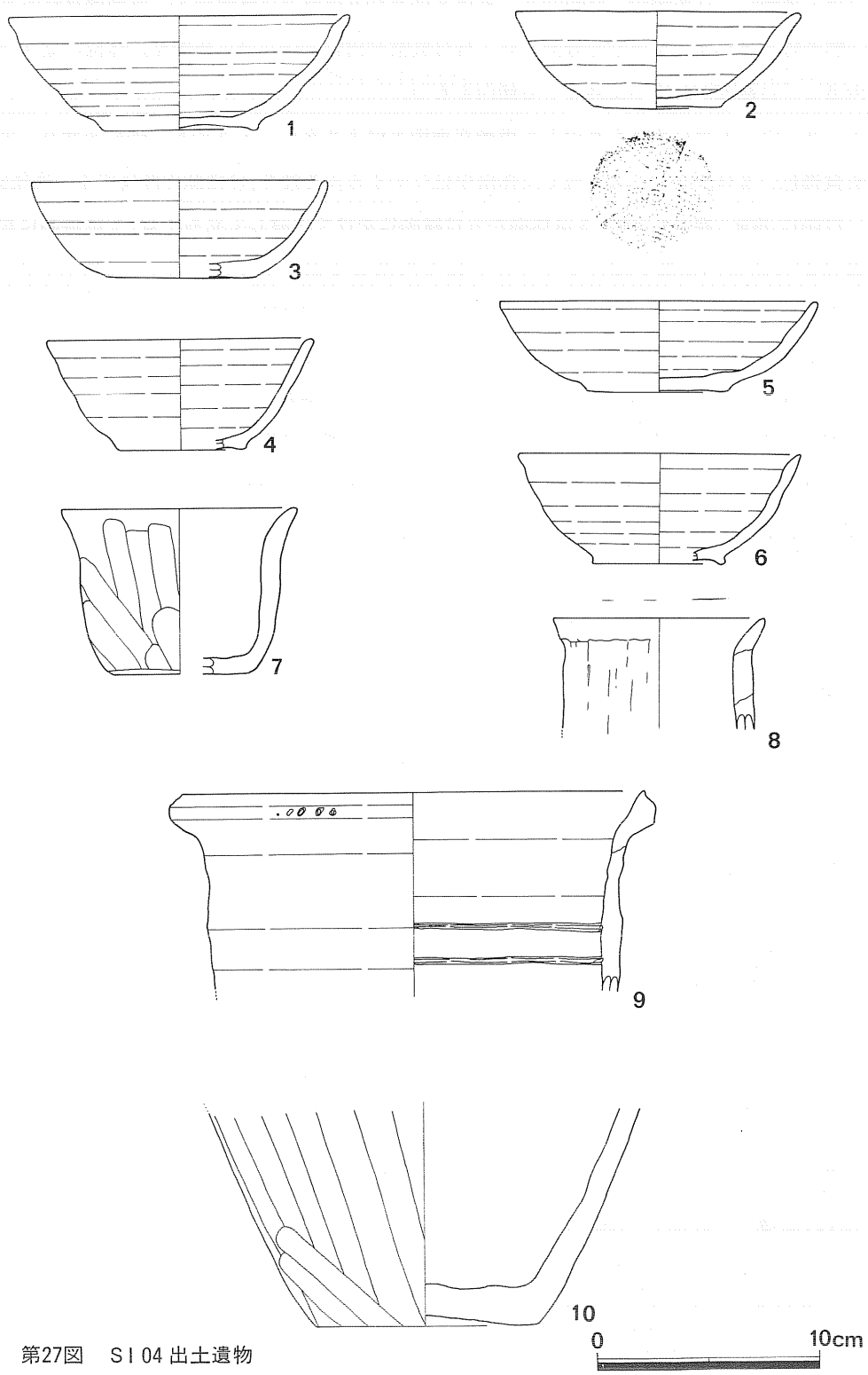
〈カマド〉　住居跡内面の西寄りで、周溝に対し約18度、西寄りに傾いて構築されている。主軸方向は南西。燃焼部は地山をわずかに掘り凹め、中央部に土師器甕を転用した支脚をすえている。煙出し部端までの長さ1.9m。袖部はわずかながらその痕跡を留める。煙道部は比較的良く残っており、地山を掘り凹み、天井部を粘土でドーム状に構築している。底面は先端に向かい、弓状にゆるやかに下降、断面形状は下部が大きく広がる袋状を示し、最大幅22cm。煙出し部は底面がわずかに凹み、深さ22cm。



第25図　SI 04 実測図



第26図　SI 04 カマド実測図



第27図　ＳＩ04 出土遺物

〈出土遺物〉　（第27図、図版23）　カマド内及びその周辺に集中する。土師器は杯を主とし、甕の場合は小型のものが比較的多い。杯は底部が回転糸切りで、無調整。体部の立ち上りは内湾し、口縁部がわずかに外反する傾向をもつ。

1・2・3・5はいずれもカマドの燃焼部堆積土中より出土。1は胎土に砂粒を含有。色調は灰黄褐色。2は完形で、1と同じく体部中位にふくらみを持ち、口縁部で外反する。底径5.7cm、口径12.8cm、器高4.3cm。3は体部から口縁部にかけて内湾して立ち上る。5は器高に比して口径が大きく、体部下位にふくらみを持ち内湾して立ち上る。6はP_4堆積土中より出土。器厚は比較的薄手になされ、胎土は緻密で堅い。器表内外面に凹凸を留め、部分的に二次火熱を受け、赤褐色を示している。体部の立ち上りは、下位にふくらみを持ちながら、4は直線状に、6は内湾し、口縁部が外反する。7～9はカマド袖部及び燃焼部堆積土より出土。7は胴部がゆるやかに内湾して立ち上り、口縁部で外反。器表外面は縦方向、内面は斜状にヘラナデを施し、底部外周をヘラケズリしている。器高7.4cm。8は胴部が直線状に立ち上り、口縁部で外反。。胎土に小礫を含有、色調は灰黄褐色。外面は口縁部を横ナデした後、口縁下半から底部にかけヘラナデを施す。内面は横位にハケ目痕跡を留める。9は胴部が直線状に立ち上り、口縁部では、器高が厚くなり、くの字状に外反、口唇部は直角になされる。胴部上半にロクロ調整痕を留める。10は土師器甕胴下半から底部にかけてのもので、カマドの支脚として、倒立させて用いられた。底部径9.3cm。外面は胴下半にかけヘラナデ、底部付近はヘラケズリを施し、内面は斜位にヘラナデの痕の痕跡を留める。

②　掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡　（第28図、図版10）

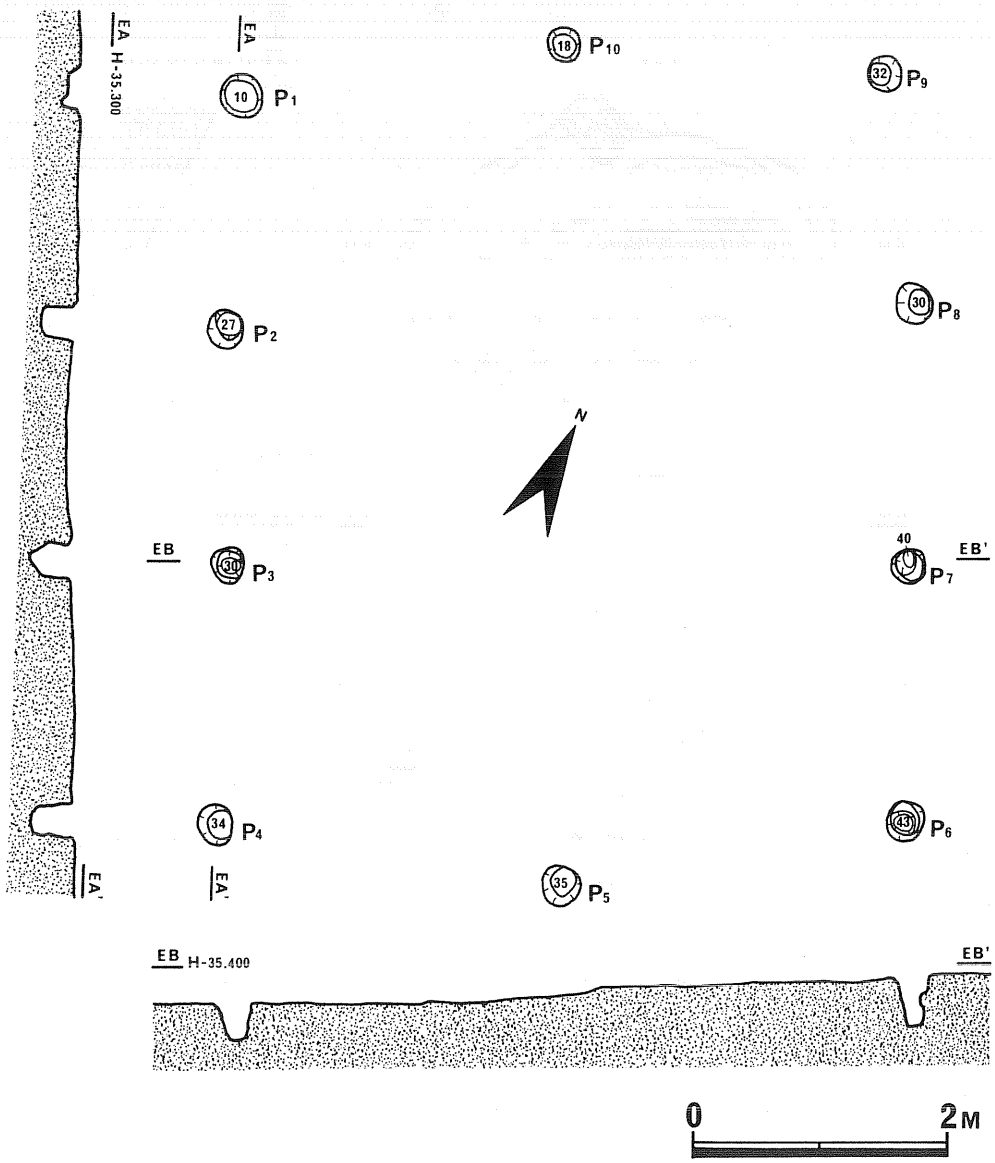
耕作土直下の2層下位面で、SI02南面に隣接して検出された。遺構は梁行2間、桁行3間で長方形プランを呈する。南北6m、東西5mで、柱間距離はほぼ平均しており、梁行の場合2.4m、桁行では2mである。柱穴は平面形状が円形で、直径28～32cm、深さは32～38cmで、柱痕跡は明瞭でないが、3基の柱穴にその可能性がみられた。建物の方位はS－28°－W。関連する遺物、遺構の検出はみられない。

③　土壙

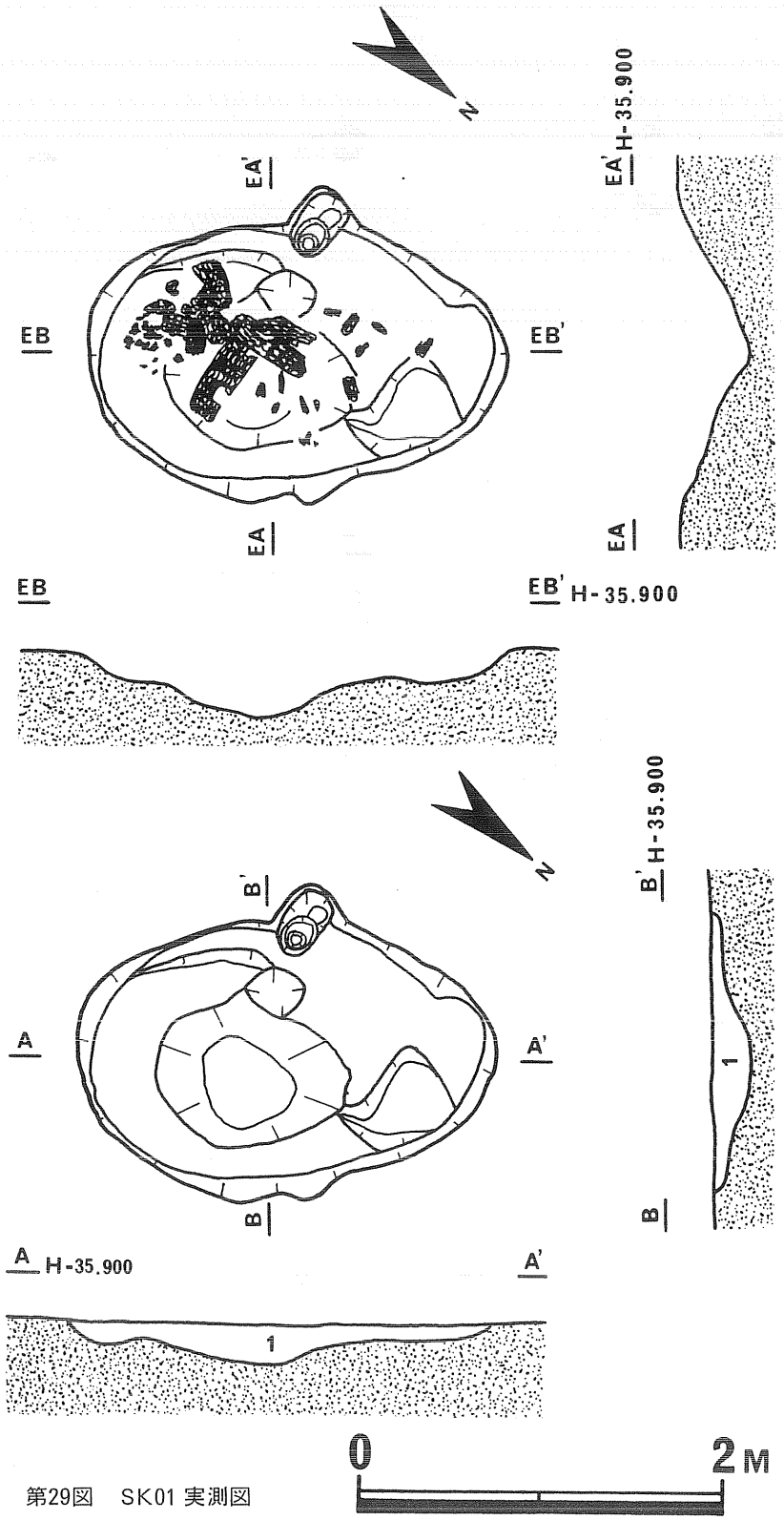
SK01土壙　（第29図、図版11）

〈形状〉　平面が楕円形を呈し、上幅径2.32×1.6m。底面、壁面ともなめらかでしまっている。中央部で一段深く落ちくぼみ、深さ20cm。

〈堆積土〉　黒褐色土1層で炭化粒を混在する。



第28図　SB01 実測図



第29図　SK01 実測図

SK02土壙　（第32図）

〈形状〉　平面が円形を呈し、直径44cm。底面は凹凸気味でしまっており、深さは12cm。

〈堆積土〉　1層に焼土、炭化粒を含み、上面程多い。

SK03土壙　（第32図）

〈形状〉　平面形は不整円形を呈し、直径1.28m。周壁に沿って3基の柱穴状ピットを検出底面はわずかだが凹凸を示し、堅くしまっている。東壁寄りで一段落ちくぼみ、深さ20cm。

〈堆積土〉　I層中に炭化物と小量の焼土を含み、一部は長さ10cmの炭化材。他層はその痕跡なく褐色粒をまばらに含む。

SK04土壙　（第32図、図版12）

〈形状〉　平面は楕円形を呈し、上巾径0.92×0.8m。底面は平坦でしまり、深さ16cm。部分的に火熱を受け硬化している。

〈堆積土〉　全層にわたり炭火粒を含む、6層は焼土も含有。

〈出土遺物〉　底面に付着して土師器片検出。

SK05土壙　（第33図、図版12）

〈形状〉　平面は楕円形を呈し、上巾径1.48m×1.32m。底面は北から南に向いなだらかに傾斜、中央部でさらに一段深く落ちこみ、土壙は2重を呈する。最深部38cm。底面はいずれも堅くしまっている。

〈堆積土〉　軟質な黒褐色土の6層を除き、他層全てに焼土、炭化物を含む。4層は焼土層。

〈その他〉　土壙中央部で、底面が1段落ちこむ部分に砂利が集石。0.3～0.5cm大の河原石で、外部からの流れ込み、及び熱化を受けた痕跡は見られない。

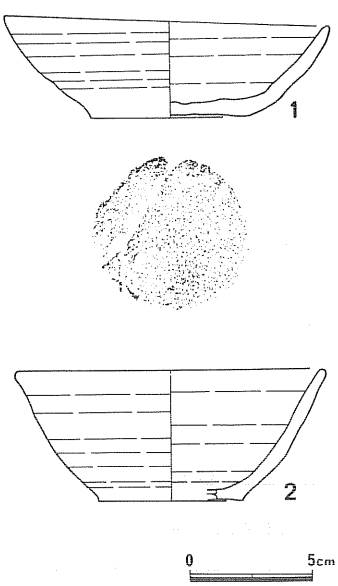
SK06・07・08土壙　（第16図、図版13）

SI02の南面部で、住居跡と重複して検出。

〈形状〉　SK06は平面形が一辺1.6mの不整方形で、地山面よりの深さ28cm。住居跡の堆積土上面で明確に確認され、SI02よりも新しい。SK07は長辺1m、短辺60cmで、地山面よりの深さ72cm。隅丸方形のプランを呈し、住居跡よりも古い。SK08は長軸が1.2m、地山面よりの深さ40cmの不整楕円形を呈し、住居跡内の焼土を切っており新しい。

〈堆積土〉　SK06・08は黒褐色土で、07は暗褐色土。

〈出土遺物〉　（第30図、図版24）　SK07の堆積土



第30図　SK07出土遺物

中位層より出土。いずれも底部が回転糸切り無調整の土師器杯で、1は底径6.5cm、口径13.2cm、器高4.1～3.5cm、体部は内湾気味に立ち上る。2は底径6cm、口径12.5cm、器高5.4cm。

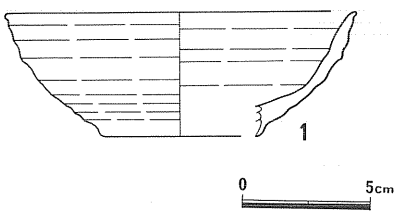
SK09土壙　（第32図、図版13）

〈形状〉　平面は円形を呈し、上巾径1.68m。南面部で一段深く24cm。

〈堆積土〉　褐色粒を全体に含む。

SK10・13土壙　（第34図）

〈検出状況〉　両遺構は重複している。SK13の遺構範囲部分は上面で暗褐色土のマウンドを形成、多量の焼土及び土器の混入がみられた。



第31図　SK13 出土遺物

〈形状〉　SK10は平面が不整の楕円形を呈し、長軸1m。西壁にほぼ垂直に落ち込み、底面付近ですそ広がりになる。深さ40cm。いずれも堅くしまっている。SK13はSK10に切られており、検出時の開口部南北軸長は1.2m。底面は堅くなめらかで東西に向いなだらかに傾斜している。深さは最深部で8cmと浅い。

〈堆積土〉　両土壙の堆積土は明瞭に分かれる。SK10は黒褐色土を主体とし、焼土を含まず、SK13は焼土を多量に含み、土師器片を含する。

〈出土遺物〉　（第31図）SK13の堆積土2層より出土。土師器杯で、器表面に凹凸を呈す。体部は内湾して立ち上がり、中位でふくらみをみせる。外面及び口縁部の内面は、部分的に2火熱を受け赤褐色化している。

SK11土壙　（第33図）

〈形状〉　平面形は楕円形で、上巾径0.92×0.6m。底面は凹凸を呈してあれている。深さ28cm。

〈堆積土〉　全層にわたりローム粒を多量に混入する。

SK12土壙　（第33図）

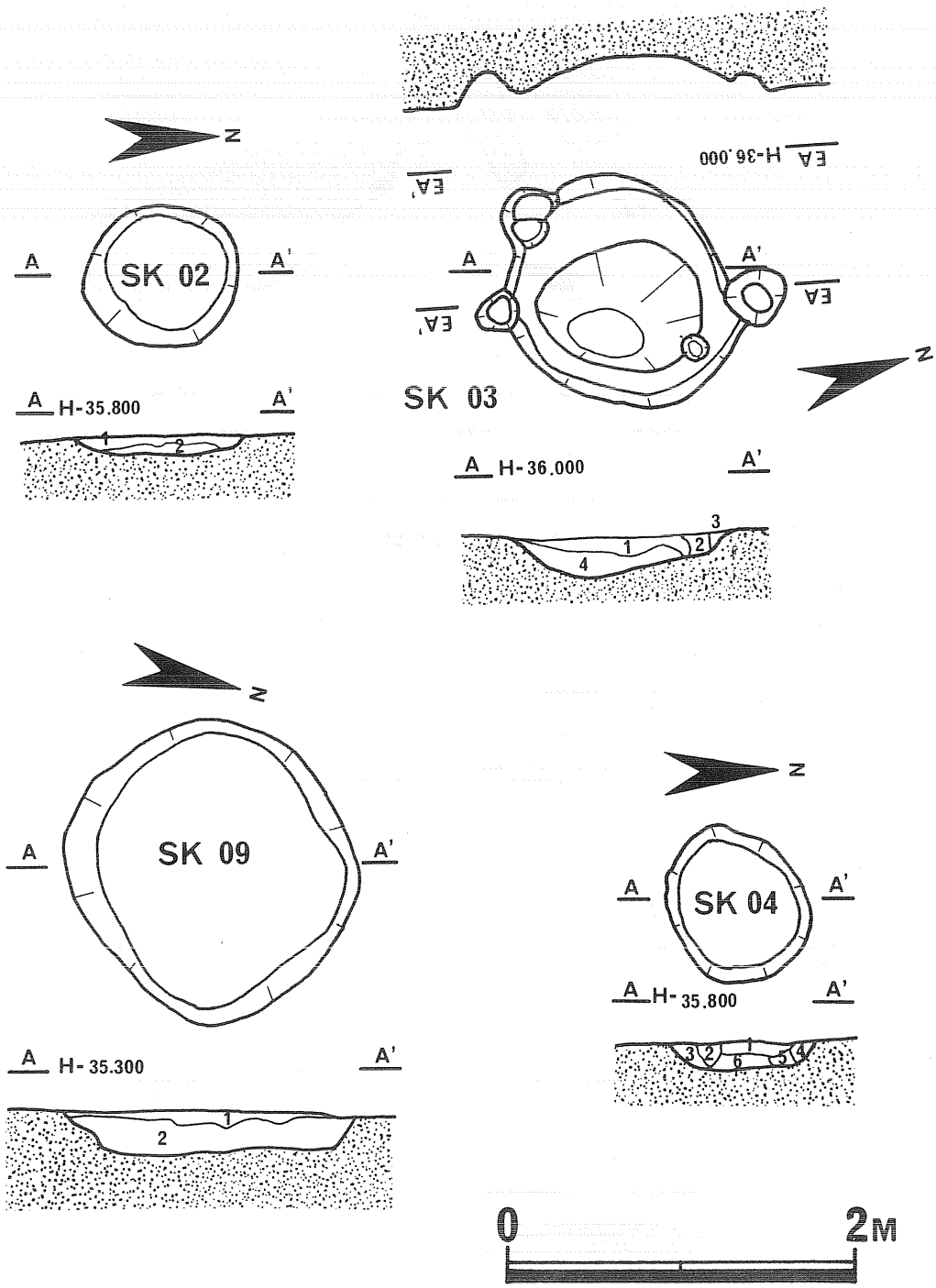
〈形状〉　平面形は東面部が張り出し気味の不整楕円形を呈し、上巾径0.88×0.8m。底面は部分的にあれており、深さ12cm。

〈堆積土〉　ローム粒を含む粘質性の黒色土を主体とする。

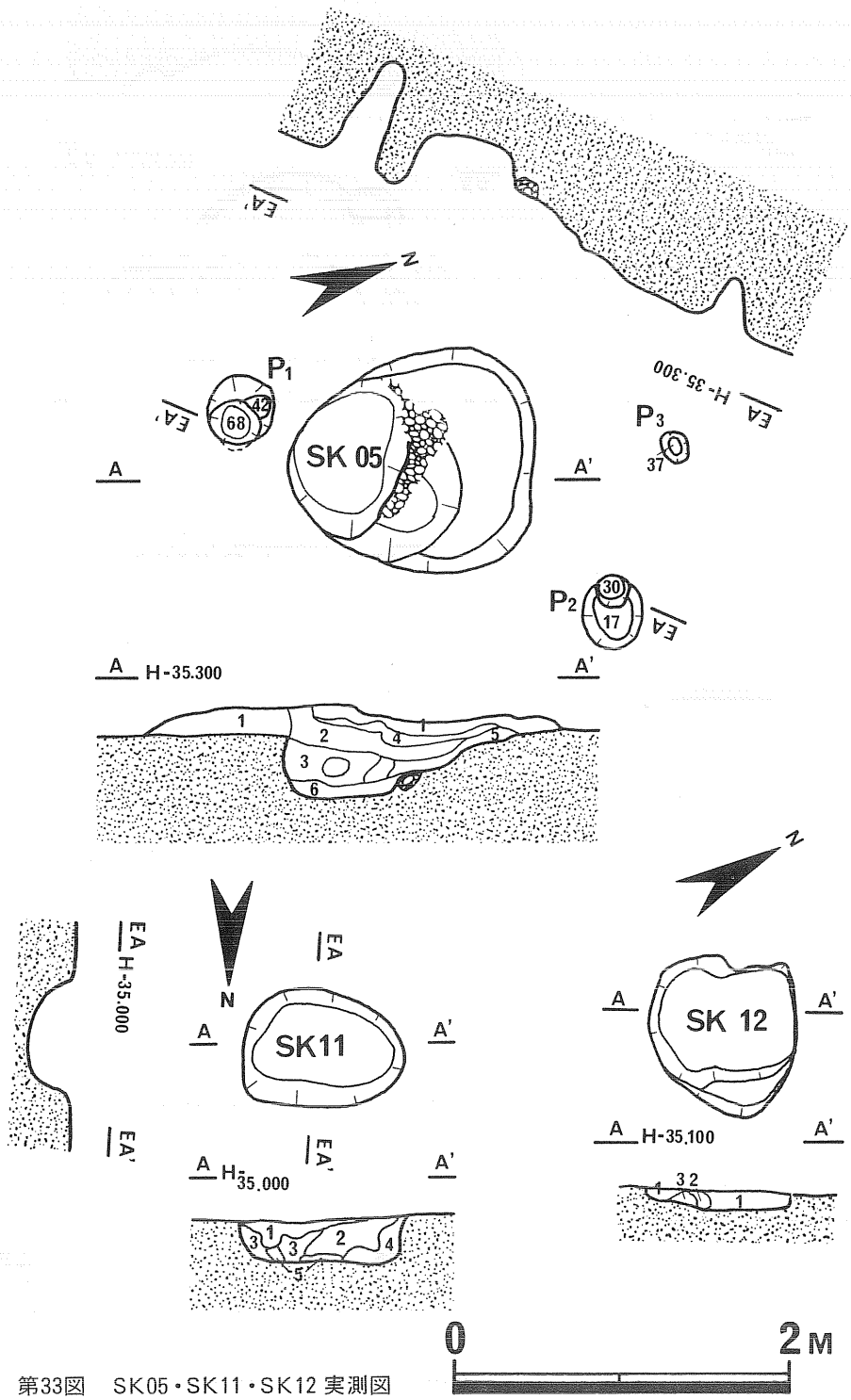
④　焼土遺構

SXF01焼土遺構　（第35図）

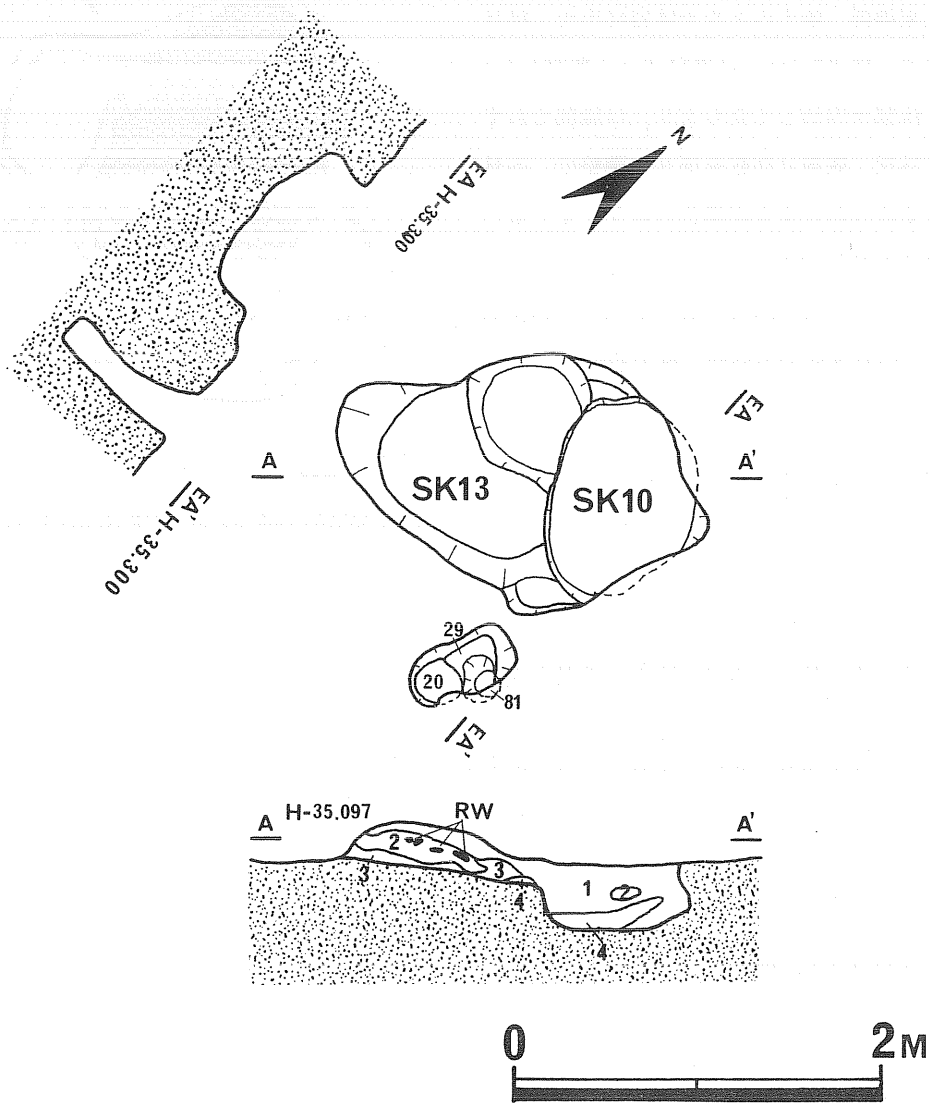
〈形状〉　直径2.2mの円形範囲で焼土堆積がみられた。焼土は地山面より浮いており、掘りくぼみはみられない。北面・東面部では巾28～60cmで粘土が盛土され、外周をめぐる。中央



第32図　SK02・SK03・SK04・SK09 実測図



第33図　SK05・SK11・SK12 実測図



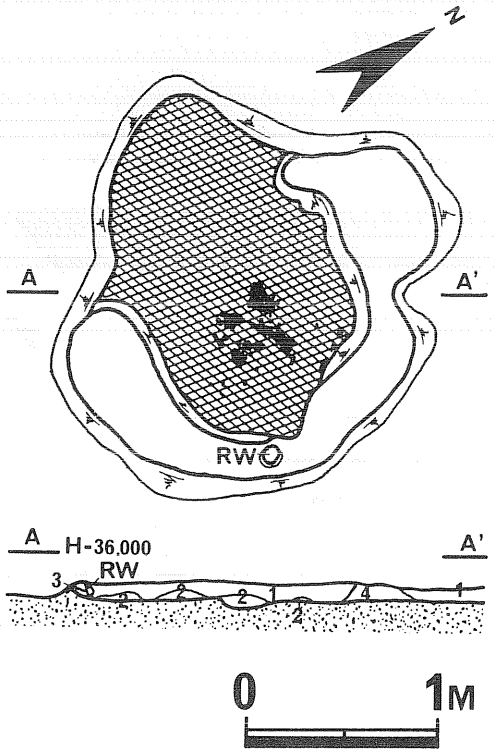
第34図　SK10・SK13 実測図

部には多量の炭化材を検出。

〈出土遺物〉　（第36図、図版24）　遺構内北東隅部、焼土内より土師器杯出土。杯は完形で、底径5.1cm、口径11.2cm、器高4.4cmで、体部は内湾して立ち上り、口縁部でわずかに外反。底部は回転糸切り無調整で、内外面に２次火熱による赤褐色のムラを生じる。

SXF 02焼土遺構

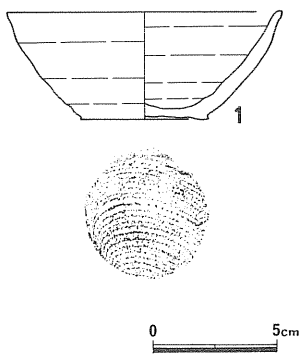
〈形状〉　直径24cm、高さ36cmで、地山面より浮いた状態で円筒状に焼土が堆積している。内部は空洞状で暗褐色土が堆積、地山面の掘りくぼみは見られない。



第35図　SXF 01 実測図

⑤　陥し穴状遺構

遺構は、調査区のほぼ全域に分散しており、いずれも地山直上で検出された。遺構よりの出土遺物は、器表面の磨耗が激しい縄文土器２点が、堆積土最上面より検出されたに留まる。



第36図　SXF01 出土遺物

SKT 01陥し穴状遺構　（第37図、図版15）

開口部長軸3.32m、短軸84cm。壙底部長軸84cm、短軸12cm、深さ98cm。方位W－6°－S。

SKT 02陥し穴状遺構　（第37図、図版15）

開口部長軸3.38m、短軸92cm。壙底部長軸3.80m、短軸12cm。深さ1.36m。方位W－8°－S。

SKT 03陥し穴状遺構　（第38図、図版16）

開口部長軸3.40m、短軸68cm。壙底部長軸4.2m、短軸10cm。深さ1.2m。方位W－19°－S。

SKT 04陥し穴状遺構　（第38図、図版16）

開口部長軸3.0m、短軸68cm。壙底部長軸3.4m、短軸16cm。深さ1.28m。方位W－4°－S。北壁は上位部が部分的に崩落している。

SKT 05陥し穴状遺構　（第39図、図版17）

開口部長軸2.72m、短軸56cm。壙底部長軸３m、短軸16cm。深さ84cm。方位W－15°－N。遺

構上面の周壁は部分的に崩落している。

SKT 06陥し穴状遺構　（第39図、図版17）

開口部長軸48cm。深さ64cm。方位W－74°－N。

SKT 07陥し穴状遺構　（第40図、図版18）

開口部長軸3.12m、短軸44cm。壙底部長軸3.8m、短軸9cm。深さ1m。方位W－15°－S。

SKT 08陥し穴状遺構　（第40図、図版18）

開口部長軸2.72m、短軸40cm。壙底部長軸3m、短軸9cm。深さ68cm。方位W－46°－N。

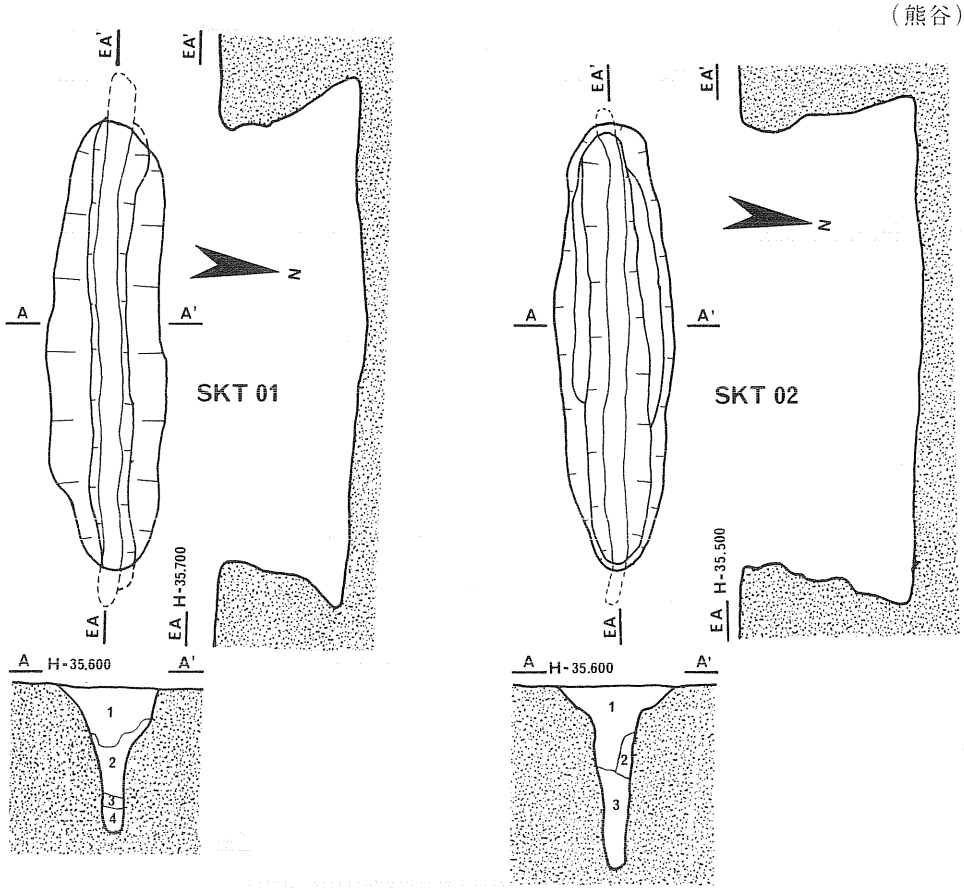
SKT 09陥し穴状遺構　（第41図）

開口部長軸3.08m、短軸68cm。壙底部長軸3m、短軸15cm。深さ1.16m。方位W－33°－S。

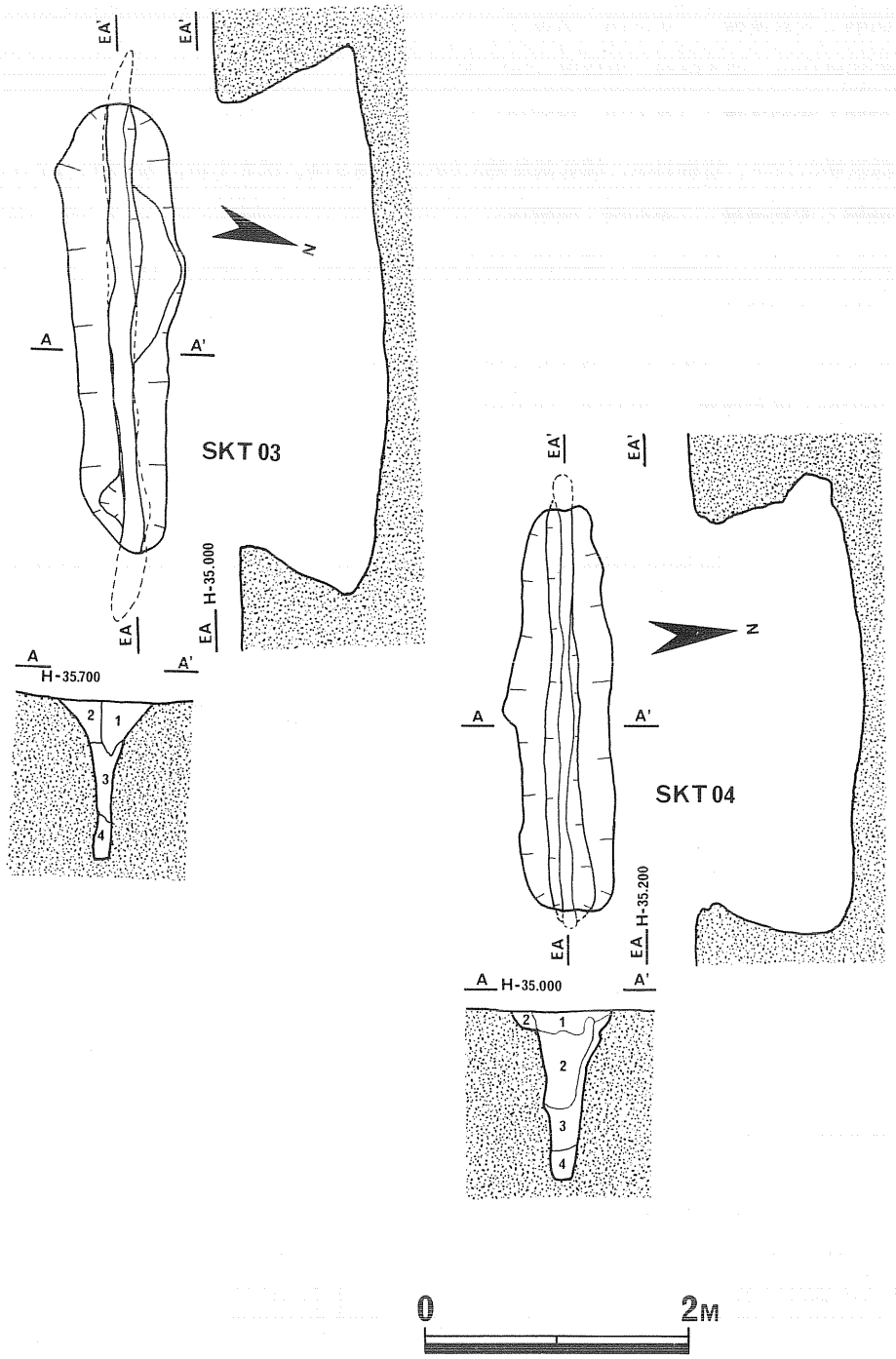
SKT 10の陥し穴状遺構　（第41図、図版19）

開口部長軸2.64m、短軸52cm。壙底部長軸2.2m、短軸12cm。深さ1m。方位W－34°－S。

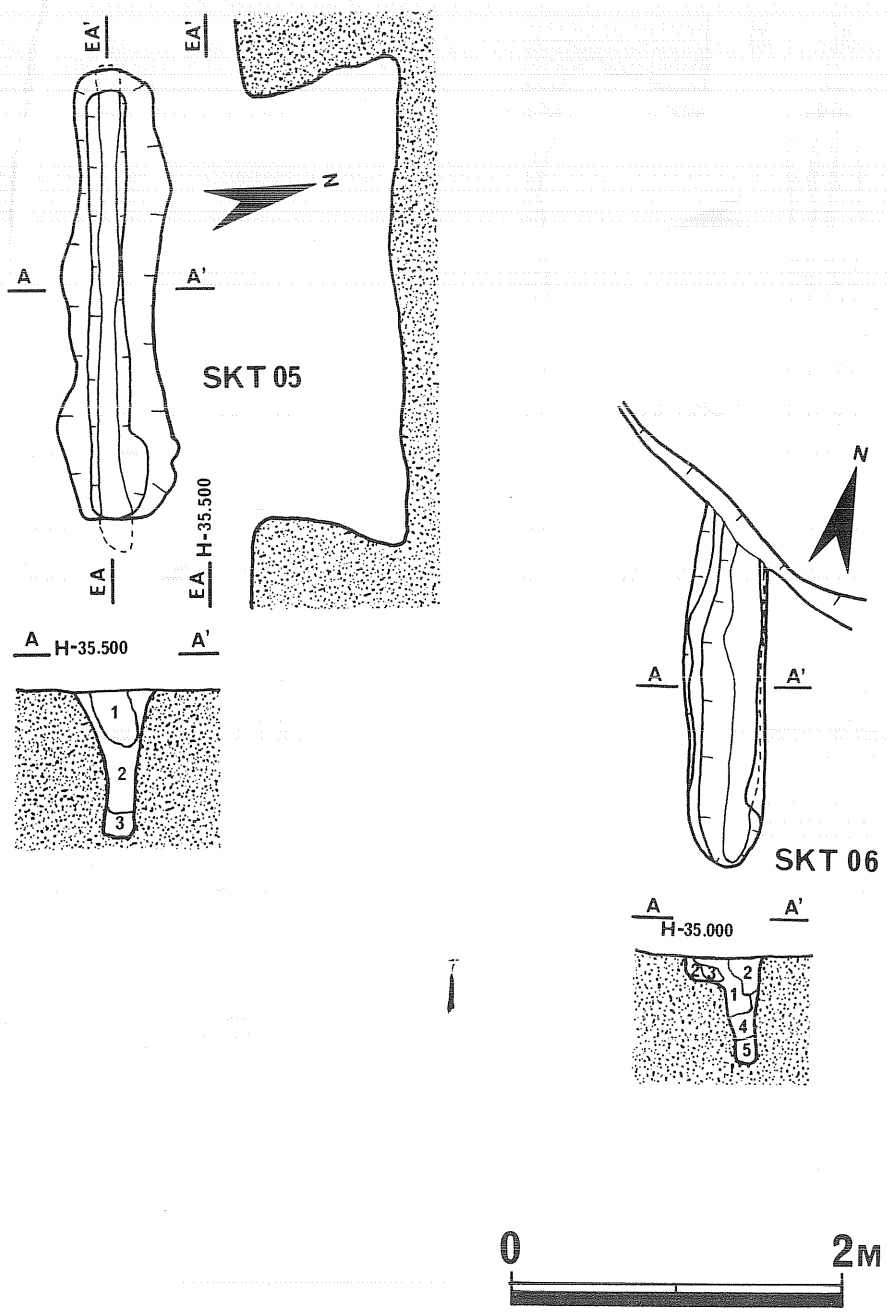
（熊谷）



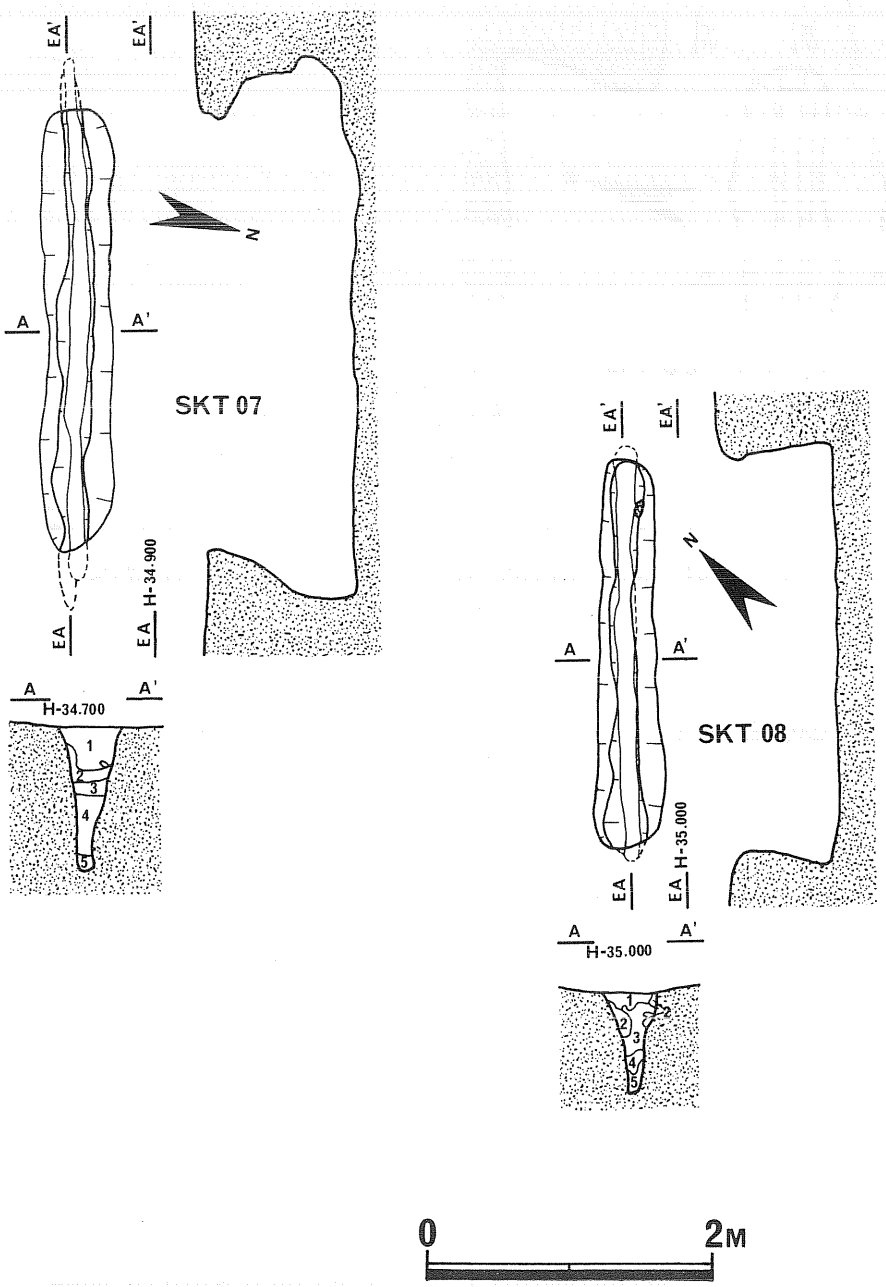
第37図　SKT01・SKT02 実測図



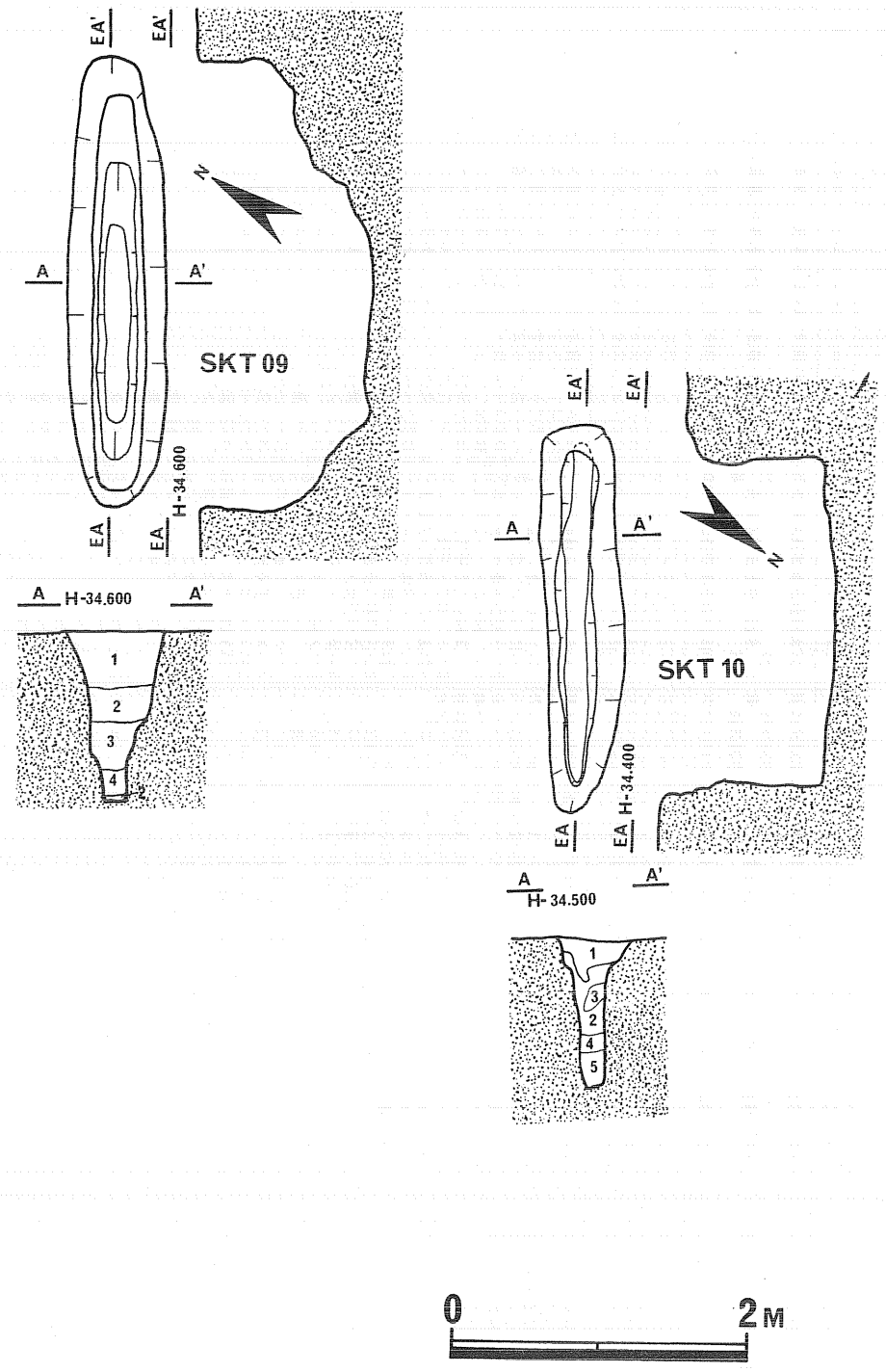
第38図　SKT03・SKT04 実測図



第39図　SKT05・SKT06 実測図



第40図　SKT07・SKT08 実測図



第41図　SKT09・SKT10 実測図

第1表　A地区遺構埋土層一覧表（1）

遺構	層	土色	土質
SI 01	1	黒褐色（5 YR 3/1）	ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子多量に混入、土器片多く含む、やわらかい。
	2	黒褐色（10 YR 3/4）	ロームブロック炭化粒子多量に混入、堅くしまっている。
	3	黒褐色（7.5YR 3/2）	ロームブロック多量に混入、やわらかい。
	4	黒褐色（10 YR 3/3）	ローム粒子少量混入、ボソボソしてしまりがない。
	5	黒（10 YR 3/1）	混入物なし、ボソボソしてしまりがない。
SI 02	1	黒（10 YR 3/1）	ややしまりあり。
	2	黒褐色（10 YR 3/2）	非常に堅くしまっている。
	3	黒褐色（7.5YR 3/2）	炭化物、ローム粒子混入、ややややわらかい。
SI 03	1	黒（7.5YR 3/1）	ローム粒子混入、ややしまっている。
	2	黒褐色（7.5YR 3/2）	ローム炭化物少量混入、堅くしまっている。
	3	暗褐色（10 YR 3/4）	ロームブロック多量混入、堅くしまっている。
	4	黒褐色（7.5YR 3/2）	やわらかい。
	5	暗褐色（10 YR 3/4）	ローム多量混入。
	6	褐色（10 YR 4/4）	ロームブロック多量混入。
	7	暗褐色（7.5YR 3/4）	ローム粒子混入。
SI 04内ピット	1	黒褐色（10 YR 3/2）	炭化物混入。
	2	黒褐色（10 YR 3/2）	焼土粒子混入。
SI 01 カマド	1	黒褐色（7.5YR 1/3）	ローム粒子、炭化粒子少量混入、しまりぎみ。
	1A	黒褐色（7.5YR 3/1）	ローム粒子、炭化粒子微量混入、焼土粒子混入、粘質性あり、ぶさぶさ。
	2	黒褐色（7.5YR 3/2）	炭化粒子微量混入、粘性あり。
	3	にぶい黄褐色（10 YR 4/3）	焼土粒子微量混入、粘性あり。（カマド本体の崩壊土と考えられる）
	3A	にぶい黄褐色（10 YR 4/3）	炭化粒子微量混入、焼土粒子混入、粘性あり。
	4	暗赤褐色（2.5YR 3/1）	炭化粒子微量混入、黒色粒混入、粘性で部分的にボロボロ。（焼土を全体とする）
	4A	暗赤褐色（2.5YR 3/4）	炭化物微量混入。黒色粒少量混入、黄褐色粘質土混入、部分的に粘性がありボロボロ。
	5	黒褐色（7.5YR 3/2）	褐色粒少量混入、焼土塊混入、炭化粒子下層部に混入、やわらかい。
	6	暗褐色（7.5YR 3/4）	焼土と焼土粒子の層で炭化物微量混入、やわらかい。
	7	暗褐色（7.5YR 3/4）	焼土塊多量混入、炭化物少量混入、ボソボソやわらかい。
	8	黒褐色（7.5YR 3/2）	褐色粒、焼土粒混入、粘性あり。
	9	黒褐色（5 YR 2/2）	ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子少量混入、やわらかい。
	10	黒褐色（10 YR 3/2）	炭化物、焼土粒子微量に混入、非常に堅く粘性あり。
	11	暗褐色（7.5YR 3/4）	ローム粒子炭化粒子微量に混入、堅く粘性あり。
	12	褐色（7.7YR 4/4）	地山部分的に加熱により硬化。
	13	黒褐色（7.7YR 3/1）	炭化粒子極微量、ローム粒子、焼土粒子少量混入、やわらかくボソボソ。
	14	黒褐色（10 YR 2/3）	ローム粒子、焼土塊、炭化粒混入、しまりあり。
	15	灰黄褐色（10 YR 4/2）	炭化粒子、ローム粒子混入、やわらかく粘性あり。
	16	黒（10 YR 2/1）	炭化粒子混入、層下部に焼土塊混入、やわらかく部分的にブサブサ。
SI 02 カマド	1	黒褐色（10 YR 2/1）	焼土粒子少量混入。
	2	暗赤褐色（2.5YR 3/6）	焼土ブロック混入。
	3	暗赤褐色（2.5YR 3/6）	ローム粒子、焼土混入、炭化物微量に混入、やや堅くしまっている。
	4	暗赤褐色（5 YR 2/4）	焼土、ローム混入、やや堅くしまっている。
	5	暗赤褐色（5 YR 2/3）	焼土微量混入、やわらかい。
	6	黒褐色（5 YR 2/1）	ロームブロック、炭化物混入、ややしまっている。
	7	黒（7.5YR 2/1）	焼土少量混入。
	8	暗赤褐色（5 YR 3/3）	ローム粒子、焼土粒子混入。
	9	暗赤褐色（5 YR 3/4）	ローム粒子、焼土、炭化物混入。
	10	黒褐色（7.5YR 2/2）	ローム粒子、炭化粒子混入、やわらかくしまりがない。
	11	暗褐色（10 YR 3/4）	ローム粒子、炭化粒子多量に混入、やややわらかい。
	12	暗褐色（7.5YR 3/4）	ローム粒子、炭化粒子、微量混入、焼土混入、やや堅い。
	13	黒褐色（7.5YR 3/2）	ローム粒子、焼土粒子微量混入、炭化物多量混入、やや堅い。
SI 03 カマド	1	暗赤褐色（5 YR 3/2）	ローム粒子、焼土粒子多量混入。
	2	褐色（7.5YR 4/4）	炭化物、焼土粒子微量混入、しまり粘性あり。
	3	暗褐色（10 YR 3/4）	炭化物、ローム粒子少量混入、堅くしまっている。
	4	暗褐色（10 YR 3/4）	ローム粒子多量混入、20%。
	5	黒褐色（7.5YR 3/1）	ローム粒子少々混入1%。
	6	黄褐色（10 YR 5/6）	ローム層、しまっていて粘性あり。
	7	黒褐色（7.5YR 3/2）	焼土粒子、炭化粒子少量混入、ローム粒子多量混入、やわらかく粘性あり。
SI 04 カマド	1	暗褐色（7.5YR 3/4）	炭化粒子微量混入、やわらかい。
	2	灰黄褐色（10 YR 5/2）	焼土塊少量混入、しまりあり粘質性あり。
	3	にぶい赤褐色（5 YR 4/4）	焼土塊混入、しまりあり粘質性あり。
	4	暗褐色（5 YR 3/4）	焼土、炭化粒子混入、しまり強い。
	4A	暗褐色（5 YR 3/4）	炭化粒子混入、しまり強い。
	5	黒褐色（5 YR 2/2）	炭化粒子、焼土粒子少量混入、しまっている。
	6	黒褐色（5 YR 3/1）	炭化粒子混入、ややしまっている。
	7	黒褐色（5 YR 2/2）	炭化粒子微量混入、やわらかい。
SK 01	1	黒褐色（7.5YR 3/1）	
SK 02	1	黒褐色（10 YR 3/3）	炭化物混入。
	2	暗褐色（10 YR 3/3）	ローム粒子混入。
SK 02	1	暗褐色（7.5YR 3/3）	炭化物混入、やや堅くしまっている。
	2	極暗褐色（7.5YR 2/3）	粘性強くやわらかい。
	3	黒褐色（10 YR 2/3）	炭化物少量混入。
	4	黒褐色（7.5YR 2/2）	炭化物少量混入、粘性あり。
SK 04	1	黒褐色（7.5YR 3/1）	炭化物、焼土微量混入、ややしまっている。
	2	黒褐色（7.5YR 3/2）	焼土、ローム混入、やわらかい。
	3	黒褐色（10 YR 2/2）	炭化物微量混入、堅くしまっている。
	4	褐色（10 YR 4/6）	ローム混入、炭化物微量混入、堅くしまっている。
	5	暗褐色（10 YR 3/3）	炭化物、ローム混入、ややしまっている。
	6	暗褐色（7.5YR 3/4）	炭化物多量混入、焼土混入、しまっている。

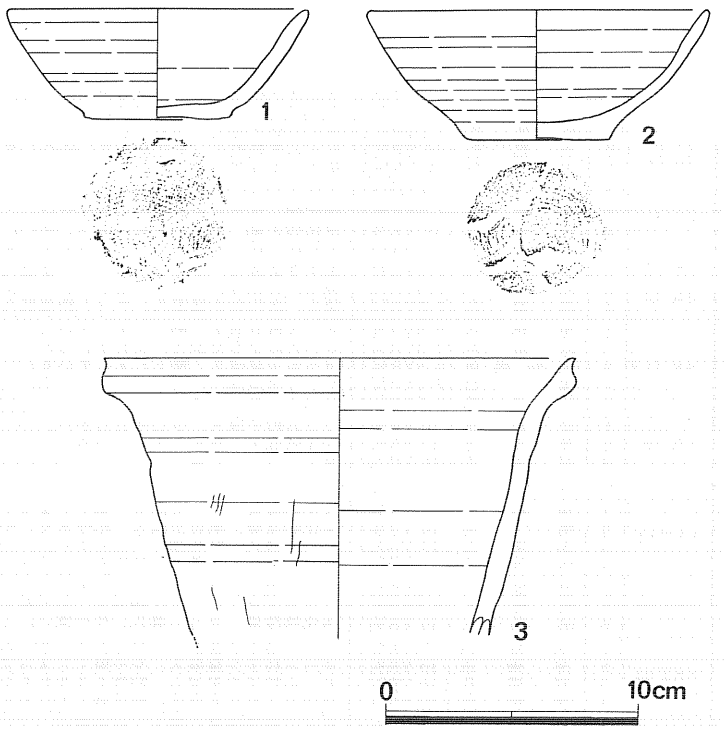
第１表　Ａ地区遺構埋土層一覧表（２）

遺構	層	土色	土質
SK 05	1	黒褐色（7.5YR2/2）	炭化物、ローム多量に混入、やや堅い。
	2	黒褐色（10 YR3/4）	ローム、褐色粒多量に混入、焼土、炭化物混入。
	3	暗褐色（7.5YR3/4）	ローム多量に混入、炭化物少量混入、やわらかい。
	4	橋暗褐色（7.5YR3/4）	焼土多量、ローム、炭化物少量混入。堅くしまりあり。
	5	黒褐色（7.5YR3/3）	炭化物多量混入、ローム少量、やわらかい。
	6	暗褐色（10 YR3/4）	炭化物少量、ローム微量混入、やわらかい。
SK 06	1	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム粒子混入、やわらかい。
	2	黒褐色（10 YR3/2）	ローム多量混入、炭化物あり、ややしまっている。
	3	黒褐色（5 YR3/2）	堅くしまっている。
	4	黒（7.5YR2/1）	やわらかい。
SK 09	1	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化物、ローム少量混入、やや堅い。
	2	暗褐色（10 YR3/3）	炭化物少量、ローム多量に混入、堅い。
SK 10 SK 13	1	黒褐色（10 YR3/2）	炭化物、焼土多量、ローム少量混入、やや堅い。
	2	暗赤褐色（2.5YR3/3）	焼土多量混入、炭化物、ローム少量混入。堅くしまっている。
	3	極暗褐色（7.5YR2/3）	焼土、炭化物、ローム少量混入、やや堅い。
	4	黒褐色（7.5YR3/2）	焼土、炭化物少量混入、ローム微量混入、やわらかい。
SK 11	1	黒褐色（7.5YR3/1）	ローム微量混入、堅くしまっている。
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム粒子多量混入、少しやわらかい。
	3	極暗褐色（7.5YR2/3）	ローム少量混入、堅くしまっている。
	4	褐色（7.5YR3/4）	ローム微量混入、堅くしまっている。
	5	明褐色（7.5YR5/6）	粘質土で堅くしまる。
SK 12	1	暗褐色（10 YR3/4）	ローム粒子混入、少しやわらかい。
	2	黒褐色（10 YR3/1）	炭化物混入、堅くしまっている。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	堅くしまっている。
SKT 01	1	黒褐色（10 YR2/3）	炭化物微量、ローム混入、堅くしまっている。
	2	褐色（10 YR4/6）	炭化物微量、黒色土混入、粘性あり、やや堅くしまっている。
	3	黒褐色（10 YR2/2）	ローム混入、粘性強くやわらかい。
	4	暗褐色（10 YR3/4）	ロームブロック混入、粘性あり、ややしまっている。
SKT 02	1	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム混入、堅くしまっている。
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	ロームブロック、炭化物混入、やや堅くしまっている。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	炭化物微量、ローム混入、やや堅い。
SKT 03	1	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム粒子少量混入、堅くしまっている。
	2	黒褐色（10 YR2/3）	ローム粒子少量混入、やや堅くしまっている。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	ローム粒子少量混入、粘性ありやわらかい。
	4	黒褐色（10 YR3/2）	ロームブロック混入、粘性強くやわらかい。
SKT 04	1	黒（7.5YR2/1）	ローム粒子微量に混入、やや堅い。
	2	黒褐色（7.5YR3/3）	黒色土少量混入、ローム多量混入、やわらかい。
	3	褐色（10 YR4/6）	ローム多量混入、やわらかい。
	4	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム少量混入、やわらかい。
SKT 05	1	黒（7.5YR2/3）	ローム少量混入、堅くしまっている。
	2	褐色（7.5YR4/3）	ローム少量混入、やや堅い。
	3	暗褐色（10 YR3/4）	ローム粒子微量混入、堅くしまっている。
SKT 06	1	黒（7.5YR1/2）	ローム少量混入、炭化物微量混入、やわらかい。
	2	黒褐色（10 YR3/1）	ローム少量、炭化粒子微量混入、やや堅い。
	3	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム粒子、炭化粒子微量混入、堅くしまっている。
	4	極暗褐色（7.5YR2/2）	ローム粒子、少量混入、やや堅い。
	5	暗褐色（7.5YR3/4）	褐色土多量、炭化粒子微量混入、やわらかい。
SKT 07	1	黒（7.5YR2/1）	ローム粒子少量混入、やや堅い。
	2	黒褐色（10 YR3/2）	ローム粒子多量に混入、ややわらかい。
	3	黒褐色（10 YR3/2）	ローム少量混入、やわらかい。
	4	褐色（10 YR4/6）	ローム少量混入、堅い。
	5	褐色（10 YR5/6）	ローム微量混入、堅い。
SKT 08	1	黒（7.5YR2/1）	ローム少量混入、やや堅い。
	2	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム少量混入、やわらかい。
	3	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム多量混入、やわらかい。
	4	褐色（10 YR3/3）	ローム少量混入、堅い。
	5	褐色（10 YR5/8）	ローム混入、やや堅い。
SKT 09	1	黒（7.5YR2/1）	ローム少量混入、非常に堅くしまっている。
	2	黒褐色（7.5YR3/1）	ローム多量混入、炭化物少量混入、粘性ありやや堅い。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	ローム多量混入、粘質土で非常にやわらかい。
	4	明褐色（7.5YR5/6）	褐色土混入、やわらかい。
SKT 10	1	黒褐色（7.5YR3/2）	焼土粒子微量混入、堅くしまっている。
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム粒子多量混入、堅くしまっている。
	3	極褐色（7.5YR2/4）	ローム微量混入、少しやわらかい。
	4	褐色（7.5YR4/4）	全体的に粘性あり、やわらかい。
	5	黒褐色（7.5YR2/2）	ローム少量混入、粘性ありやわらかい。
SXF 01	1	赤褐色（5 YR4/8）	焼土層で炭化物少量混入、堅くしまっている。
	2	黒褐色（7.5YR3/2）	層全体に炭化物含む、焼土粒子少量混入、やわらかい。
	3	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化物、焼土粒子少量混入、やや堅い。
	4	明赤褐色（5 YR5/6）	粘土

2　遺構外出土遺物

①土師器　（第42図）

1・2は、いずれも調査区南東部のピット底面より出土・ピットは柱穴状を呈するが、遺構としての関連性が不明瞭であり、遺構外遺物として記載した。共伴する土器は、この他に同面をヘラミガキし黒色処理を施した土師器杯片である。1・2はそれぞれ底径5.9cm、5.6cm、口径11.9cm、13.4cm、器高4.2cm、5.2cmでいずれも底部は回転糸切り無調整、体部は、内湾して立ち上がる。3は土師器甕で、調査区南東部の2層下位面で出土。胴部稜線は直線状に立ち上がり口縁部で外反、口唇部で直立する。胴部上半にはロクロ調整痕を留め、外面は下半にかけてヘラナデを施す。



第42図　遺構外の出土遺物

②　縄文土器

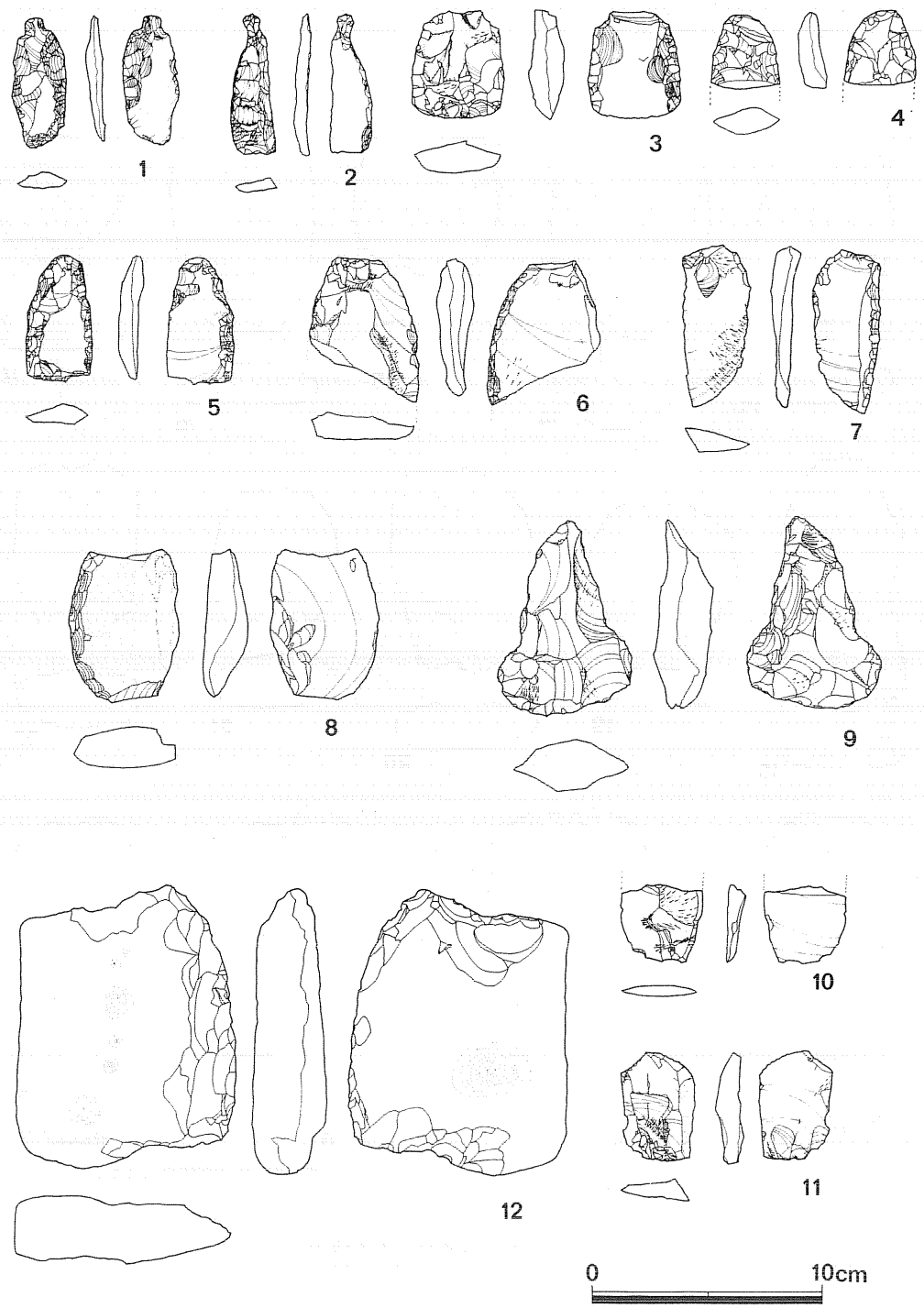
縄文土器片が数点出土したが、表面の風化が激しく、図示することができなかった。

③　石器　（第43・44図、図版25）

石匙　（第43図　1・2）　縦長の石匙であり、表面は全面剥離を施し、主要剥離面は部分的に加工を施している。頁岩。

石ベラ　（第43図　3・4）　3は表面を全面剥離し、主要剥離面は両側縁のみに加工を施している。4は両面剥離である。頁岩。

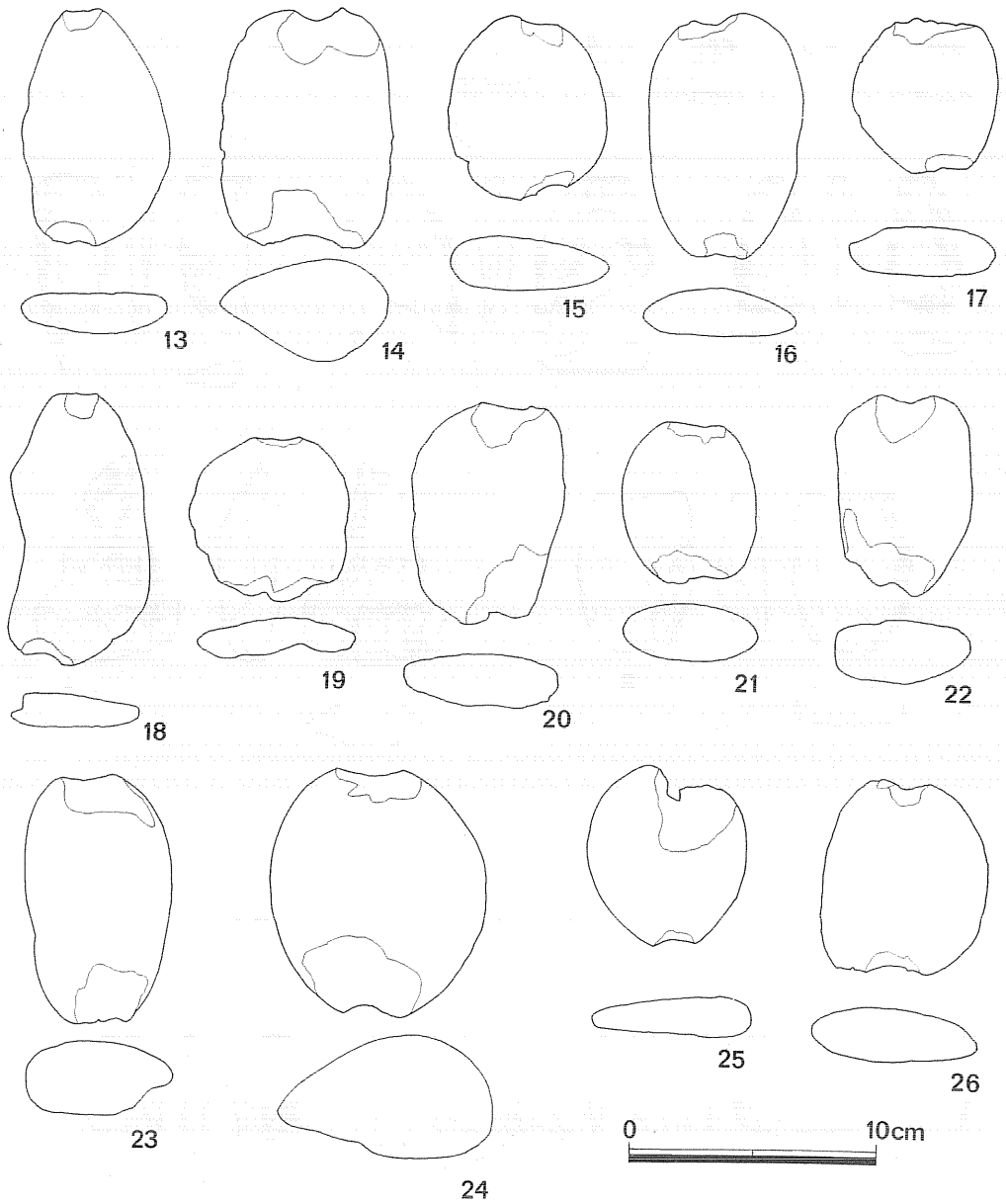
剥片石器　（第43図、5～11）　表面は部分的に剥離を施し、主要剥離面は一側縁に加工を施している。



第43図　遺構外　出土遺物

石錘　（第43・44図、13～26）　12は、一側縁に刃部を作出して礫器として使用したり、凹石として使用されている。凝灰石。

（熊谷）



第44図　遺構外の出土遺物

3　小結

検出された遺構は、平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、 土壙、焼土遺構、陥し穴状遺構であり、平安時代を中心に生活が営まれていたと考える。以下、その主なものを下記に述べる。

①住居跡について

検出された住居跡は4棟で、台地北東端部の、斜面ながら比較的平担な場所に、2棟づつ隣接している。4棟の住居跡は、いずれも出土土器に時期的相異はみられない。ＳＩ01～03に関しては、その検出された遺構の状況に類似点が多く、極めて近接した時期に構築、廃棄がなされたと考えられる。すなわち、（1）形態として、カマドを付設する壁部（東西壁）が長い長方形プランを呈し、主軸方向は南東、（2）いずれも壁溝を有するが、全周する例が無く、カマドに隣接する部分が中断する。（3）カマドの主軸方向はほぼ統一され、Ｓ－Ｅで24°～38°に集中。煙道部は地山をくり抜いて構築される傾向を持つ。（4）柱穴配置に関して、ＳＩ03はその痕跡が無く、ＳＩ01､02も明確さを欠く。（5）ＳＩ01､02はカマドに隣接して右側に貯臓穴状ピットを有する。（6）堆積土は、基本的に3層からなる自然堆積の単純層で、各層がレンズ状に堆積する。さらに調査区の西、南側は連続してほぼ平坦にひろげていることから、関連する遺構の存在が考えられたが、試掘の結果、明確な確認はなされなかった。以上の事から、本遺跡は現状での確認棟数内で営なまれた、小集落であったと考えられる。遺構内からの出土遺物は全て土器で、その大部分を土師器が占め、編年的には表杉ノ入式（氏家1957）の範ちゅうに入ると考えられる。

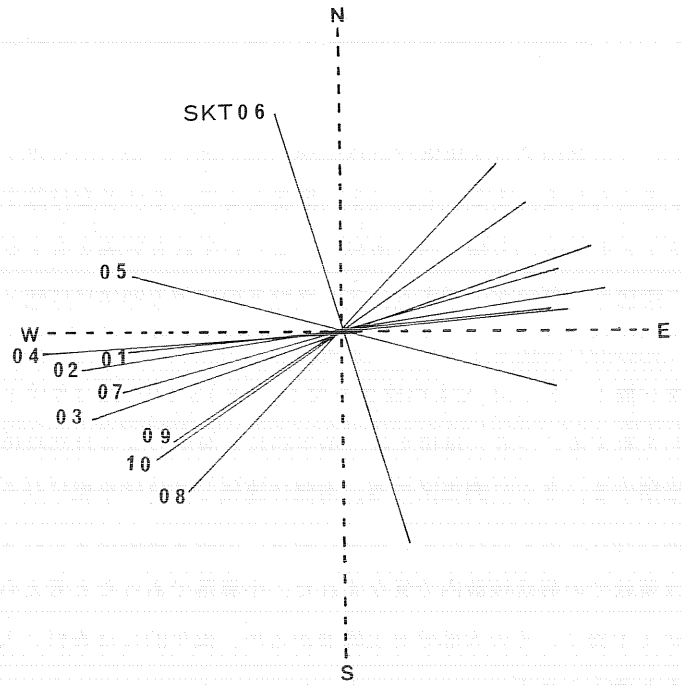
②土壙について

検出された土壙は13基であり、形態から次の様に区別される。（1）平面形状が楕円形もしくは円形を呈し、比較的浅い（ＳＫ01～04･07･09～13）。（2）同平面形を呈し深い（ＳＫ05）。（3）方形を呈す（ＳＫ06）。これらの土壙はさらに、堆積土に焼土を含有する（ＳＫ01～04・05･13）、土師器を出土する（ＳＫ04・05・07・08・13）ものがある。（1）（2）の形態を有し、かつ上記の堆積土状況・及び出土遺物を示す例は、雄勝郡稲川町宮の前遺跡（庄内・1979）や能代市竹生遺跡（永瀬・1981）等にみられ、いずれも平安時代の年代を想定している。

③陥し穴状遺構について

検出された遺構は10基である。平面形は溝状を呈し、長軸方向の断面は、底面付近でふくらみ気味に内傾し、中位から上位にかけ垂直に立ち上がる場合と、底面から上面にかけ垂直に立ち上がるものがある。前者の例が多く、後者はＳＫＴ01のみである。短軸方向の断面はＶ字状を呈す。堆積土はいずれも上層（黒色土もしくは黒褐色土）、中層（黒褐色土）、下層（褐色土もしくは黒褐色土）に分かれ、一部は中層にローム粒子を多量に含存する。このことは壁面の上面部崩壊土が混入したものと考えられ、上位壁に段を形成しているものには、混入が極めて少ない事と合わせ、本遺跡の場合、上位壁に1段を設けて掘りこまれていたものと思われる。長軸の方位は、第45図に示している如くＷ－Ｓで、4°～46°に大部分が集中している。これは遺構の大半が、斜面方向に長軸を向けて設置された結果生じたものと考え

られる。この様に形態、立地状況に同傾向を示し、分布の仕方が分散していることに特色がある。この事は同類の遺構を検出する他遺跡でも似かよった現象を示しており、その用途目的（福田、1981）により生じた結果とも考えられるであろう。しかし、本遺跡の場合その性格は明確でない。出土遺物は、磨耗の激しい縄文土器片が数点ＳＫＴ04堆積土上面で出土したにとどまり、関連する遺構も検出できないことから、年代を明確に断定することは出来ない。



第45図　陥し穴状遺構主軸方位略図

④遺物について

出土遺物は土師器を主とし、須恵器杯１点、縄文土器数点、及び石器で、石器は量的に少い。この項では土師器について記す。

〈土師器〉

杯…遺構内で出土し、その大半は底部切り離しが、回転糸切りで無調整。器形は、１・器高が比較的高く（10～14cm）深いつくりのものと、２・器高が（５～7.5cm）のものに大別できる。体部の立ち上がりは、Ａ、内湾を呈す。Ｂ・直線状を示すものとがあり、口縁部は、ａ・外反、ｂ・直線、Ｃ・内反する例がみられる。出土状況は、１は比較的少なくＡ－ａの傾向がみられ、住居跡内出土を主とする。２は最も多く、２－Ａ－ａ、２－Ｂ－ｂの傾向を持ち、住居跡内出土の場合、その比率は３：１。２－Ａ－Ｃは量的に極めて少ない。色調は橙色と明褐色のものが多く、後者は主として器表外面に黒色のムラを生じる。黄褐色を示すものは少ないが内外面にロクロ成形痕の凹凸を明瞭に留める場合が多く、胎土は緻密で堅い。

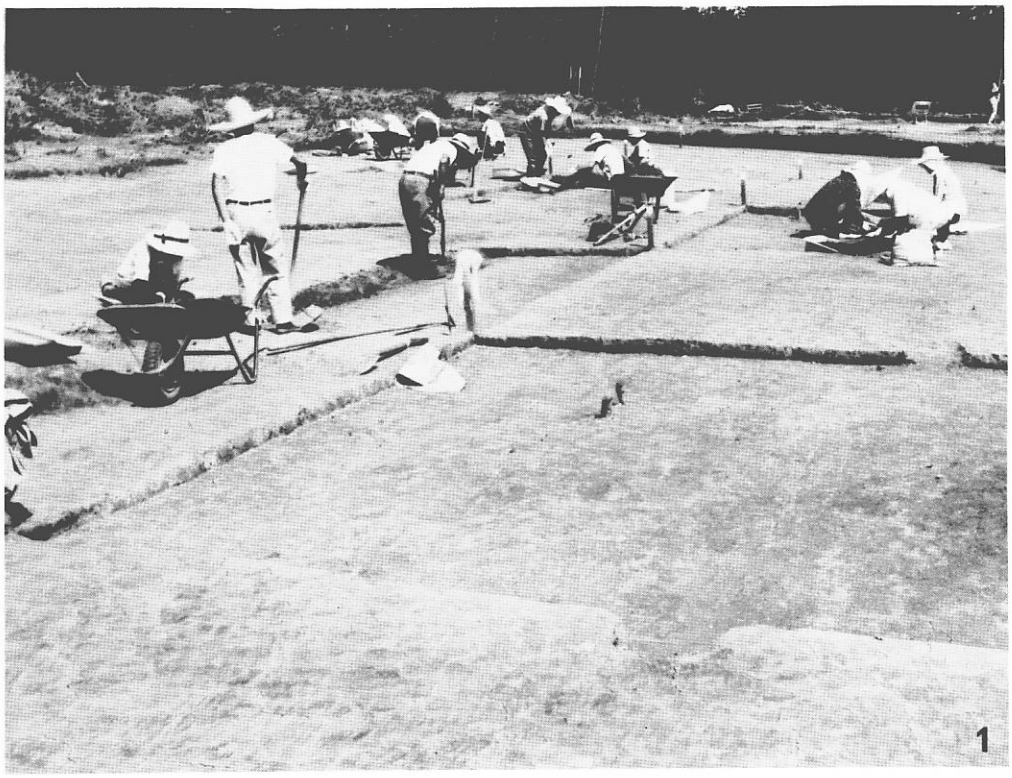
その他内面をヘラミガキし、黒色処理を施した杯の破片が２点出た。杯片は、調整区南部の柱穴状ピット柱面より、回転糸切り無調整の土師器杯と共伴。杯は３－Ｂ－ｂのものである。

皿形土器は2点でそれぞれＳＩ01・02より出土。体部から口縁部にかけ強く外傾しており法量成形とも類似している。底部は回転糸切りで無調整。

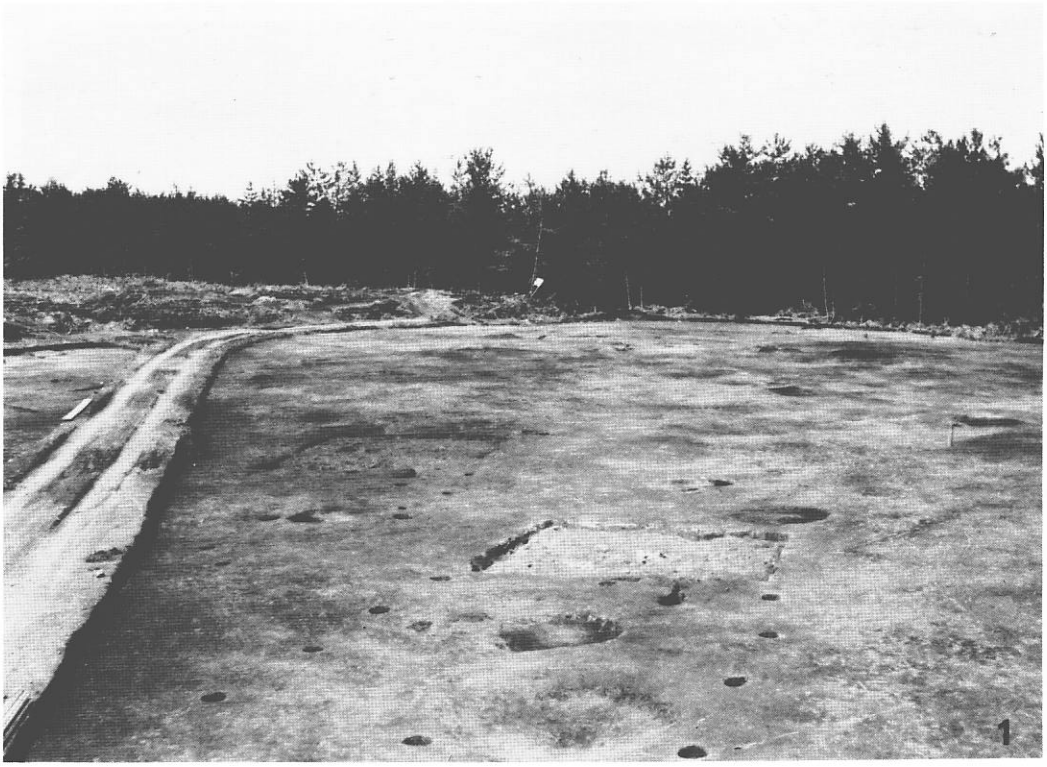
甕　全て遺構内出土である。小型のものと比較的大型のものに大別され、前者は量的に少なく胴部の立ち上がりがゆるやかに内湾し、口縁部で外反するもので、口縁部は横ナデ、胴部上半から下半にかけヘラナデを施す。後者は胴部の立ち上がりが直線状のものを主とし、ふくらみ気味を呈する例もあり、口縁部はいずれも外反し、口唇部で垂直になる。器面調整は、胴部上半に、ロクロ痕を留め、下半はヘラケズリを施す。

（熊谷）

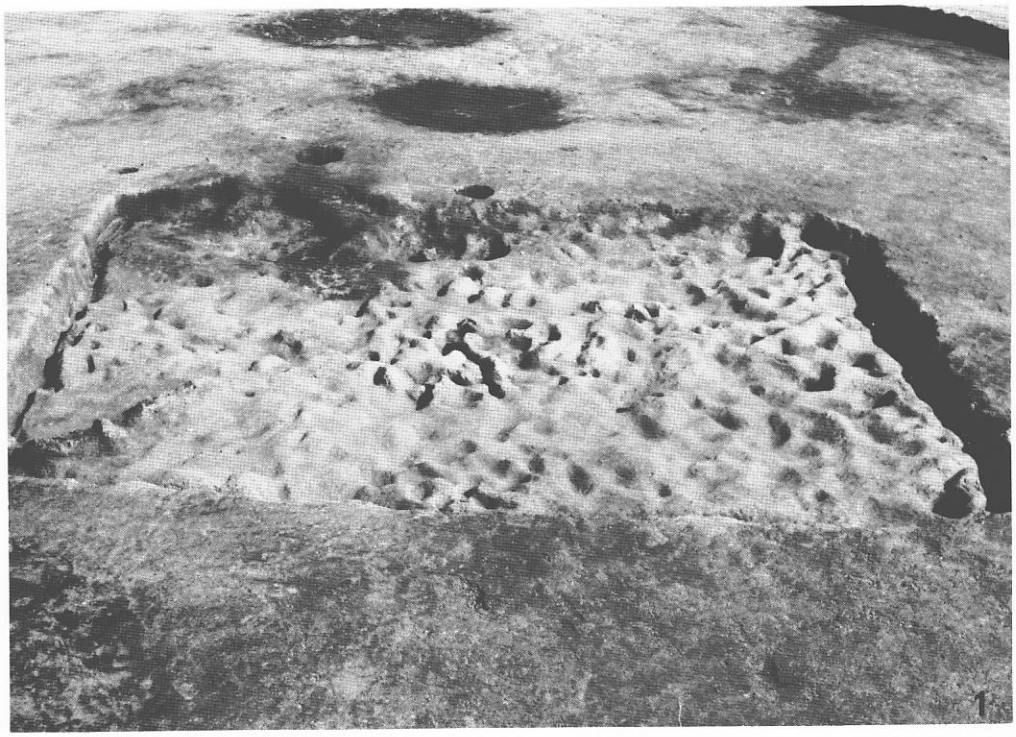
図版１　①発掘調査前　①調査風景

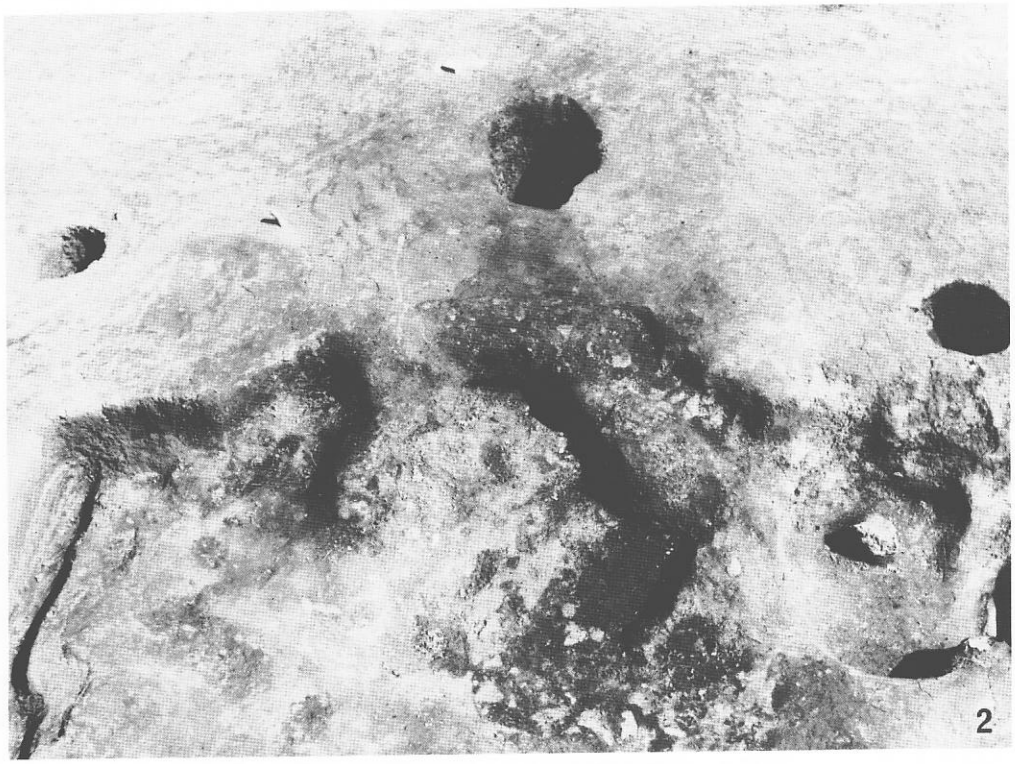


図版 2　①・②調査風景

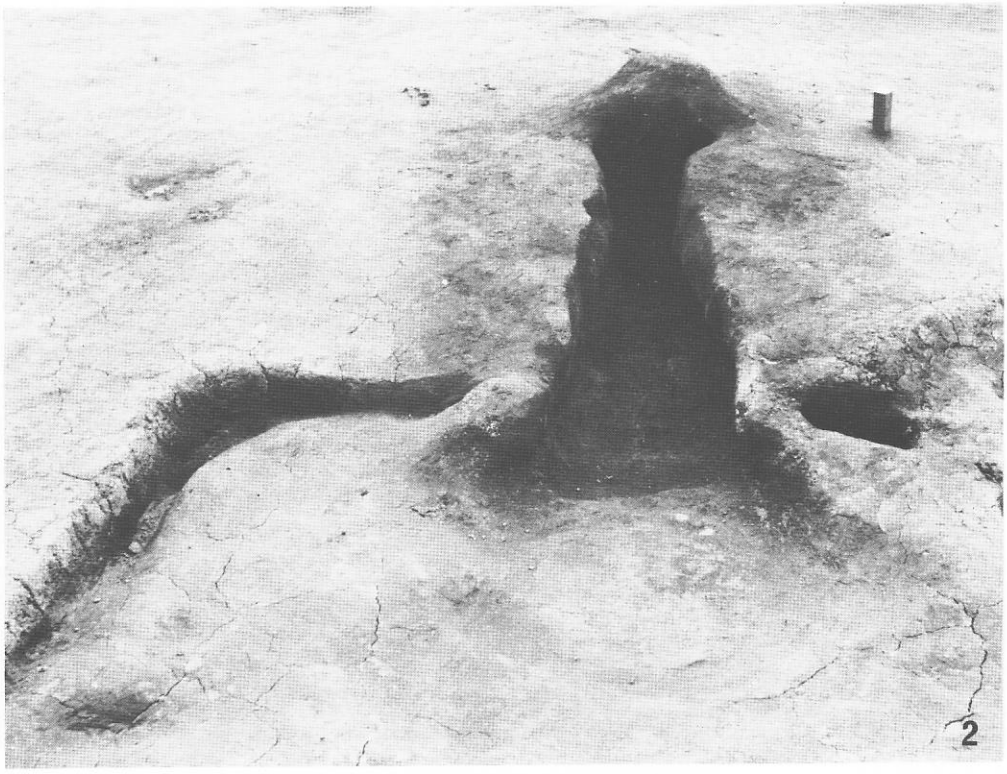


図版 3　①調査終了時（南▶北）②調査終了時（北▶南）



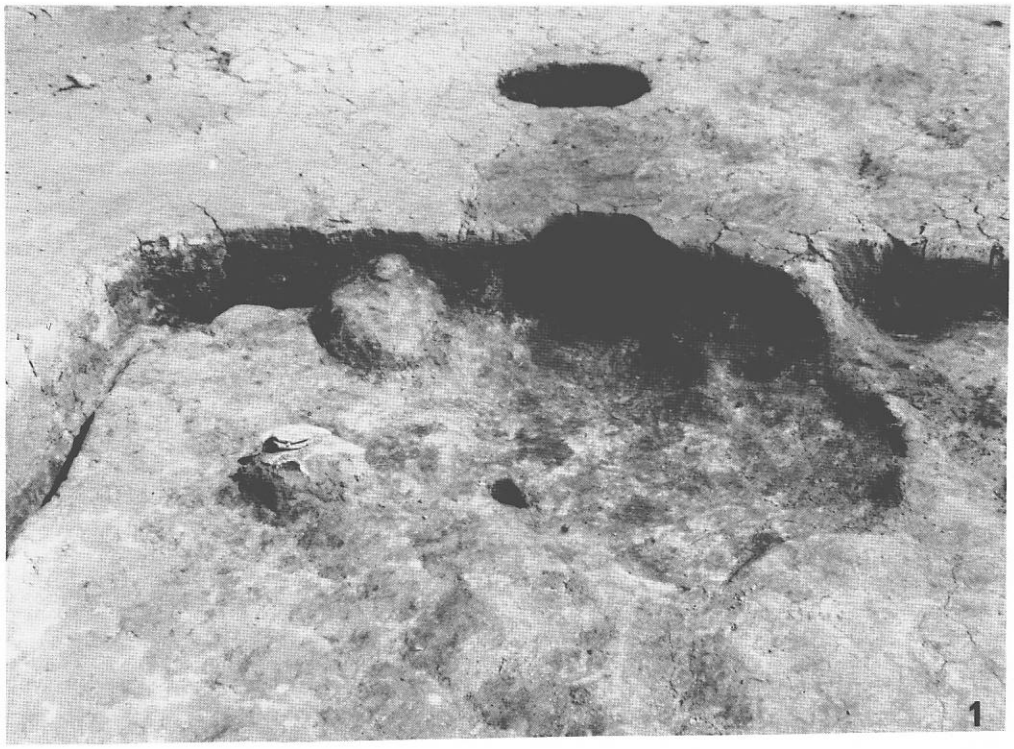


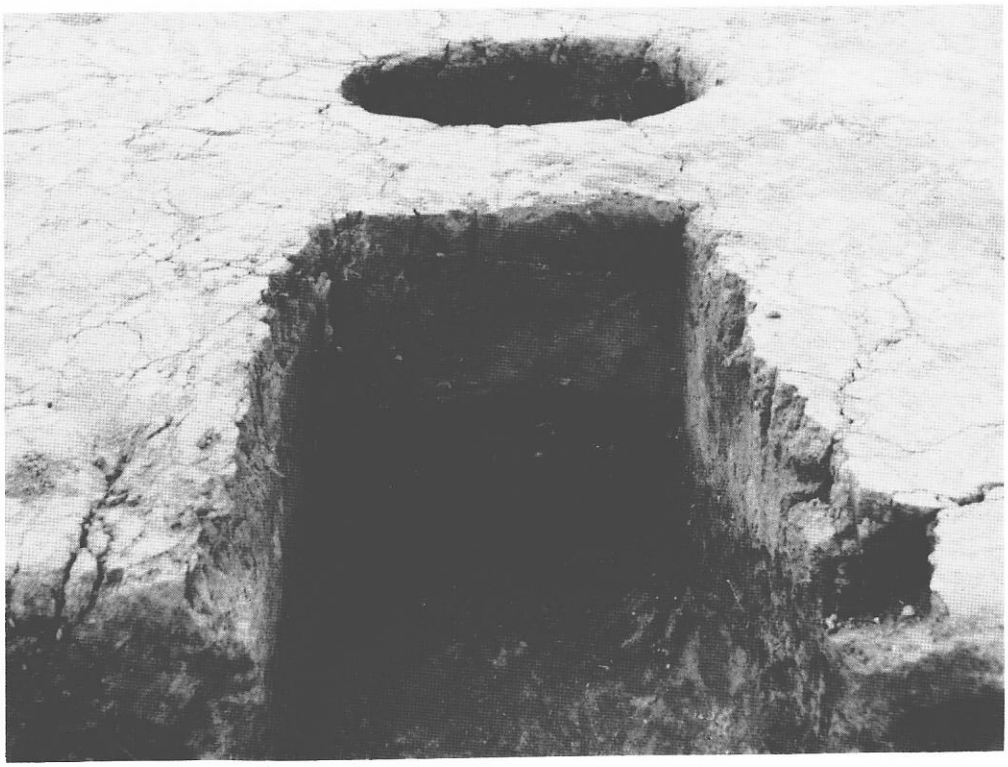
図版4　①SI 01（北▶南）②SI 01のカマド



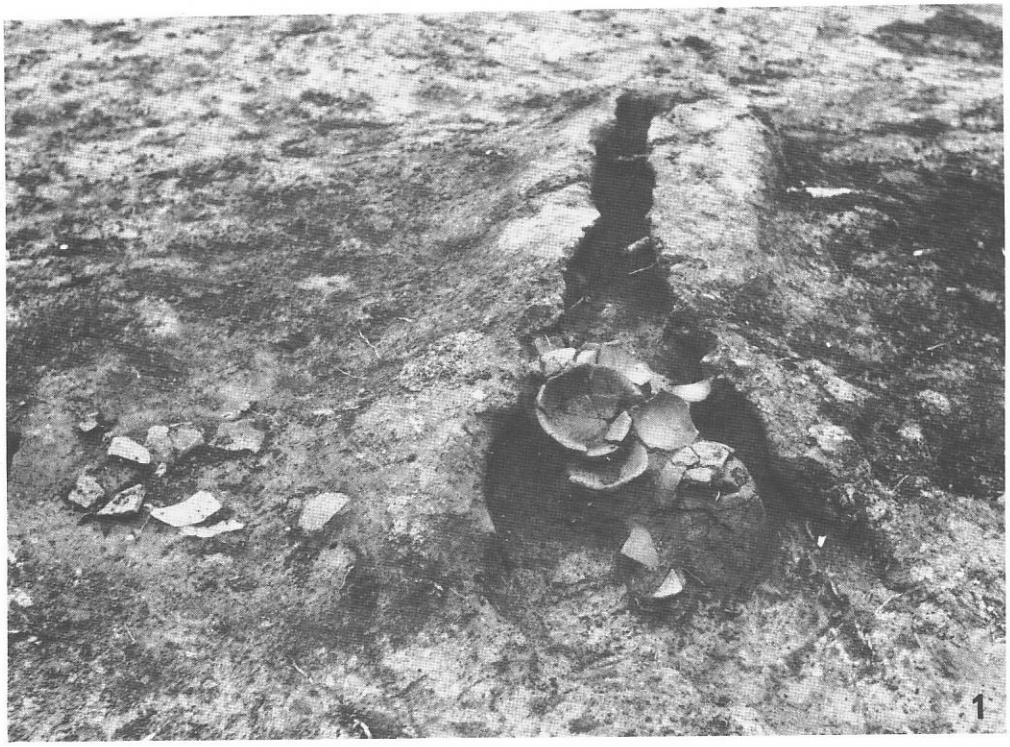
図版5　①SI 02（北▶南）②SI 02のカマド

図版6　①SI 03（西▶東）②SI 03（北▶南）

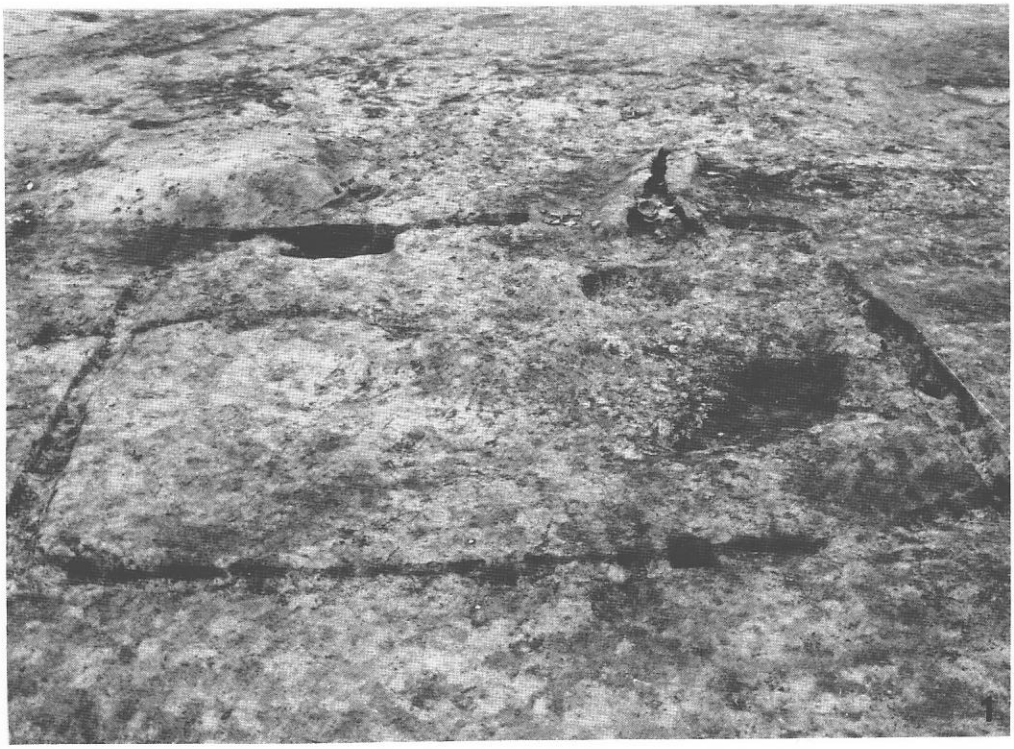


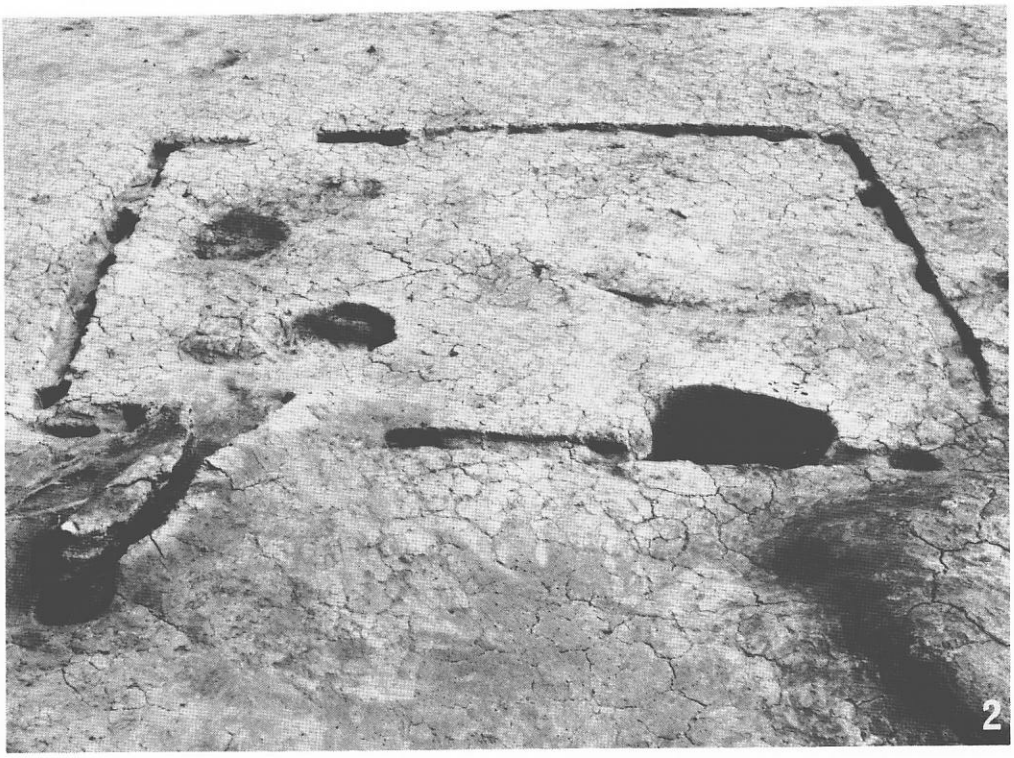


図版7　①SI 03のカマド　②SI 03煙道部の断面

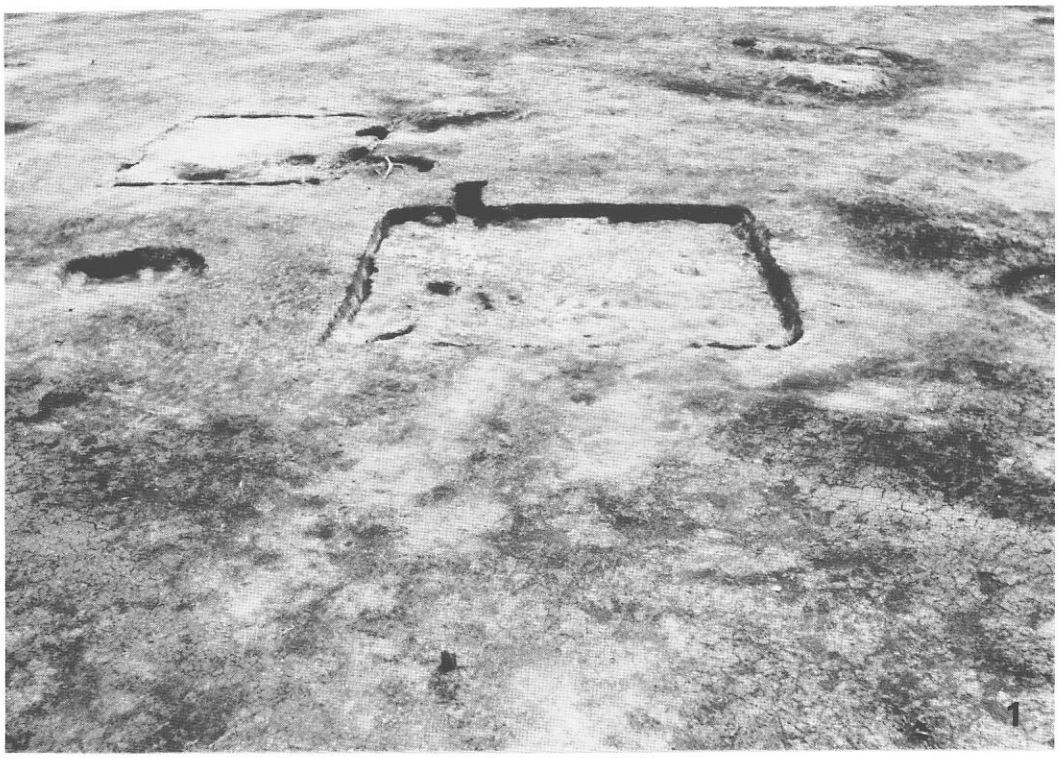


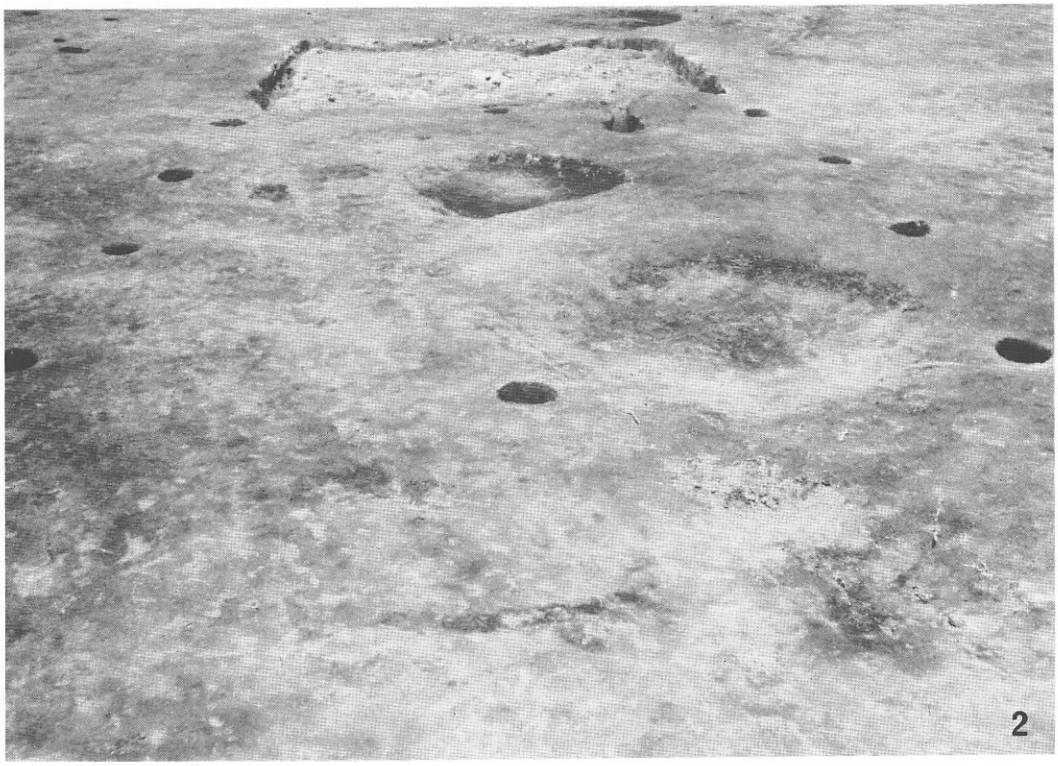
図版8　①SI 04 遺物出土状態　②SI 04 カマドの支脚



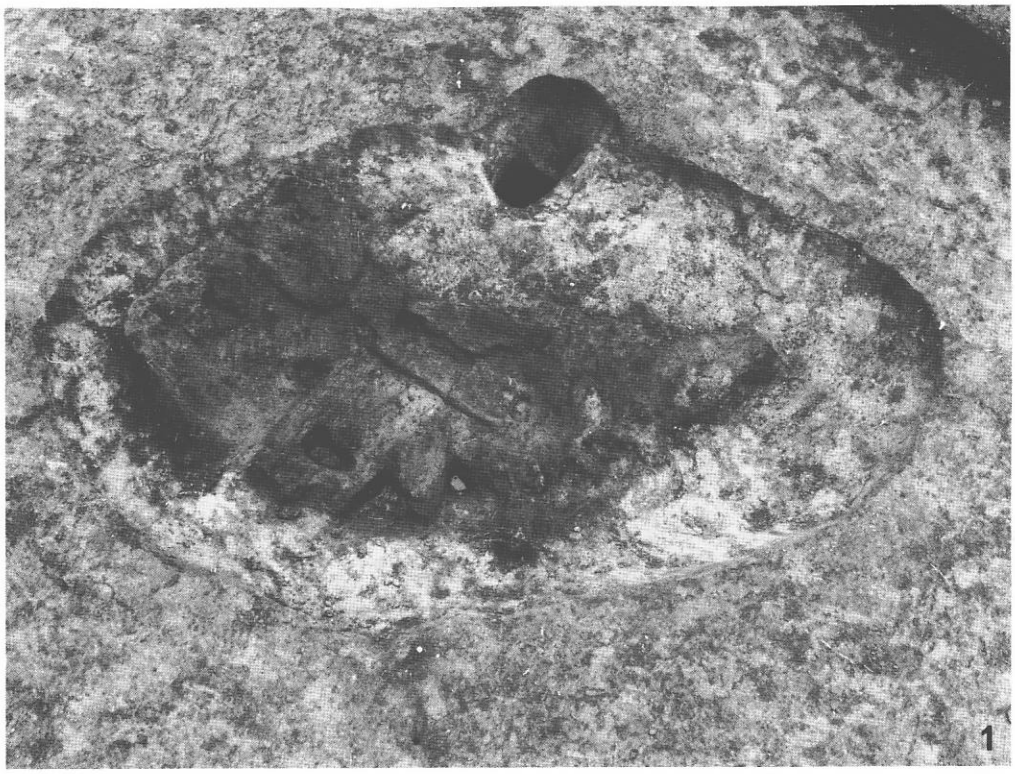


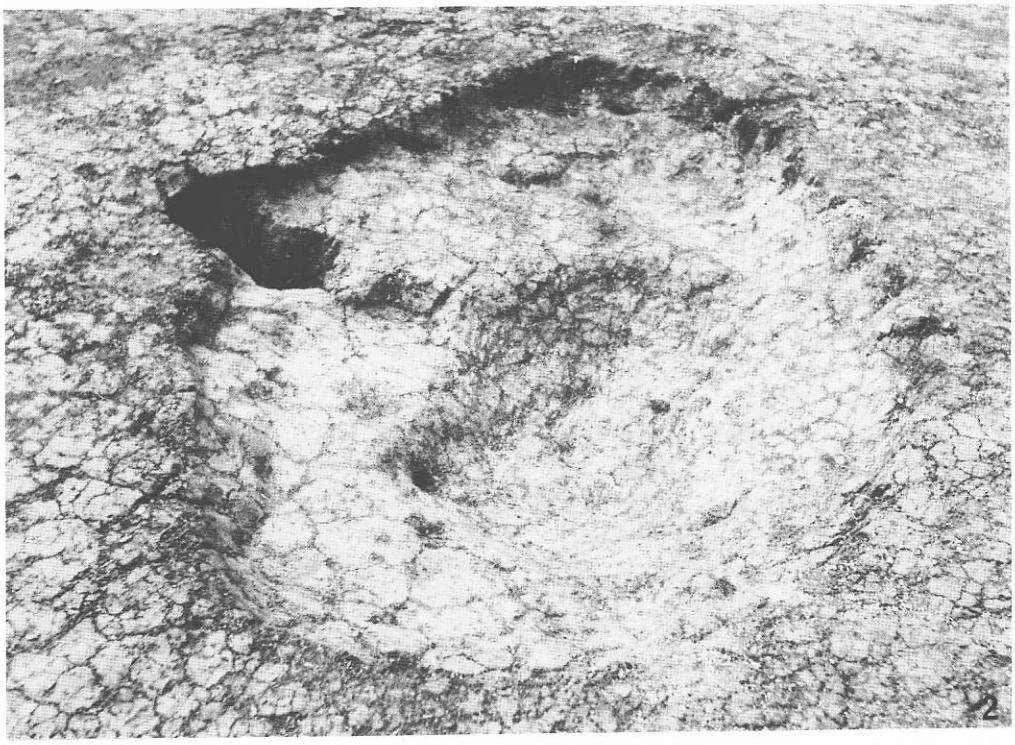
図版9　①SI 04（東▶西）②SI 04（西▶東）



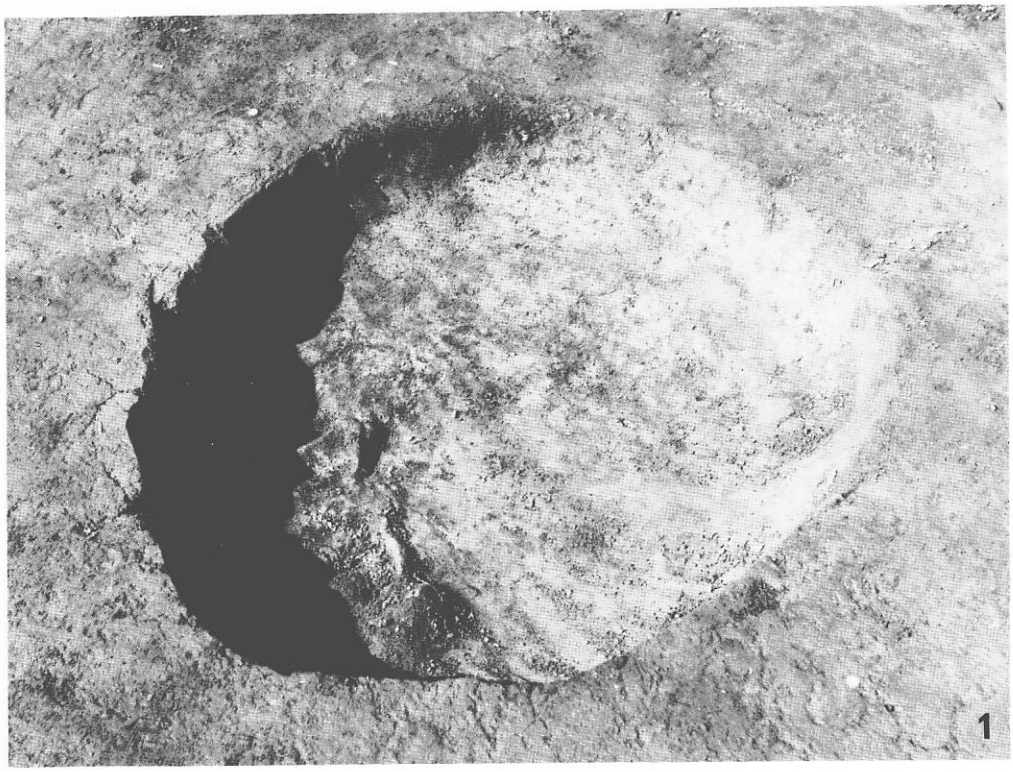


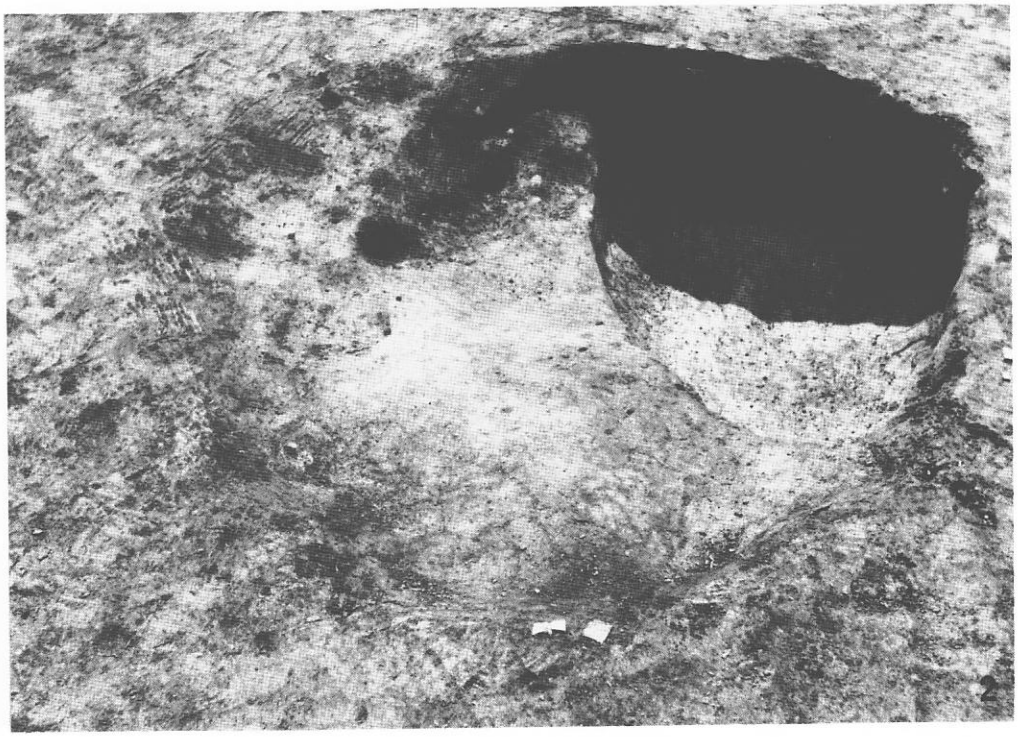
図版10　①SI 03・04（北▶南）②SB 01（南▶北）



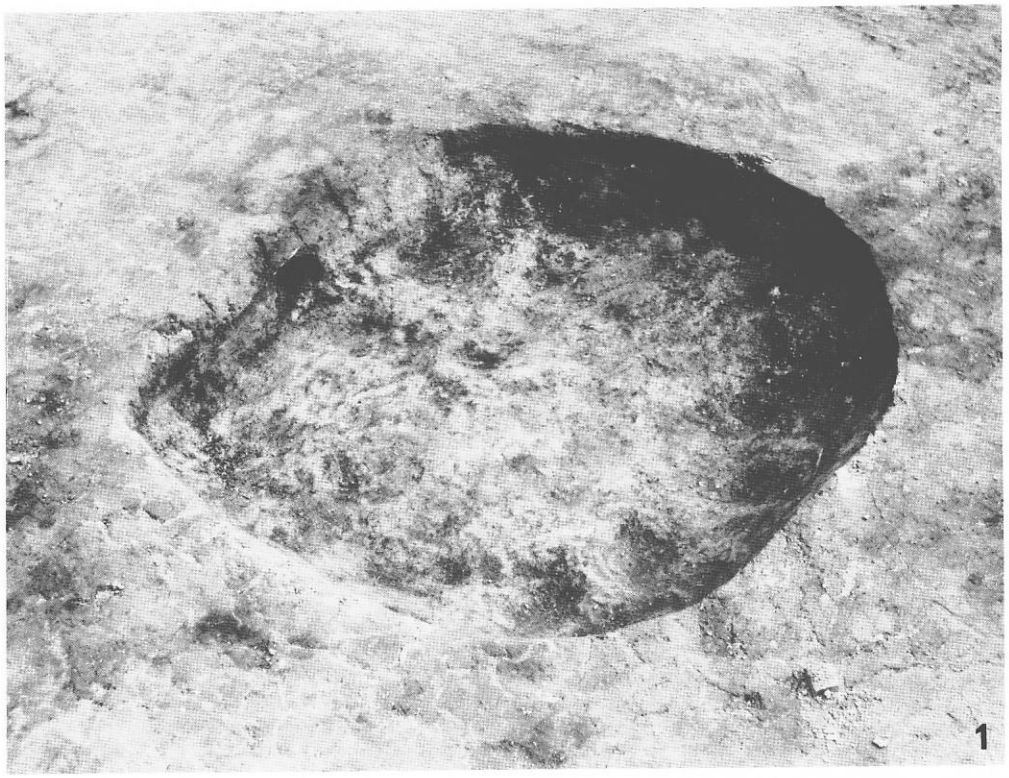


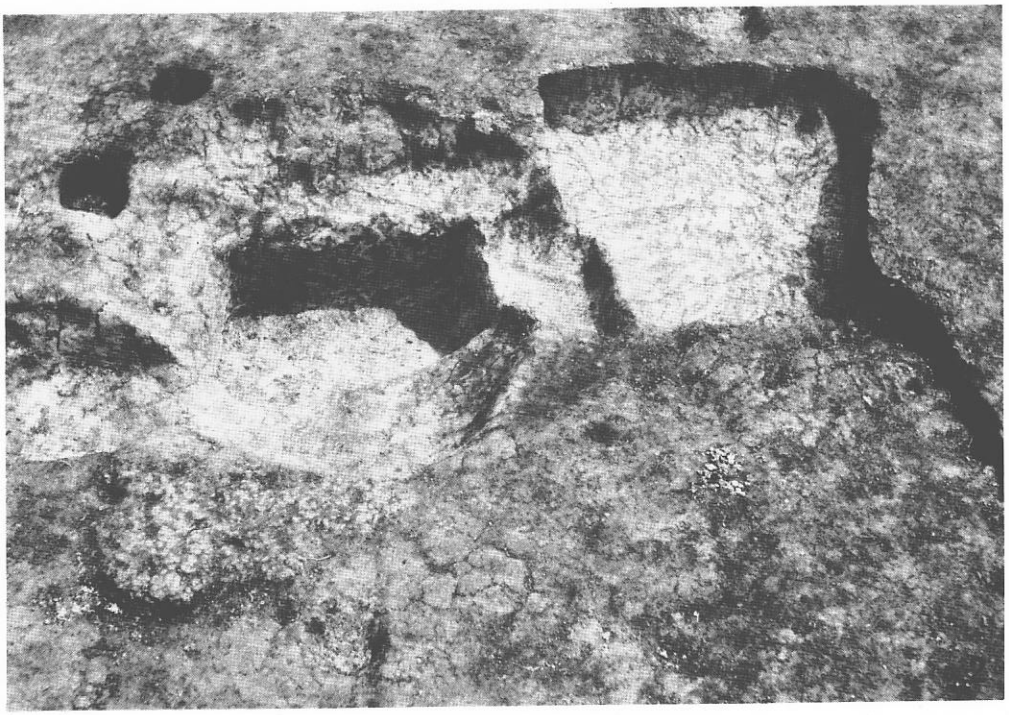
図版11　①SK 01 炭化材出土状態　②SK 01（南▶北）



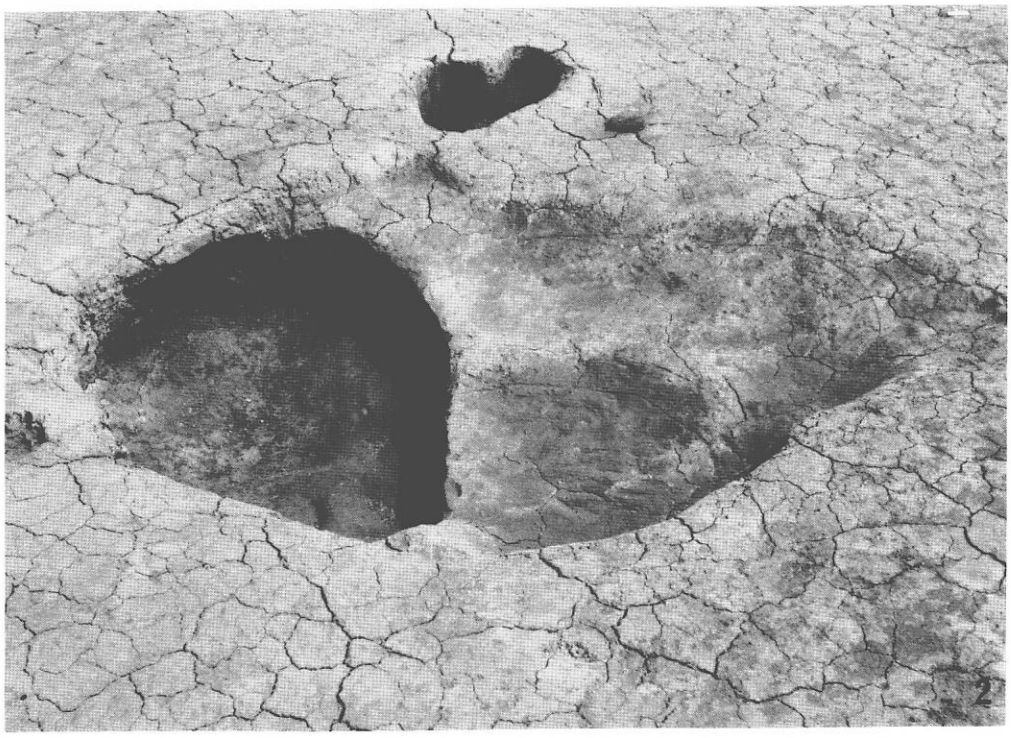


図版12　①SK 04（南▶北）②SK 05（西▶東）

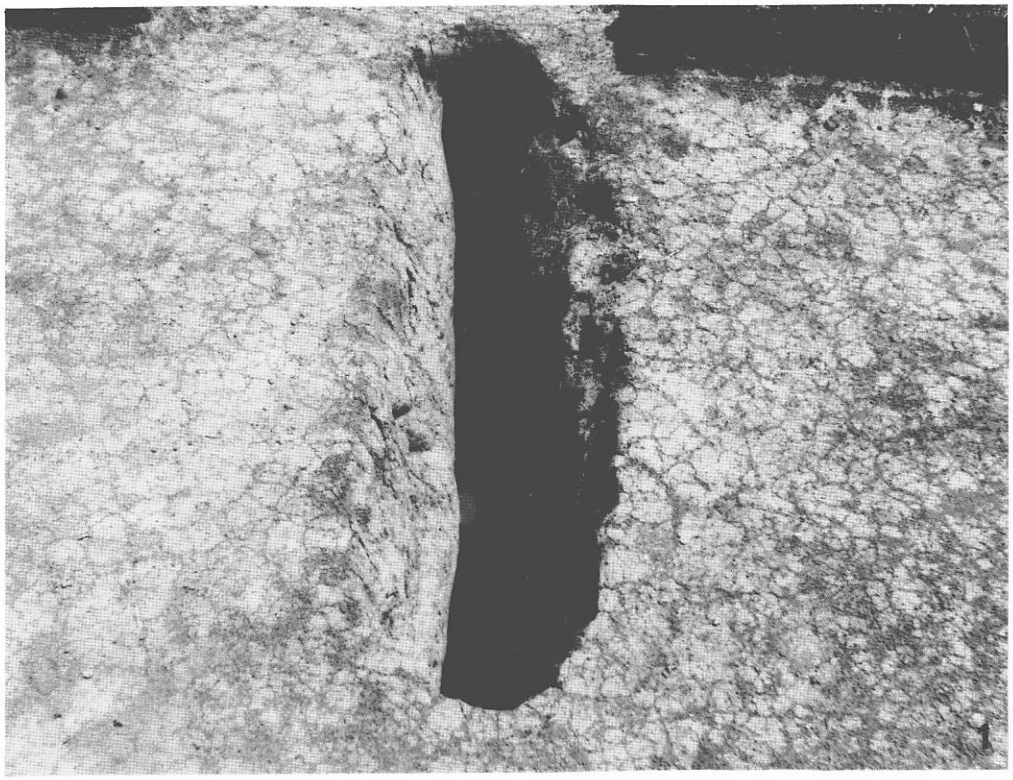


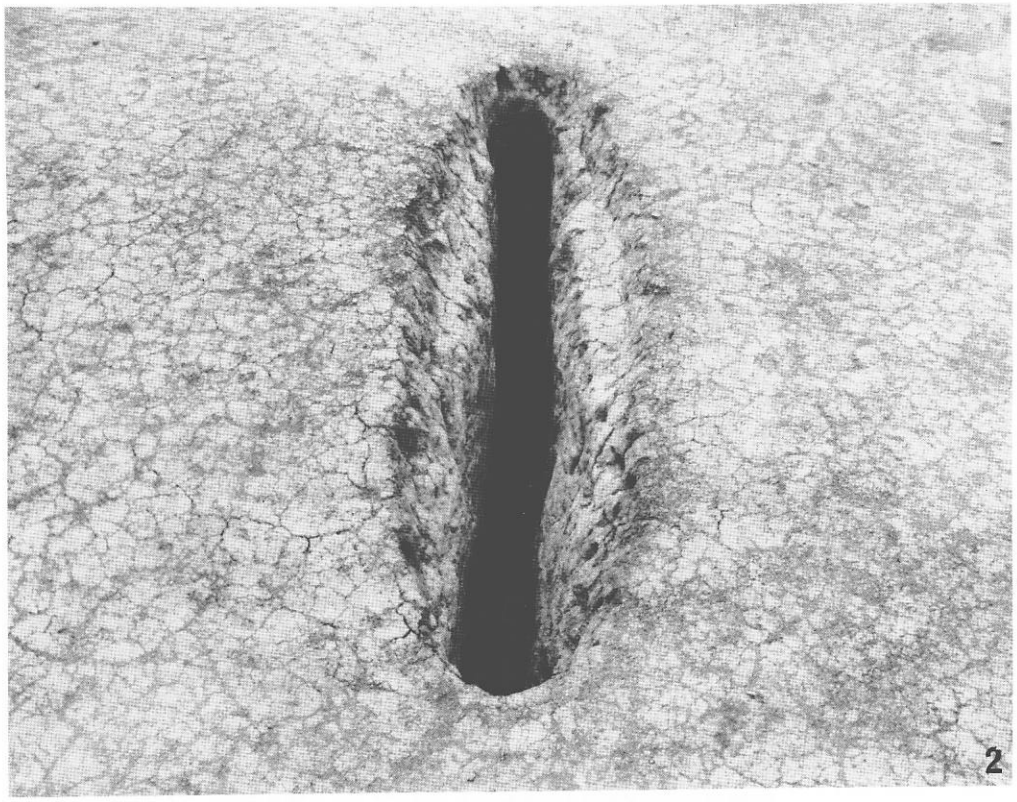


図版13　①SK 09（北▶南）②SK 06・07・08（南▶北）

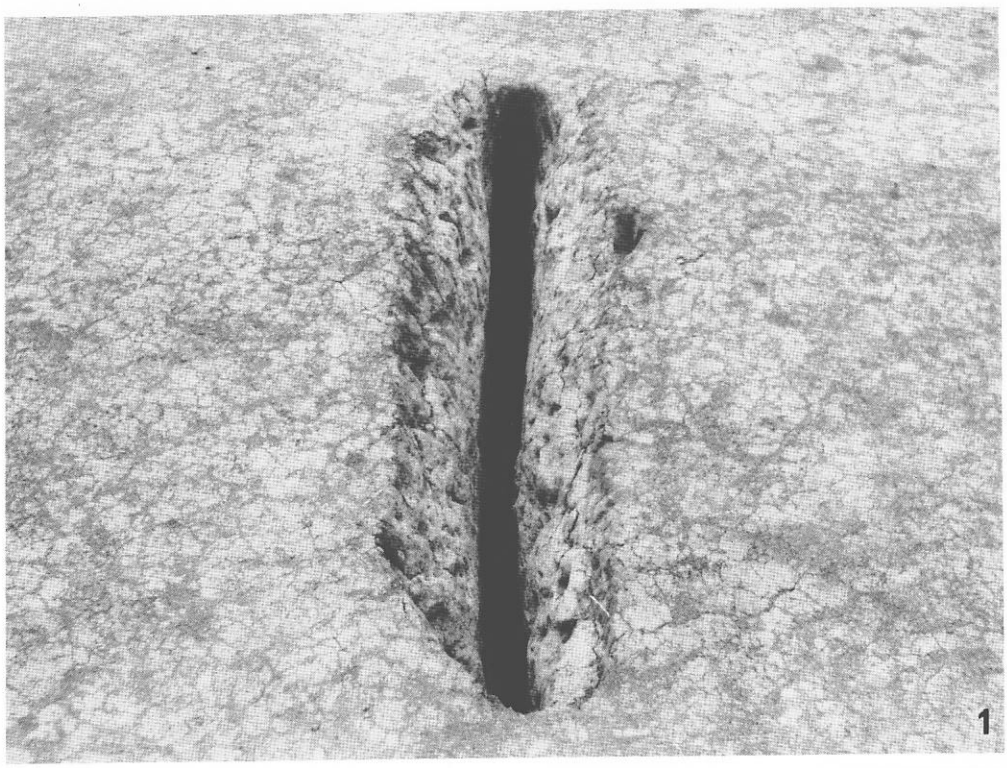


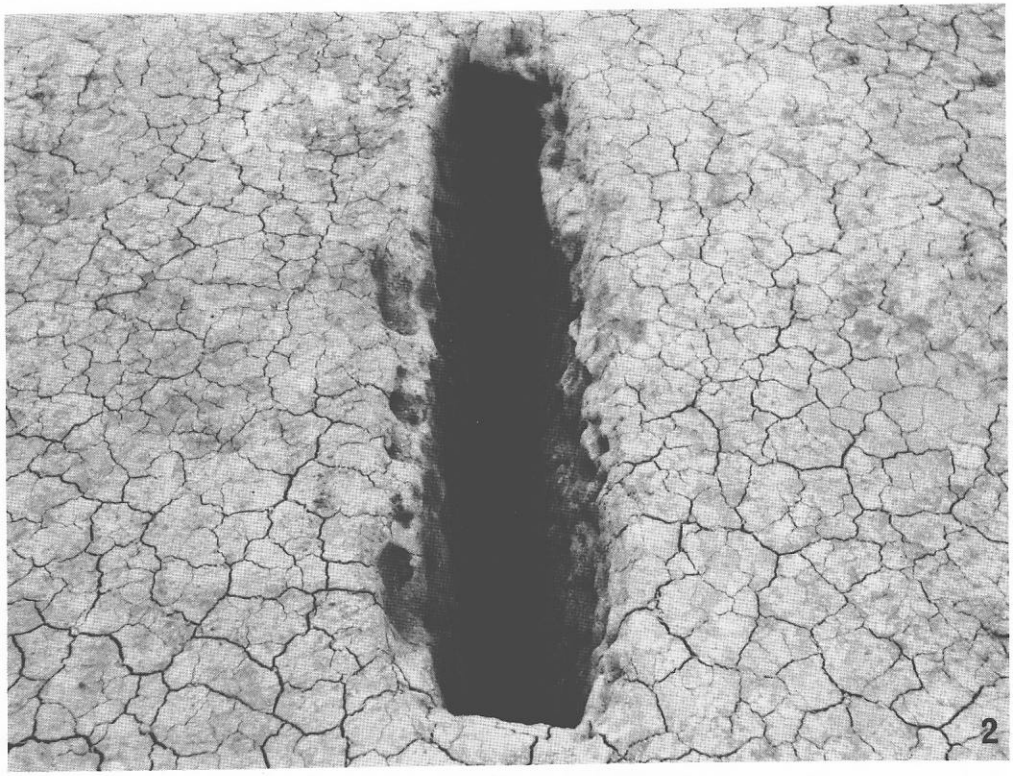
図版14　①SK 10・13の確認面　②SK 10・13（北▶南）



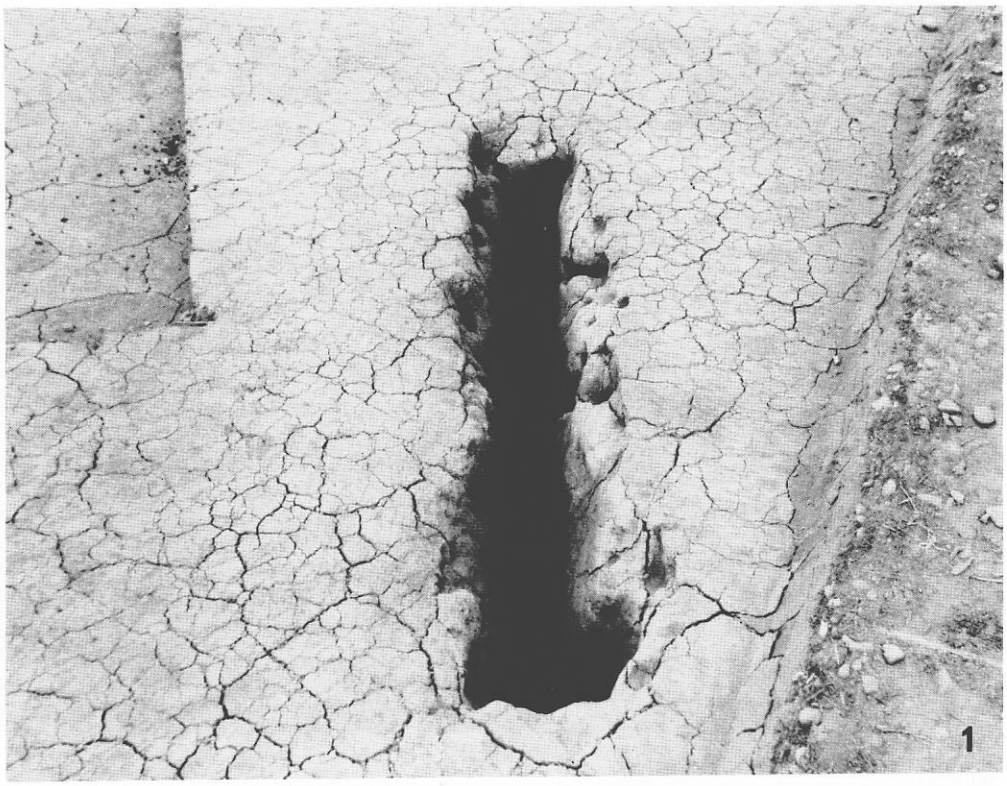


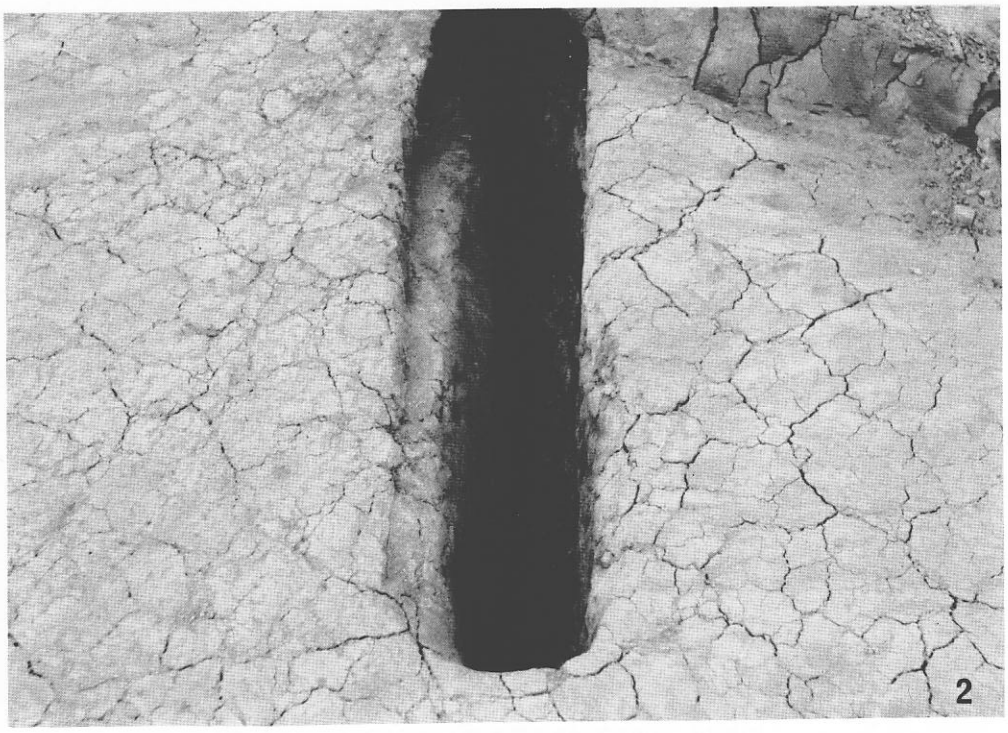
図版15　①SKT 01（西▶東）②SKT 02（東▶西）



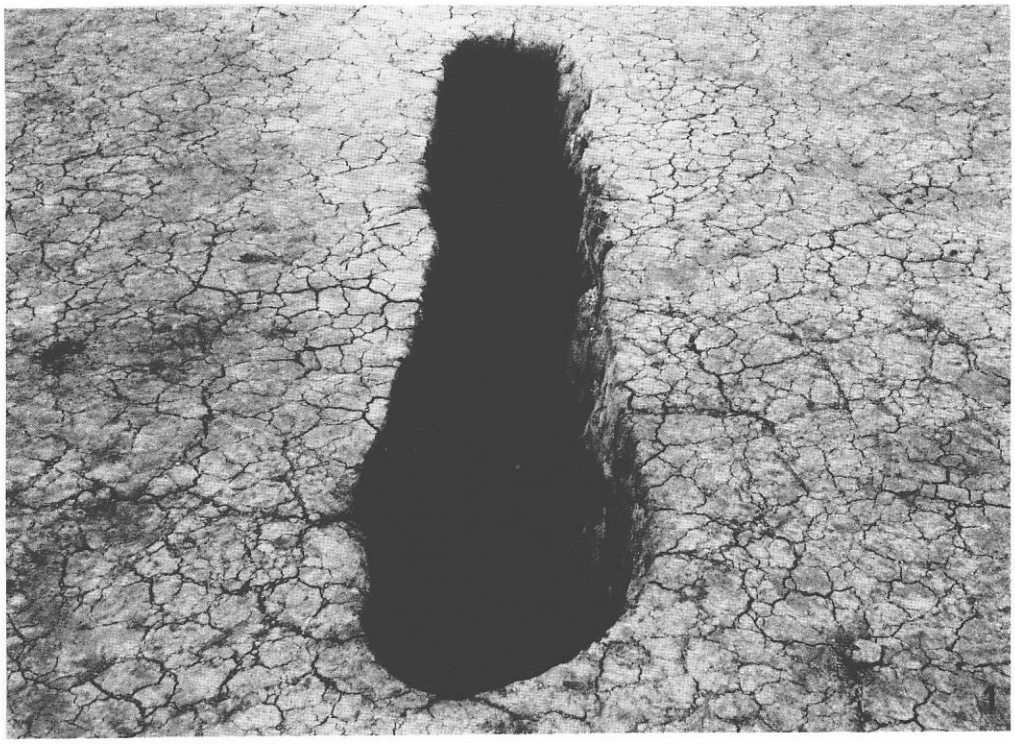


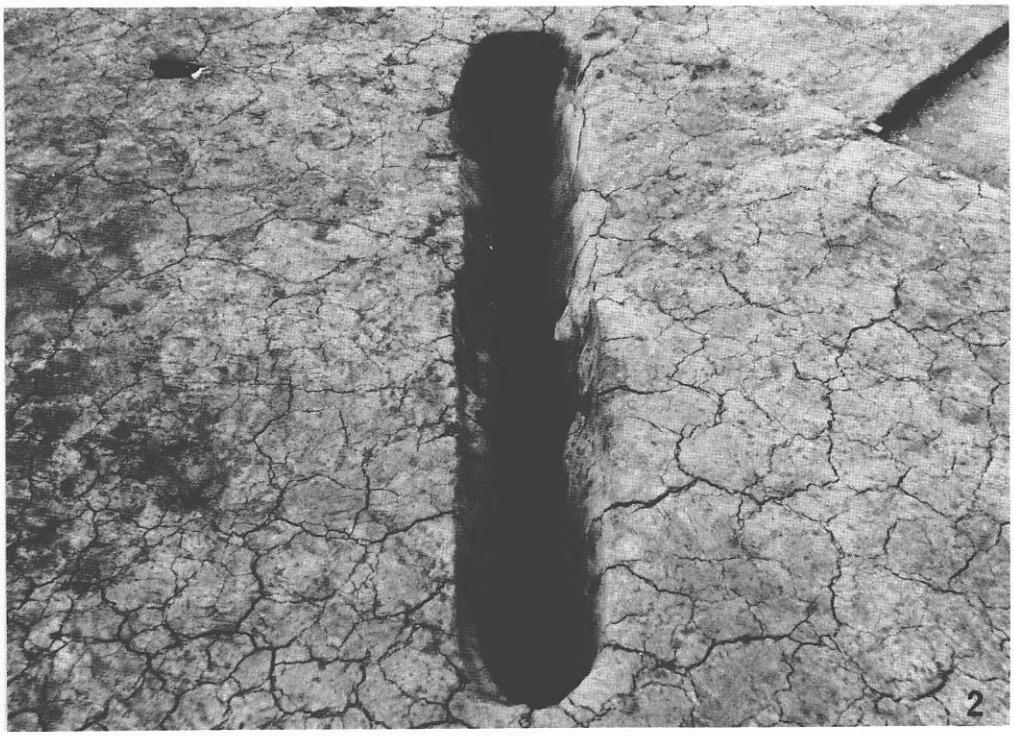
図版16　①SKT 03（東▶西）②SKT 04（東▶西）



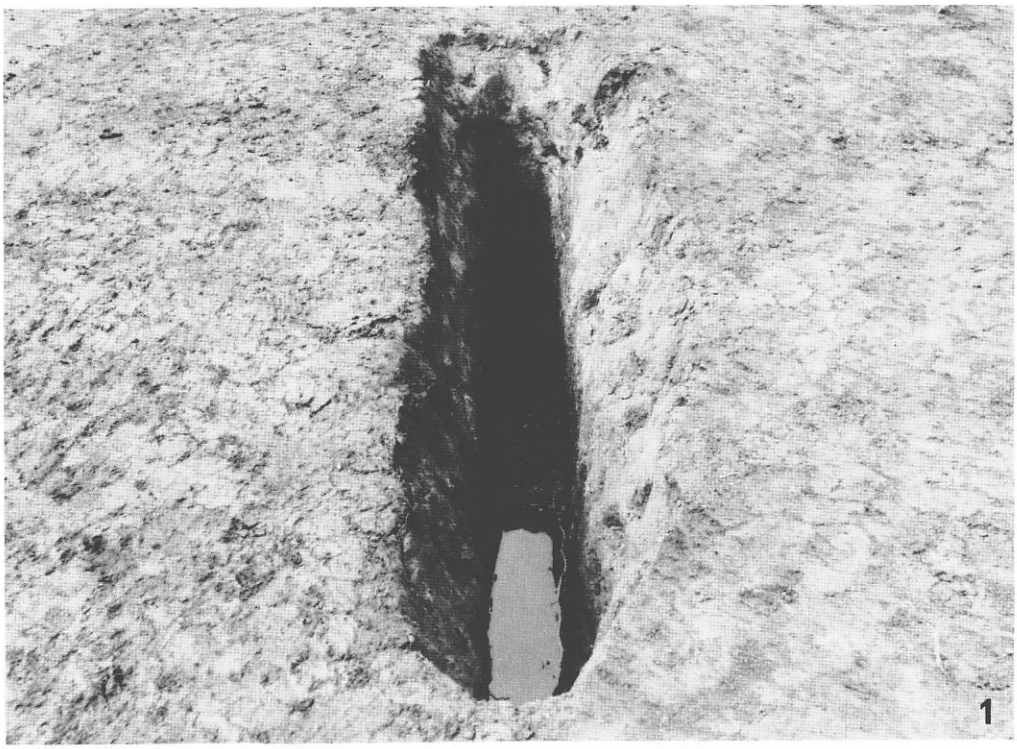


図版17　①SKT 05（東▶西）②SKT 06（南▶北）

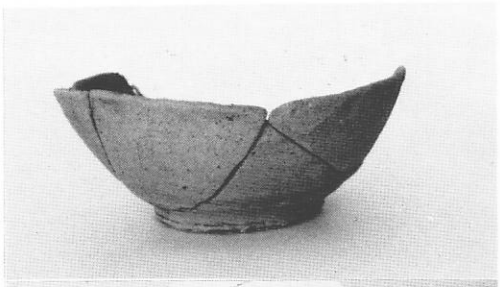


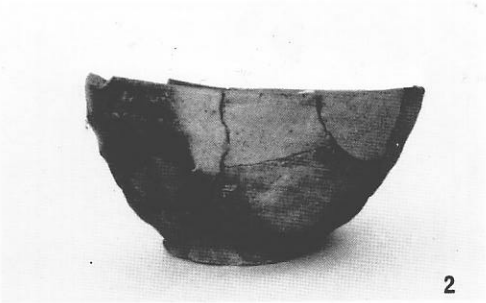


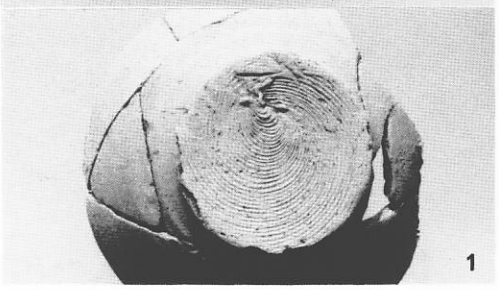
図版18　①SKT 07（東▶西）②SKT 08（北▶南）

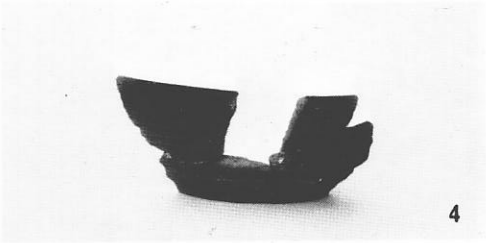


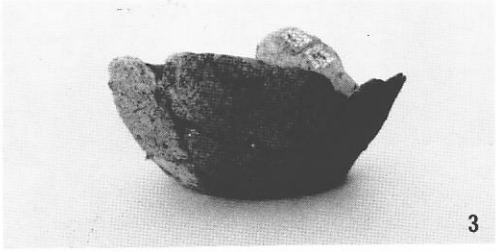
図版19　①SKT 10（東▶西）

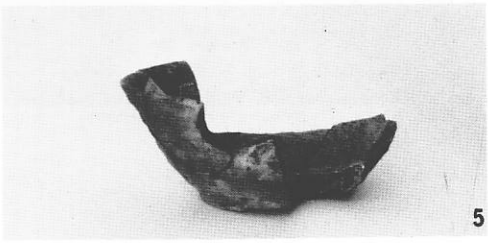


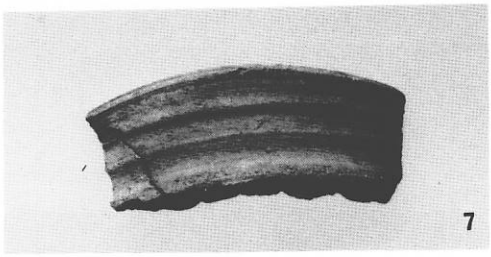


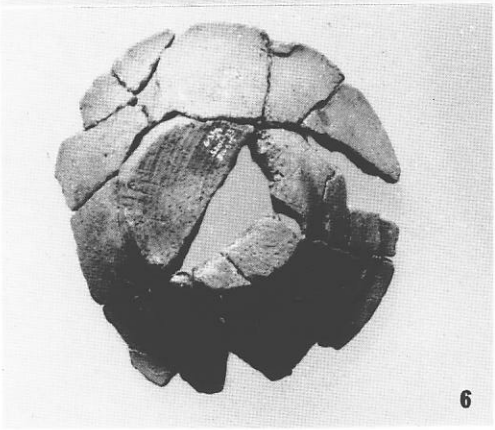


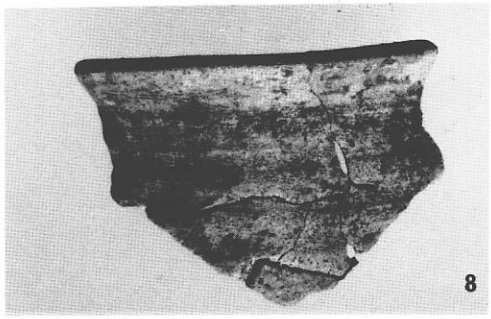




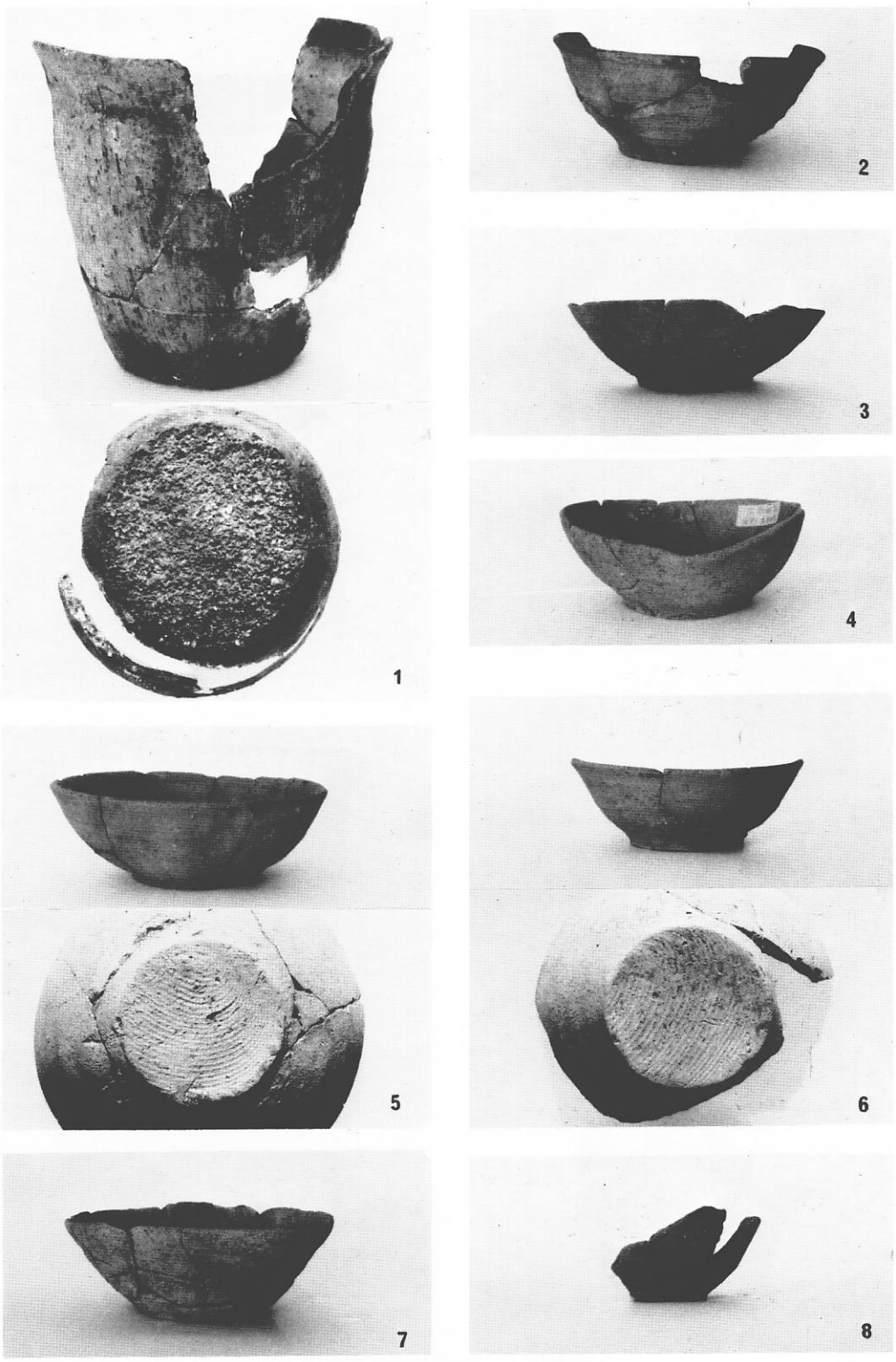




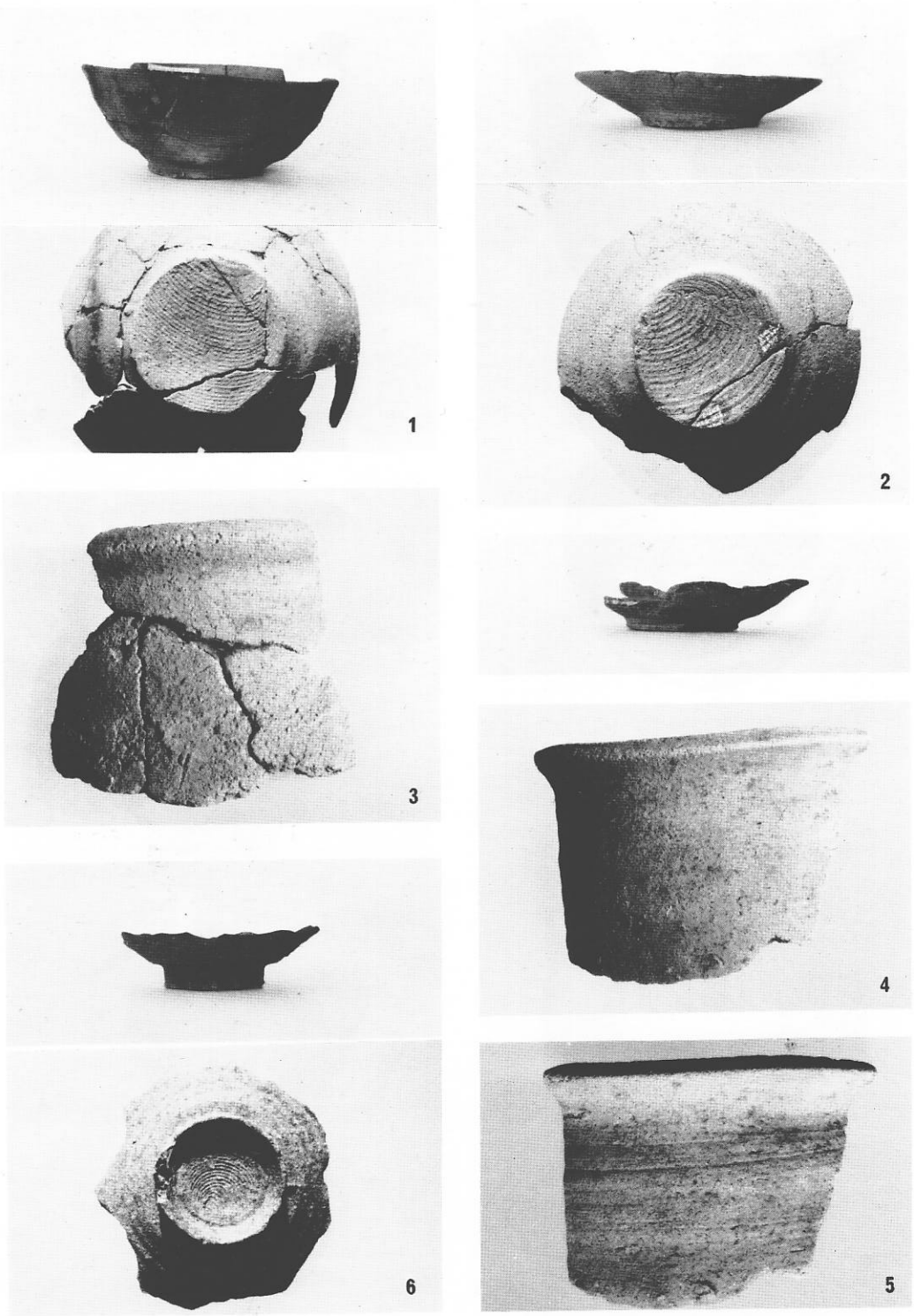




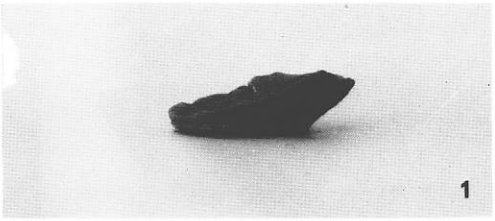
図版20　①～⑧SI 01 出土遺物

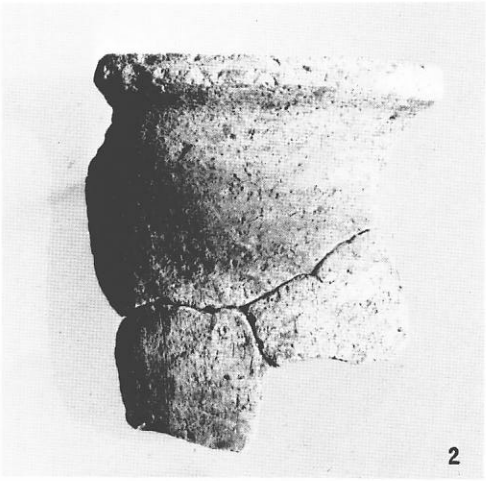


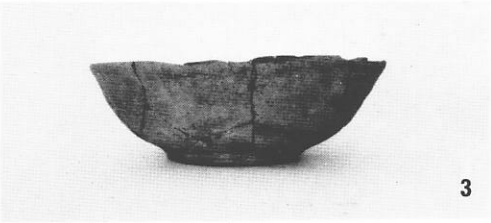
図版21　①SI 01 出土遺物　②～⑧SI 02 出土遺物

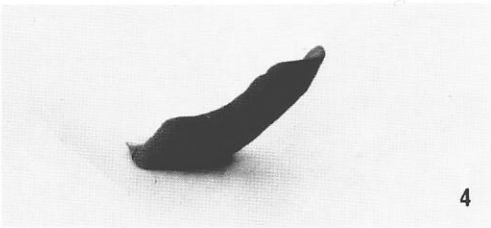


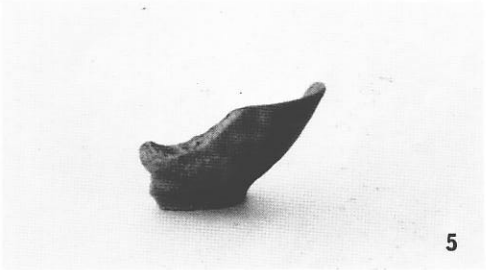
図版22　①～⑥SI 02 出土遺物

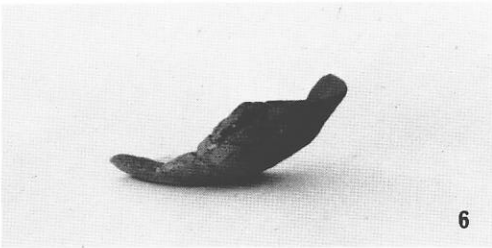


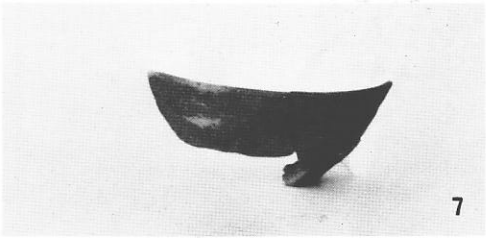


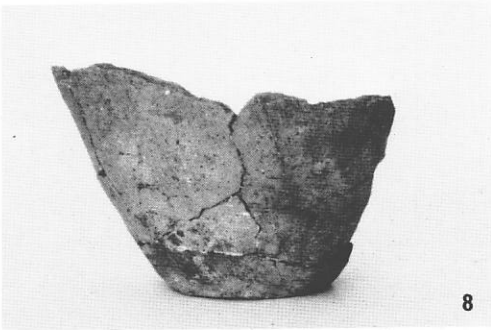


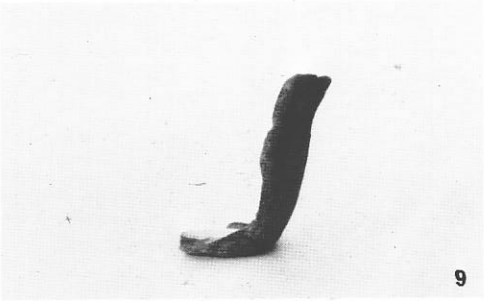




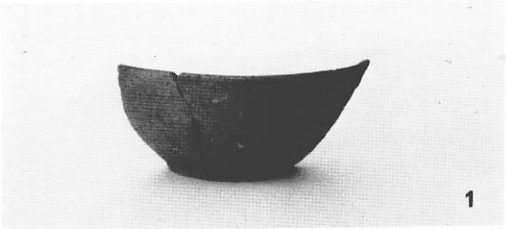


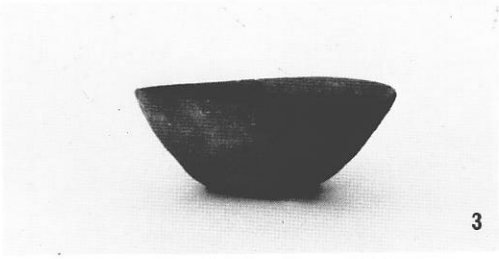


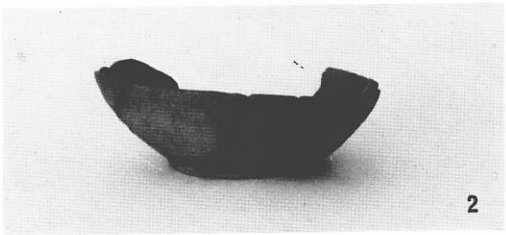




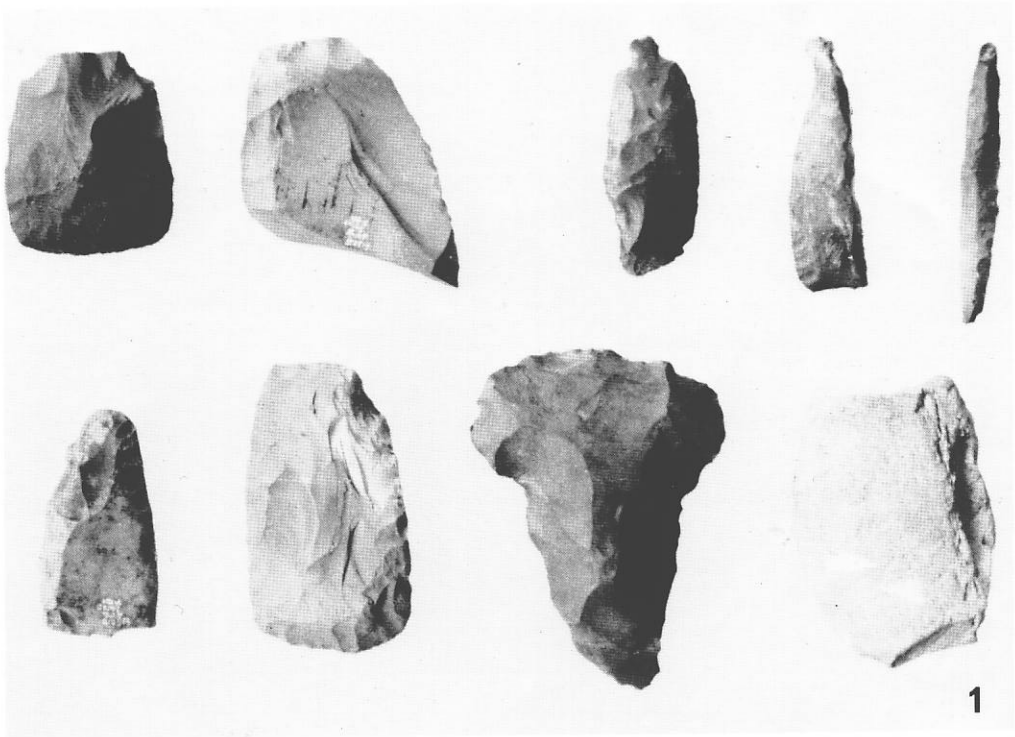
図版23　①・②SI 03 出土遺物　③～⑨SI 04 出土遺物

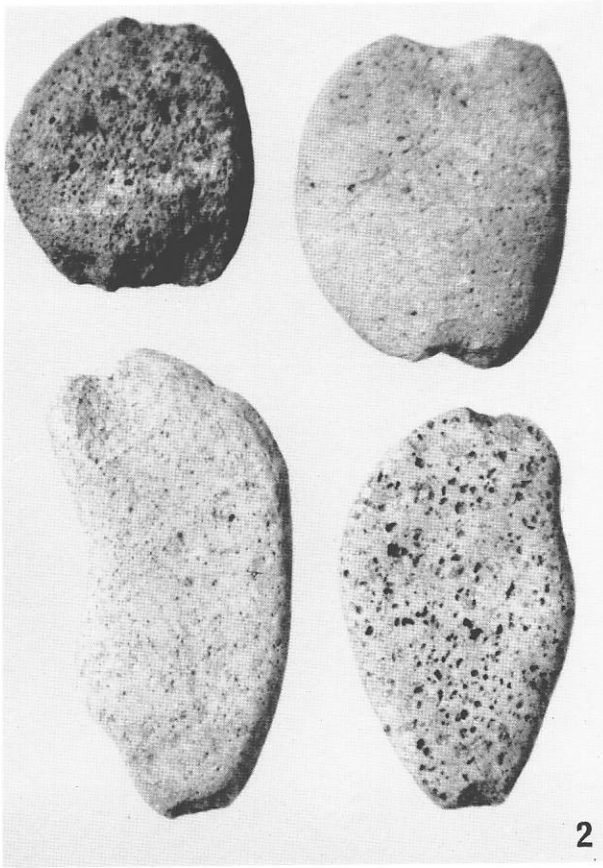




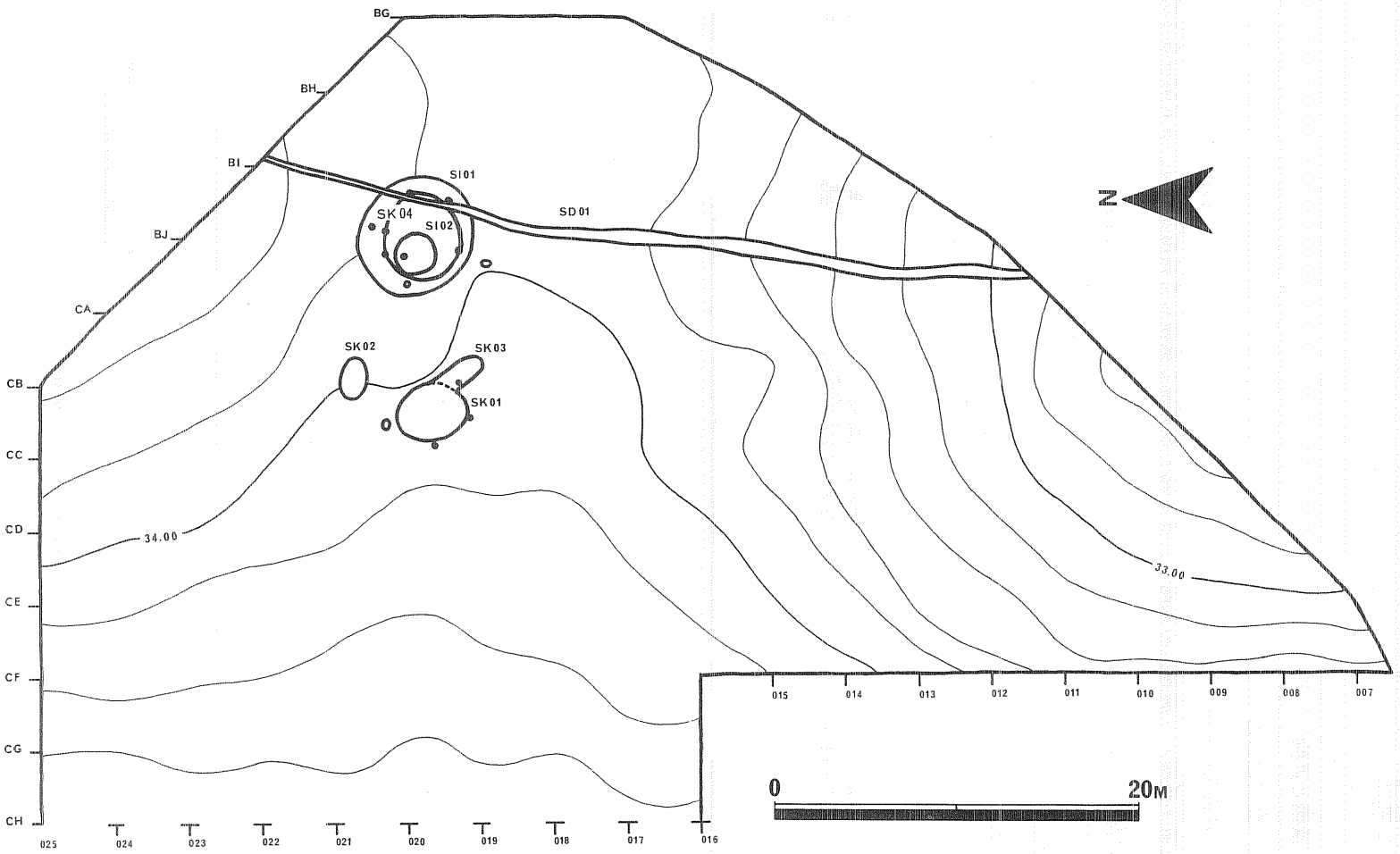


図版24　①・②SK 07 出土遺物　③SXF 01 出土遺物





図版25　①・②遺構外出土遺物



第46図　腹鞁の沢遺跡Ｃ地区遺構分布図

C地区

1　遺構と遺物

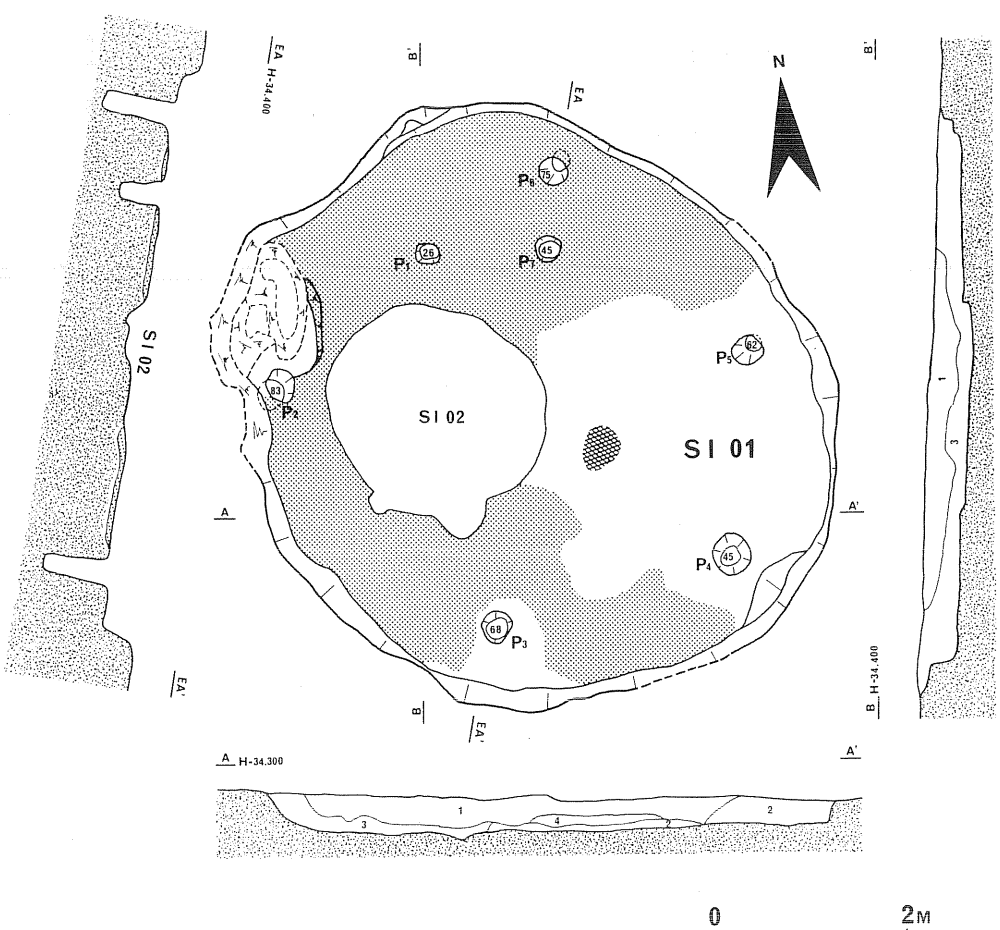
①　竪穴住居跡

ＳＩ 01竪穴住居跡　（第47図、図版27）

〈位置・重複〉　調査区の東側で、ＳＩ02・ＳＫ04と重複して検出された。ＳＫ04→ＳＩ02→ＳＩ01の順に古い。

〈平面形〉　ほぼ楕円形を呈し、長軸6.5m・短軸5.9mを測る。

〈床面〉　床面は平坦である。特徴的なことは、炉の周囲と東部分を除き、砂を敷いていることである。西側に厚く（約5cm）、北・南壁近くは薄い。

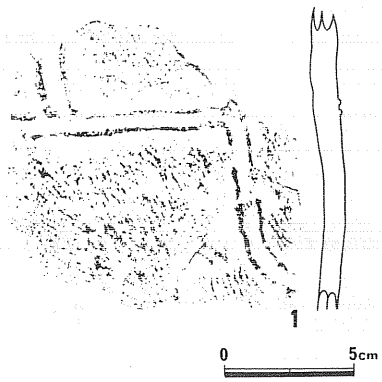


第47図　ＳＩ 01 実測図

〈壁〉　地山が西から東に低く傾斜しているため、西側の壁が高くなっている。壁高は西壁で約40cm、東壁で約20cmである。

〈壁溝〉　検出されなかった。

〈柱穴〉　主柱穴は、壁のやや内側のP_2～P_6の5本と考えられる。主柱穴の間隔は、P_2-P_3が3・4m、P_3-P_4が2.5m、P_4-P_5が2.1m、P_5-P_6が2.8m、P_6-P_2が3.8mであり、P_2-P_3とP_6-P_2がほぼ等しく、P_3-P_4とP_5-P_6もまたほぼ等しい。P_4-P_5がもっとも狭い。



第48図　SI01 出土遺物

〈炉〉　地床炉が、床面中央よりやや東側に位置する。焼土は薄く、範囲も広くない。

〈出入口〉　住居跡の東側に出入口を想定したい。それは、主柱穴であるP_4-P_5の間隔がもっとも狭いことと砂の敷いていない部分であることからである。壁高ももっとも低い。

〈出土遺物〉　（第48図、図版32）　床面直上で検出された土器片である。地文である斜縄文の点に、2本を単位とする細い隆線文が貼付されている。大木8a式期の土器と考えられる。

SI 02竪穴住居跡　（第49図、図版27）

〈位置・重複〉　SI01・SK04と重複して検出され、新旧関係は上記のとおりである。

〈平面形〉　円形を呈し、直径は約2.3mほどである。きわめて小規模の住居跡である。

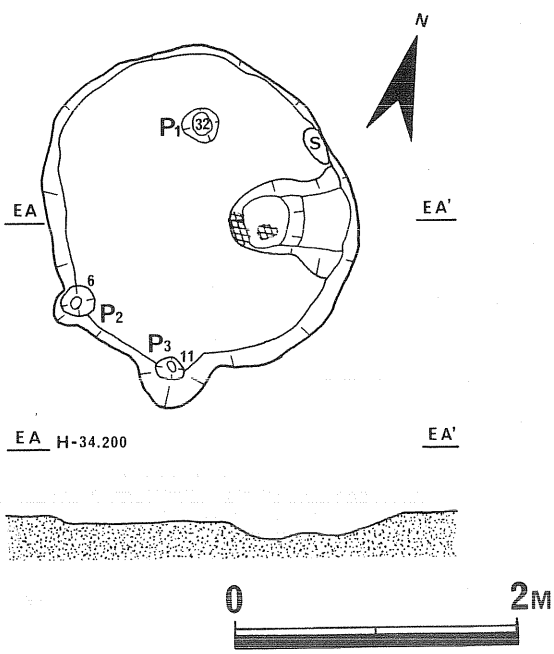
〈床面〉　ほぼ平坦である。

〈壁〉　SK04の構築のさい削られたと考えられ、壁高10cmほどが確認できる。

〈壁溝〉　検出されなかった。

〈柱穴〉　P_1～P_3が検出されたが、P_2・P_3は浅く、主柱穴にはなり得ないと考えられる。

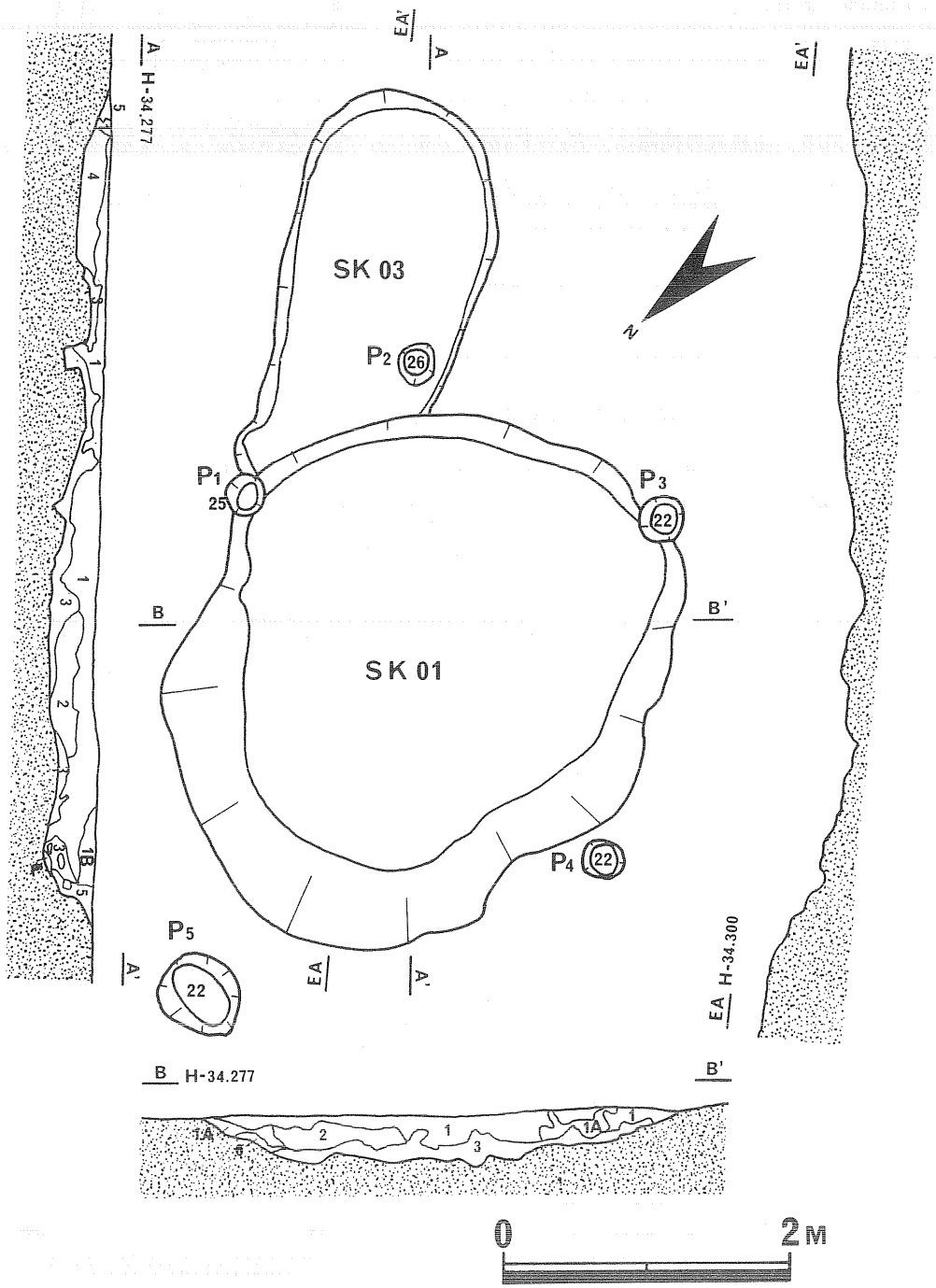
〈炉〉　東壁に接して、複式炉に類似する炉が設置されている。石組みや埋設土器はない。炉床は二段になり、西部分はわずかに焼土化し、東部分は



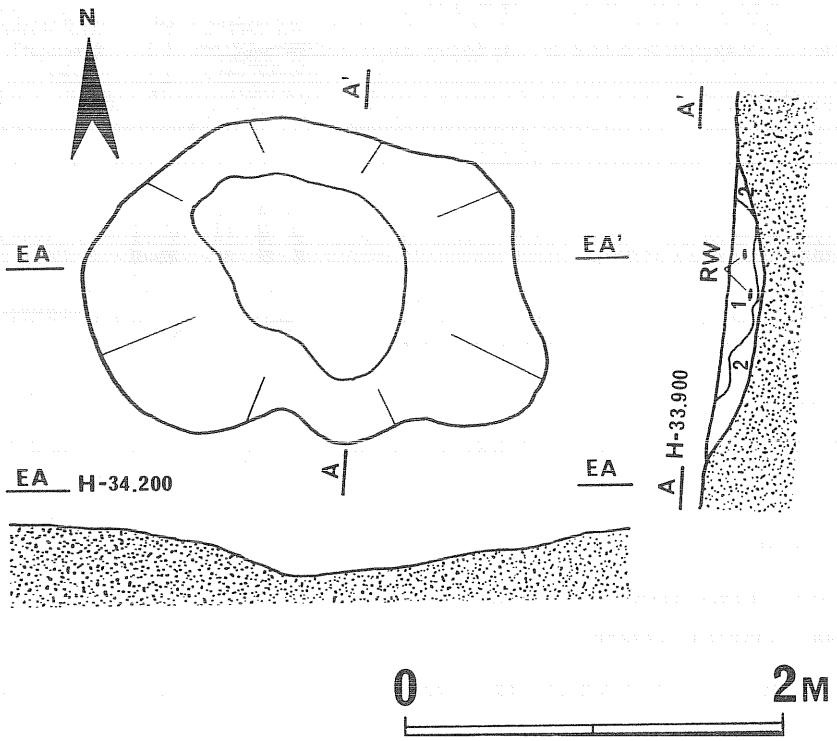
第49図　SI02 実測図

堅固にたたきしめられている。

〈出入口〉　P_2－P_{11}部分かと思われるが、確証はない。



第50図　SK01・SK03 実測図



第51図　SK02 実測図

〈出土遺物〉　埋土から縄文土器片が１点出土したのみである。

② 土壙

ＳＫ01土壙　（第50図、図版28）

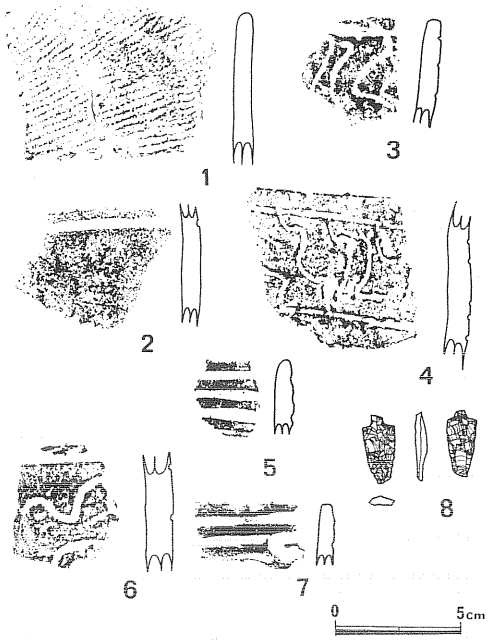
〈位置・重複〉　ＳＩ01に近接して検出された。ＳＫ03と重複するが、本遺構が新しい。

〈平面形〉　不整円形を呈し、径3.5～４ｍを測る。

〈壁，床〉　壁から床にかけて、鍋底状を呈する。床面は凹凸を呈する。

〈出土遺物〉　埋土層から縄文土器破片が出土したが、磨耗が激しく図示するにいたらなかった。

ＳＫ02土壙　（第49図、図版30）



第52図　SK02 出土遺物

〈位置〉　SK01の北側に近接して検出された。

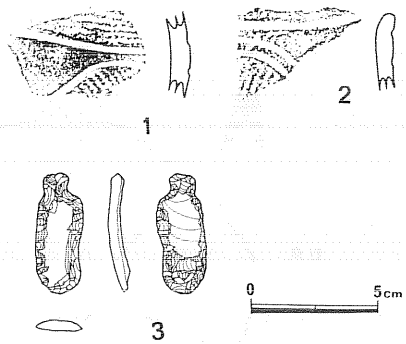
〈平面形〉　不整楕円形を呈する。長軸約2.4m。短軸約1.6mを測る。

〈壁・床〉　壁から床にかけて、鍋底状に凹む。床面は平坦である。

〈出土遺物〉

土器（第52図）

第1類（1）口縁部の直立する深針形土器であろう。縄文のみが施文されている。



第53図　SK03出土遺物

第2類（2～6）口縁部の直立する深鉢形土器の破片であろう。沈線文が直線または曲線に施文されている。

石器（第52図）

石鏃（8）　凸基の石鏃である。頁岩。

SK03土壙　（第50図、図版28）

〈位置・重複〉　SI01の西側に近接して検出された。SK01と重複するが、本遺構が古い。

〈平面形〉　SK01のため、北西端部が切られているが、楕円形を呈するものと考えられる。

〈壁・床〉　壁から床にかけて、鍋底状に凹む。床面は平坦である。

〈出土遺物〉　縄文土器片が出土したが、細片のため図示するにいたらなかった。

SK04土壙　（第54図）

〈位置・重複〉　SI01・02と重複して検出されたが、本遺構がもっとも新しい。

〈平面形〉　不整楕円形を呈する。長軸4.7m。短軸4.3mを測る。

〈壁・床〉　壁から床にかけて、鍋底状に凹む。床面は凹凸を呈する。

〈出土遺物〉　（第55、56図、図版33・34・35）

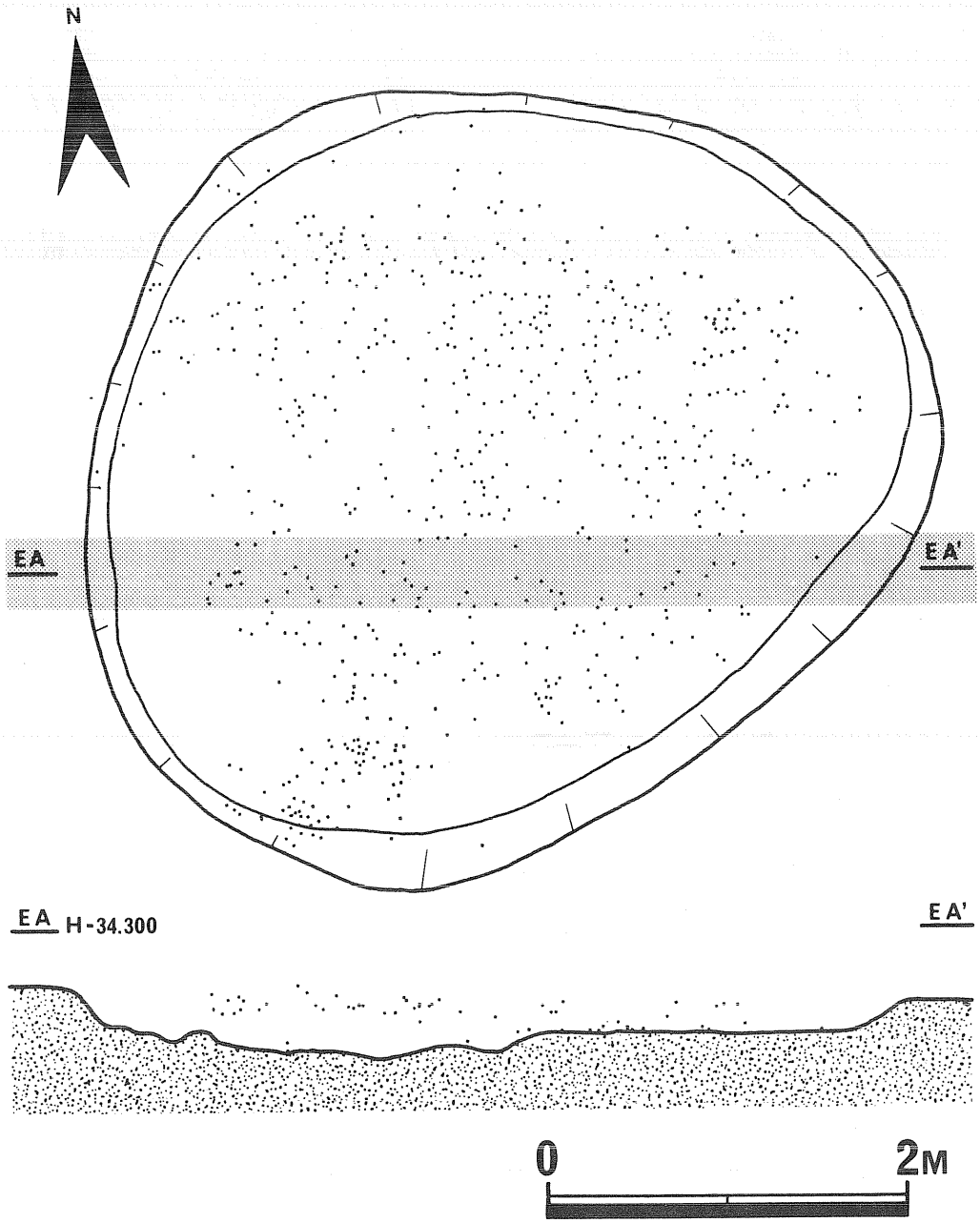
土器

第1類（1～6）　斜縄文のみ施文された深鉢形土器であろう。口縁部が直立するもの（5・6）とわずかに外反するもの（1～4）がある。

第2類（7～9）　波状口縁の頂部に円形の隆帯を貼付する類。口縁部、胴部には斜縄文のみを施文している。

第3類（10～12）　口縁部に、撚糸圧痕文が巾約2cmほど施文され、文様帯を構成する。この文様帯の下部は無文である。

第4類（13～18）　口縁部の直立する深鉢形土器と考えられる。口唇部近くに1条の沈線がめぐる。

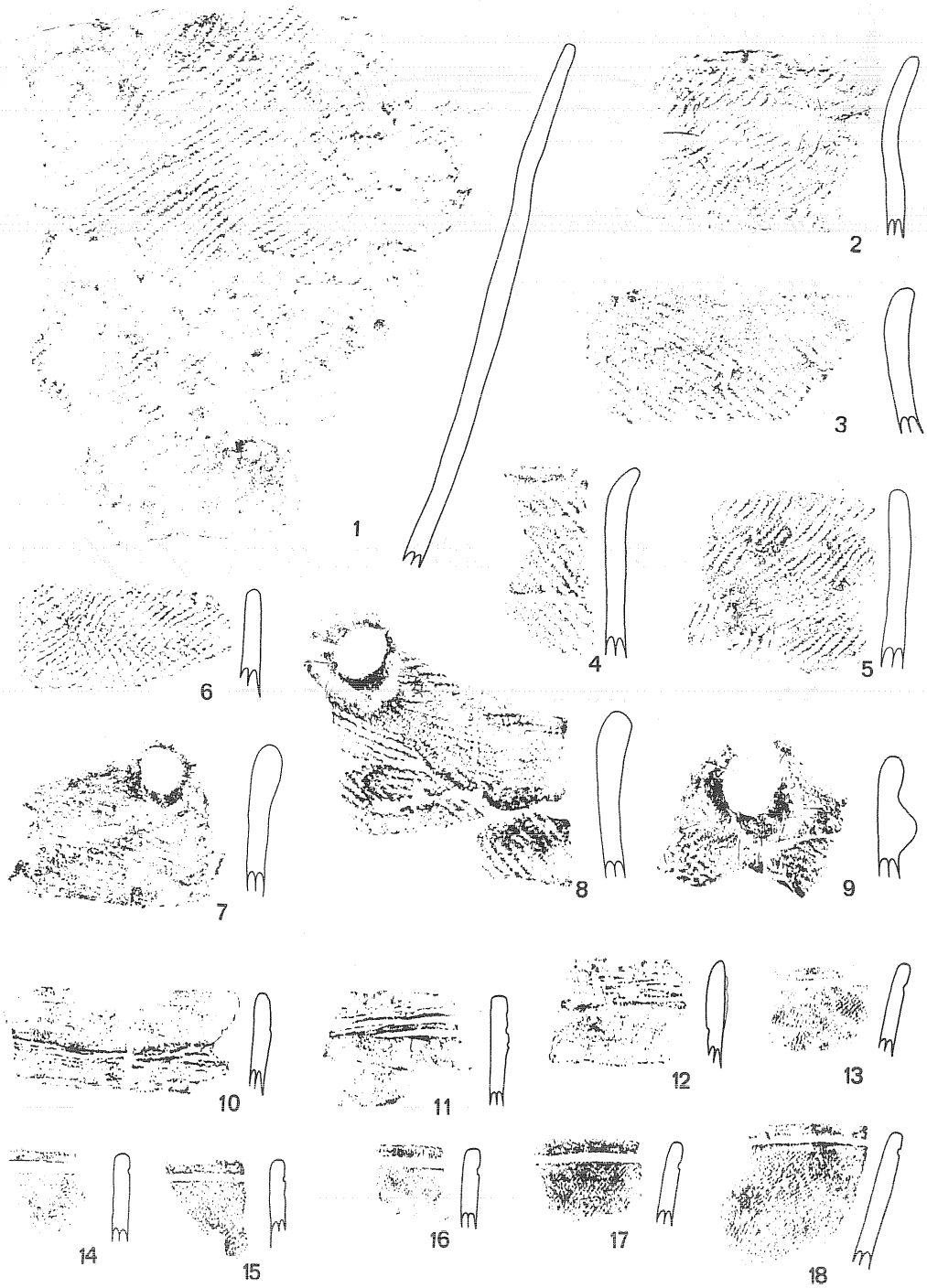


第54図　SK04 遺物出土状況図

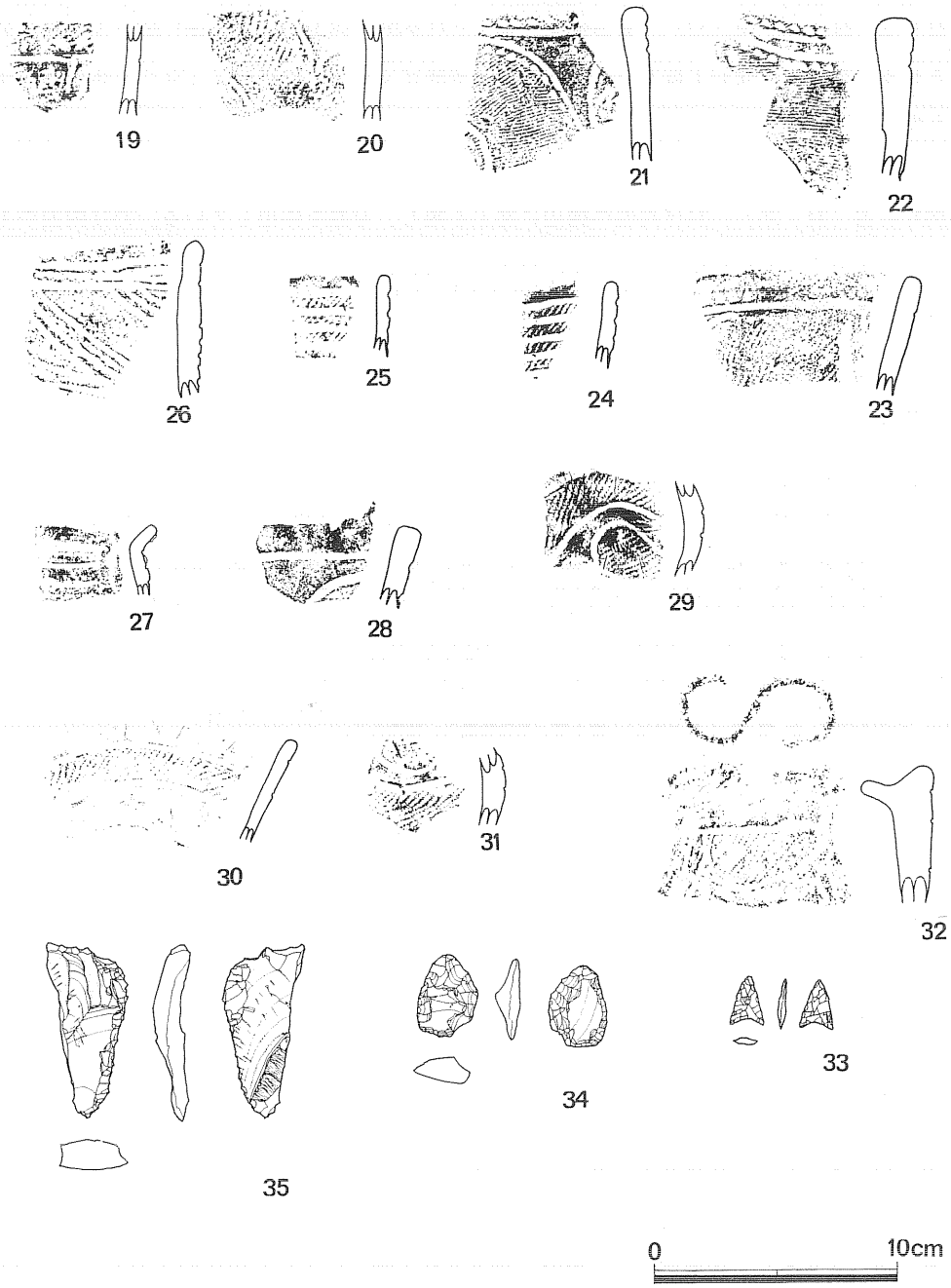
第５類（19・20・25）　斜縄文の上に、沈線が施文される例。

第６類（24・25）　口縁部に数条の沈線文が施文される例。

第７類（26・27）　地文としての斜縄文は認められなく、沈線が施文される。27は、低平な



第55図　SK04 出土遺物



第56図　SK04 出土遺物

隆帯を貼付し、その両側縁を沈線で縁どりしたものである。

第８類（21・23・28～33）　磨消縄文の施文される例。22・23には沈線に沿って刺突文が施文される。29・30は壺形土器であろう。33は突起部分であり、口唇部は「Ｓ」字状を呈する。

石器　（第56図）

石鏃（33）　凹基の石鏃である。頁岩。

剥片石器（34・35）　34は両面の縁辺に加工を施し、刃部を作出している。35は両面の１部分に加工を施し、刃部を作出している。いずれも頁岩。

③　溝状遺構

調査区の東側を南北に横走する溝状遺構である。幅約30～100cm、深さ25～30cmを測る。断面形は鍋底状を呈する。

第２表　Ｃ地区遺構埋土一覧表

遺構	層	土色	土質
SI 01	1	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化物多量、ローム少量混入、土器含む、堅い。（SK04埋土層）
	2	褐色（7.5YR4/3）	炭化粒子、ローム粒子微量混入、堅くしまっている。
	3	暗褐色（7.5YR3/4）	炭化粒子、ローム粒子、焼土粒子少量混入、緑色砂少量混入。堅くしまっている。
	4	黒褐色（7.5YR3/1）	炭化粒子、ローム粒子、黒色土微量混入、やわらかい。
SK 01 SK 03	1	黒褐色（10 YR3/3）	炭化粒子、焼土微量混入、土器片、フレーク類含む、堅くしまっている。
	1A	黒褐色（10 YR3/1）	ローム粒子、炭化粒子、焼土微量混入、土器片、フレーク類含む、堅い。
	1B	黒褐色（10 YR3/2）	炭化粒子、焼土微量混入、堅くしまっている。
	2	黒褐色（10 YR3/2）	炭化粒子混入、土器片、フレーク類含む。
	3	オリーブ色（5 Y 3/2）	炭化粒子、ローム粒子混入、粘性度大、土器片、フレーク類含む。
	4	暗赤褐色（5 YR3/4）	焼土層、炭化物混入、粘性あり。
	5	にぶい黄褐色（10 YR5/3）	ローム粒子混入、粘性あり。
	6	褐色（10 YR4/4）	ローム粒子、黒色粒子混入、しまっている。
SK 02	1	黒褐色（7.5YR3/1）	ローム粒子、炭化物少量混入、堅くしまっている、土器片含む。
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム粒子、炭化物少量混入、堅くしまっている。
SK 04	1	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化物多量、ローム少量混入、土器片含む。（SI 01の１層）
SD 01	1	黒（10 YR2/1）	堅くしまっている。
	2	黒褐色（10 YR3/2）	ローム粒子少量混入、やわらかい。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	粘土質、しまっている。

2　遺構外の出土遺物

土器　（第57・58図、図版36・37）

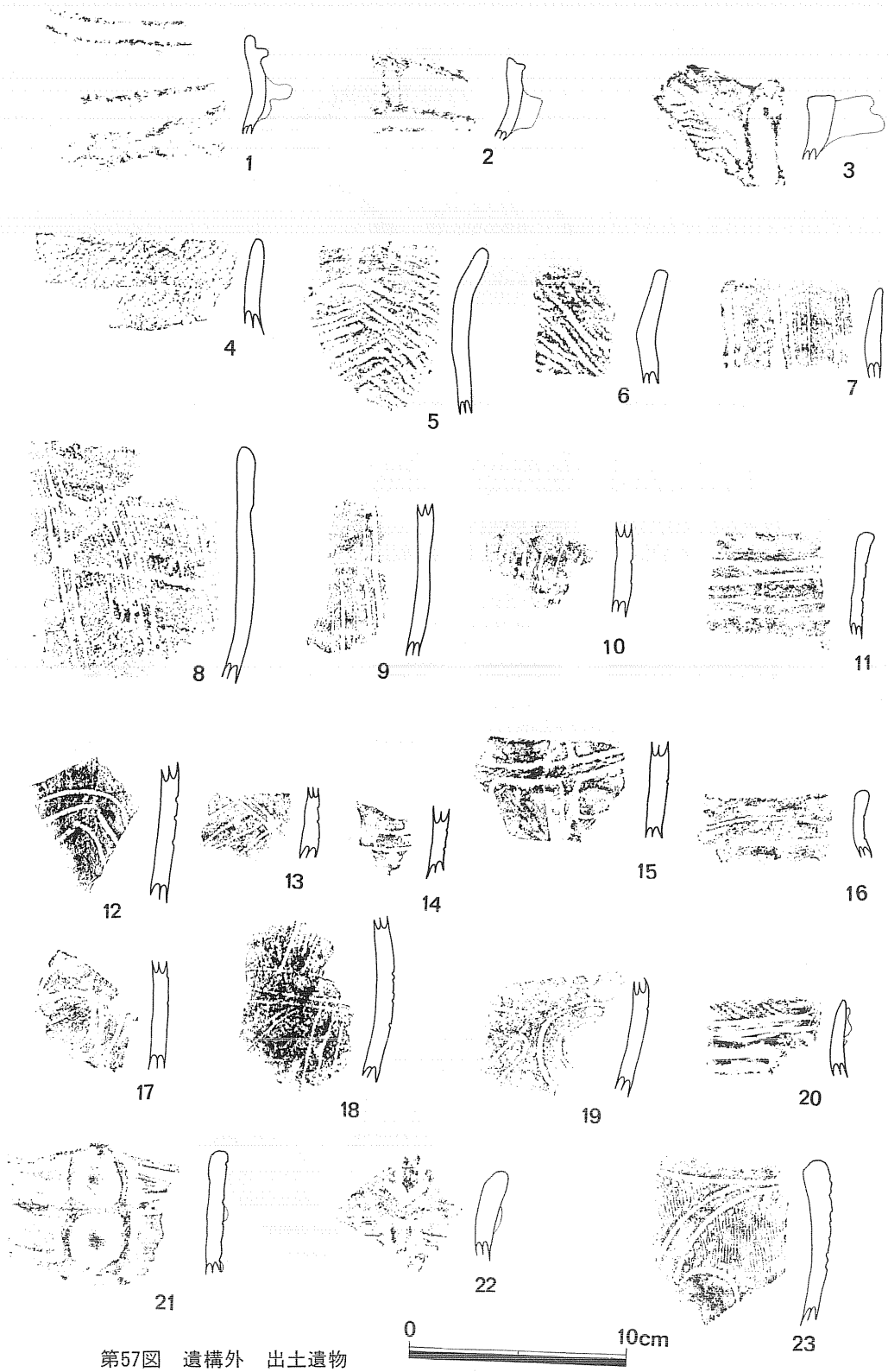
第１類（１～３）　隆帯を貼付し、口縁部を肥厚させる例。３には沈線による渦巻文が認められる。大木８ａ期と考えられる。

第２期（４～６）　斜縄文のみ施文される例。いずれも深鉢形と考えられ、４は口縁部が直立し、５・６はわずかに外反する。

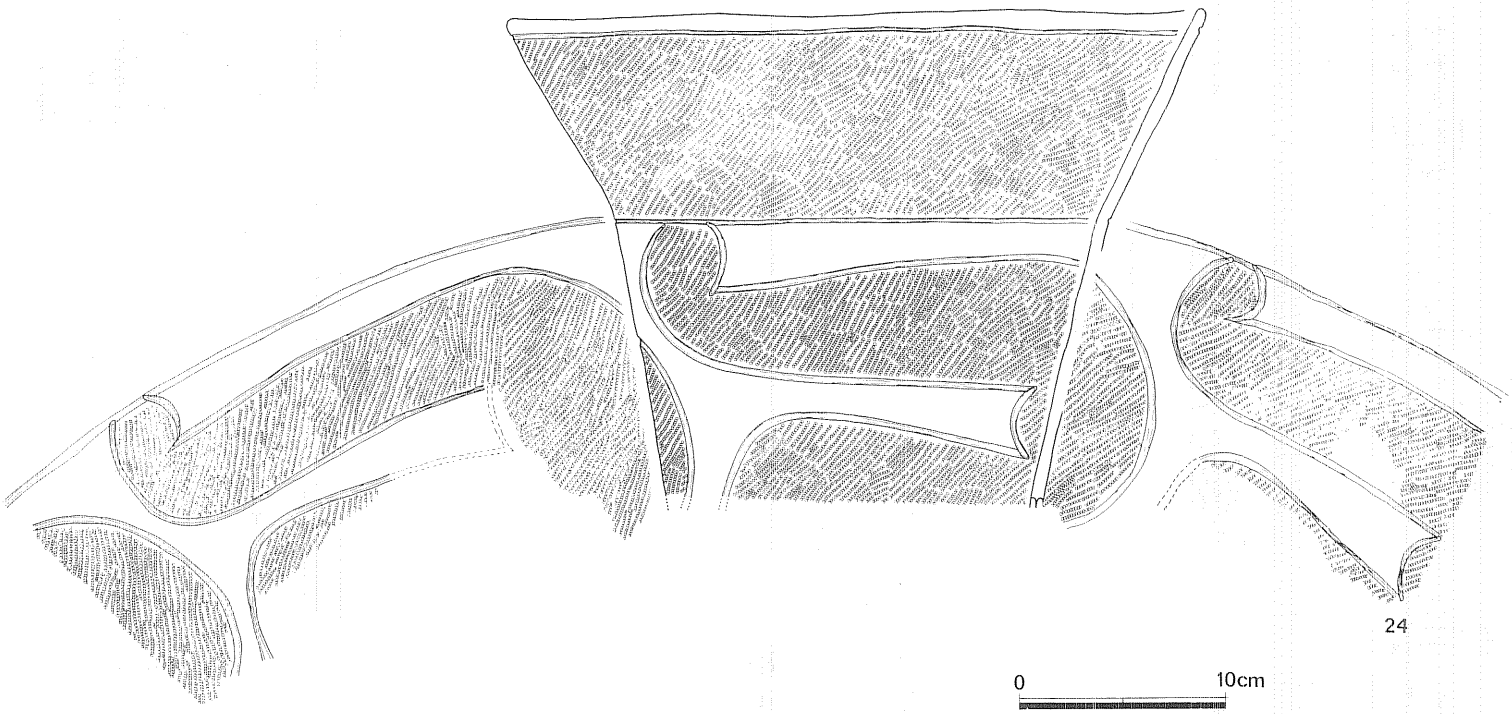
第３類（７～８）　沈線文のみを縦位に施文される例。いずれも深鉢形と考えられ、口縁部は直立する。

第４類（10～19）　地文としての斜縄文は認められず、沈線文を曲線または直線に施文する例。　腰内Ｉ式期の土器と考えられる。

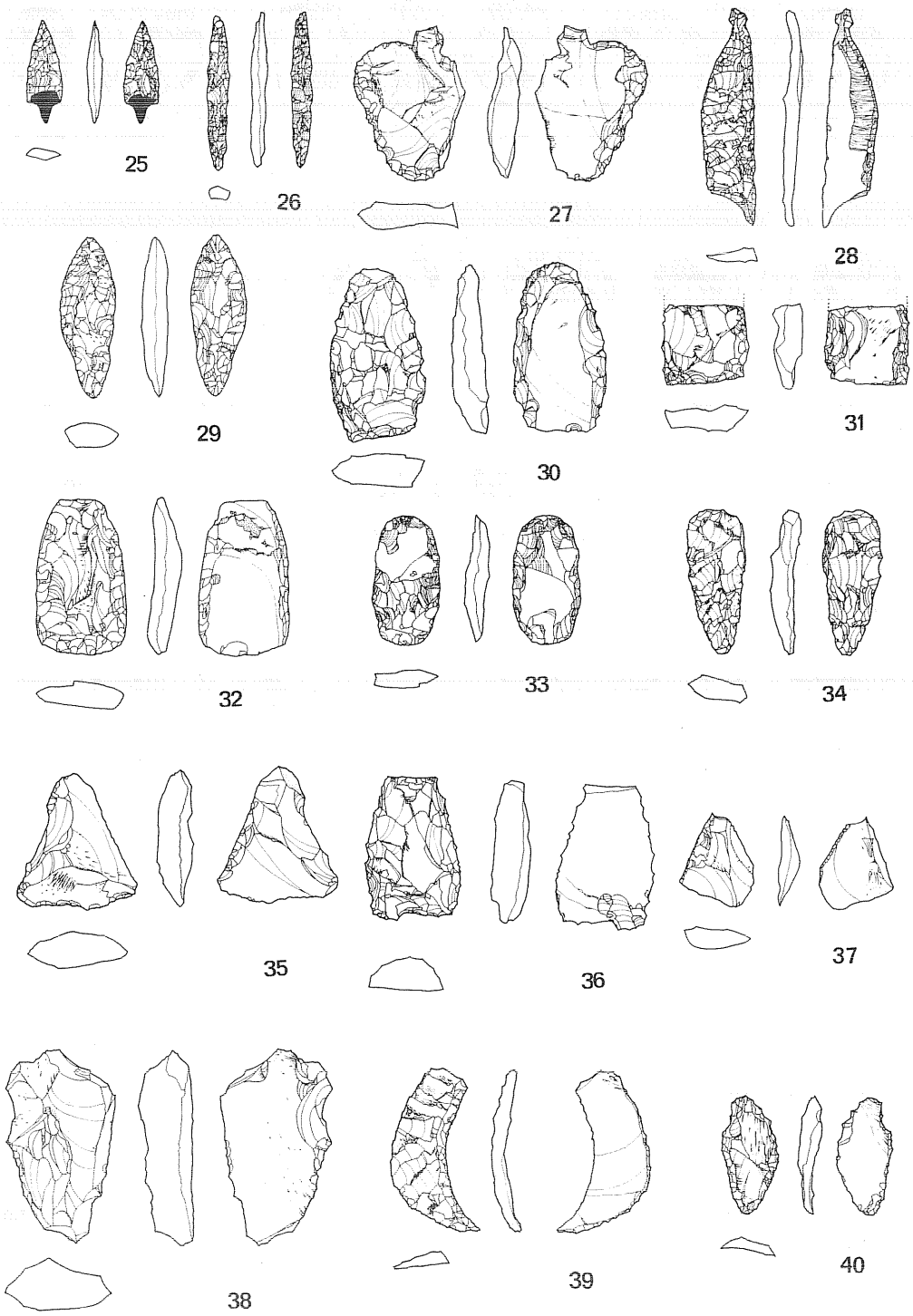
第５類（20～22）　低平な隆帯を貼付し、この側面に沈線文を施文する例。十腰内Ｉ式期の



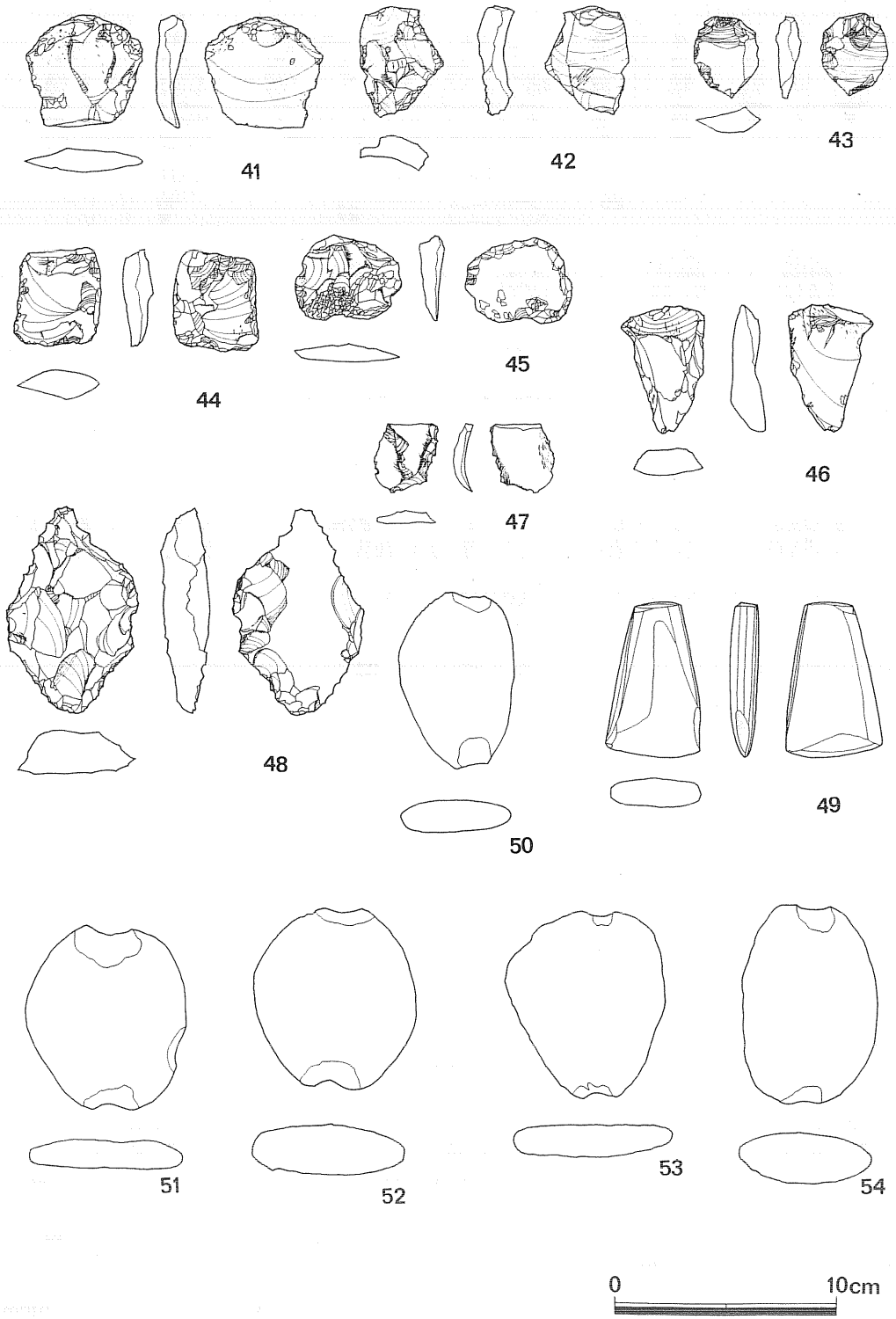
第57図　遺構外　出土遺物



第58図　遺構外　出土遺物



第59図　遺構外　出土遺物



第60図　遺構外　出土遺物

土器と考えられる。

第6類（23・24）　磨消縄文の認められる例。23は沈線に沿って、刺突文が施文される。24は口縁部の外反する深鉢形土器である。胴部に磨消縄文による文様帯を有する。

石器（第59・60図、図版37）

石鏃（25）　凸基の石鏃である。基部にアスファルトが付着している。頁岩。

石錐（26）　両端とも錐部となる。頁岩。

石匙（27・28）　いずれも縦形を呈するが、28がていねいな作りである。28の先端部には抉り部が認められる。

石槍（29）　両面加工の石槍である。中央部で狭くなり、基部を形成する。

石篦（30～36）　34が両面加工であり、他は表面を全面加工し、主要剥離面は部分的に加工している。いずれも頁岩。

剥片石器（37～48）　剥片の一部分に加工を施こし、刃部を作出している。29は石匙かもしれない。頁岩。

石斧（49）　両刃の石斧である。凝灰岩。

石錘（50～54）　扁平な河原石の長軸の両端に凹部を作出している。凝灰岩。

（永瀬）

3　小結

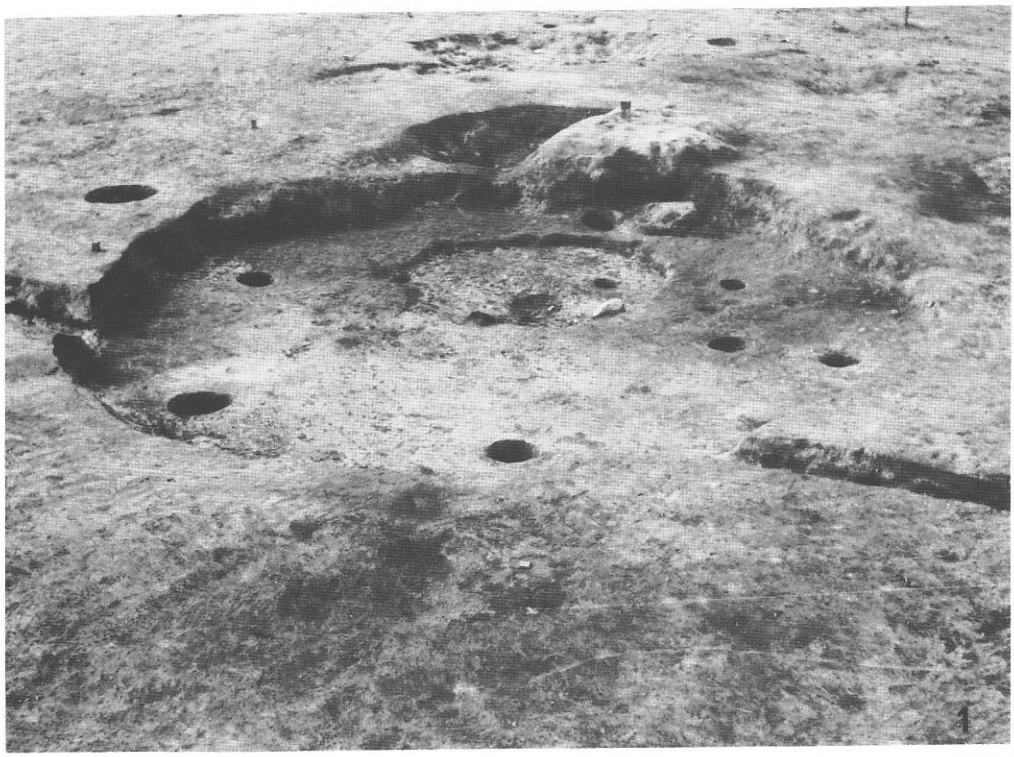
C地区で検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、土壙4基、溝状遺構1条である。

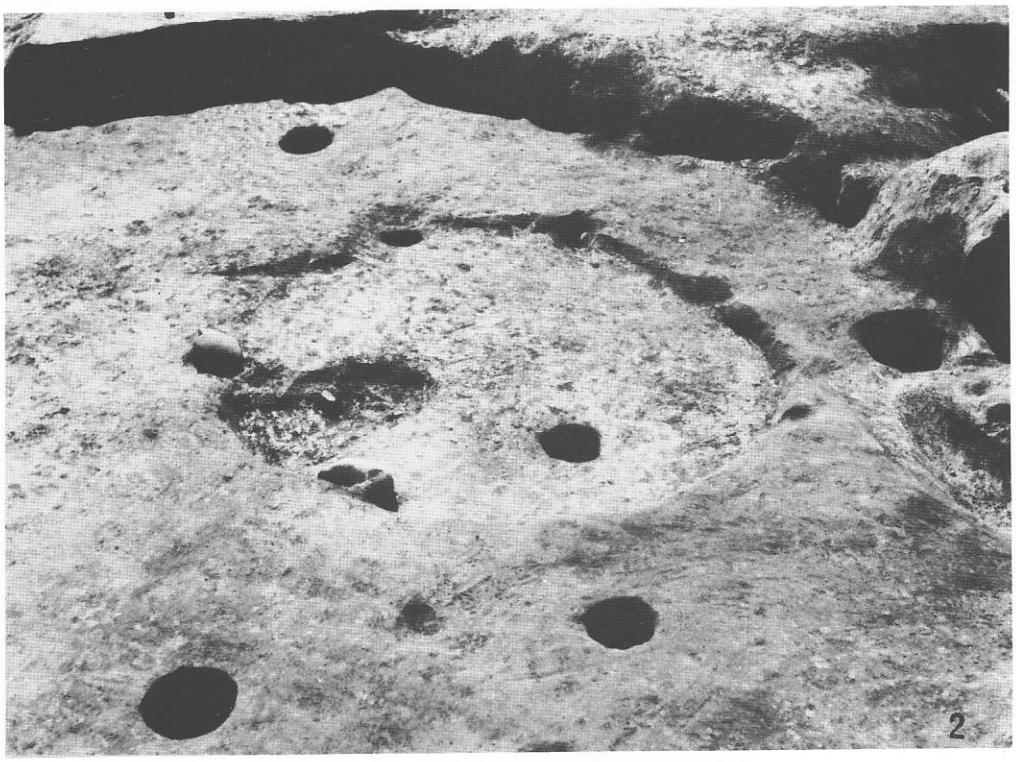
遺構の時期は、SI02住居跡が大木8a式期であり、土壙は十腰内I式期を中心とするものと考えられる。SI02住居跡と溝状遺構は時期不明である。なお、SI02住居跡類似住居跡は、能代・山本地方においては、能代市大内坂II・能代市館下I・峰浜村中田面遺跡で検出されており、縄文時代後期前葉の住居跡と考えられる。

特徴的なことは、SI01住居跡の床面に敷かれた砂である。砂は床面全体に敷きつめられるのでなく、炉の周囲と出入口部と考えられるところに敷かれていない。住居空間の使い分けを暗示しているようで興味深い。

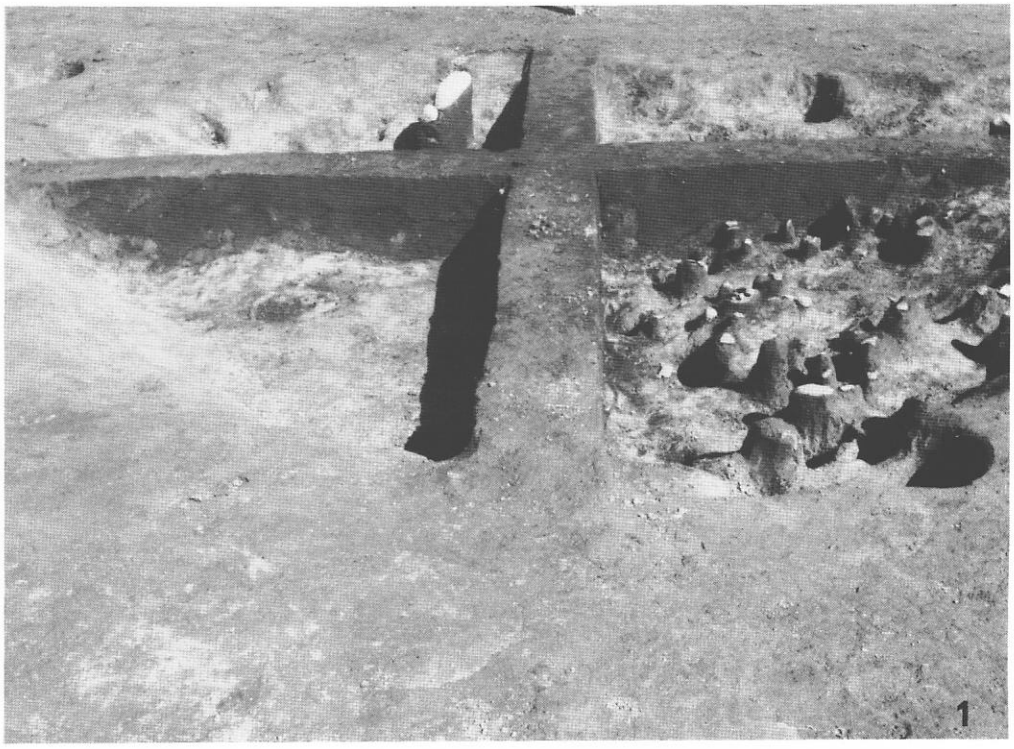
（永瀬）

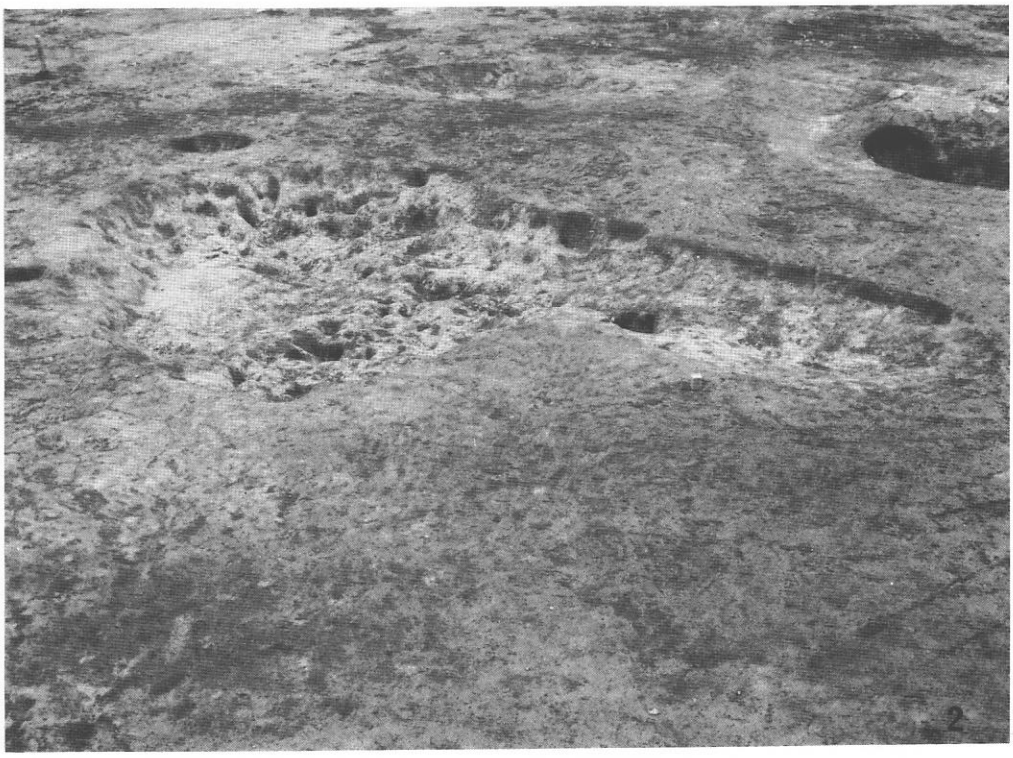
図版26　①発堀調査前のようす　②調査終了時



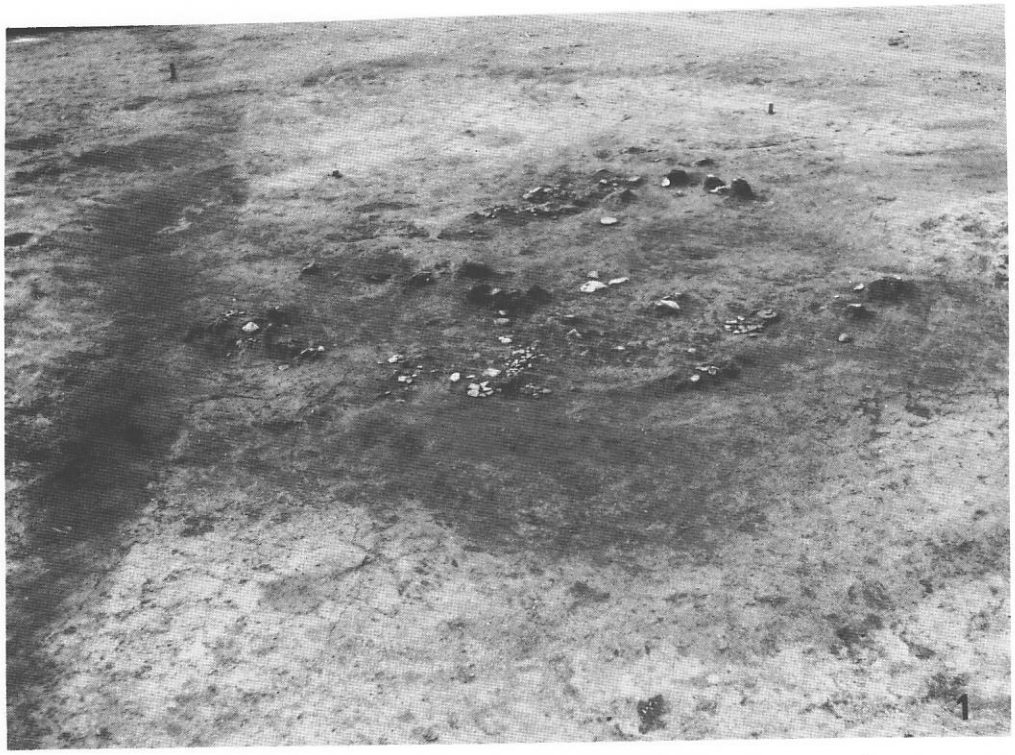


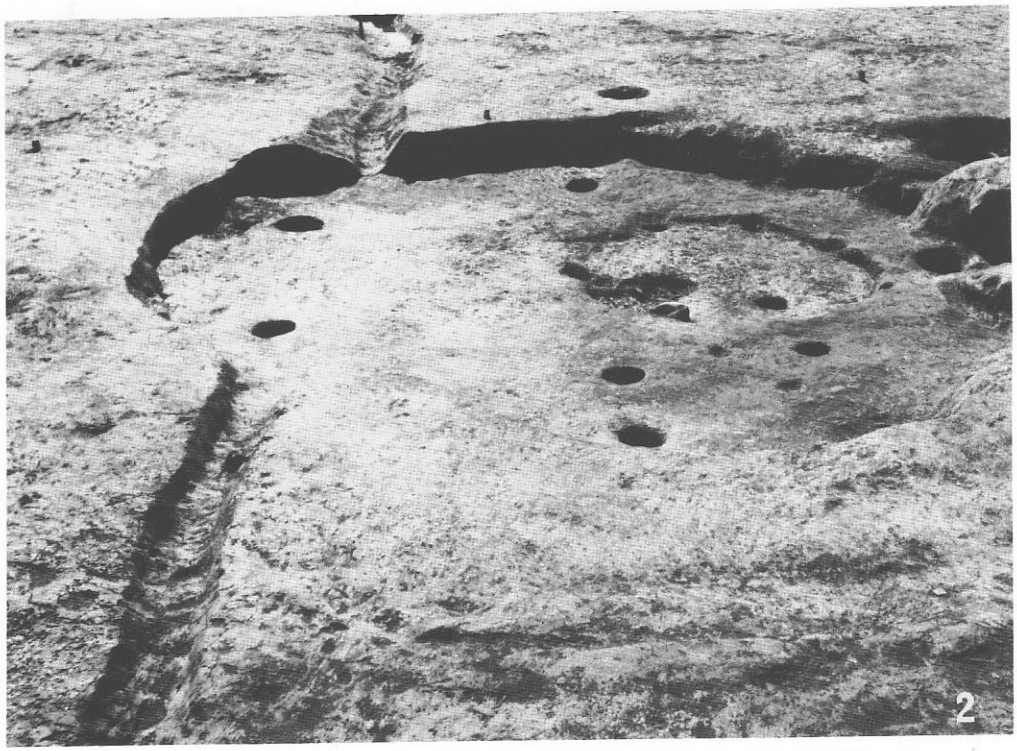
図版27　①SI 01（東▶西）②SI 02（北▶南）



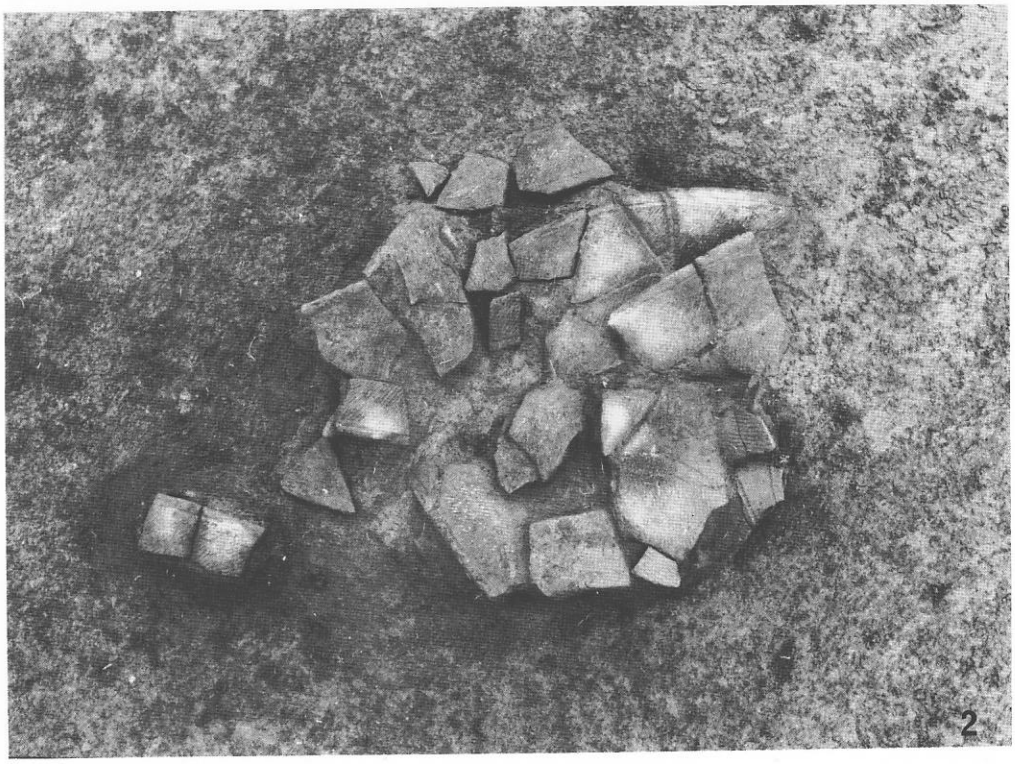


図版28　①SK 01　②SK 01・03（南▶北）



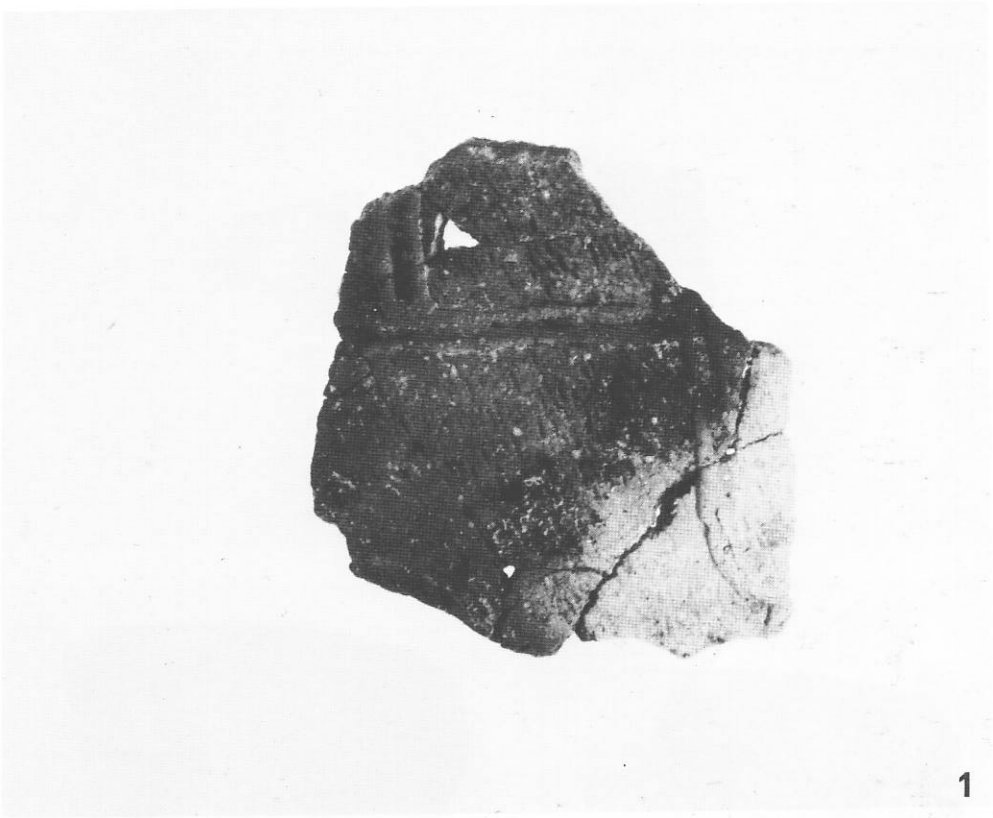


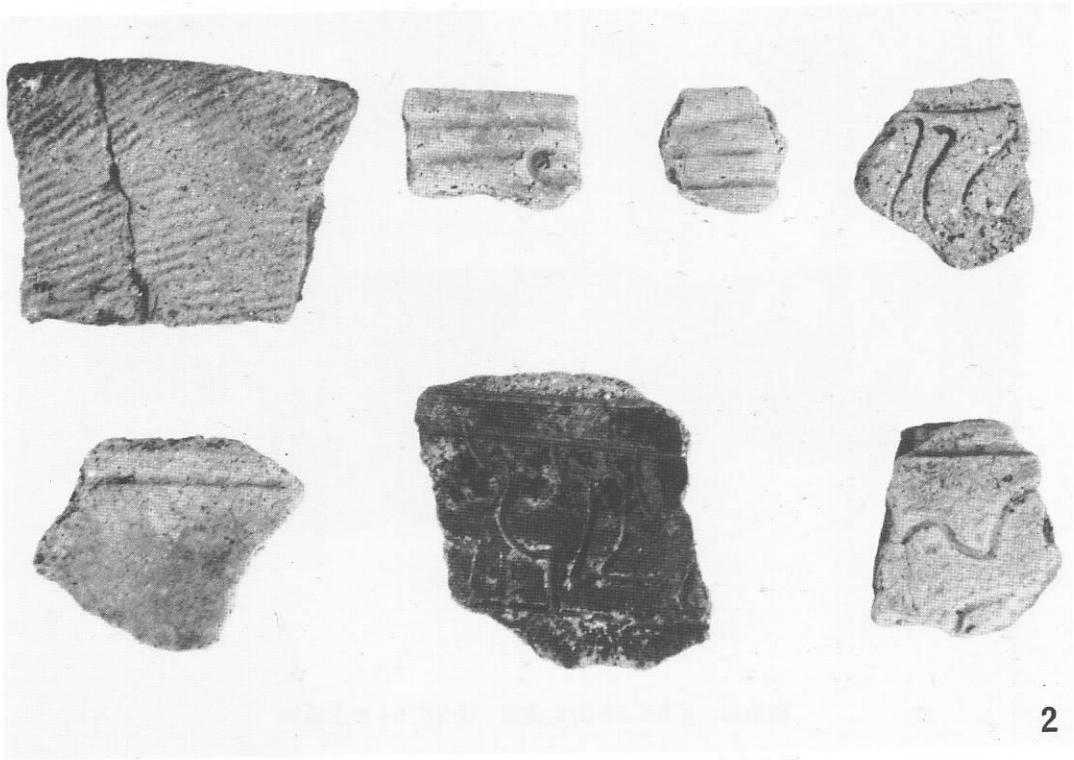
図版29　①SD 01・SK 04確認面　②SD 01・SI 01・02　（西▶東）



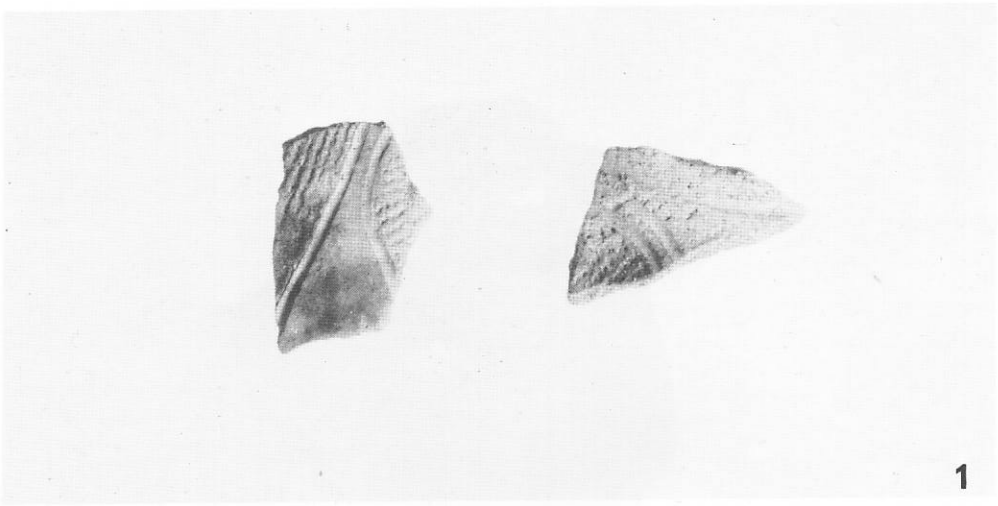
図版30　①SK 02（西▶東）②土器出土状態

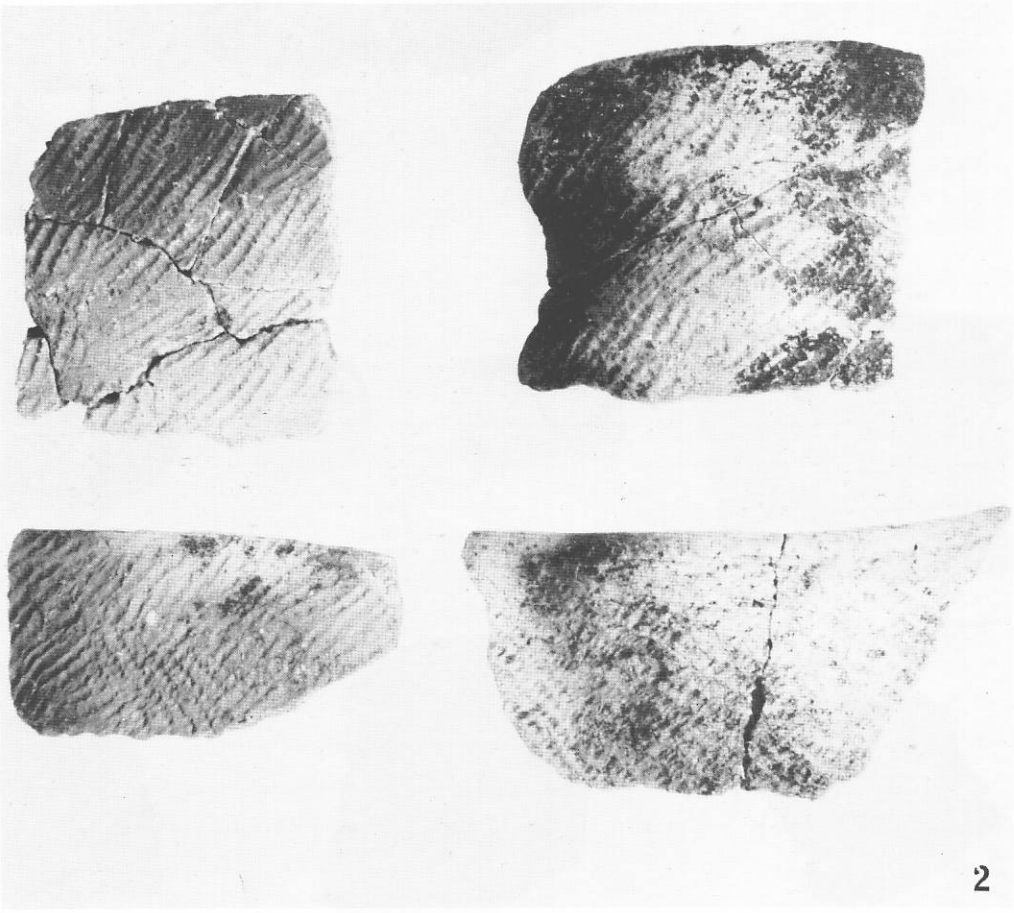
図版31　①石鏃出土状態　②石匙出土状態



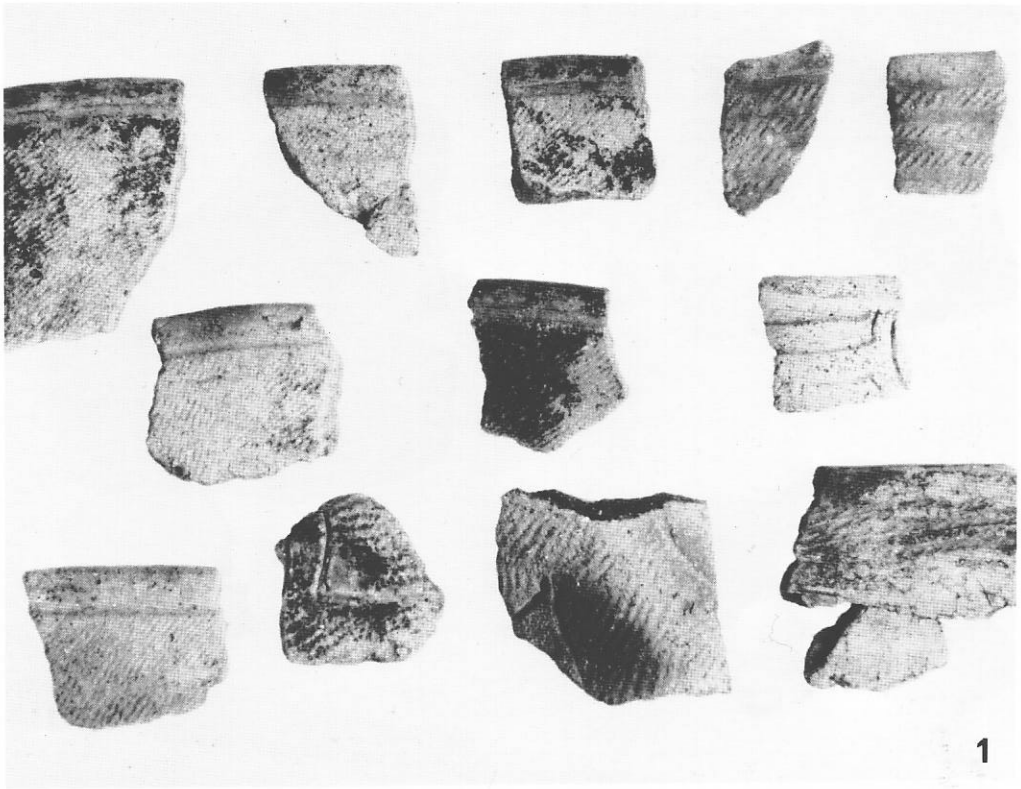


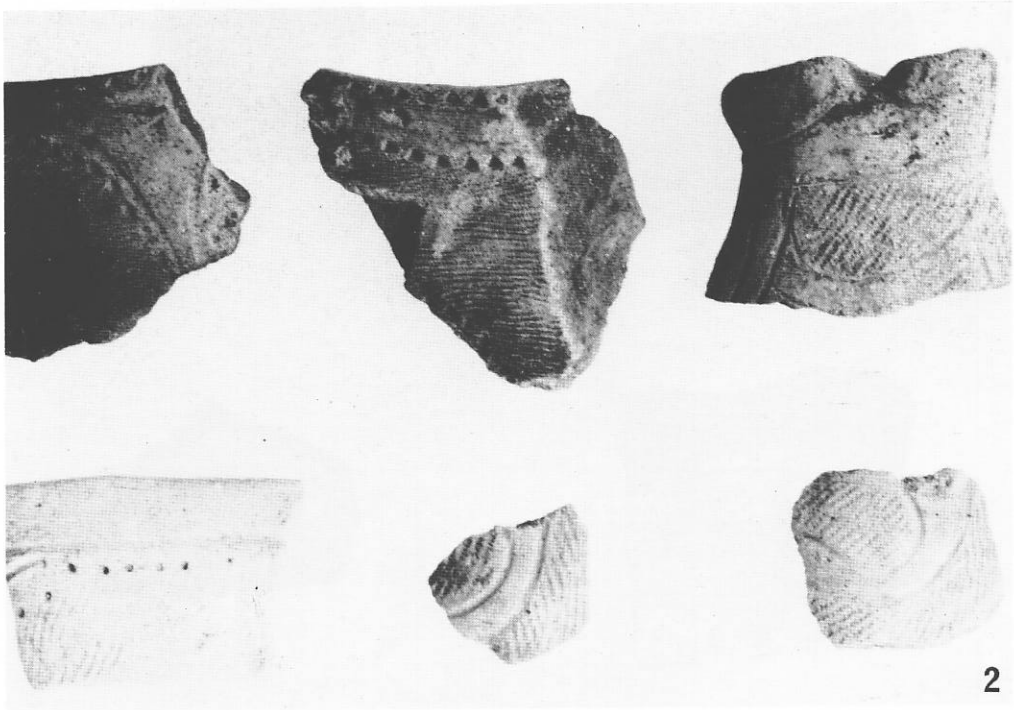
図版32　①SI 01 出土遺物　②SK 02 出土遺物



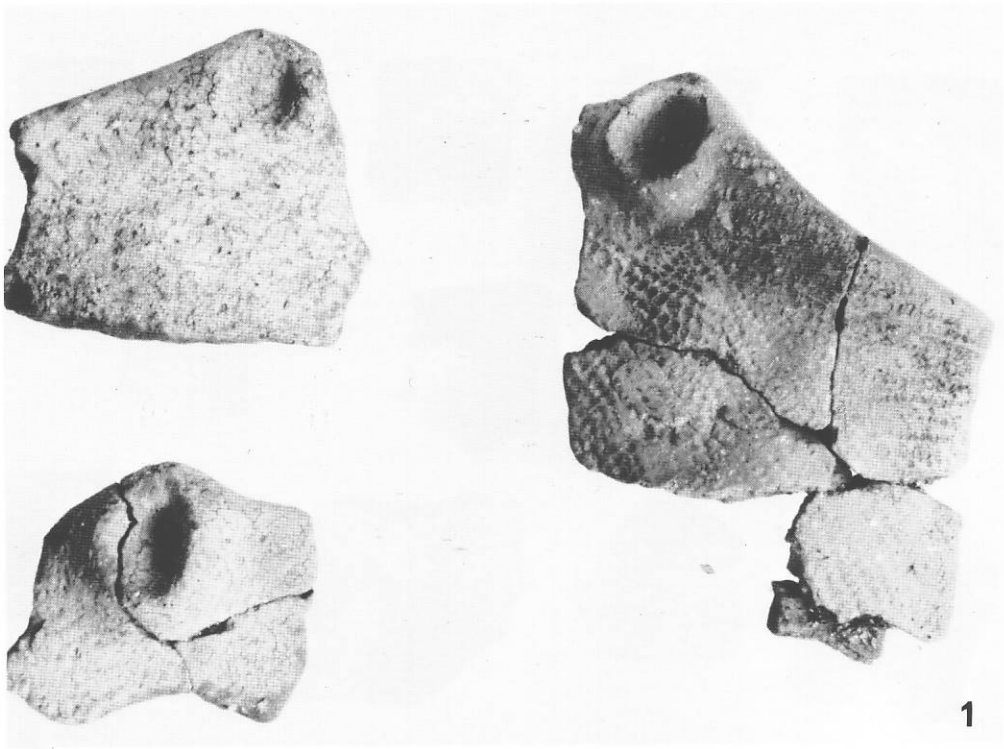


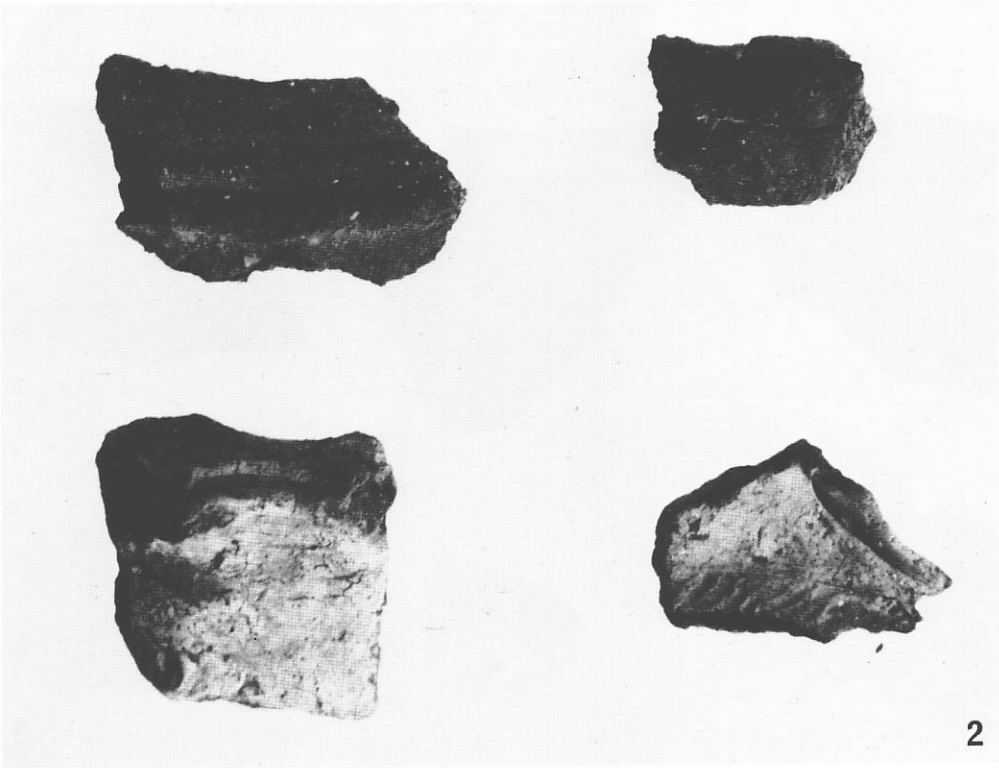
図版33　①SK 03 出土遺物　②SK 04 出土遺物



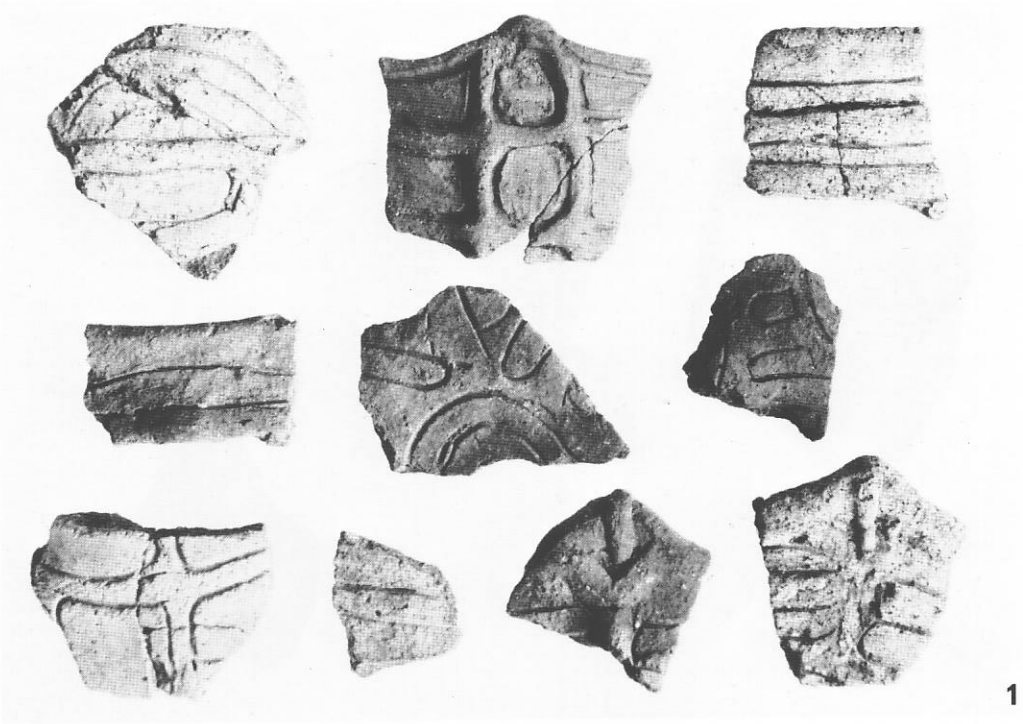


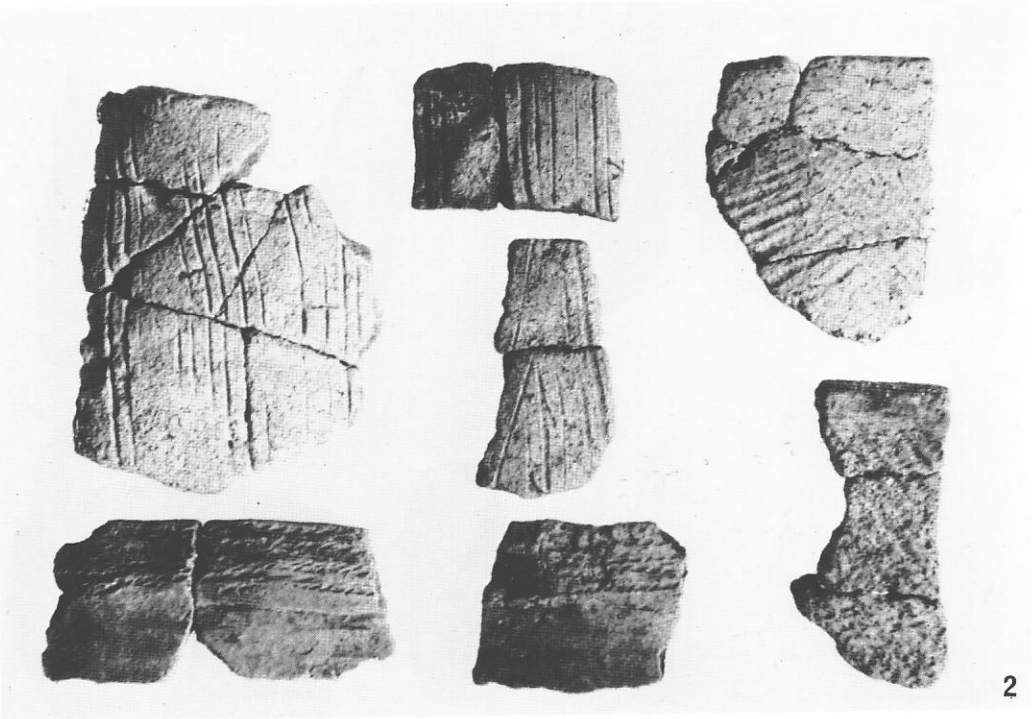
図版34　①・②SK 04 出土遺物



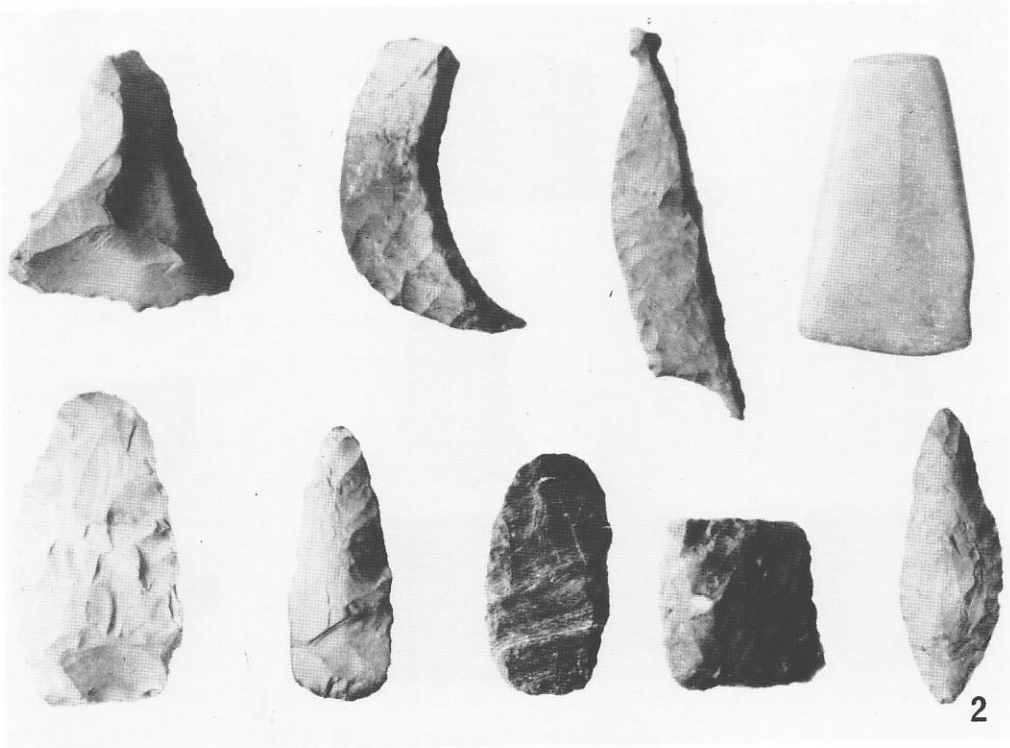


図版35　①SK 04 出土遺物　②遺構外出土遺物





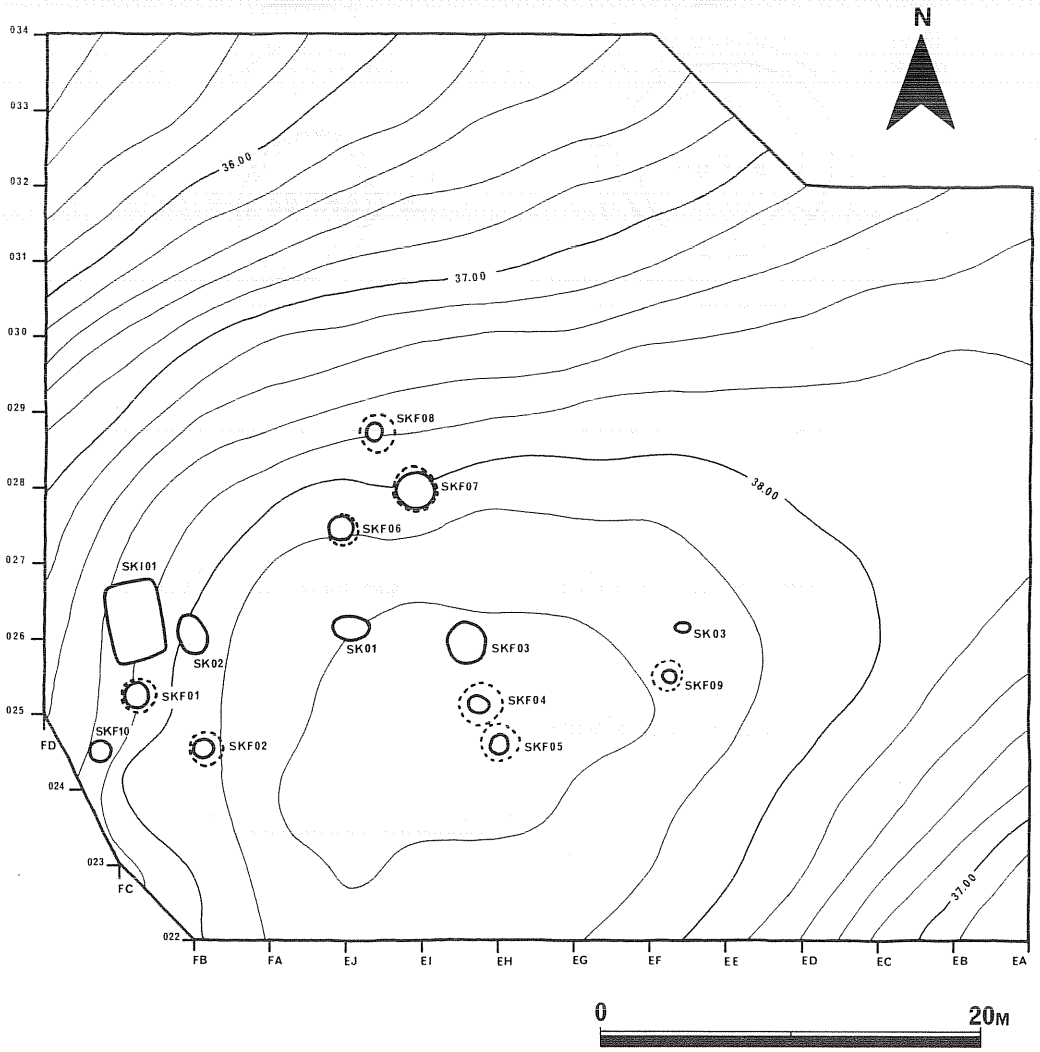
図版36　①・②遺構外出土遺物



図版37　①・②遺構外出土遺物

図版38　①遺構外出土遺物

D地区



第61図　腹鞍の沢遺跡D地区遺構分布図

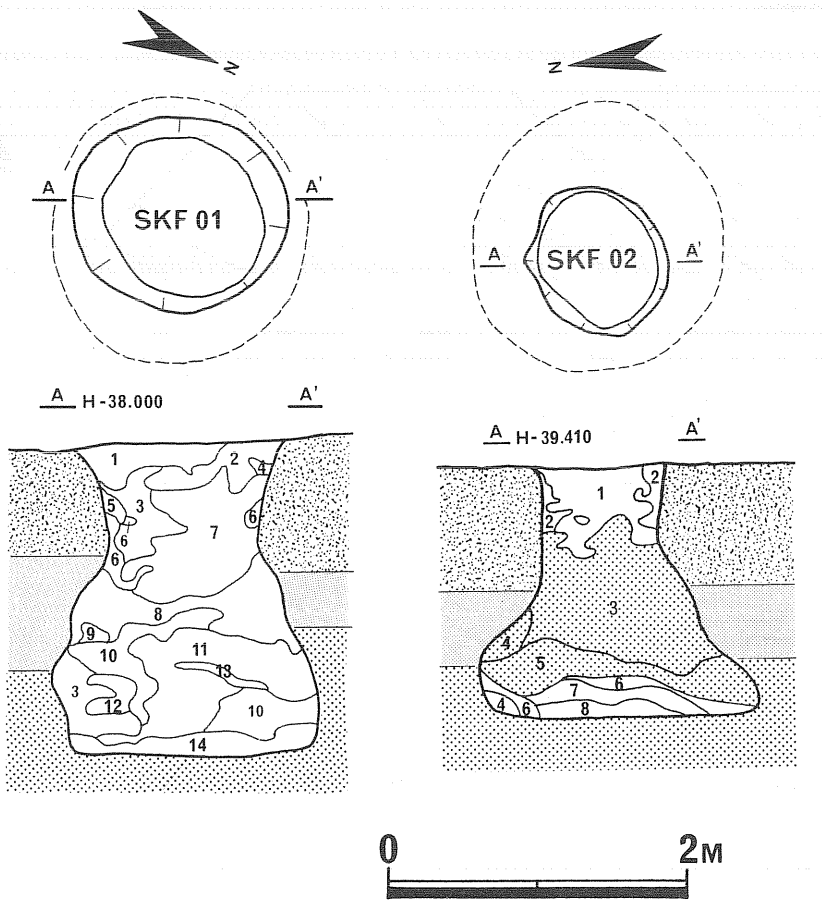
1　遺構と遺物

①　袋状土壙

SKF01袋状土壙　（第62図、図版41）

〈位置〉　調査区両端のFB025グリッドに位置している。すぐ南寄りにSKF02、SKF10があり、北隣りにはSKI01とSK02がある。

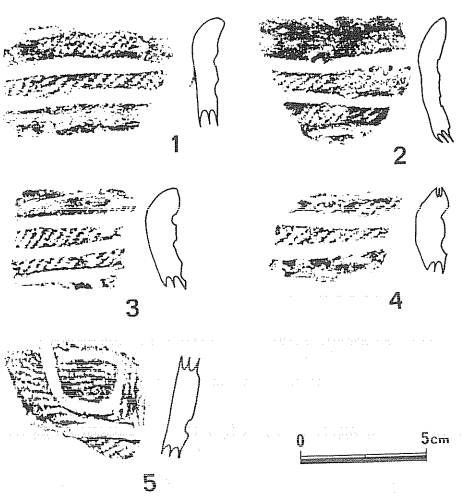
〈形態〉　平面形には口縁部、底部とも円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径1.4m頸部径１m、底部径1.6m、深さは2.2mである。底面は平坦で良好。



第62図　SKF01・SKF02 実測図

〈埋土状況〉　自然に堆積したもので、炭化物を微量に含んだ黒褐色、暗褐色土層からなる。

〈出土遺物〉　（第63図、図版53）　3と5は、底面からの出土であり、他は埋土層内出土である。いずれも、同一個体であると考えられる深鉢形土器の口縁部と胴部の破片である。斜縄文を地文とし、その上に太い沈線文を施文している。十腰内Ⅰ式期の土器と考えられる。



第63図　SKF01 出土遺物

SKF02袋状土埋　（第62図、図版42）

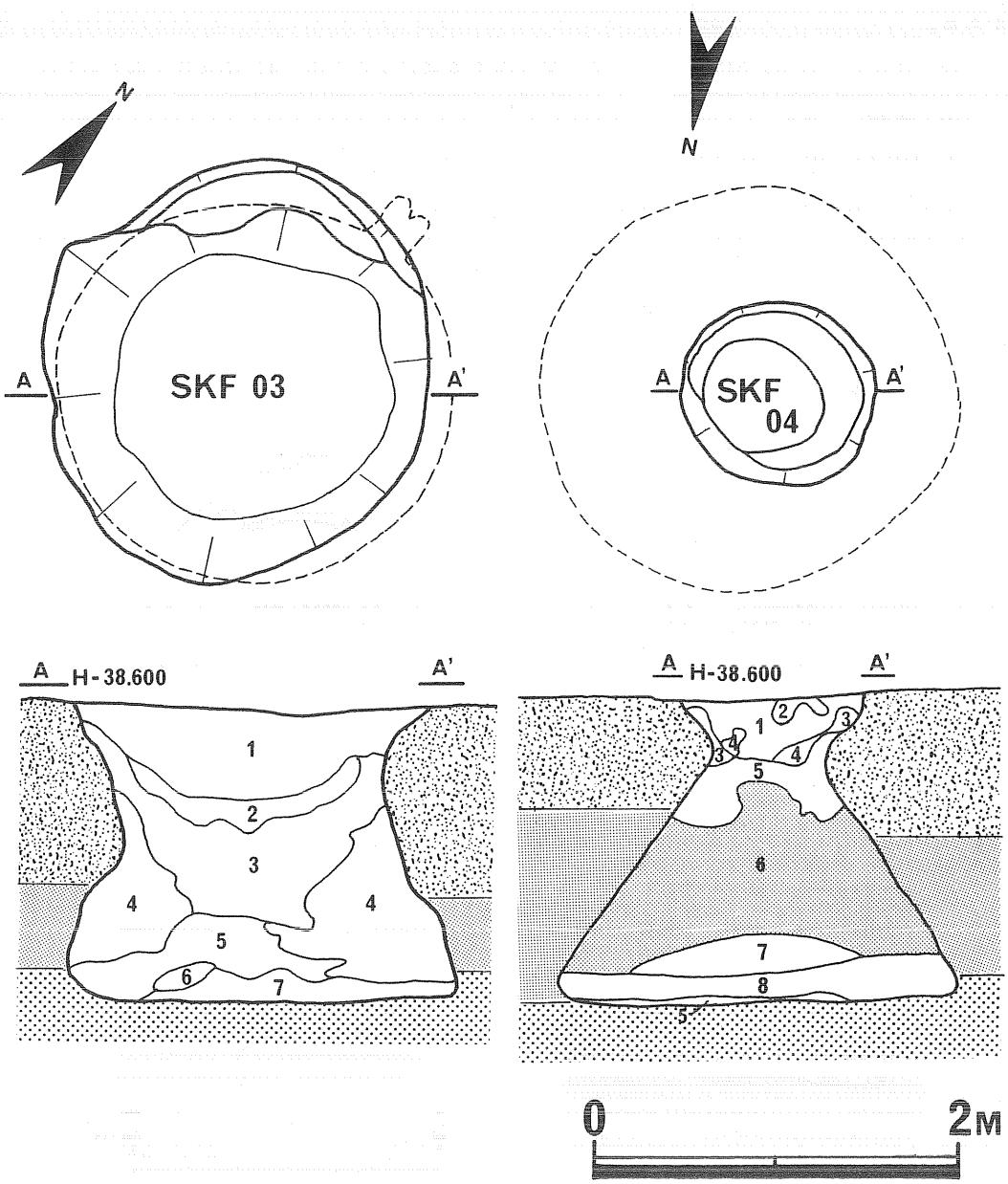
〈位置〉　調査区西端のFA024グリッドに

位置している。すぐ西寄りにはSKF01、SKF10がある。

〈形態〉　平面形は口縁部、底部とも楕円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径1.1m、頸部径0.9m、底部径1.8m、深さは1.7mである。底面は平坦。

〈埋土状況〉　人為的に埋められた層は、3層、4層、5層の暗オリーブ系層である。

〈出土遺物〉　なし



第64図　SKF03・SKF04 実測図

SKF03袋状土壙　（第64図、図版41）

〈位置〉　調査区中央EH025グリッドに位置している。すぐ南隣りにはSKF04、SKF05がある。

〈形態〉　平面図は口縁部、底部とも円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径2.4m、頸部形1.5m、底部径2.2m、深さは1.6mである。底面は平坦で堅く、底面北壁に小さい横穴がある。

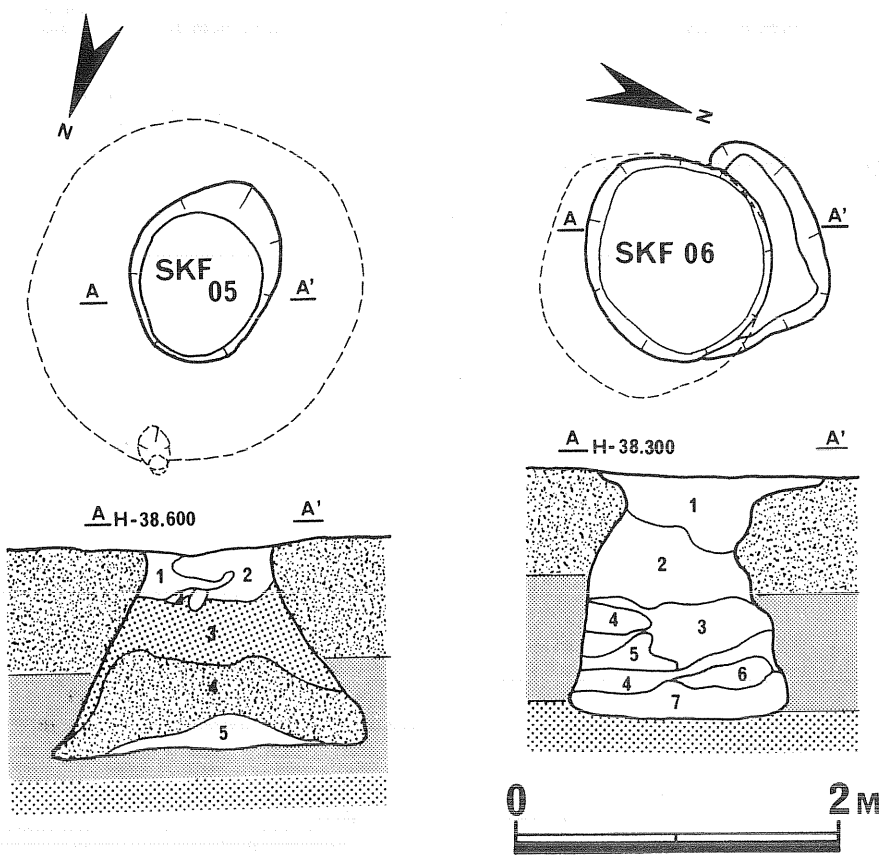
〈埋土状況〉　自然に推積したもので、炭火物を微量に含んだ黒、暗、明褐色土層からなる。

〈出土遺物〉　なし

SKF04袋状土壙　（第64図、図版43）

〈位置〉　調査区中央南寄りEH 025グリッドに位置している。すぐ北側にSKF 03、そして南側にはSKF05がある。

〈形態〉　平面形は口縁部、底部とも円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径1.1m、



第65図　SKF05・SKF06 実測図

頸部形0.8m、底部径2.2m、深さは1.7mである。底面は頸部に比べ、非常に広く平坦である。

〈埋土状況〉　6層のローム＋砂層は人為的に埋められたものである。

〈出土遺物〉　なし

ＳＫＦ05袋状土壙　（第65図、図版43）

〈位置〉　調査区中央南寄りEH024グリッドに位置している。すぐ北側にはSKF04、SKF03が直列する。

〈形態〉　平面形は口縁部、底部とも楕円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径1.2m、頸部径0.9m、底部径2m、深さは1.4mである。底面は平坦であるが北壁際に深さ30cmのピットがある。

〈埋土状況〉　3層のローム層と4層の砂層は人為的に埋められたものである。

〈出土遺物〉　なし

SKF06袋状土壙　（第65図、図版44）

〈位置〉　調査区中央寄りEJ027グリッドに位置している。すぐ北東部にはSKF07、SKF08がある。

〈形態〉　平面形は口縁部、底部とも不整円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径1.4m、頸部径1.2m、底部径1.6m、深さは1.5mである。底面は緩やかな凹凸をなし、平坦ではない。

〈埋土状況〉　自然に堆積したもので、炭化物を微量に含む黒、暗、明褐色、褐色土層からなる。

〈出土遺物〉　なし

SKF07袋状土壙　（第66図、図版45）

〈位置〉　調査区中央EI028グリッドに位置している。すぐ西方部にはSKF06、SKF08がある。

〈形態〉　平面形は口縁部、底部とも円形である。断面形はビーカー状。口縁径2m、頸部径1.8m、底部径2.3m、深さは1.6mである。底面は平坦で良好であるが、北壁際に深さ20cmのピットがある。

〈埋土状況〉　1層のローム＋砂層と3層、5層のローム層は人為的に埋められたものである。

〈出土遺物〉　なし

SKF08袋状土壙　（第66図、図版46）

〈位置〉　調査区中央EI028グリッドに位置している。すぐ南方部にはSKF06とSKF07が

ある。

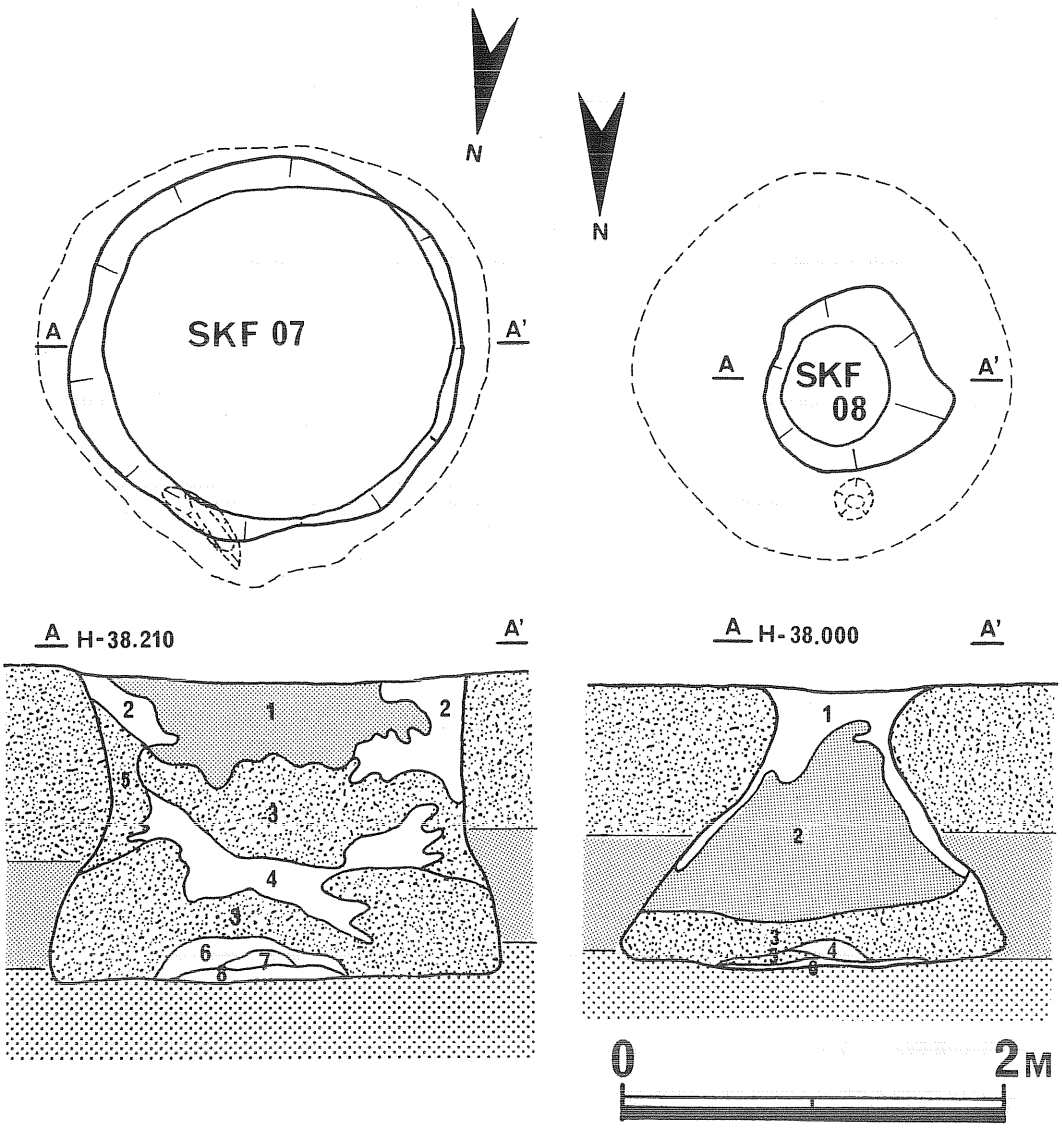
〈形態〉　平面形は口縁部が不整楕円形で底部は円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径0.8m、頸部径0.6m、底部径2m、深さは1.5mである。底面は平坦であるが、中央部北寄りに深さ22cmのピットがある。

〈埋土状況〉　2層のローム＋砂層のローム層は人為的に埋められたものである。

〈出土遺物〉　なし

SKF09袋状土壙　（第67図、図版47）

〈位置〉　調査区中央南東寄りEE025グリッドに位置している。すぐ北隣りにはSK03がある。



第66図　SKF07・SKF08 実測図

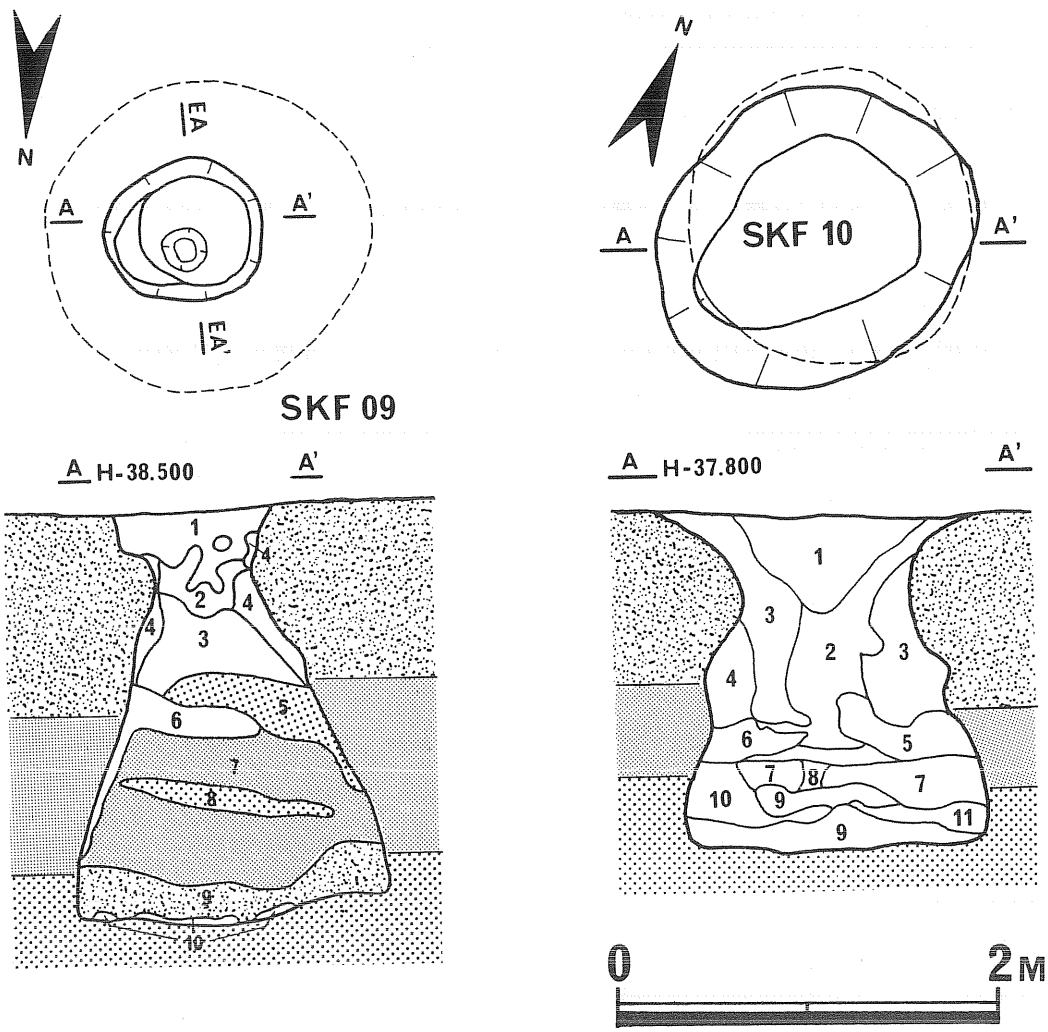
〈形態〉　平面形は口縁部が楕円形、底部が円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径が0.8m、頸部径0.5m、底部径1.7m、深さは2.2mである。底面は平坦であるが中央部に深さ7cmのピットがある。

〈埋土状況〉　5層、8層の砂層、7層のローム＋砂層、9層のローム層は人為的に埋められたものである。

〈出土遺物〉　なし

SKF10袋状土壙　（第67図、図版48）

〈位置〉　調査区西南端FC024グリッドに位置している。北東部にはSKF01とSKI01、SK02があり、東方部にはSKF02がある。



第67図　SKF09・SKF10 実測図

〈形態〉　平面形は口縁部が楕円形、底部が円形である。断面形はフラスコ状。口縁部径が1.7m、頸部径1.5m、深さは1.8mである。底面は平坦である。

〈埋土状況〉　自然に堆積したもので、炭化物を微量に含んだ黒、暗褐色、明褐色土層からなる。

〈出土遺物〉　なし

②　土壙

SK01土壙　（第68図）

〈位置〉　調査区中央両南寄りEJ026グリッドに位置している。

〈形態〉　平面形は長軸2m、短軸1.3mの楕円形である。深さは30cmで、底面は凹凸をなし、壁は緩やかに立ち上がる。

SK02土壙　（第68図、図版51）

〈位置〉　調査区西方部FB026に位置している。すぐ西隣りにはSKI01がある。

〈形態〉　平面形は長軸2.3m、短軸1.7mの不整楕円形である。底面までの深さは約30cmであるが、底面は激しく凹凸をなし、中央部には深さ20cmの凹みがある。

SK03土壙　（第68図、図版51）

〈位置〉　調査区中央部EE026グリッドに位置している。すぐ南隣りにSKF09がある。

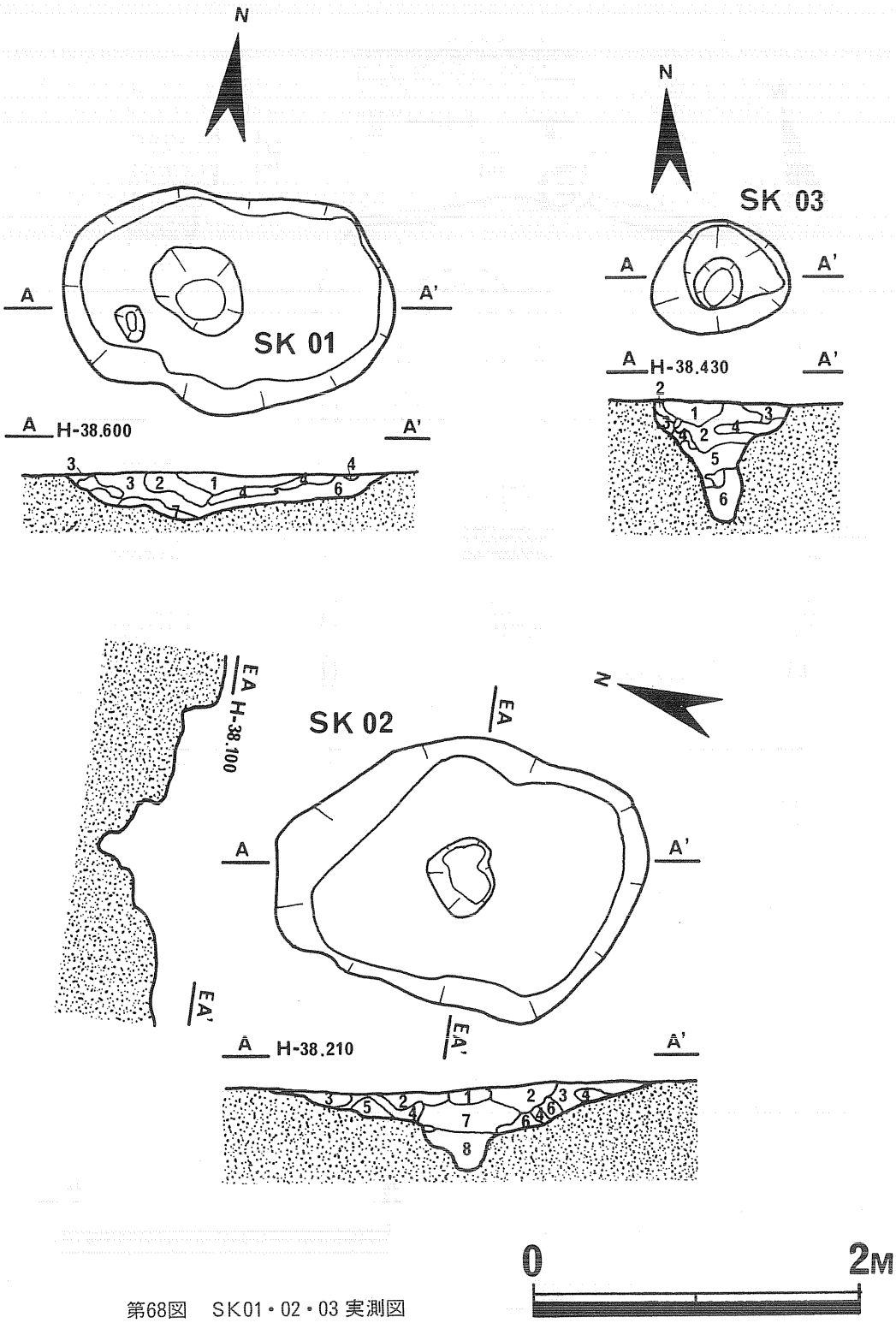
〈形態〉　平面形は長軸0.8m、短軸0.6mの不整楕円形である。断面形は逆円錐状をなし底部までの深さは70cmである。

③　竪穴状遺構

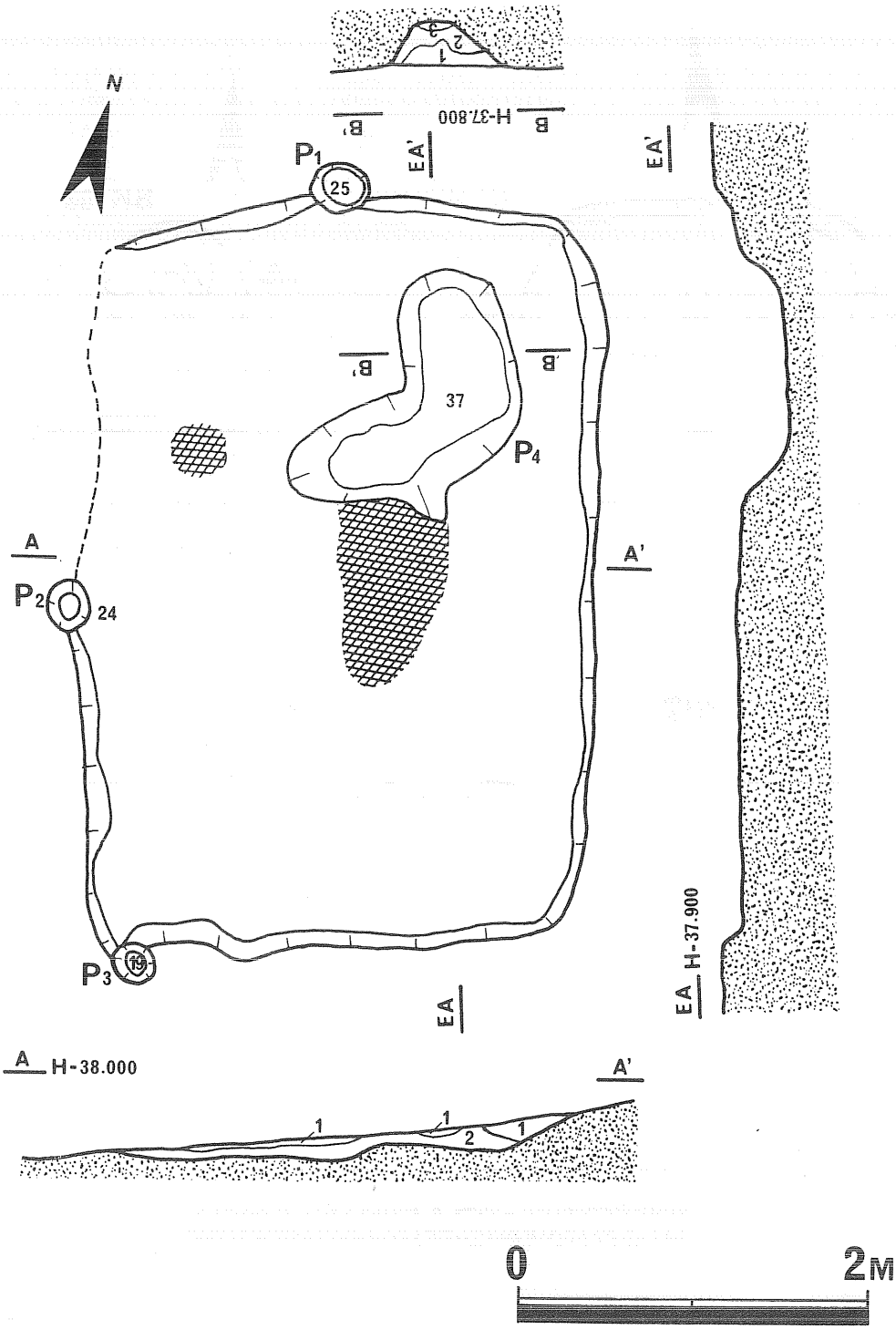
SKI01竪穴状遺構　（第69図、図版52）

〈位置〉　調査区西端部FB026グリッドに位置している。南側にはSKF01、SKF02、SKF10があり、東側にはSK02がある。

〈形態〉　平面形は1辺4m×1辺2.8mの長方形である。床面積は約11m²。柱穴はP_1～P_3。壁は東側で緩やかに20cm程立ち上がるが、西側の壁はほとんど確認できない。床面は平坦でしまり、中央部と西北部に焼土がある。また、中央部の焼土北側には深さ27cm程のカギ型の凹みP_4がある。　（大高）



第68図　SK01・02・03 実測図



第69図　SKI 01 実測図

第3表　D地区遺構埋土層一覧表（1）

遺構	層	土色	土質
SKI 01	1	黒褐色（7.5YR2/2）	焼土粒子、ローム粒子微量混入、ややわらかい。
	2	褐色（7.5YR3/3）	焼土、炭化物、ローム粒子微量混入、やわらかい。
SKI 01内 P4	1	褐色（7.5YR3/4）	ローム、炭化物少量混入、やや堅い。
	2	黒褐色（7.5YR3/4）	ローム多量、焼土及び炭化物微量混入、非常にやわらかい。
	3	暗褐色（7.5YR3/4）	焼土微量混入、やわらかい。
SKF 01	1	黒（10 YR3/1）	炭化物少量混入、ローム微量混入、やわらかい。
	2	暗褐色（7.5YR3/3）	炭化物微量混入、工器片含む、やわらかい。
	3	黒褐色（7.5YR2/2）	ローム微量混入、やわらかい。
	4	暗褐色（7.5YR3/4）	炭化物微量混入、やわらかい。
	5	黒褐色（10 YR3/3）	ローム微量混入、非常にやわらかい。
	6	褐色（7.5YR3/4）	混入物なし、やわらかい。
	7	極暗褐色（7.5YR2/3）	炭化物、ローム微量混入、土器片含む、やわらかい。
	8	黄褐色（10 YR5/6）	粘性ありやわらかい。
	9	褐色（7.5YR4/4）	炭化物、ローム粒子微量混入、粘性ありやわらかい。
	10	灰褐色（7.5YR4/2）	ロームブロック、炭化物少量混入、やわらかい。
	11	黒褐色（7.5YR3/2）	ローム粒子、炭化物微量混入、やわらかい。
	12	明褐色（7.5YR5/6）	層全体が砂状、堅くしまっている。
	13	にぶい褐色（7.5YR5/3）	ローム多量、炭化粒子微量混入、やや堅い。
	14	にぶい褐色（10 YR5/3）	ローム粒子、炭化粒子少量混入、やわらかい。
SKF 02	1	暗褐色（10 YR3/3）	炭化粒子、ローム粒子混入、粘性ありしまっている。
	2	褐色（10 YR4/6）	炭化粒子微量混入、粘性ありやわらかい。
	3	暗オリーブ褐色（2.5Y 3/3）	砂層、黒色土少量混入。
	4	オリーブ褐色（2.5Y 4/4）	破層、ローム混入。
	5	暗オリーブ（5 Y 4/3）	砂層、ローム少量混入。
	6	黒褐色（10 YR3/3）	粘性ありやわらかい。
	7	褐色（10 YR4/4）	ローム粒子、砂混入、粘性ありやわらかい。
	8	黒褐色（10 YR3/1）	炭化粒子、ローム粒子少量混入、粘性ありやわらかい。
SKF 03	1	黒褐色（7.5YR3/2）	褐色砂、緑色砂少量混入、炭化物微量混入、粘性ありやわらかい。
	2	黒褐色（7.5YR2/2）	ローム少量混入、炭化物微量混入、堅くしまっている。
	3	褐色（7.5YR4/6）	炭化物、ローム少量混入、粘性あり、やわらかい。
	4	明褐色（7.5YR5/8）	粘性ありやわらかい。
	5	極暗褐色（7.5YR2/3）	ローム粒子少量混入、わわらかい。
	6	暗褐色（7.5YR3/4）	黒色土混入、やわらかい。
	7	黒褐色（7.5YR3/1）	炭化物、ローム少量混入、非常にやわらかい。
SKF 04	1	暗褐色（7.5YR3/3）	褐色砂、炭化物、ローム粒子少量混入、やわらかい。
	2	褐色（10 YR4/6）	褐色砂の層。炭化粒子微量混入、やや堅い。
	3	黄褐色（10 YR5/6）	炭化粒子微量混入、粘性ありややしまっている。
	4	褐色（10 YR4/4）	炭化粒子、褐色土微量混入、やわらかい。
	5	極暗褐色（7.5YR2/3）	褐色土、炭化物、ローム粒子少量混入、やわらかい。
	6	明褐色（7.5YR5/6）	砂層、炭化粒子微量混入、堅い。
	7	黒褐色（7.5YR2/2）	ローム粒子少量混入、粘質土でややしまっている。
	8	褐色（10 YR4/4）	砂層、堅くしまっている。
SKF 05	1	暗褐色（10 YR3/3）	砂、炭化粒子微量混入、しまっている。
	2	褐色（10 YR4/6）	堅い砂層。
	3	オリーブ褐色（2.5YR4/6）	堅い砂層。黒色土微量混入。
	4	黄褐色（10 YR5/6）	堅い砂層。
	5	暗褐色 7.5YR3/3）	炭化粒子、ローム粒子少量混入、粘性ありやわらかい。
SKF 06	1	暗褐色（7.5YR3/4）	層全体に炭化物混入、ローム粒子、砂少量混入、やや堅い。
	2	褐色（7.5YR4/4）	緑色砂、ローム粒子、炭化物少量混入、やわらかい。
	3	黒褐色（7.5YR2/2）	層全体に炭化物混入。ローム混入、やわらかくボソボソ。
	4	明褐色（7.5YR5/8）	堅い。
	5	明褐色（7.5YR5/6）	堅く、ボソボソ。
	6	暗褐色（7.5YR3/3）	粘性ありやわらかい。
	7	極暗褐色（7.5YR2/3）	ローム粒子、炭化粒子量混入、粘性あり　、やわらかい。
SKF 07	1	明褐色（7.5YR5/6）	炭化物少量混入。
	2	黒褐色（7.5YR2/2）	炭化物、ローム粒子少量混入、砂微量混入、堅い。
	3	明褐色（7.5YR5/8）	炭化物、黒色土少量混入、やや堅い。
	4	黒褐色（7.5YR3/1）	炭化物、ローム粒子少量混入、やわらかい。
	5	褐色（7.5YR4/4）	ローム多量混入、堅い。
	6	暗褐色（10 YR3/3）	炭化物、ローム粒子少量混入、砂少量混入、粘性ありやわらかい。
	7	暗褐色（7.5YR3/3）	炭化物少量、砂多量混入、やわらかい。
	8	暗褐色（10 YR3/4）	炭化物、砂、ローム少量混入、堅い。
SKF 08	1	暗褐色（7.5YR3/4）	炭化物微量、緑色砂混入層、ザラザラ堅い。
	2	黄褐色（2.5YR5/6）	緑色砂混入層、ザラザラ堅い。
	3	褐色（10 YR4/4）	粘土層でやわらかい。
	4	暗褐色（10 YR3/3）	黒色土混入、粘性ありやわらかい。
	5	オリーブ褐色（2.5YR4/6）	オリーブ色の砂層、堅くしまっている。
	6	黒褐色（10 YR2/2）	粘質性の黒色土、ややしまっている。
SKF 09	1	黒褐色（10 YR2/2）	炭化物、ローム少量混入、粘性あり。
	2	暗褐色（10 YR3/3）	ローム粒子多量、炭化物少量混入、粘性ありやわらかい。
	3	黒褐色（10 YR3/3）	炭化物微量、オリーブ色砂混入。
	4	黄褐色（10 YR5/6）	粘土質で堅くしまっている。
	5	暗オリーブ（5 Y 4/4）	オリーブ色砂多量、炭化物微量混入、やわらかくボロボロ。
	6	黒褐色（10 YR3/2）	ローム粒子とオリーブ色砂がブロック状に混入、やわらかい。
	7	黄褐色（10 YR5/6）	褐色砂混入、粘性あり。
	8	暗オリーブ（5 Y 3/3）	オリーブ色砂層、やわらかい。
	9	褐色（10 YR4/6）	褐色粘土層やわらかい。
	10	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化粒子、ローム粒子微量混入。
SKF 10	1	黒褐色（10 YR2/2）	ローム粒子、炭化物微量混入、やや堅くしまっている。
	2	黒褐色（10 YR2/3）	ローム粒子、炭化粒子微量混入、やや堅くしまっている。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	炭化物微量、黒色土、ローム混入。

第３表　Ｄ地区遺構埋土層一覧表（２）

遺構	層	土色	土質
SKF 10	4	暗褐色（10 YR3/4）	ローム、黒色土混入、やわらかい。
	5	褐色（10 YR4/4）	ローム混入、堅くしまっている。
	6	褐色（10 YR4/6）	堅くしまっている。
	7	明褐色（7.5YR5/6）	堅くしまっている。
	8	極暗褐色（7.5YR3/2）	やわらかい。
	9	黒褐色（7.5YR3/1）	やわらかい。
	10	褐色（7.5YR4/6）	やわらかくボロボロ。
	11	黄褐色（10 YR5/6）	堅くしまっている。
SK 01	1	黒褐色（7.5YR2/2）	炭化物微量混入、やわらかい。
	2	黒（7.5YR2/1）	炭化物、ローム粒子微量混入、やわらかい。
	3	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム微量混入、やわらかい。
	4	黒褐色（7.5YR3/2）	炭化粒子、ローム粒子微量混入、堅くしまっている。
	5	褐色（7.5YR4/4）	ローム少量混入、粘性あり。
	6	褐色（7.5YR4/3）	炭化粒子微量、ローム多量混入、粘性が強い。
	7	極暗褐色（7.5YR2/3）	ローム粒子微量混入、堅くしまり、粘性がある。
SK 02	1	黒（7.5YR2/1）	炭化粒子、ローム粒子微量混入、やわらかい。
	2	黒褐色（7.5YR2/2）	炭化粒子、ローム粒子微量混入。堅くしまっている。
	3	褐色（7.5YR4/4）	炭化物微量混入、堅い。
	4	暗褐色（7.5YR3/3）	ローム粒子微量混入、やわらかくボロボロ。
	5	暗褐色（7.5YR3/4）	炭化物、ローム少量混入、堅くしまっている。
	6	暗褐色（7.5YR5/6）	炭化粒子微量混入、堅くしまっている。
	7	極暗褐色（7.5YR2/3）	攪乱層。
SK 03	1	黒褐色（10 YR2/2）	粘性ありやわらかい。
	2	黒褐色（10 YR2/2）	ローム粒子少量、炭化粒子混入、粘性ありやわらかい。
	3	暗褐色（10 YR3/3）	ローム粒子少量混入、しまっている。
	4	褐色（10 YR4/4）	炭化粒子混入、粘性ありしまっている。
	5	暗褐色（10 YR3/4）	炭化粒子少量混入、粘性ありしまっている。
	6	にぶい黄褐色（10 YR4/3）	炭化粒子少量混入、粘性ありしまっている。

2　遺構外の出土遺物

土器　（第70図、図版53）

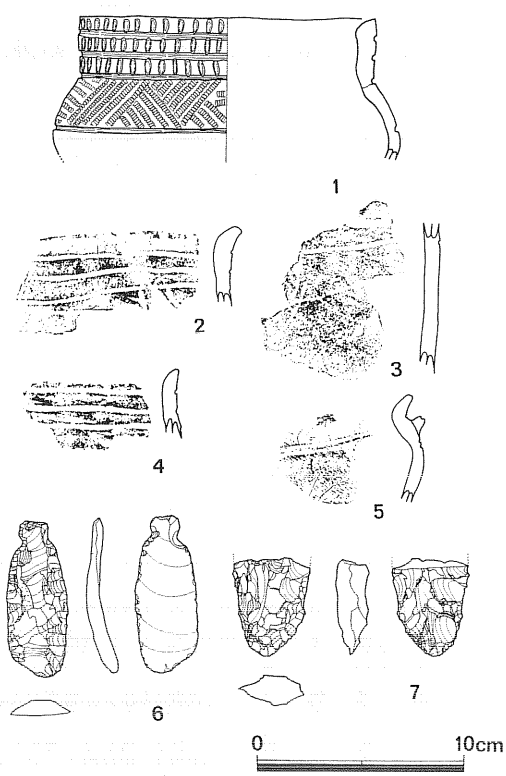
第１類（１）　広口の壺形を呈すると考えられる。直立する口縁部には３条の沈線が横位にめぐり、沈線間には縦位の刺突が加えられる。胴部には磨消縄文が認められる。内面にはていねいなミガキが施こされる。

第２類（２～４）　口縁部がわずかに外反する深鉢形土器の破片である。沈線のみ施文されている。十腰内Ｉ式土器と考えられる。

第３類（５）　口縁部の外反する小型壺形土器である。頸部と胴部に２本１単位とする沈線がめぐる。頸部下に粘土瘤の貼付が認められる。

石器　（第70図）

石匙（６）　縦長の剥片の表面に押圧剥離



第70図　遺構外　出土遺物

が施こされる。頁岩。

石槍（７）　両面加工の石槍であるが、基部を欠損。頁岩。

（永瀬）

3　小結

Ｄ地区で検出された遺構は、袋状土壙10基、土壙３基、竪穴状遺構１棟である。

遺構の時期は、ＳＫＦ01袋状土壙が十腰内Ｉ式期のものと考えられるが、他の遺構は不明である。ただ９基の袋状土壙3基ずつ１グループを形成する傾向がみられることと、袋状土壙から掘り上げた土砂を、古い袋状土壙に投げ捨てる一連の行為がみられることから、ほぼ同時期のものと考えられる。

袋状土壙で注目されることは、前述のように１基を除き、他の９基は３基ずつ近接して構築されていることと、その埋土層をみると３基のうち、１基か２基は人為的に一気に埋められていることである。

一気に埋められたと考えられる埋土を見ると、ロームやローム＋砂や砂である。これらの埋土は、新しい土壙を構築するさいに、掘り出された土砂を古い土壙に投げ捨てたためと考えられる。

以上のことから、１グループ３基の袋状土壙の３基同時存在は考えられない。しかしながら、袋状土壙が３基ずつグルーピングされることは、単位集団数と袋状土壙の所有形態を示唆してくれるのではないだろうか。また、新しい土壙を掘って、古い土壙を埋めていく行為は、土壙の性格、使用期間、さらには集団のその土地への定住期間をも問題にされるべきものとして重要であると考えられる。

（永瀬）

Ｖ　まとめ

Ａ、Ｃ、Ｄ地区の調査結果、約10haの腹鞍の沢台地には、縄文時代中期、後期、平安時代に人々が、生活をしていたことが判明した。生活の拠点である住居地域は、いずれの場合にも台地の縁辺部を選定していて、台地の中央部ではない。

今回の調査では、Ａ、Ｃ、Ｄ地区とも遺構、遺物の検出量は少なかった。しかしながら、秋田県内としては、新たな知見を得ることができた。

①　陥し穴状遺構は、県内でも検出例が増加してきたが、全体の分布状況を把握することのできる例はない。Ａ地区の10基の陥し穴状遺構は、調査区域外にまだ分布すると考えられ、全

体を把握できなかったが、陥し穴状遺構の有り様が理解できる資料であろう。

② A地区の4棟の竪穴住居は、カマドの構築方法やカマドの構築位置の違いなどから、同時存在ではないと考えられる。いずれにしても小集落の完掘である。いったい何を生業としていたのであろうか。今回の調査ではそれを解決してくれる出土遺物はなかった。住居跡内の埋土の花粉分析を成田典彦氏（十和田小学校教諭）にお願いしたが、その分析結果を本報告に掲載することは、時間的に不可能であった。

③ C地区のSI 01竪穴住居跡の床面に敷かれていた砂は、住居空間の使い分けを暗示しているように考えられる。さらに、柱穴配置との関係で出入口も想定させてくれる。

④ D地区の袋状土壙は、3基が1グループを形成し、新しく掘った土壙の土砂を古い土壙に投げ込む行為をうかがうことができた。袋状土壙の性格、単位集団の袋状土壙の所有の問題単位集団の数、定住期間等を考える上で貴重な資料と考えられる。

最後に、古代の竪穴住居跡の出入口を想定するため、佐藤昭男氏（県立農業短期大学）の御指導を得て、中山式硬度計を使用して実施してみた。しかしながら、雨の日が続き床面の状態を一定に保持することができず、そのデーターは不確実なものになってしまった。また機会があれば実施してみたいと考えている。終始、懇切ていねいな御指導をしてくれた佐藤昭男氏に感謝の意を表します。

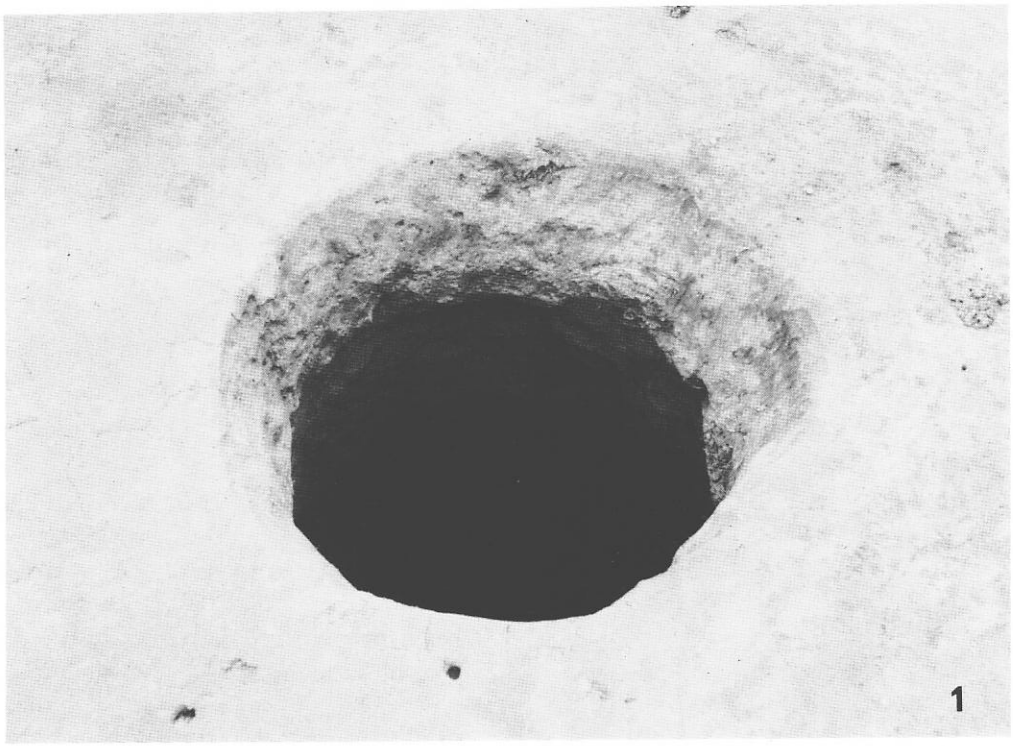
（永瀬）

引用及び参考文献

岡田茂弘、桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」　『研究紀要Ⅰ』　1974年
氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」　『歴史　第14輯』　1957年
秋田県教育委員会　『宮の前遺跡』　1979年
秋田県教育委員会　『中田面　重兵衛台Ⅰ　重兵衛台Ⅱ　根洗場遺跡発堀調査報告書』1980年
秋田県教育委員会　『杉沢台遺跡発掘調査報告書』　1981年
福田友之　「溝状ピット研究に関する覚え書き」『弘前大学考古学研究　第1号』　1981年
瀬川司男　「陥し穴状遺構について」　『岩手県埋蔵文化財センター紀要Ⅰ』　1981年
後藤勝彦　「縄文後期の土器」　『縄文土器大成3　後期』　1981年
新野直吉　遠藤巌編纂　『日本地名大辞典5　秋田県』　1980年

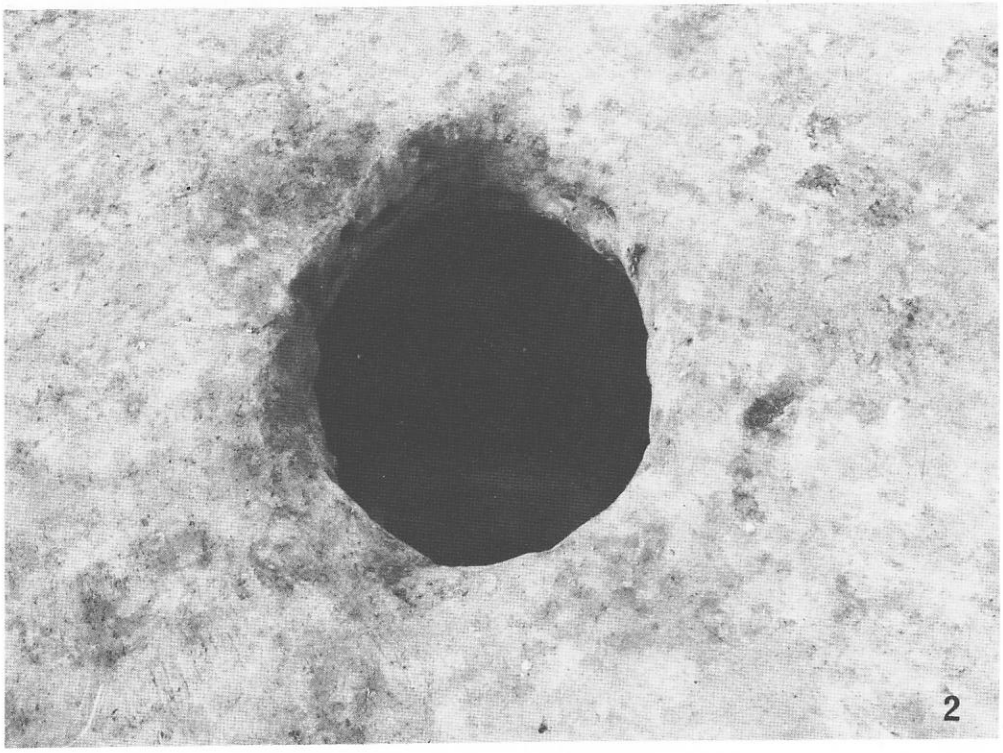
図版39　①発堀調査前のようす　②調査風景

図版40　①・②調査終了時

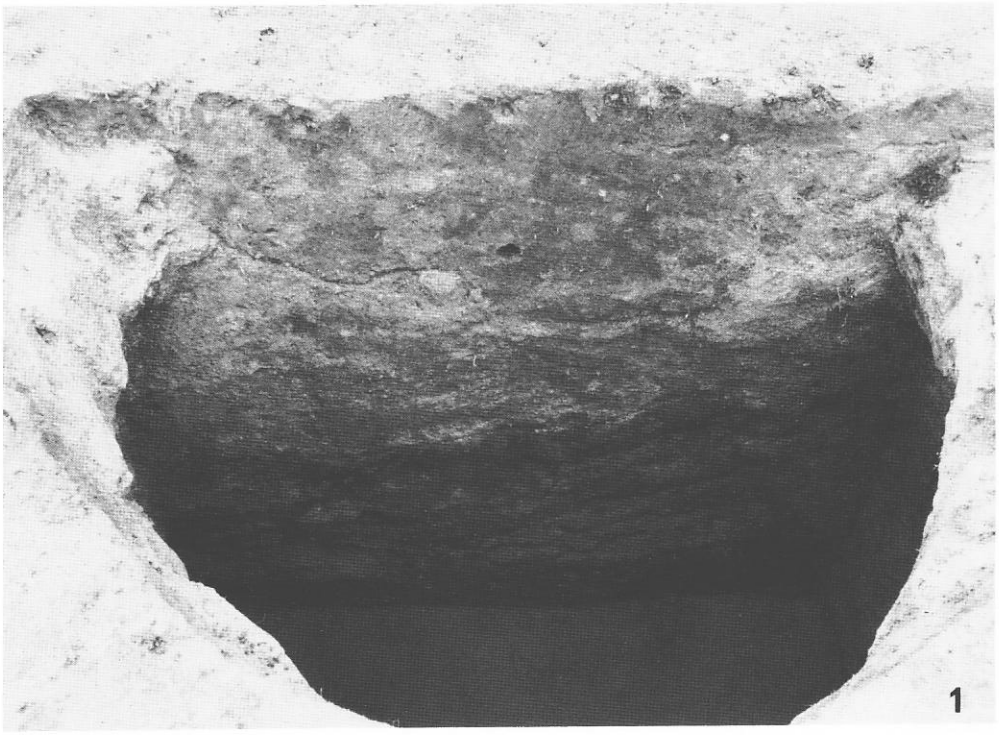


図版41　①SKF 01　②SKF 03

図版42　①SKF 02埋土　②SKF 02

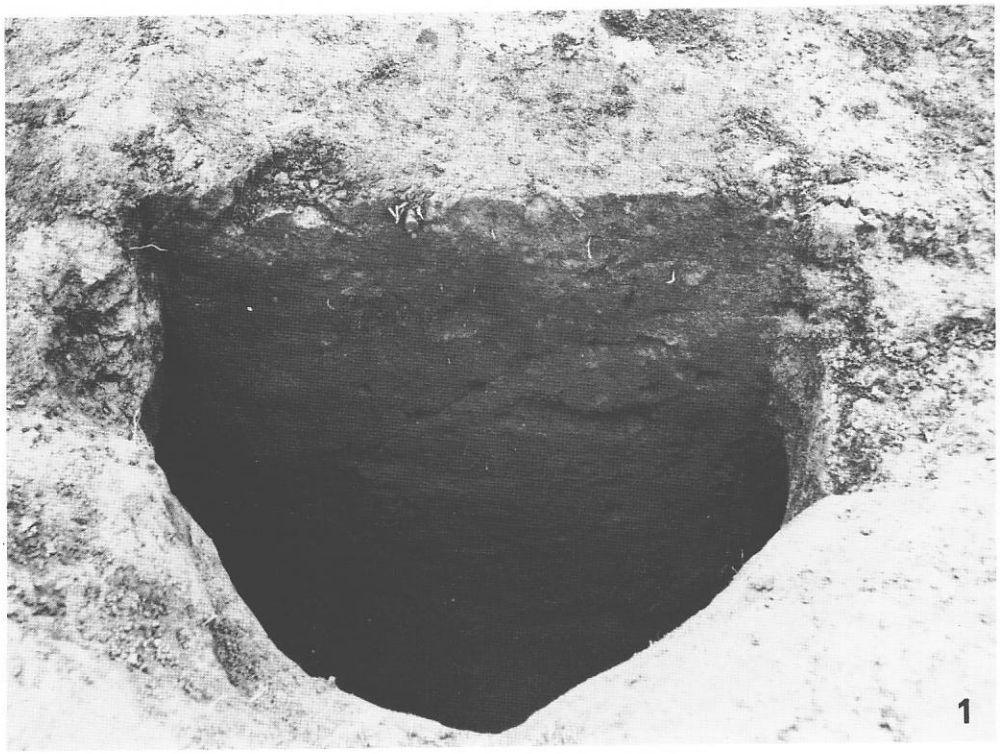


図版43　①SKF 04　②SKF 05



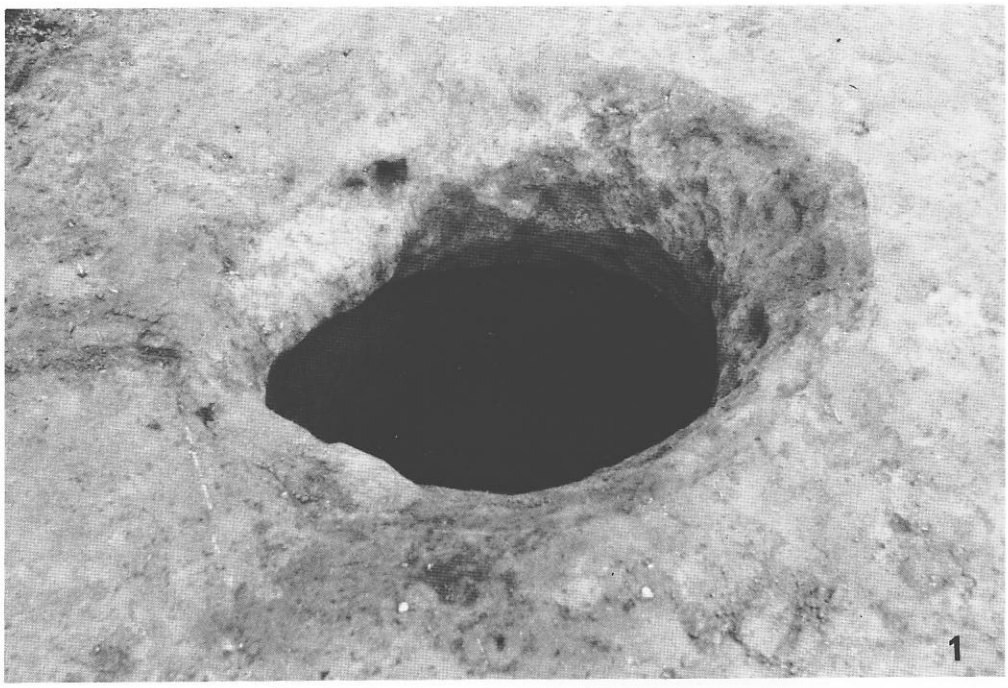
図版44　①SKF 06 埋土　②SKF 06

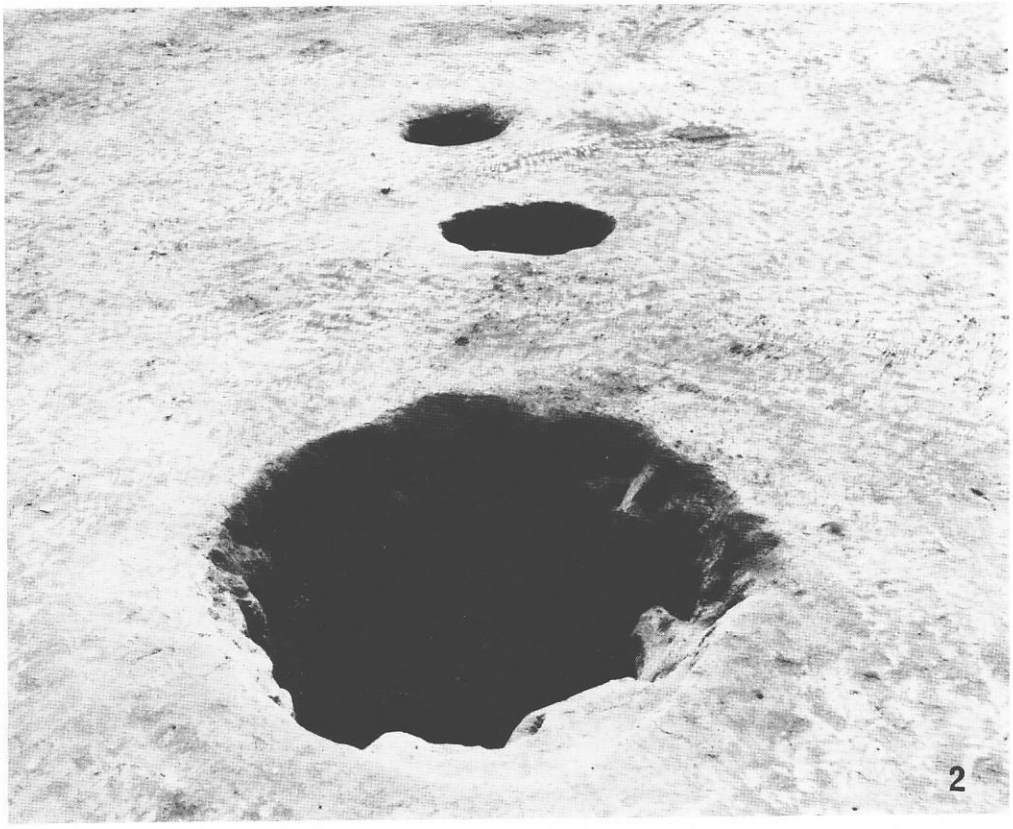
図版45　①SKF 07 埋土　②SKF 07



図版46　①SKF 08 埋土　②SKF 08

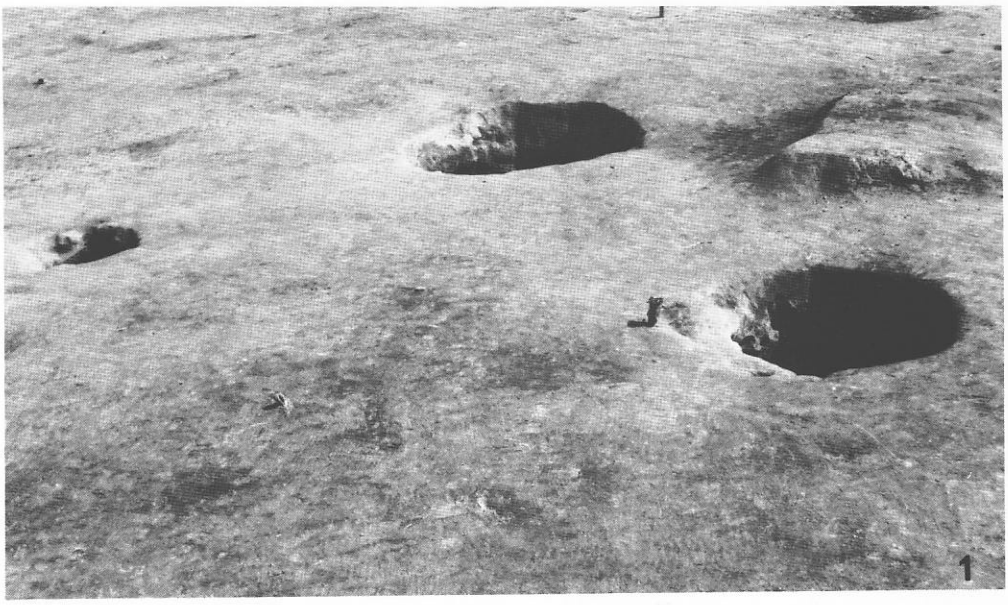
図版47　①SKF 09 埋土　②SKF 09



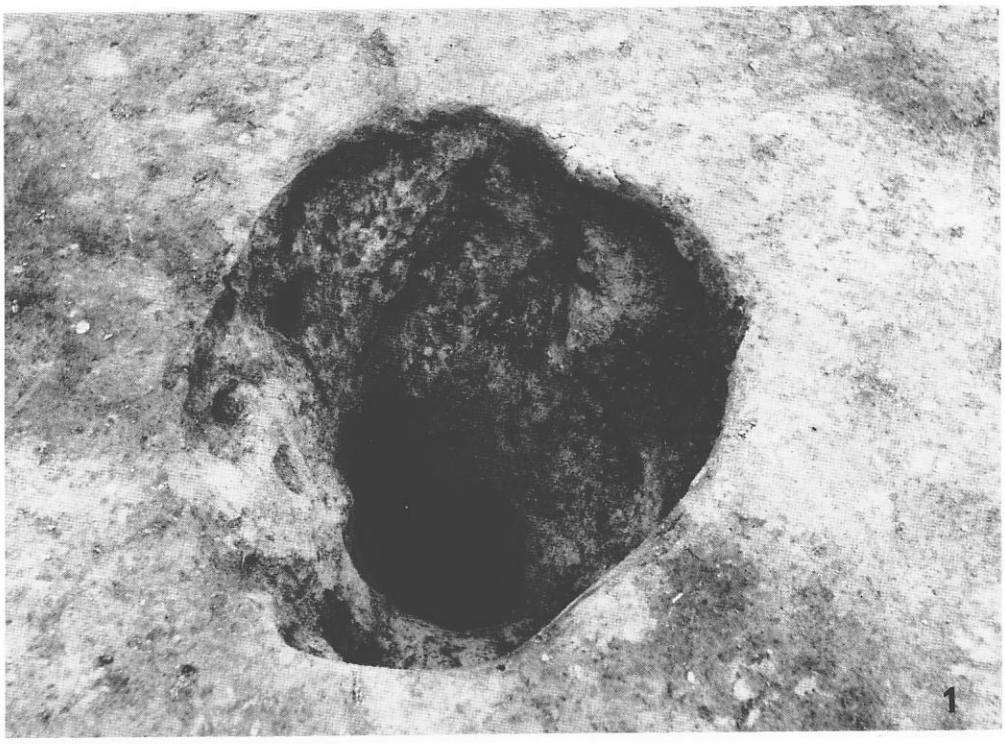


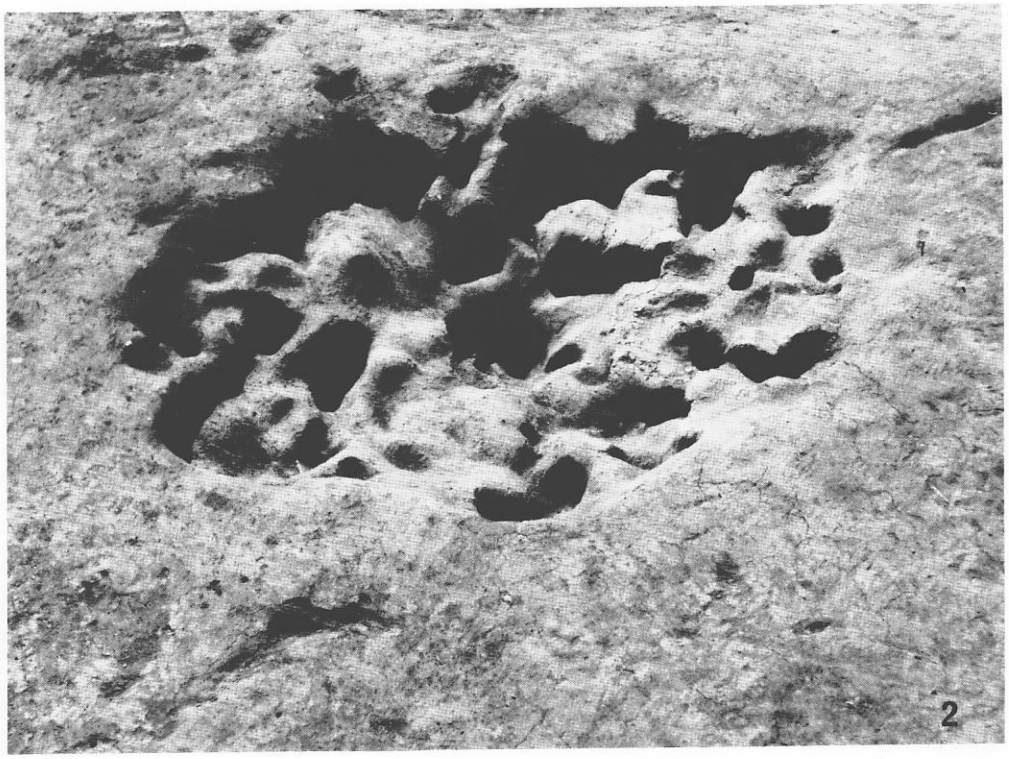
図版48　①SKF 10　②SKF 03・04・05（北▶南）

図版49　①SKF 01・02・10（東▶西）②SKF 01・02・10（西▶東）

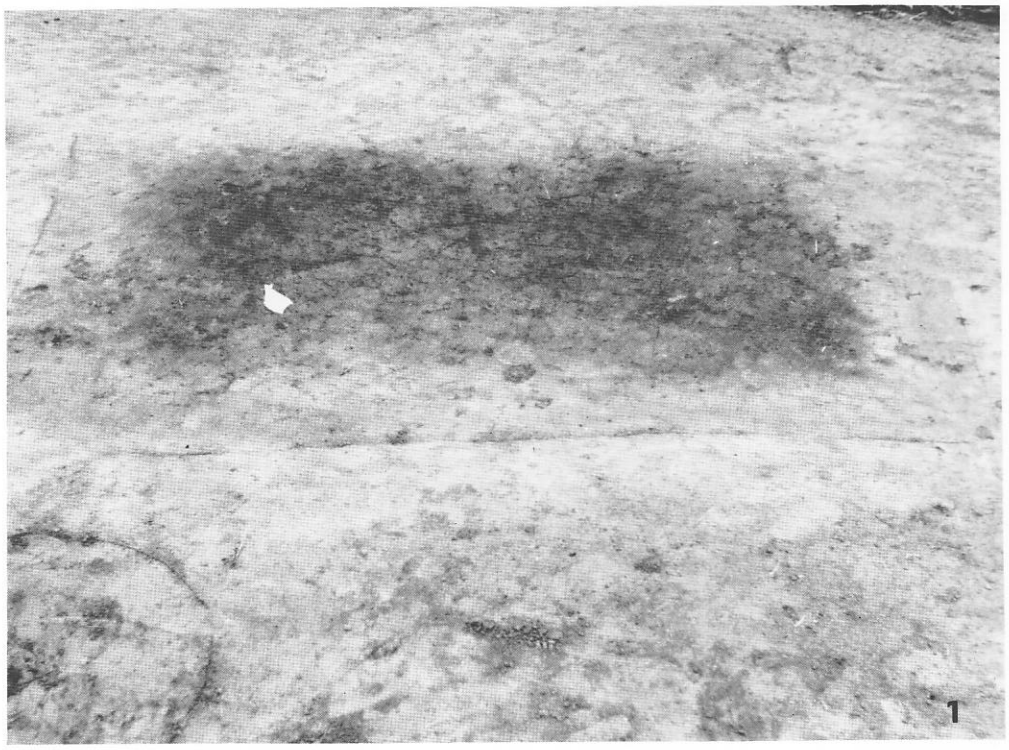


図版50　①SKF 06・07・08（西▶東）②SKF 06・07・08（北▶南）

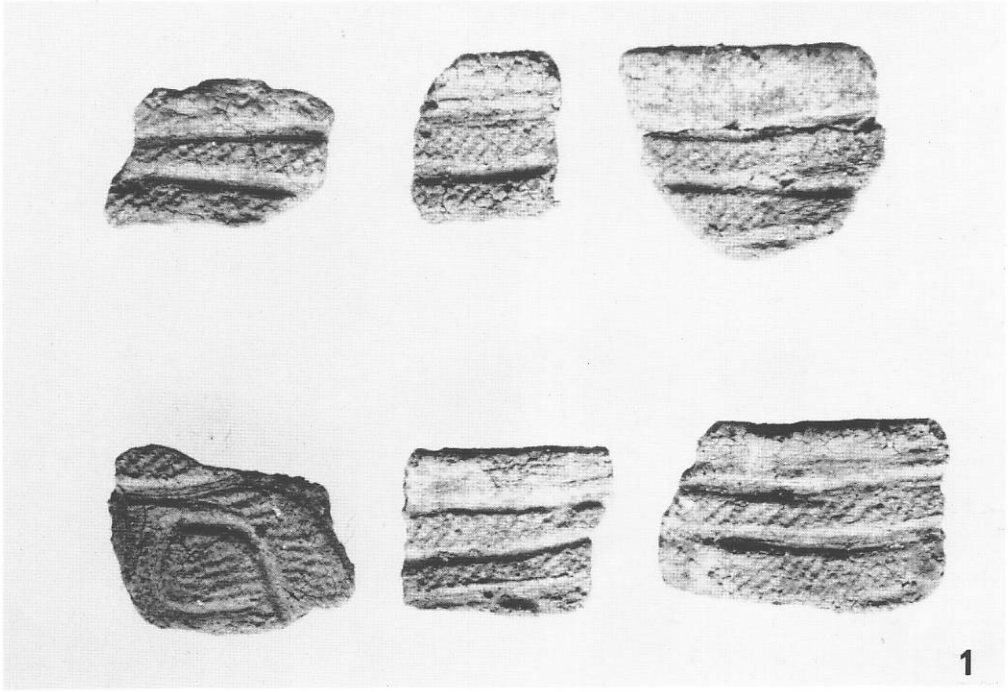


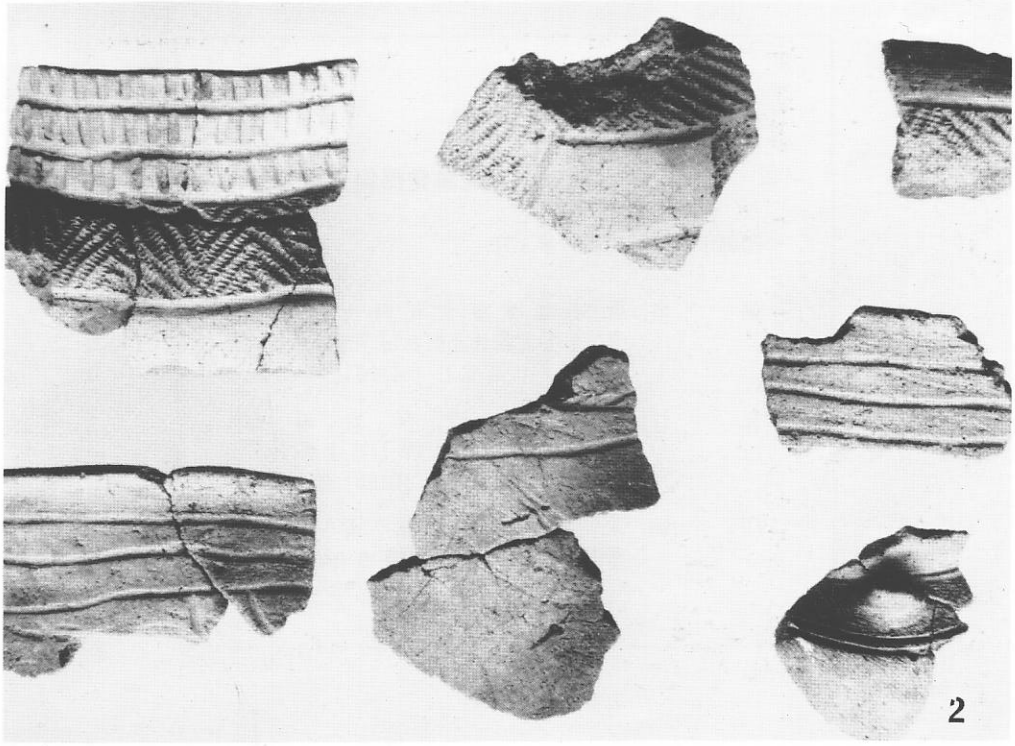


図版51　①SK 02　②SK 03



図版52　①SKI 01 の確認面　②SKI 01（西▶東）





図版53　①SKF 01 出土遺物　②遺構外出土遺物